大江戸仙女暦
石川英輔
講談社文庫

石川英輔（いしかわ・えいすけ）
1933年京都府生まれ。武蔵野美術大学講師。江戸の庶民生活に焦点をあて、江戸時代の生活の知恵や楽しさを再評価したエッセイ『大江戸事情』シリーズのほか、現代人と江戸芸者いな吉の時空を超えた恋心を、楽しい江戸市民の暮らしの中で描いた『大江戸神仙伝』『大江戸仙境録』などの小説も大好評。

カバー装画　村上　豊

い10-17

大江戸仙女暦

石川英輔

講談社文庫

石川英輔
い 10 17
大江戸仙女暦
講談社文庫
Y619

ISBN4-06-263972-6
C0193 ¥619E (0)
9784062639729
1920193006193

大江戸仙女暦
石川英輔
定価：本体619円（税別）

い 10 17

江戸で最高の贅沢、歌舞伎の顔見世興行を初日に特等桟敷で見物、大川の舟遊びでは澄んだ水に泳ぐ白魚の鍋を味わい、愛宕山で雪見しながら江戸市中を一望する——現代から〝転時〟した男が芸者・いな吉と味わう、贅を尽くした名所絶景巡り。美しい江戸に花開くせつない恋を描く傑作小説。『いな吉江戸暦』改題

講談社文庫
石川英輔作品

- 大江戸神仙伝
- 大江戸仙境録
- 大江戸遊仙記
- 大江戸仙界紀
- 大江戸仙女暦
- 大江戸えねるぎー事情
- 大江戸テクノロジー事情
- 大江戸生活事情
- 大江戸リサイクル事情
- 雑学「大江戸庶民事情」
- 大江戸泉光院旅日記
- SF三国志
- 未来妙法蓮華経
- 2050年は江戸時代 衝撃のシミュレーション

講談社文庫

講談社文庫

大江戸仙女暦

石川英輔

講談社

大江戸仙女暦◎目次

大江戸仙女暦

ロンドン橋

速見洋介は、イングランド銀行から王立取引所の前を抜けて、キング・ウィリアム通りをロンドン橋の方へ向かってゆっくり歩いて行った。

数十メートル歩いてはちょっと足を止め、一瞬の間だけ空中を見据えるようにする。注意深く観察していれば、その瞬間だけ体がやや光を通すようになって、向こうの景色がかすかに見える。だが、すぐもとに戻って歩き始めるので、外国人の多いこの大都会では、平凡な東洋人の男が多少変わった行動を取るぐらいで特別な注意を払う人もいない。

やがて、モニュメント、つまり一六六六年のロンドン大火の記念塔のそばを通り越してロンドン橋にさしかかった洋介は、欄干に近づいて立ち止まるとテームズ川を見渡した。この辺の川幅は二百メートルぐらいだから、東京の隅田川でいえば中央区と江東区の間を流れて

いるあたりとほぼ同じである。

かつては年に何度か来ていたロンドンも、会社を退職してからはすっかり縁がなくなってしまい、博物館を取材するための今度の訪問は七、八年ぶりだった。だが、目まぐるしく変わってゆく東京と違って、こちらは大きな変化があったように見えなかった。テームズ河畔(かはん)の風景も、洋介の記憶では、何の変化もないように見える。

東京は、ここ百年以内でも、関東大震災とアメリカ軍による空襲という二つの災害によって総破壊に近い状態になり、さらに残っていたわずかな部分まで、政府が率先(そっせん)してあおりたてた不動産ブームのせいで消えてなくなってしまった。こうなれば、もう古いものにこだわる必要もないから、何でもできるが、イギリス人は日本人ほど〈進歩的〉ではないらしく、金が儲(もう)かるといってそれほど熱心に古い建物を壊さないようだ。

そのせいだろうが、数年のうちに古い町並みを叩き壊して住民を追い出し、その跡地に数十階の高層ビルが立ち並ぶというような、一目でわかる変化は起きていない。

まだ二月末なので、曇(くも)り空の下を吹く湿気を含んだ川風は冷たかった。洋介は、川面(かわも)を見下ろしながら首をすくめた。三十分ほどかけて、シティからここまでぶらぶらと歩きながら、〈あちら〉の世界へ行ってみようかどうしようかと迷いに迷い続けていたが、まだ決心がつかない。

洋介には特殊な能力がある。自分では〈転時能力(てんじ)〉と呼んでいるのだが、今いる自分の世

界から、約百六十年前の過去の世界へ自分の体を一瞬のうちに転移させることができるのだ。

気力を集中して正面をじっと見詰めながら数秒たつと、肉眼に映る現在の光景にかさなって、古い時代のその場所の姿がぼんやり見え始める。透視(とうし)を続けていると、急に向こうの光景がはっきり見えるようになり、その瞬間を逃さずあちらの世界へ一気に〈跳(と)〉べば、体が一瞬のうちに現在から過去の世界に移る。同じ方法でもとの世界へ戻れるから、二つの時間帯を自由に往復できるのである。

シティからロンドン橋まで歩く間に、洋介は、現代のロンドンにかさなって見える町並みが本当にロンドンの同じ場所の過去の姿なのかどうかを確かめるため、技術者らしい緻密(ちみつ)さで、町角や古そうな建物などに向かって繰り返し繰り返し透視を行った。

過去を透視するといっても、普通に肉眼で見るような広い範囲にわたる映像が連続的に見えるわけではない。目を凝(こ)らした瞬間の視野の中心部だけがはっきり見えて、遠くの様子もあまりはっきりわからないから、全体像を知るためには、部分部分を見て頭の中で総合する必要があった。辻々で立ち止まりながら透視を繰り返したのは、道筋の様子を確かめるためなのだ。

これまで見たところでは、透視して見える道路と目の前に見える現在の道路は、かなりよく一致していた。

東京でも、日本橋や神田のような古くから市街地だった地域の道路は、江戸後期の道路とほぼ同じ位置にあるが、昔は道幅が狭く、カギの手に曲がっている場合が多いから、その場で透視しても、かさなりにくい。また東京には、江戸時代からの建造物はほとんど残っていないから、もとと同じ地点かどうかを確かめるためには、その付近の状況についての知識が必要である。

ところが、ロンドンの中心地では、道路の位置も道幅も東京ほどひどく変わっていない部分が多いばかりか、外観に古い姿を留めている建物さえ所々に残っているため、自分が透視している過去の世界がロンドンの古い姿である証拠は、東京とは比べものにならないほどたくさん見つかった。

ロンドンの金融街であるシティからロンドン橋まで歩いてみた洋介は、自分が透視しているのが過去の……恐らくは十九世紀初期、一八二〇年代頃のロンドンであることをほとんど疑わなくなっていた。

また、ロンドンでも東京とまったく同じように過去の時代を透視できる以上、外国へ来ても転時能力がそのまま続いていることは明らかだったし、古い時代のロンドンへ転時できそうなはっきりした感触もあった。

しかし、それでも、洋介は、遠い昔のロンドンに転時する決心がつかなかった。

過去の時代へ転時するには、言葉の通じる同じ民族が住んでいる日本の中でさえ、それな

りの準備が必要だ。まして、異民族の住む国の古い時代へ、その時代の知識もなしに飛び込むのはかなり危険である。どんなことが起こるか見当もつかないし、困った状況に巻き込まれてしまった時など、外国人相手では対応のしようもないからだ。

過去の時代へ行くということの意味を誰よりもよく知っている洋介は、テームズ川の流れを見ながら、はじめて自分が過去の時代に転がり込んだ時のことを思い出していた。

五年前のことだった。当時、洋介は、二十年も勤めた製薬会社の研究所を退職し、科学評論家としてようやく一本立ちしかけていた。先妻が、急に脳血栓のできる難病で急死してからというもの、安定した生活のために窮屈なサラリーマンをしているのが次第にいやになり、思い切って文筆の世界に入ったのだ。

専業の文筆業は、それまでの内職程度の執筆経験から想像していた以上に厳しい職業だったが、それでも、一年たつかたたないうちに総合雑誌の連載の依頼があったりして、ある程度安定した生活ができるようになった。

順調な滑り出しの中で、ただ一つ気になっていたのは、一ヵ月ほど前から体の奥底に感じていた異様な疼きだった。疼きといっても、表現のしようのない奇妙な感覚があるだけでまったく苦痛はないし、もとの職業のおかげでいささかの医学的知識はあり、どう考えてもそれが病気の兆候とは思えないので、普通の生活を続けていた。

ところが、たまたま用事があって都心へ出て、日本橋の北詰、つまり三越側の交差点を歩いていた時、その疼きが急に耐えがたいほど強まって、文政五年（一八二二）の江戸の同じ地点、魚河岸の前へ転がり込んでしまったのである。

もちろん、その時の洋介はすっかり動転して、自分の身の上に何が起きたかわからなかった。それに、見慣れない服装をした大勢の野次馬に取り囲まれた時は、正直いってどうしていいか見当もつかず、不安におののいた。

幸いなことに、たまたま通りかかった若い医者、北山涼哲に救い出され、自宅に連れて行ってもらったおかげで、次第に、自分が昔の江戸に転がり込んだらしいことはわかったが、もとの世界に戻る方法はない。やむを得ず江戸暮らしを続けたものの、日本橋の保守的な職人の家に生まれ育った洋介にとって、文政年間の江戸は、あまり違和感のある世界ではなかった。

この時代の江戸言葉は現代語の原型だから、語彙にもアクセントにも、かつての東京の下町言葉との共通点が多く、日常会話は最初からあまり不自由がなかった。しかも、町の基本的な構造が現代とあまり変わっていない江戸の下町は、洋介にとって勝手のわかった世界だったから、百六十年前の故郷は、慣れれば簡単に溶け込める土地だった。

しかも、持っていた自動巻の腕時計を金持の収集家に売って大金を手にしたばかりか、涼哲に頼まれて米糠から脚気の薬を作り、それによってかなりの収入を得るようになると、東

京より江戸の方が住みやすいとさえ感じるようになった。

そのうちに、自分の意思で二つの時代を往復できるように転時能力のコントロールが可能になった洋介は、〈仙境〉から来た不思議な人物、神仙として尊敬されながら、江戸と東京の二重生活を始めたのである。

だが、まったくの異境である過去のロンドンとなれば、江戸へ行くのとはわけが違う。東洋人というだけでも人目を引くところへ、二十世紀末の洋服を着て歩けば、それだけで人だかりしかねない。また、現代のロンドンでさえ、コクニーという下町訛りが聞き取りにくく、洋介程度の能力では、庶民階級の気軽に話す英語は三分の一ぐらいしか理解できないのだから、十九世紀へ行けばまったく通じないと思った方がいいだろう。

それでも、ある程度の金があれば何とかなるだろうが、百年以上前のイギリスの通貨については何も知らない。古銭屋に行けば手に入るかもしれないが、まとまった量になれば安くは手に入らないだろうし、不確実な目的で無駄な支出をしたくなかった。

取材の用件が片づいて明後日は東京へ帰れるという解放感のせいでちょっと冒険してみたくなっただけで、イギリス史に関心があるわけでもないから、高価な代償を払うぐらいならこのままロンドンの郊外でもぶらついてから帰るつもりだったのだ。

洋介は、視線を川から橋の上に移して透視した。

昔のロンドン橋は、今の橋よりかなり狭いため、自分の体は宙に浮いていた。このまま転時すれば、川に落ちる。転時には常にそういう危険が伴うから、はじめての場所は、行く先の状況をよほどくわしく確かめなくてはならないのである。

時間をかけて透視しているうちに、この時代のロンドン橋は、上に建物がいくつも建ち並ぶ面白い構造になっていることがわかったが、道路の部分には、馬車や馬に引かせた荷車に混じって、大勢の歩行者が歩いている。

洋介は、見る方向を変えては透視を繰り返したが、そのうちに、透視で見える昔の男たちが、揃いも揃って帽子をかぶり、黒いコートを着ていることに気づいた。帽子は、円筒形のシルクハットが圧倒的に多かったが、半球形の山高帽もかなり混じっている。百数十年前のイギリス人は現代のイギリス人より小柄なため、自分ぐらいの背格好なら、まぎれ込んでもあまり気づかれないかもしれないという気がした。それに、着ているコートも黒っぽいのが多く、自分が着ているのと似たり寄ったりだから、帽子を目深にかぶり、マフラーで顎のあたりまで隠すようにして歩けば、あまり目立たないかもしれないと思った。

シルクハットはかさばるから、東京へ持って帰るのもやっかいだが、安い山高帽ぐらいなら、今の日本では役に立たないものの、お土産と考えれば買っても損失はあまり大きくない。

今歩いてきた道筋で、男ものの帽子を売っている店の前を通ったことを思い出した洋介

は、橋の途中から引き返した。

流子

マンションのドアを後ろ手に閉めると、音を聞きつけた妻の流子がエプロンで両手を拭きながら小走りに出て来た。

「お帰りなさーい」

洋介は、妻の上背のあるしなやかな姿を見てほっとしたようにいった。

「やれやれ、やっと、わが家にたどり着いた。久しぶりの海外旅行だから、気疲れしたよ」

靴を脱ぎ、急に重く感じるようになった荷物を持って居間に入ると、流子は、いそいそとあとを追いながら声をかけた。

「疲れたでしょう。お風呂沸いてるわ」

「すぐ入るよ。でも、お茶を飲みたい」

「焙じ茶がいい？　煎茶にしましょうか」

「焙じ茶にして」

流子が茶の支度を始めたので、洋介は洗面所へ行って手を洗い、寝室で普段着に着替えてから、居間に戻ってソファに座った。

「ああ、やっぱり広い家は気持がいいな」

「本当ね」

流子は、熱湯を注いだ焙じ茶が、洋介の好みの濃さになるのを待ちながら、室内を見廻して相づちを打った。

「何となく気が大きくなるし、よく考えると割安の買い物だったわ」

洋介は、笑った。

「支払いは、きみが大部分受け持ったのだから、ぼくにとっては割安というよりただみたいな買い物だった」

昨年の春先だった。長年親しくつきあっていたマンションの隣人から、今住んでいる部屋を買ってほしいという申し入れがあった。定年退職することになったので、いろいろ考えた末に故郷へ引き揚げることに決めたから、できれば気心の知れている洋介たちに住んでほしい、というのだった。

洋介にも買って買えないことのない金額だったが、大手の出版社で編集者をしていて銀行

の融資(ゆうし)を受けやすい流子が、自分の資産として買うことになった。

張り切った流子は、女子大同期の友人でインテリアデザイナーを兼ねている建築士と相談し、部屋の仕切りから内装、電話などの配線まですべてやり直すことにした。その人が管理会社に相談に行ってくれたところ、このマンションは、必要に応じて拡張できるよう各戸の仕切り壁の一部がブロック積みにしてあると教えてくれたので、二人は近くの古いマンションに仮住まいをしながら本格的な工事をし、二軒分を一軒として広く使うことにした。

改築と内装の経費は洋介が払ったが、一つしか必要のない台所や風呂の一方は、水廻りを封じて普通の部屋に改装したから、新居は、もとの家の二倍以上広く、新築同様になったのである。もともとが相場より安かっただけに、割安な買い物になったと思って、二人とも満足しているのだ。

やがて茶が入ると、流子は湯呑を二つ持ってきて洋介の横に座った。

「あなたは、焙じ茶が好きね」

「ぼくは、外国にいる間は、バター茶でもマテ茶でもコーヒーでも紅茶でも馬乳酒でも何でも文句をいわずに飲むけれど、家へ帰れば焙じ茶がいい」

洋介は、そういいながら湯呑を取って熱い茶を吹きながら飲んだ。流子は、自分も一口すすってからしみじみといった。

「さびしかったわ。あなたが半月も家を空けたのは、結婚してからはじめてでしょう。それに、広くなった家にまだ慣れないから、一人でぽつんといると、妙にわびしい気分になるのね」

「何をいってるんだ」

洋介は笑いながら、妻の細い腰を左手で抱き寄せた。

「きみだって、二週間ぐらい出張することはざらだったじゃないか」

流子は、編集者としてはなかなか有能らしかったが、性格は、どちらかといえばひかえ目でおとなしい方だった。まだ三十代なのに、すでに新しく創刊した女性雑誌の編集長として、二年間に発行部数を倍近くに増やした実績がある。その仕事ぶりが評価されて、今では、国内の美術館の所蔵品全集という豪華出版物の編集責任者として、責任の重い業務をこなしている。

仕事が仕事だから、流子は出張が多く、雑誌の編集をしていた当時は、海外取材で一ヵ月も家を空けることさえ珍しくなかった。それなのに、珍しく半月ほど海外へ出た夫の留守をさびしがるのが、洋介にはおかしかった。

「だって……」

流子は、夫に体を押しつけながらいった。

「あたくしは、あなたがこの家にいると思えば、どこへ行っても平気だし、自分が家を離れている時は、仕事が忙しいからさびしいどころじゃないけれど、あなたのいないこの家に半

月も一人でいるのは、さびしくってたまらない」
流子の真剣な表情を見て、洋介は、苦笑した。
「そんなの勝手だよ」
「そう。自分でもかなり勝手だと自覚してるわ。そんなことをいいながら、来週もまた、月曜から水曜まで三日も山陰地方へ出張するんだから。
でも、さびしくてたまらなかったのは本当だから、しかたないでしょ」
流子はそういいながら、くっきりした二重まぶたの目で夫を見上げ、誘うように唇を少し開いた。洋介は湯呑を置いて妻の肩を抱き寄せると、形の良い唇に深く口づけした。流子も、夫の首に両腕を廻して力を込めながら応じた。しばらくお互いの感触を確かめ合ってから唇を離すと、流子は満足そうに溜息をつき、洋介の胸に頬をおしつけていった。
「これで、少し落ちついたわ。さ、お食事の支度をしなくちゃ。
あたくしも、ほんの十五分ぐらい前に会社から帰ったばかりで、まだやりかけなのよ。あなたの帰る時間がわかっているから、もっと早く帰っていろいろ支度をしておこうと思っていたのに、夕方になってから急用ができてしまって、やっとぎりぎりのところで間に合ったという感じ」
洋介は、妻の背中をやさしく撫でながらいった。
「多分そうだろうと思ったよ。でも、無理しなくてもよかったのに」

「だって、いつも、あたくしが出張から帰って来ると、あなたはちゃんとお風呂を沸かして食事の支度もして待っていて下さるでしょう。いくらあたくしでも、これぐらいしなくちゃ、女房として申しわけが立たないわ」
流子は、勢いよく立ち上がった。
洋介は、かつて親しい編集者に、先生は、サラリーマンと結婚した女流作家みたいですね、といってからかわれたことがある。妻が勤め人で毎日会社に出勤し、夫の方は一日中家にいるのだから、はた目には伝統的な妻と夫の立場が逆転しているように見えるのだろうと思って、自分でもおかしかった。
実際、家にいる洋介が食事の支度をして流子の帰りを待つのはごく普通だったが、先妻が亡くなってから再婚するまで、ずっと一人暮らしをしていて慣れているから、特別なことをしている意識はほとんどない。
もし、十人家族の食事を作らなくてはならないのなら、とても片手間でできることではないが、一人分と二人分なら作る手間はほとんど同じだから、流子が夕食に帰れる時は、少し多めに作っておけば済む。スーパーマーケットで売っている食料品は、ほとんどが二人分ぐらいを単位にして売っているから、洋介にとっては、男やもめ時代の延長にすぎなかった。
それでも、再婚した時、二人でまったく新しい家に住んだのなら、少しは違った暮らしぶりになったかもしれないが、自分も再婚だった流子は、洋介がすでに十五年近く暮らしてい

たこのマンションに転がり込むような形で結婚生活を始めた。もちろん、式を挙げるなどという形式も踏まなかったし、短い休暇をとっただけでそのまま毎日出勤する生活を続けたので、気分としては、新世帯の若妻というよりむしろ居候に近かった。

洋介も、妻の仕事をよく知っているだけに、最初から家事労働力としてはまったく期待していなかったため、いつの間にか今のような生活の形ができ上がってしまったのだ。

とはいうものの、流子がそのことを平気で受け入れてきたわけではない。洋介が忙しい身であることを誰よりもよく知っているばかりか、洋介と知り合う前に、半年にも満たない結婚をして別れたみじめな経験があるだけに、働いている自分をやさしくいたわってくれる夫の手助けが充分にできないことを人一倍気にしていた。

「じゃ、風呂へ入るよ」

洋介は、妻に声をかけ、焙じ茶を飲み干して立ち上がった。

「夕飯の支度に、あと三十分ぐらいかかるから、ゆっくり入ってね」

台所から流子の声が聞こえた。

居間のソファに座って新聞を読んでいると、いい香りを漂わせながら、流子が入って来た。

「まだ、お仕事なさるの」

流子は、夫の斜め前に立って尋ねた。

「とんでもない。ベッドに入れば眠ってしまいそうだから、ここできみがお風呂から上がるのを待っていたんだ」

うっすらと寝化粧をした流子は、白い絹のナイトウェアを着ていた。おとなしいデザインだが、引き締まった胸とくびれた腰のシルエットがほのかに透けて見えた。

半月の間、外国で厄介な取材に集中していた洋介は、女盛りの妻のまぶしいほど艶やかな姿を見て強い欲望を感じた。新聞を横に置きながら見上げると、流子はソファに腰を下ろして熱っぽくささやいた。

「抱いて……」

洋介は、体を押しつけてくる妻の体をすくい上げるように膝の上に抱き上げた。

「嬉しい」

流子は、大きく息をつきながら夫の首に両手を廻し、唇を押しつけた。洋介は、唇を合わせながら左手で背中を抱き、右手で胸を探った。乳房が固く盛り上がるのが、柔らかい絹を通してはっきりわかった。流子は、夢中で夫を抱き締めるばかりだ。

「あなた」

しばらくたって唇を離すと、流子は息を弾ませていった。

「半月も一人でいるのはつらかった。あたくしは、あなたが本当に大好きなの。今度という

今度は、つくづくそう思ったわ。もとのままの家なら、どこでもあなたの匂いがしみついているから、もっと平気でいられたかもしれないけれど、この家を改装して今の形になってから半年にもならないせいか、一人でいると、まるでホテル住まいしているみたいなよそよそしい気分になって、気が滅入ってくるのね。こうやってあなたといっしょにいれば、何とも思わないのに」

「もとのままの方が良かったかな」

「一人でいる時に、そう感じたこともあるわ」

流子は、うなずいた。

「あたくしは、ただきれいで便利な新しい家にしたいと思うばかりで、仕切りも内装も全部変えてしまったから、もとの家の面影は何もないでしょう。でも、今度みたいに一人になって考えると、あなたにとっては、前の家には亡くなった方の思い出がいっぱいあったはずなのに、自分勝手で無神経すぎたのじゃないかと思って悩んだわ」

「そんなこと考える必要はないよ」

洋介は、妻の髪を撫でながらいった。

「前の家内は亡くなったけれど、きみは、こうやって元気に生きていて、新しい自分の家を作ったんだ。ぼくは、過ぎたことをくよくよ思い出さないたちだから、流子との今の生活に満足している。それに、もう当分どこへも長い旅行をすることはないだろうから、きみは安

心して、ここで自分の思い出を作ればいい」

「あなたにそういっていただけばほっとするわ。あと二、三年たって、ここにも生活の匂いがつけば、もとの家よりずっと本当にあたくしたちの家になると思うし、そうなれば、一人でいても、きっと落ち着いていられるようになるでしょう」

流子は、夫を抱く腕に力を込めた。

「でも、あたくしって本当にわがままね」

「どうして? きみは、何でもちゃんとやっている。少しもわがままじゃないよ」

「だって、つまらない男の人と結婚してすぐに離婚して、もう自分の人生は終ったと思い込んで暮らしていたばかなあたくしが、あなたみたいな人の奥さんになれたのだから、本当なら家にいて専業主婦と秘書の役をしてもバチは当たらないところでしょう。それなのに、むしろあたくしの方があなたの世話になっているぐらいで、しかもうんと大切にされて好きなことをさせてもらっている……これだけでもわがままなのに、一人でいるとさびしいなんて不平をいっているんですもの。母が生きていれば、叱られてばかりいると思うわ」

「そんなことはないさ」

洋介は、笑った。

「流子にとって、ぼくがつごうのいい亭主なら、ぼくにとっても、きみはつごうのいい女房なんだ。ぼくは、普通の平穏な結婚生活は充分に経験しているから、今さら、きみが普通の

良い奥さんになってくれることなんて期待しちゃいない。サラリーマンならともかく、こういう仕事をしていれば、今みたいな生活の方がずっと刺激的で面白いからね。

だって、流子の仕事は普通の勤め人に比べるとかなり特殊だろう。外国の雑誌との提携業務で、しばらく海外へ出て帰って来なかったと思うと、雑誌の編集長になって朝帰りしながら働いたり、雑誌が話題になると美人編集長としてテレビに出たと思うと、今度は日本中の美術館を飛び廻っている。きみのやることには、意外性があって退屈しないんだ。

だから、結婚して何年もたつのに、編集者と結婚したというより、愛人がたまたま編集者をしているみたいな気分が続いている。ところが、本当は愛人じゃなくてれっきとした本妻なんだから、何をしてもどこからも苦情は出ないからね。ぼくにとっては、きみほどつごうのいい女房はいないと思っているよ」

「そう思ってもらえれば安心だし、嬉しいわ」

流子は、夫の胸に顔をすり寄せていった。

「じゃ、今夜は、つごうのいい女房を遠慮なく楽しんで……」

「そうしよう。半月も一人でいて辛かったから、うんと楽しみたい」

「明日は土曜だから、電話もかからないでしょう」

洋介は、妻を抱いたまま立ち上がった。ナイトウェアの裾が垂れて、形の良い脚があらわになった。

「まるで、花嫁さんみたいね」

流子は、夫の首にしっかりつかまりながら嬉しそうにいった。

「ずいぶんひねた花嫁さんだけれど」

寝室へ入ってベッドの上におろすと、流子は、枕元のつまみを廻して天井の間接照明を暗くしてから、そっと自分の布団の中に入った。洋介も自分の寝床にもぐり込んだ。電気毛布が敷いてあるので、中はほんのりと暖かい。

手をさしのべると、流子は夫の腕の中に全身をなげかけるようにすり寄って来た。

二人は、待ち焦がれていたようにしっかり抱き合った。洋介は、妻の唇を吸いながらナイトウェアの前を開き、肌をぴったり合わせて脚と脚を深く交差させた。それだけで半ば恍惚となった流子は、唇を半ば開いて上品にあえぎ始めた。

久しぶりに暖かく滑らかな妻の肌を抱いたのだから、すぐにでも欲望を満たしたいところだが、そこは十歳以上も年上の夫らしく自己抑制をきかせて、まず背中から腰のあたりの感じやすいあたりをやさしく愛撫する。流子は、体を小さく震わせた。

乳房に触れると、流子のあえぎはひときわ大きくなった。手のひらを使ってやわらかくもみしだかれると、それまではかすかにあえぐだけだったのが、次第に甘い声を洩らすようになる。胸の刺激で快感が急に高まり、恥じらいの気持がうすらいだところで、手を下におろして滑らかな内腿に手を滑らせれば、耐えられなくなった流子は、待ち望んでいる部分に夫

を誘い込むように体を大きく開いた。

洋介は、すっかり知り尽くしている手順に従って妻の悦びを引き出し、いつものように悦びにあえぐのを耳元に聞きながら、はじめて流子といっしょに過ごした夜のことを思い出していた。

再婚を決めた夜、二人はこの同じマンションの改築する前の寝室で最初の一夜を明かしたのだが、洋介は、その時のことが忘れられない。

洋介が流子との結婚を決心したのは、彼女に離婚歴のあることを知った時だった。もし再婚するのなら、流子以外の女性は考えられなかったし、彼女も担当の編集者として以上の好意を抱いていてくれることはうすうす察していたものの、自分からいい出すのはためらっていた。

二十年近い結婚経験があるばかりか、先妻の亡くなった後には、やけになってパイプカットし、少し荒れた生活をしていた時期もあったから、ずっと年下の初婚の女性を妻とするのは、流子がちゃんとした女性であるだけに、気の毒だと思っていたからだ。それだけに、流子に短い結婚経験があることを知った時は、むしろほっとしたものだった。

ところが、はじめて男と女として接した時、洋介は、深い満足と同時に奇妙な違和感も覚えた。流子の肉体は申し分のないほど見事に成熟していて、いくらか女性経験のある夫を充分満足させてくれているのに、流子自身は、ただされるままに受け身でいるだけで、自分の

悦びを求める気持がないように感じたからだ。

それ以来、洋介は、ひたすら妻を女として目覚めさせるように努めてきたが、その努力の甲斐があって、間もなく別人のように積極的になり、夫に抱かれる悦びを積極的に求めるようになった。

今では、流子は、努力に見合う以上の報酬(ほうしゅう)を夫に与えてくれるようになっている。

貪欲に悦びを求め続ける妻の期待を満たすため、さまざまな手を使って次第に高みに押し上げ、もう耐えきれなくなった頃、洋介も彼女の引き締まった滑らかな肉に入り込む。半月ぶりの交歓だけに、その快楽にただ夢中になり、さまざまな角度からお互いの体をむさぼり合い、次第に刺激を強め合う。

悦びが高まるにつれて、流子はいつもと同じように日頃のしとやかさをかなぐり捨てて貪欲になり、あられもなく乱れきって、より強い行為を求め始めた。洋介も、若い妻の欲求を満たすために考えたあらゆる方法を尽くすが、やがて流子が充分に高まって快感に耐えられなくなった時、彼女のしなやかな体をしっかりと組み敷いて、華やかな悦楽の声を耳元に聞きながら果てる。

ようやく満ち足りた二人は、そのまましばらく抱き合っていた。

流子がしばらくの間、恍惚の境を漂い続けているのに対して、洋介は、男の生理にしたがってすぐに醒めたが、まだ息づかいは激しかった。

その時、洋介の耳元に、

「お前さまぁ」

という悲しげな細い女の声が響いた。

その声は、非常にはっきりしていて、そら耳とは思えないばかりか、誰の声かもはっきり聞き分けられるほどだった。あるいは、流子にも聞こえたのではないかと恐れた洋介は、少し頭を上げて妻の顔を見下ろした。だが、彼女は唇をやや開いたまま目を閉じ、穏やかな表情で胸を上下させているばかりだった。

――いな吉だ――

洋介は、心の中でつぶやいた。間違いなく、あれはいな吉の、それも忘れようにも忘れられない瞬間の声だが、なぜ、今ここであの時の声がと、思い出して首をかしげた。

洋介には、東京の生活のほかに、江戸での生活があり、江戸でいっしょに暮らしているのが、若い芸者のいな吉だった。いな吉といっても男ではない。江戸時代の芸者、特に深川芸者には男の名を名乗る者が多かったのである。

イギリスへ行く前から、仕事が立て込んでいたので、洋介は、ここのところしばらく江戸へ行っていない。いな吉が待ちかねていることは確かだったから、彼女の声が聞こえるぐらいのことがあっても驚きはしなかった。百数十年もの時間を越えて二つの時代を自由に往復できること自体の不思議さに慣れてしまった身にとって、付随して起こる多少の超自然的現

象にいちいち心を動かしてはいられないからだ。

しかし、今はっきり聞こえたいな吉の声は、洋介にとっても不思議で意外だった。

洋介の転時能力は、一定の時間を移動できるだけなので、東京で一日を過ごせば、江戸でも一日が経過している。こちらの明日はあちらでも明日で、こちらの三年前はあちらでも三年前なのだ。しかも、両方の世界での太陽と地球の位置関係も同じだから、季節も一致している。あちらは太陰太陽暦いわゆる旧暦で、こちらはグレゴリオ暦だから、暦の日付は同じでないが、立春や春分などの節気は一致する。

そのため、生活感覚のずれを生じることなしに、二つの世界で生活してこられたのだが、たった今聞こえたのは、五年前の江戸で聞いたまま、頭の中にこびりついたようになっている声なのだ。こんなことは、これまでに経験がなかった。

最初、江戸へ行った時は、まったく偶発的に生じた転時能力に翻弄されて突然転がり込んだのだが、二ヵ月ほどたってから自分の意思で転時できるようになった。しかし、江戸へ来て半年目に、また転時能力を失った。その一ヵ月前ぐらいから次第に能力が弱まるのを意識していた洋介は、転時ができなくなる直前に、悩み抜いた末に江戸を捨てて東京を選び、いな吉の前から消えてしまったのである。

自分が見捨てられることを直観的に悟ったいな吉が悲しげに、「お前さまぁ」と叫んだ声を、洋介は一生忘れられないが、さっきはっきり聞いたのが、その時の声なのだ。

――なぜ、今になってあの時の声が……――

洋介は、不思議でたまらなかった。

自分が江戸へ行けなかった時、いな吉が自分を慕うあまりこちらの世界に姿を現わしたことは再三ある。だが、洋介の転時能力は、その後また回復して、いな吉との生活も平穏に続いているのだから、きわめて楽天的なあの娘が、今になってにわかに過去の寂しさを思い出すとは思えないのだ。

――明日にでも、さっそく行ってみよう――

洋介は、そう思った。

普通なら、貞淑(ていしゅく)な妻を抱いたまま愛人のことを考えるのには、いささかなりとも罪悪感がともなうはずだ。芯からの浮気者ならともかく、遊び人というわけでもない洋介のようなタイプの男なら、特にそうだろう。ところが、いな吉の生きている時代から百何十年かたたないと流子は生まれてこないし、流子の生きている現在へ来れば、いな吉は百年以上も前に亡くなった歴史上の存在にすぎないのだ。

二つの時代を往復できる転時能力者の現実的な感覚としては、いな吉と流子の関係は、亡くなった先妻と流子の関係とよく似ていた。数年間の独身生活を続けた後に流子と再婚した時、亡くなった先妻に対する不貞行為を働いていると感じなかったのと同様、百六十年前の江戸でいな吉と暮らすことが、東京にいる妻に対しての裏切りだとはまったく感じないのである。

完全に満ち足りた流子は疲れはて、洋介の腕の中でぐっすり眠ってしまった。そっと体を離して半ば上半身を起こすと、ほの暗い電灯の光で、愛欲の行為の時のままに長い髪を乱し肌をあらわにした妻の全身が白く綺麗(きれい)に見えた。洋介は、そっとナイトウェアの前を合わせてから布団をかけ、電灯を完全に消して目を閉じた。

元気だった頃の先妻と、微笑んでいるいな吉の顔が、二人ともまるで生きている人の姿のように脳裏に浮かんだ。そこに、たった今まで自分に抱かれてあえいでいた流子の生々しい感覚がかさなった。

いな吉

地下鉄の人形町駅から地上に出た洋介は、いつもの〈定点〉に向かって歩いて行った。転時は、どんな場所でもできるのだが、だからといってどこでも安全にできるわけではない。転時した先の同じ空間に固い物質があれば、非常に危険だからである。

洋介は、かつて、転時した先にあった木の枝で腕を傷つけたことがあるが、相手が細い枝で、こちらが二の腕をかすっただけだったから軽傷ですんだものの、たとえば転時した先に大きな石があって重複すれば、即死してしまうだろう。危険を避けるためには、念入りに透視を繰り返しながら行く先の状況を確かめなくてはならないが、たびたび行く場所なら、安全な場所をいくつか決めておくのが手っとり早い。

洋介は、そういう場所を自己流で定点と呼んでいるのだが、地元の日本橋、神田界隈には

二十ヵ所ぐらいあって、その中から目的地になるべく近くて人通りのない場所を選んで転時するようにしている。人形町通りの東側にある難波町に近い路地にある一つの定点へゆっくり歩いて行った洋介は、足をとめてあたりを用心深く透視した。

すぐに、うっすらと江戸が見えた。

江戸の下町はかなりの過密状態である。現代の東京で夜間人口密度が高い豊島区や中野区に比べても三倍ぐらいに達する。そのため、過疎状態だった武家地などに比べていかに庶民が冷遇されていたかという論拠になっているが、それでも、十九世紀の江戸は、洋介が自分の目で見てきた同じ時代のロンドンの下町に比べれば、人口密度としては三分の一ぐらいだろう。特にロンドンの貧民街に比べればがらがらという感じだ。

何しろ、あちらは当時の世界の最先端をゆく国だけに、貧民街でも土地の利用効率を高めなくてはならず、五階、六階という煉瓦や石造りの建物がずらりと並んでいた。しかも、同じ部屋に何家族もが同居していることも珍しくなかったし、地上に住めないほど貧しい人は地下室に住んでいた。

江戸の下層階級の住む、一戸の面積が間口九尺（二・七メートル）、奥行きが二間（三・六メートル）の棟割長屋に比べれば、ロンドンの貧民街の人口密度は五倍ぐらいの高密度に達していたことがわかっている。

明治以後、日本の知識人にとっての主な仕事の一つは、理想化した欧米諸国をお手本にし

て遅れた庶民を教え導き、一日も早く先進国なみの生活大国ならぬ軍事大国にすることだった。そのためには、あちらの特に優れた部分とわれわれの劣った部分を比較するのがもっともわかりやすかった。

その結果、江戸時代の日本は、ほとんどとりえのない暗黒時代のように宣伝される結果となってしまったが、今になって冷静に検討すれば、両方の実情を本当に正確に分析したうえで比較した人が意外に少なかったことがはっきりわかる。

進歩的な見方によれば、十九世紀のロンドンの住民は、立派に自覚した〈市民〉で、日本人がその後百年以上もたってなお到達できないほど高度の民主主義のもとに整然たる市民生活を送っていたことになるらしい。単純な洋介も、これまでは何となくそう信じていたのだが、実際に見て廻ったロンドンの低い階層の人々が住む地域は、清潔さという点でも住民の生活水準という点でも、けっしてそれほど立派だとは思えなかった。

洋介の歩いた二月末のロンドンは、家という家の煙突から吐き出す石炭の煙のため空が煤煙で薄暗いばかりか、のどがいがらっぽくなるようないやな臭いがした。霧の出るような天候なら、煙が地表近くによどんでろくに前も見えなくなり、息も苦しくなるほどだった。現代風にいうなら、大変な公害都市なのだが、明治時代の日本の知識人は、これも進歩した豊かな社会の象徴としてうらやましがったそうだ。

それに、ロンドンの庶民たちは、太陽の没することなき偉大な帝国の市民としては、どう

ひいき目に見ても身なりも顔色もあまり良くなかった。体はいくらか大きいものの、入浴好きで小ざっぱりした江戸の庶民と比べれば、ほとんど風呂へも入らないせいでうす汚れた感じがした。

そういう下層階級の人々が、六階ぐらいの建物に詰め込まれるように住んでいて、昼間は大部分が外へ出ているから、道路は人だらけだ。しかも、いうまでもないことだが、人口という点では、中以下のそういう階層の人々はけっして少数派ではなく、貴族やインテリの階層に比べて非常に多いのである。

江戸の下町が過密だというのは、あくまで現代の東京に対してであって、同じ時代のロンドンを見てきた洋介の目で比較するなら、江戸の中心部である日本橋地区でさえ過疎地のような状態だった。江戸の裏長屋は大部分が平屋で、せいぜい簡単な二階のついている程度だから、いくら詰め込んだところで、六階建ての建物がぎっしり並ぶ大都会に比べればたかが知れているからだ。

ロンドンの裏町で転時しようとした時は、あまりの過密ぶりになかなか安全な場所を見つけられなくて困ったものだったが、それに比べるなら、江戸の裏町での転時は問題にならないほど楽である。洋介は、あたりを透視しながら、二、三人歩いている通行人の視線が定点からそれるのを待って一気に転時した。

次の瞬間、急に空がぱっと開けて空気の匂いが変わり、洋介の体は、いつもと同じように

見慣れた江戸の町に移っていた。かすかに潮の香がする。

しかし、いつもと同じ……と思ったのは最初の一瞬だけで、何か今までと違う独特の違和感が体の奥に残った。とはいうものの、その奇妙な感じはあまり強くなかったので、洋介は、大きく息を吸ってから歩き始めた。通い慣れた道だが、なるべく目立たないように肩をすぼめて道端を歩く。

何しろ、ここは成人男子の平均身長が一五六センチという世界だ。しかも、普通の男なら、月代(さかやき)といって額から頭のてっぺんを剃り上げ、後頭部に身分相応の髷(まげ)を結っていなくてはならない。身長が一七五センチもある大男が歩いているだけでも人目を引きかねないのに、月代をせずに髪を長くして、いわゆる総髪(そうはつ)にしているのだから、大手を振って歩けば、かなり異様に見える姿なのである。

江戸で仕立てたこの時代の着物が身につくようになって、今では当人が気にするほど目立たないのだが、大きすぎる体を縮めるようにして歩く習慣はなかなか抜けなかった。

それでも、勝手のわかっている土地だから、やや早足で歩いて行くうちに、洋介はまた何となく奇妙な感じがしてあたりを見廻した。肉体的な違和感はいつの間にか消えていたが、今度は、あたりの様子がどことなく不自然なのに気づいたのだ。さらに十メートルほど歩いた時、大きな町家の塀の上からのぞいている庭木の楓(かえで)に少し紅葉しかかった葉がついているのが見えた。

東京は三月になったばかりだが、まだ春は遠いという感じで、木々はようやく芽吹き始めたところだが、見たところではまだ冬枯れのままだった。ところが、こちらも気温は同じようだが、どう見ても春先というより晩秋(ばんしゅう)か初冬(しょとう)の感じなのである。

転時能力を得てからもう五年になり、転時した回数も百回を越えているが、東京と江戸の季節の進みが一致していなかったことなどただの一度もなかっただけに、洋介は、ここが自分にとってなじみの深いあのいつもの江戸ではなく、何か異質な場所にまぎれ込んでしまったのではないかという不安を感じた。

もともと、転時という現象自体が正体不明なのだから、何が起きても不思議ではない。時間の流れが、一本の筋のように単純な構造をしているのなら、さかのぼって行けば必ず同じ時に行きつけるはずだが、もし、もっと複雑な構造になっているのであれば、どこか別の場所に流れつくはずだからである。

さっきの違和感といい、季節のずれといい、これまでになかった奇妙な経験のせいで、急に不安になった洋介の足取りが重くなった。

用心深い性格の洋介は、自分がこの世界では異端者であることを強く意識している。もし、ここが自分のよく知っている江戸でなければ、軽々しい振る舞いをするのが危険なことも、充分に理解していた。

「アレ、旦那(だんな)さま」

ためらいながら足を運んでいると、後ろから急に声をかけられて、洋介は振り向いた。いな吉の家で働いている若いお手伝いのおたねが、何やら小さな包みを胸にかかえて立っていた。

「おう。おたねさんか」

洋介は、ほっとして立ち止まった。

「いな吉は、こちらにいるかい」

「はい」

おたねも、ほっとしたような様子でうなずいた。

「でも、姐さんは、旦那さまが消えてしまわれた、といって、お座敷にもあまりお出にならず、こちらのお宅にこもっていらっしゃいます」

「何だって？」

洋介は、驚いていった。

「この間帰る時に、御用があって、二十日ほど来られないと話しておいたのだが……」

「早く行って差し上げておくんなさいまし」

おたねは、気がせくようにいった。

「姐さんがどれほどお喜びになるやら。わたしは、一足お先に行ってお知らせします」

おたねはそういって、小走りに駆けだした。

洋介が向かっているのは、いな吉と二人で暮らしている家で、いな吉には、そのほかに芸者屋としての営業用の自宅がある。おたねは、芸者屋での召使だから、何かの用か届け物でもあってこちらへ来たらしい。

洋介は、自分も急ぎ足になりながら、胸騒ぎがするのを感じた。どう考えても普通ではないし、気のせいか、この前最後に見た時よりもおたねが子供っぽくみえる。

確かに、何かが不自然だった。

十日や十五日ぐらい江戸へ来られなかったことは、今度がはじめてではない。この前別れる時は、仙境つまり洋介の住んでいる世界に大切な用があって、しばらく来られないという説明にいな吉は納得していた。

現代日本の既婚女性でさえ、夫が仕事で一ヵ月ぐらいどこかへ行くといって嘆き悲しむ人はめったにいないのだから、我慢強いこの時代の女性が、男があらかじめ予告して二十日ぐらいどこかへ行ったところで、大騒ぎするはずがない。まして、利口者で楽天家のいな吉が、わずかな期間を待ちきれずに泣くなどということは、洋介には考えられなかった。

「何かある」

ひとり言をいいながら急いで行くと、すぐに難波町の家に着いた。この家は、井筒屋という裕福な酒問屋の持ち家で、いな吉と暮らすために借りているのである。洋介が、道路に面した潜り戸を開ける前におたねは裏口へ入り、勝手口へ駆け込んだ。

〽里を離れし草の家に
　二人がほかは虫の声
　隙漏る風に有明の
　消えて嬉しき窓の月……

　中に一歩入った洋介の耳に、爪弾きの三味線の音と、それに合わせて唄ういな吉の独り稽古らしい美しい声が聞こえた。唄うことが何より好きだから、どんなに気分が落ち込んでいても、稽古だけは欠かさないのだ。飛び石伝いに二、三歩入った時、先に行ったおたねが着いたらしく急に唄声が途切れた。洋介は、二、三回呼吸するほどの間だけ足を止めてから上がり口に向かった。

　すぐに家の中で軽い足音が響き、洋介が引き戸を開くのと、弾かれたようにいな吉が飛び出して来るのとほとんど同時だったが、いな吉はその場で板敷に座り込み、真剣な表情で洋介の顔を見上げながらいった。

「お、お前さま。本当に、お前さまでござんすネ」

「もちろん……本当に私だ」

　彼女の真剣な様子に少し気押されながら、洋介はうなずいた。

「ああ、良かった」

　見る見るうちに涙が黒い瞳を濡らし、滴となって流れ落ちた。

「な、何も泣くことはなかろう」

　洋介は驚いていった。

「ア、アイ」

　いな吉は、懐から紙を出して目に当てながらうなずくと、今度はにっこりと笑った。

「もう、二度とお目にかかれないものと諦めてましたから、嬉しくって、ツイ……」

「そんな、大袈裟な……」

　といいながら、洋介は、いな吉の顔を見詰めた。形の良い眉、涼しげな大きい目に愛らしい唇、いつもながら見とれるほどの美貌は相変わらずだった。髪は艶やかな島田に結って、櫛と簡素な簪を一本挿し、衣裳は結城の唐桟縞に白茶の小柳繻子の帯をやの字崩しに締めた普段着姿である。

　年齢の割には渋すぎる拵えのせいで、かえって若々しさが引き立って見えるのだが、彼女の美しい姿を見て洋介の違和感はますます強くなった。

　——どうも何かがおかしい——

　相手がいぶかしがっているとは夢にも思わないいな吉は、一息にいった。

「あんなふうに幽霊みたいに消えてしまわれたから、もう二度とお戻りにはならないと思って、わちきは毎日泣いておりました」

　それを聞いて、洋介は、頭の中で何かが光ったように感じた。

「ここで立ち話もなんだから」
といって上がると、そのまま茶の間に入り、長火鉢の前の自分の場所にあぐらをかいて座り込む。いな吉が嬉しさを包みきれないような様子で襖を立てたので、洋介はすぐに尋ねた。
「今年の干支は何だっけ」
「いやでござんすヨ、お前さま」
向かい合わせの自分の場所に人形のようにきちんと座りながら、いな吉は、袖で口をおさえて笑い、壁に張ってある一枚刷の暦の方を見ながらいった。
「今年は、壬午ではございませんか」
「午年……」
それを聞いてすべてがわかった洋介は、愕然としながら自分も振り返って暦を見た。確かに壬午となっていた。
この前、江戸へ最後に来たのは、文政十年（一八二七）の亥年だったから、午年なら、文政五年か、さらに十二年後の天保五年（一八三四）のはずだ。しかし、どう考えても後者ではあり得ない。目の前にいるいな吉は、ほんの半月ちょっと前に別れたばかりの文政十年のいな吉よりさらに若く見え、まだどことなく稚ささえ残っているからだ。
「やはり、そうなのだ」

洋介は、大きく息をついた。
「お前さま。どうかなさいましたかエ」
いな吉が、ちょっと心配そうに小首をかしげながら尋ねた。
「いや、何でもない」
できるだけさりげなくそういってから、話題を変える。
「のどが乾いたから茶でもいれてくれないか」
洋介の奇妙な振る舞いに慣れているいな吉は、慌てて立ち上がり、
「アイ。これは、わちきとしたことが……」
といいながら、手早く茶の支度を始めた。彼女の注意力が茶の方に向いたところで、洋介はさりげなく質問した。
「こうっと、今日は何日だったかな」
「十月一日でござんすヨ」
「そうか」
洋介は、うなずいた。
いな吉の前で転時したことは、これまでにただの一度しかない。いや、いな吉に限らず必要のない限り、転時する瞬間を誰にも見られないように努力していた。ところが、はじめて転時能力を失いかけた時は、最後の最後まで去就に迷い、東京へ戻る決心がついた時は、ほ

とんど余力がなくなっていて、いな吉の前から突然消えるという大失態を演じてしまったのだ。
　大の男の姿が目の前で急に薄くなって消える、という想像を絶する経験をした彼女が、心に大きな衝撃を受けたのも無理はないが、あれは、忘れもせぬ文政五年陰暦九月一日だった。洋介は、はじめて転時能力を失って去ったあの時から一ヵ月しかたたぬ江戸へ戻ってしまったらしいのだ。
　つまり、いな吉にとっては、洋介が一ヵ月ぶりに戻って来たことになるが、洋介にとっては、その間に五年の年月が流れている。なぜこんなことになったのか、洋介にはさっぱり見当もつかなかった。
　これまでと違う条件といえば、地球の裏側にあるロンドンで何回か転時を繰り返したことぐらいだ。地球上の場所によって転時能力が影響を受けるかどうかについては、何ともいいようがないから、影響を受けないという証拠もない。そうなると、今度は、次に東京へ転時した時、本当にもとの世界へ戻れるかどうかが心配だった。
だが、いな吉には、洋介の複雑な立場などわかるはずもないから、茶が入ると湯呑を茶托にのせて、長火鉢の上においた。
「アイ。煮花が入りましたヨ」
「有難う」

と、湯呑を取れば、いな吉は洋介の頭をしげしげと見て、
「今日のお前さまは、いつもとちょっと違っていらっしゃるようで、何だかおかしゅうござんす。この間までは、白髪などなかったのに、少し白いものが見えますハ。たったひと月で急にお年をお召しになるはずもないけれど……」
　さすがによく観察しているものだと思いながら、洋介は改めていな吉の顔を見た。文政五年のいな吉は、数えでは十八歳だが、満年齢ではまだ十七歳未満、つまり十六歳代だが、どう見ても現代的感覚でいう未成年者……子供ではない。
　できるだけ小児性を残すように育てるのを良しとする現代と違って、この時代は、しつけ、教育のすべてが、子供を少しでも早く大人にするためにあったから、男も女も数えの十六歳で成人の扱いになった。男の場合は、前髪を剃り幼名を改め、いわゆる元服をして、外見でも大人になったことがはっきりわかるようにする。
　女性は二十歳になれば〈年増〉と呼び、女盛りの始まりとみなされた。
　こういう社会だから、数え年十八歳の芸者は、精神的には完全に一本立ちしている。肉体的にはまだ瑞々しいが、充分に一人前の大人の女なのだ。しかし、二十歳になった文政十年のいな吉をよく知っている洋介の目には、十六歳の顔は丸みを帯びて愛くるしく、体はまだ脂が乗り切っていない感じで華奢に見える。
「仙境では、いろいろ不思議なことが起こるが、それをお前にわからせることはとてもでき

ないのさ」

洋介は、五年前より白髪が増えているはずの頭を右手でなでながらいった。

「涼哲先生に、お前さまが目の前で消えてしまわれたと申し上げたら、大変驚いておられましたから、帰っていらっしゃったとお伝えした方がよろしゅうございましょうか」

ようやく他人のことを考える余裕ができたのか、いな吉が涼哲のことを口にした。北山涼哲は、はじめて江戸に転がり込んだ洋介が、日本橋北詰の魚河岸前で困惑しきっていた時に、助け出してくれた本道医つまり漢方の内科医である。いな吉といっしょに暮らすまで北山家に同居していた洋介にとっては、恩人であり、もっとも親しい友人であり、仕事の相棒でもあったのだ。

「そうか。じゃ、これからちょっと挨拶に行って来るかな」

洋介は、茶を飲み干していった。すると、いな吉は頭を強く横に振って、

「お前さまがいらっしゃらずとも、おたねを知らせにやります」

「なぜだい」

「だって……」

いな吉は、軽く睨んだ。

「わちきにあんなこわい思いをおさせなすったのだから、せめて今日一日ぐらいは、ここでいっしょにいらっしゃって下さってもよろしゅうございましょうに」

「それは、悪かった。じゃ、おたねをやってくれ」

洋介は、笑いながらいった。流子が三日間の出張に出た間にこちらへ来たのだから、居続けしたところで問題はない。いな吉は、立ち上がって茶の間を出て行ったが、すぐに戻って来た。

「涼哲先生とおこま姐さんと、わちきの実家へおたねをやりました」

おこま姐さんも元は芸者でいな吉の師匠でもあるが、今では、芸者稼業のマネージャーをしてくれている二十五歳の美女である。

「そんなにあちこちに心配をかけたのか」

「だって……」

いな吉は、ちょっと具合が悪そうに上目づかいで洋介を見ると、

「お前さまの姿が足の方からうすくなって、すーっと消えてしまわれた時、わちきは、これはもう幽霊になってあの世へ帰ってしまわれた、もう二度とこの世には戻っていらっしゃるまいと思いました」

「それで、泣いてばかりいて皆に心配をかけたんだな」

いな吉が嘆いていた本当の理由がわかって、洋介はうなずいた。彼女は、ちらっと舌を出してから頭を横に振った。

「おこま姐さんも、おっかさんも、笑うばかりでございました」

「そうだろう」
「旦那さまはもともとが仙境のお方なのだから、術を使って消えるぐらいはお手のものだろう。それに、きっとまた来るとおっしゃったのなら、すぐにいらっしゃるヨといって、本気で取り合ってくれませなんだ。でも、涼哲先生だけは、黙りこくってしまわれました」
いな吉がそういった時だった。勝手口の方から慌ただしい足音がして茶の間の前で止まり、
「姐さん。涼哲先生が……」
「もう、おみえかエ」
という、おたねの声が聞こえた。
いな吉が腰を浮かせた。走って来たらしいおたねは、襖を開けて入って来ると大きく息をつきながら、
「はい……元大坂町へ行きましたら、ちょうど先生がみえていて……、わたしといっしょに……こちらへいらっしゃいました」
「ソンナラ、すぐに」
いな吉は身軽に立ち上がり、おたねといっしょに出て行ったが、おたねはよほど急いで先に来たらしく、涼哲の声が聞こえたのは、それから二、三分たってからだった。
「速見さまが戻られたというのは、まことでござるか」

息せき切った涼哲の問いに、いな吉がこれも早口で答えている。
「アイ。ほんの今しがた……サ、サ、先生もお上がりなさいませ」
すぐに、二人の足音がもつれるように聞こえて、障子が開いた。
「速見さま」
涼哲は、洋介の顔を見るなり、茶の間に一歩足を入れて膝をつき、両手を前に揃えていった。
「先日は、幽霊のように消えてしまわれたとのことで、もうお目にかかれぬかと心を痛めておりましたが、このように早々（はやばや）とお戻り下され、不佞（ふねい）、嬉しゅうてなりませぬ」
不佞というのは、知識階級の儒者や医者などが使う独特の一人称である。
嬉しさを包みきれないような様子ながら、生真面目な涼哲が真剣な表情でいうのを聞いて、洋介も思わず手を前につき頭を下げた。
「すっかりご心配おかけ致し、まことに申し訳ない」
「そ、そのような……お謝り下さってはかえって恐縮致します」
涼哲は、慌てて片手を上げ、顔の前で横に振りながらいった。
「こちらが勘違いして勝手に心配致しておりましたので、速見さまのせいではござりませぬ」
「悪いのはわちきでございます」

いな吉は、体を縮めるようにして二人の間に割って入り、両手を前に揃えて額を畳にすりつけた。

「わちきが早合点してしまったばっかりに、八方ご迷惑をおかけ致しました。本当に恥ずかしくてなりません」

「それをいうなら、お前の見ている前でああいう消え方をした私が、謝らなくてはならない。でも、またこうやって戻って来たのだから、許してくれ」

洋介は、いな吉をなだめた。

「そんな、許すの許さないのなんて……」

いな吉は、驚いたように、

「お前さまが、またきっと必ず来る、とおっしゃったのに、わちきが、幽霊になってしまわれたと思い込んだのが悪いのでございますから」

「まあ、よろしいではござらぬか。姐さんが心配なさるのもごもっともなれど、無事お戻りになったゆえ、もう何もおっしゃいますな。不佞もひと安心致しました。

ところで、速見さま」

涼哲は、本当にほっとしたらしく大きく息をついてから、急に何かを思い出した様子でいった。

「ところで、速見さまが仙境よりお戻りになったら、ぜひにお引き合わせ下されと、ある人

から熱心に頼まれておりますが、お会い願えましょうか」

「どんな人で」

「木場で一、二を争う材木商、武蔵屋八左衛門と申す大変な金持にござります。前々からかかっていた脚気が、この六月頃、急に悪くなり、その後さっぱり良くならずに苦しんでいるから診てやってほしいと、井筒屋の忠太郎に頼まれまして参りましたところ、衝心しかけている重症にござりましたが、かの仙境の霊薬でみごとに治しました。

その時には、顚末をお話し致しましたが、もうお忘れでござりましょうか」

「聞いたような気も……」

洋介は、つぶやきながら首をかしげた。

「井筒屋の忠太郎が武蔵屋のあるじと昵懇で、ぜひ薬をやってほしいと頼みに参りましたゆえ、速見さまにもご相談致し、お許しを得ました。覚えておられませぬか」

そんな話があったような気もするが、何しろ、あの当時は十人以上もの患者のために米糠を処理して脚気の薬を作ったが、洋介自身は患者に会っていないため、もともと一人ずつのことをそれほどよく覚えてはいないのだ。

いきなり日本橋のたもとに出現した洋介を救い出した時、涼哲は、この人物がありふれた人間ではなく、不思議な異世界である仙境からこの世に流されて来た〈神仙〉に違いないと信じて自分の家に連れ帰った。そして、最初に教えてくれるように頼んだのが、脚気の治療

法だった。

幸いなことに、洋介にとって、ビタミンB_1の欠乏症にすぎない脚気など病気のうちにも入らなかったし、熟練した実験化学者の腕を振るえば、台所にあるあり合わせの道具を使って、生の米糠からビタミンB_1を多く含んだ液を作るぐらいたやすいことだった。

涼哲が、その薬をまず飲ませたのが、重症の衝心脚気にかかっていた幼なじみの親友、井筒屋忠太郎だった。盛夏を前にして瀕死の重態になっていた忠太郎は、危ういところで充分な量のビタミンB_1液を飲んで一命を取りとめたが、正直な涼哲は、この〈霊薬〉を作ったのは自分ではなく、仙境から来た神仙であることを父親の忠助に打ち明けた。

井筒屋は、大手の下り酒問屋、つまり、関西から船で運んで来る酒を手広く扱っている豊かな商人なので、働き盛りを迎えようとしている一人息子を救ってくれた洋介は、それ以後、一家の守り神のように扱われるようになったのである。

涼哲宅に居候していた宿なしの洋介にとって、もっとも有り難かったのは、難波町のこの家を提供してもらったことだが、いな吉が深川から日本橋に戻って芸者屋を開業する時も、井筒屋は大いに力になってくれた。

この時代、脚気は江戸の風土病だった。白米を大量に食べるのが原因なのだが、当時としては原因も治療法もわからず、非常に死亡者の多い難病だったから、涼哲は、新しく得た霊薬で患者をどんどん救うつもりだった。

しかし、先祖代々日本橋地区から離れずに住み続けた珍しい家系の子孫である洋介としては、うっかりこの時代の住人の運命に干渉した結果として、未来に生まれるはずの自分に影響が及ぶことを恐れた。そのため、涼哲に命じて、前世に善根を積み現世で金持になっている患者しか治療しないように釘をさした。祖父が、口癖のように「うちは昔から、さむらいと金持にゃ縁のない家柄だ」といっていたのを思い出して、大金持なら自分の運命に影響はないだろうと見当をつけたからである。

そのため、生真面目な涼哲は、いちいち相手の家柄などをくわしく報告して洋介の判断を求めてから、治療に当たっていた。木場に住む金持の材木商の話も、そのうちの一つだったのだろうが、洋介にとっては五年も前のことだから、はっきり覚えてはいない。しかし、涼哲にとっては、ほんの二、三ヵ月前のことなので、洋介に思い出させようとしていった。

「あの時のことも、お忘れでございましょうか。

武蔵屋のあるじは、商人ながら親分肌のなかなか気骨のある人物にござります。ようやく起きられるようになった頃になって、忠太郎が、あの薬は、実は神仙に賜った仙境の霊薬だ、と打ち明けましたところが、この世に仙境や神仙などあるはずはない、といって取り合わなかったそうでございます。

と、申しましても、いいがかりをつけて薬礼を払わぬなどといううけちなお方ではなく、まことに気前よく多分の薬礼を払って下されました。しかし、忠太郎はくやしがりまして、何

とかして速見さまがまことの神仙であることをわからせたいものだと思ったらしく、自分でやって来ていろいろとお願い致しましたところ、最初のうちは、そんな人は相手にせずに放っておくようにおっしゃっておりました。それでも、忠太郎が何度もお願いしますと、『八月二十二日には雨風が強くなり、木場に三尺ほど水が上がるゆえ、用心せよ。ただし、他言すれば天罰が下る、と伝えなさい』と仰せになりました」

「ああ、あれは確か、八月の中頃……」

そこまで聞いて、洋介は、はっきり思い出した。涼哲が、金持の材木商に投薬し、脚気が治ってから薬代の分け前を届けに来た時に、そういう話が出て、ついには、忠太郎がやって来たのだった。

「さよう。その見当にございます」

涼哲はほっとしたようにうなずいた。

当時の洋介にとっては、治療する相手が、自分の先祖に関係があるかどうかという一点にしか関心がなかったので、最初のうちは上(うわ)の空で聞いていたのだが、話を聞いているうちに、金の力と自分の五感しか信じないというその武蔵屋という男を少しからかってみたくなり、深川の木場に関係のあることで予言をしてみせたのだ。

もちろん、洋介に未来を予知する能力があるはずもなく、幕末期の神田の名主だった斎藤月岑(げっしん)の書き残した江戸時代の記録『武江(ぶこう)年表』の記事によって、この年の八月に江戸を襲うはずの台風のことを知っていたのにすぎない。

「忠太郎が、すぐ木場へ行って話しましたところ、武蔵屋は、商人ながら豪気な男ゆえ、神仙のご託宣など信じないとはいったものの、忠太郎の顔を立てるつもりか、迷いをさますつもりか、あるいは、内心では信じていたのかわかりませぬが、店の者を呼んで何やらこまごまといいつけていたとのことにございます。

ところが、ご承知のごとく、八月二十二日は嵐となって津波が押し寄せ、木場は大水となりました」

ご承知のごとく、といわれてもまったく記憶にないところから想像すると、洋介はその日は東京にいたらしいが、文政五年八月二十二日は、グレゴリオ暦では十月六日。台風シーズンだから、津波ではなく、たまたまの満潮時とかさなった高潮だったのだろう。

「武蔵屋はすっかり驚いてしまい、さっそく詫(わ)びと礼をいうため忠太郎のもとへ駆けつけてから、二人連れ立って駕籠(かご)を走らせ、この難波町の家へ参りました。しかし、あの頃、速見さまはあまり江戸へ来られず、九月一日の宵には、いな吉の前で急に消えてしまわれまして、以後おみえにならぬため、それきりになっております。

ところが、今度は、武蔵屋どのがすっかり信心してしまわれましてな、最近でも三日に上げず忠太郎の店に使いをよこされ、まだ神仙さまはおいでにならぬか、と問い合わせる始末。それもそのはずでございまして、あの時、津波が来ることを知って何かの手を打たね

ば、どれほどの損害が出たかわからぬとのことでござりました。
　それが、たまたま二十一日に当たっていた公儀御用の大量の木材の仕入れを二日間遅らせたばかりか、店にある木材も川並衆を集めて流れぬように縄をかけさせたため、何百両とも何千両ともいうほどの損害を受けずに済みましたそうな。
　とにかく、命と身代の両方を助けていただいたというわけで、もともとが格別に気っぷの良い木場の大旦那だけに、速見さまに一度お目にかかってお礼申し上げないことには、どんな罰が当たるやも知れぬ、といい暮らしておられると、忠太郎が申しております。
　一声かければ、すぐに駆けつけて来られますが、お会いなされましょうか」
　涼哲は、ちょっと遠慮がちに尋ねた。洋介は、涼哲が、自分と武蔵屋を引き合わせたがっているらしいことを察してうなずいた。
「もちろん、お会いします」
「もし、今ご在宅なら、大喜びで駆けつけて来られましょう。とにかく、今では以前とは打って変わって、速見さまをまことの神仙様と信じておられます」
　それを聞いて、洋介は苦笑した。財産つまり金と、五感のもとである命をまとめて救ってくれたから神仙を信じるのなら、武蔵屋にとって、実際は金と五感しか信じていないことに変わりないのではないかと思ったからだ。だが、涼哲は、相変わらず大まじめでいった。
「よろしければ、すぐに使いをやりますが、よろしゅうございましょうか」

「どうかな」
　洋介は、いな吉の顔を見た。せめて今日だけは、二人きりでいたいのではないかと思ったのだが、彼女の反応は違っていた。
「それは、なるべく早くお知らせになった方がよろしゅうござんすヨ」
「そうか」
「わちきは、辰巳（たつみ）にいた頃、武蔵屋さまのお座敷に何度か出たことがありますが、とてもきんどとは思えないほど腹の座ったきおい肌のお方でいらっしゃいます」
〈きおい肌〉とは、任侠（にんきょう）気質とでもいうのか、いわゆる強きをくじき弱きを助ける気風のことである。
「もともと、木場の旦那衆にはきおい肌が多くて、それだけなら珍しくもござんせんが、武蔵屋さまは格別でいらっしゃって、あれほどの大店（おおだな）の旦那としては珍しいとの評判でございます。あの旦那さまなら、ぜひ、お知り合いになっておかれた方がよろしゅうござんす」
「わかった」
　洋介はうなずいた。いな吉までがそういうのなら、今日はどうせひまなのだ。
「それでは、涼哲どの。私は、今日一日この家におりますから、すぐにでも、使いをおやり下さい」
「しからば……」

涼哲は、ほっとしたように腰を浮かしかけたが、ふと気づいたようにいった。
「ところで、ほんのしばらくお目にかからぬうちに、何やら頭の白いものが急に増えてしまわれたようで」
「いな吉にも、同じことをいわれました」
洋介は、右手で頭を撫(な)でながら、
「仙境では、いろいろと不思議なことが起こります」
と、ごまかした。

周の春

洋介は、江戸へ転時した時とは別の定点に向かって歩いていた。定点は、障害物がないだけでなく、出発側より到着側の方がやや低い場所の方が安全なのである。転時した時にやや体が落ちるぐらいの方が、足の裏と地面が重複する心配がないからだ。そのため、よほど緊急の場合以外は、江戸へ来る場合と東京へ戻る場合に別の定点を使っていた。
ごく普通の足取りで歩いてはいるものの、内心はかなり不安だった。
これまでは、東京で一日が過ぎれば必ず江戸でも一日が過ぎていたし、その逆も同じだった。ところが、今度は五年も前の江戸へ戻ってしまったのである。こんなことははじめてなだけに、はたしてもとの東京へ戻れるかどうか、あまり自信はなかった。
考えてもどうにもならないとは知りながら、洋介は、こんなことになってしまった理由を

あれこれ想像していた。転時という現象自体、考えれば考えるほど不可解な面が多くて説明のしようもないのだが、昨夜になってはじめてはっきり意識したのは、別の時間に転移しても同じ場所にいられる不思議さだった。

地球はたえず公転と自転を続けていて、自転速度だけをとっても、一日に一回転するのだから赤道上では時速千六百六十六キロメートル、日本あたりでも千キロメートルぐらい。秒速にすれば二百メートル以上の猛スピードで動いている。行き当たりばったりで別の時間帯へ転時すれば、猛烈な勢いで動いている地面と衝突して、即死する方がむしろ当然だ。

そればかりか、地球は太陽の周囲を公転もしているのだから、別の時間に転時した時、そこにうまく地球があるとは限らない。むしろ、ないのが普通だと思うし、かりにあったとしても、もとまったく同じ地点に転移できる可能性はゼロに近い。

ところが、洋介は、百数十年を隔てた時間を百回以上も転時したのに、いつも必ず同じ場所へ転移したばかりか、特別な衝撃を感じたことさえない。つまり、転時能力は、単に別の時間帯を往復するだけではなく、地球上に密着している能力も含んでいることは確かなのだ。

とすると、東京から遠く離れたロンドンで何度も転時を繰り返したことが、時間のずれを生じた原因になっているかもしれない、と想像してみるのだが、もともとよくわからない現象だけに、いくら考えてもそこから一歩も出られない。

そんなことを考えながら、芳町(よしちょう)に近い横丁にある一つの定点へ来た洋介は、用心深くあたりを見廻したが、透視できる未来の東京がもとの東京なのか、少し時間のずれた東京なのか確かめることはできなかった。

もし、五年前の東京へ戻ったとすれば、そこは、流子と再婚したばかりの世界で、仕事の方でも、まだようやく文筆で生計が成り立つようになったばかりの状態なのだ。それでも、過去へ行ければ、その後の情勢の変化がわかるだけに、何とか身を処していけそうだが、逆に、五年後の未来社会へ行ってしまえば、まるで知らない世界になる。

そう思うと不安でたまらなくなるが、だからといって、ここでためらっていたところでどうなるものでもない。転時能力のように不可解な力を使いつけていると、ものごとをある程度以上深く考えない習慣がつくので、洋介は、すぐに決心して目の前に見える東京に跳んだ。

間違いなく、いつも見慣れた人形町界隈に転時できたのでひと安心したものの、日付を確認するまでは軽はずみに動くことはできないから、新聞売り場へ行って売っている新聞の日付を見た。

間違いなく、もとの時間に戻っていた。ほっとした洋介は、そのまま地下鉄で中野へ帰った。

夕方には流子が帰って来たが、別に変わった様子もなかった。

洋介は、安心していつもの生活に戻った。

木場の武蔵屋からの使いが、難波町の家に手紙を届けて来たのは、武蔵屋自身がはじめて洋介に挨拶に来た日の三日後、十月四日の午後だった。宛名が自分あてになっていたので、洋介は自分で開封し、巻紙を広げて読んでみたが、すぐいな吉に渡した。

変体仮名を読むのにいくらか慣れたとはいえ、この時代の達筆な人が筆で書いた癖の強い字は読みにくい。特に武蔵屋の筆跡には解読できない部分が多くて、ざっと見たところでは、芝居に関することが何か書いてある程度にしかわからなかったからである。しかし、さすがにいな吉は、渡されたあまり長くない手紙にちらりと目を通しただけでわかったらしく、すぐに顔を上げて洋介を見た。

その表情は、まぶしいほど輝いて見えた。

「武蔵屋の旦那さまが、お前さまとわちきを、顔見世の初日によんで下さいますヨ」

「顔見世って何だい」

藪から棒なので、尋ねると、いな吉はびっくりした様子で、

「アレ、いやでござんすヨ」

と、いって洋介の顔を見詰めたが、すぐに笑いだした。

「顔見世といえば、お芝居の顔見世にきまっているじゃござんせんか。

今年の市村座の顔見世は、卯年に仲違いしていた成田屋と音羽屋が、久しぶりに同じ舞台を踏む仲直り狂言で、上方から帰った大和屋がその仲立ちをするというので、それはモウモウ大変な前評判でございます。とても普通なら桟敷など取れるこっちゃござんせんのに、あの旦那さまは、それはそれは、お芝居がお好きなばかりか、有名な見巧者でいらっしゃって、成田屋とも木場でのおつき合いがあって大のご贔屓で金主もしていらっしゃるし、二丁町の芝居茶屋でも特別の上客でいらっしゃるから、今度の狂言のことも前々からご存じで、桟敷を取っていらっしゃったのでござんしょう」

やや興奮したように一気にしゃべるのを聞いて、洋介は、

「そうか」

と、うなずいた。だが、いな吉の喜びに水をさしてはいけないと思い、一応はわかったような顔をしただけで、実際は何のことやらさっぱりわかっていない。わからないのも当然で、当時の人なら特に芝居好きでなくても常識的な話題だが、芝居の知識がまったくないのに等しい洋介にとっては、呪文を聞いているのと大差ないからだ。

もちろん、質問すれば喜んで説明してくれるだろうが、今までの経験によれば、その説明もこの時代の常識を背景としていてわからない部分があり、その部分を質問するとまたいな吉の常識にもとづいた説明になり……という具合に、あまり論理的でない循環が始まるはずだから、うっかり質問できない。

だが、大喜びしているいな吉には、洋介に理解できたかどうかなど考えるゆとりもないらしく、すぐに腰を浮かせた。

「武蔵屋さまのお使いがお待ちだから、すぐにご返事申し上げなくてはなりません」

「手紙なら、お前が書いてくれ」

洋介も、文章を書くのはプロだが、毛筆で巻紙に変体仮名の候文を書く能力はない。その点、いな吉は、六歳の春から〈女筆指南〉という看板を掲げた女性の師匠のもとで、恥ずかしくない程度の女文字をかけるまで手習いに励んでから、さらに大身旗本の奥勤めを済ませている。この時代としては中程度以上の教育を受けていて、奥勤めの頃には、奥様の手紙の代筆もしたというから、格調正しい手紙を書けるのだ。

だが、いな吉は、首を横に振った。

「こういう時は、返事の口上だけ申し上げればよろしゅうござんす」

「じゃ、適当に答えてくれ」

「アイ。口上はわちきが申しますが、お前さまは、もちろん顔見世にはいらっしゃいますネ」

いな吉は、立って茶の間の障子に手をかけたが、振り向きながら、念を押すようにいった。

「も、もちろん行くとも」

洋介は、以前いな吉といっしょにちょっとだけ中村座を見に行ったことがあるが、退屈なので一度で懲りてしまい、それ以後は行っていない。今回も、もし、いな吉が乗り気でなければ断わってしまうところなのだが、彼女は芝居が大好きで、特に、十一月一日に始まる顔見世となれば、見ないのは芸者の恥ぐらいに思っているのだ。

といっても、これはいな吉に限ったことではなく、江戸の女性にとっての大芝居見物は、ほかに比べる対象もないほどの最高の娯楽であり、中でも顔見世は、特別なあこがれの世界だった。

現代の歌舞伎では、演目が毎月替わるが、江戸では、年に四、五回替わるのが普通であり、当たり狂言なら客が入る限り何百日でも興行を続けた。この当時、正式に認可されていた大芝居の中村座、市村座、森田座の三座では、役者は一年間その芝居小屋つまり劇場で出演するが、毎年十月十七日に入れ替わりになり、十一月一日から新しい顔ぶれによる興行を始める慣習になっていた。どの役者をどの劇場に出演させるかは、興行主が合議で決めたのである。

したがって、十一月は〈顔見世〉の月といい、古代中国の周では十一月が正月だったといういい伝えに従ってこの月を芝居国の正月とし、一日を初日として華やかに開演した。中国かぶれにしゃれて〈周の春〉〈周の正月〉などと呼ぶ場合もあった。

劇場関係者は、一日から三日までの三日間、裃と羽織袴姿で正装し、正月の飾りつけを

して雑煮を祝ったというから、本当に正月気分だったようだ。十月のうちにちゃんと餅つきもしておいたというから徹底している。

しかも、顔見世は十二月一杯続くのではなく、千秋楽が十二月十日だから、四十日間だけの興行だ。特別な大入りの時でさえ十五日まで延長するだけだったから、普通の興行というより一種の祭礼のような雰囲気で、芝居の年中行事のうちでも特に重要だった。芝居好きの人なら、何が何でも見たかったし、見に行けない人は非常にがっかりしたようだ。

三座のうちの中村座は堺町、市村座は葺屋町、森田座は木挽町にあったが、俗に二丁町という堺町と葺屋町は、現在の日本橋人形町三丁目付近で、いな吉の実家のある小網町からも、この難波町からも、自分の芸者屋のある元大坂町からも目と鼻の先だった。つまり、いな吉は、武家奉公に出ていた期間と深川で芸者をしていた間を除いて、生まれてこの方ずっと芝居町まで徒歩十分足らずの場所に住んでいたことになる。

彼女が芸事を好きになったのも、役者や芸人が大勢住んでいる環境の影響を受けたせいだったし、芝居はもちろん、子供の頃から大好きだった。

そういういな吉にとって芝居は生活の一部であり、特に芸者になってからは、顔見世はほとんどすべて見てきた。客のお供で行く場合もあったが、仲間同士で誘い合わせて行く場合も多かった。顔見世ぐらい見ておかないと、座敷で客の相手もできないからだ。

ところが、今年は、旦那の洋介がまるで幽霊のように消えてしまうのを見た衝撃で、芸者

仲間に顔見世を誘われても断わるほど落ち込んでいたのに、いきなり洋介が戻って来たと思うと、すぐに辰巳時代に顔見知りだった武蔵屋の主人が山のような贈り物を持って挨拶に現われた。そして、自分を洋介の妻のように扱ってくれたばかりか、今度は、話題の的になっている市村座の顔見世の、しかも初日に招待してくれたのだ。

天にも昇る心地になったいな吉は、洋介が内心迷惑に思っているなどとは夢にも思わないから、いそいそと出て行くと、上がり口に腰をかけて茶を飲みながら待っていた使いの男の前で板敷に膝と両手をつき、

「お待たせいたしまして、申し訳ございません。当家のあるじも喜んで伺うと申しております。いな吉も必ずお供いたしますと、武蔵屋の旦那さまへお伝え下さりませ。遠方からお越しくだされまして、おかたじけのうございます」

と、丁重に返事を述べた。使いの男は、

「かしこまりましてござります。ご主人さまといな吉さま、お揃いでおいで下さるよし、あるじに申し伝えまする」

と、返事の口上を復唱して帰って行った。

こうして、洋介の意思とはほとんど無関係に顔見世に行く話は決まってしまったが、女性にとっての顔見世の魅力をよく知っている武蔵屋にとっては、これが洋介と一層親しくなるためのもっとも自然な手段だったのである。

しかし、それからが一騒動だった。
まず、桟敷（さじき）の定員は七人だから、大柄な洋介を二人前としても、いな吉と武蔵屋自身を合めて四人前で、あと三人入れる。空けておくのも無駄なので、洋介の方で誰かを連れて行くのならぜひ、という連絡が折り返して入った。
川柳に、「顔見世のお供はどれもくじ強し」とか「顔見世に下女泣きだして供に行き」「目を赤くして顔見世の留守にいる」などとあるように、限られた定員に対して希望者はいつでも圧倒的に多いが、この場合は、いな吉が、おこま姐さんとおたね、それに涼哲夫人の多恵を指名して問題なくおさまった。
本当に賑やかなのは、その後だった。
まず、当日は何を着て行くかが大問題になった。普通の正月なら、誰でも身分、経済力相応の晴れ着を着るが、三ヶ日のうちに顔見世へ行ける人は限られている。特に、初日の上等の桟敷では、こちらからも見晴らしが良い代わりに、よそからでもよく見えるから、江戸中でも特に晴れがましい場面でたっぷり見られる覚悟をしなくてはならない。
しかも、女性が四人揃えば、四人それぞれの身分、職業、立場もあり、四人の調和も考えなくてはならないし、武蔵屋のような豪商の招待となれば、あまりみっともない恰好をしては、主人側に対しても失礼に当たる、という口実がつくので、衣裳選びが一仕事になるのだ。

芝居は観客なしに成り立たないから、芝居が文化なら、芝居を見るのもその一部でなくてはならない。となると、芝居を楽しむために半月もかけて衣裳を決め、ふさわしい髪形にして化粧をする知識、経験、いわば芝居見物のノウハウも芝居の一部で、立派な文化というべきだろう。
ただし、子孫が江戸文化と呼ぶようになるさまざまなものや風俗を作りだしたこの時代の先祖たちに、自分たちの作品をヨーロッパ的な意味での芸術や文化とみなす意識がまったくなかったことは、現場に居合わせている洋介の見聞として断言できる。
明治維新と太平洋戦争の敗戦という二つの断層によって、われわれは伝統的な生き方を軽蔑して過去のあら探しに熱中した。ようやく価値を認める場合でさえも、外国語を翻訳した言葉、あるいはカタカナ外国語を使って、まるで外国人のような立場でしか評価することができなくなってしまったのである。
しかも、ほめるにせよ悪口をいうにせよ、なるべく欧米的な発想で、できるだけ欧米人のようないい廻しをしないと尊敬されないから、意識するにせよしないにせよ、自分が西洋的と信じているものさしを当てようとする。
だが、洋介が肌で感じている江戸文化は、生活そのものであって、古ぼけた過去の遺物として博物館のガラスケースに収め、外側から外国人の目で観察するような対象ではない。
それはともかく、江戸の女性には、顔見世の衣裳の相談で行ったり来たりするのが立派な

文化かどうか、などと考えるような種類の教養はないが、これ以上張り合いのあることはめったになかったので、いな吉は毎日上機嫌だった。

洋介としては、転時の瞬間を見せた結果として、すっかりおびえさせ、辛い思いをさせたという負い目があるから、自分の〈顔〉のおかげでこれだけ喜ばせてやれるのは、本当に嬉しかった。

そして、いよいよ十月の晦日になった。この年の十月は小の月なので、二十九日になると、二丁町は騒然としてくる。洋介は、芝居にまったく関心がないので、近所にいながらこれまで寄りついたこともなかったが、いな吉が顔見世へ行くというのを聞いた難波町の近所の女たちまでが、何となくそわそわしているのを見て急に興味が湧き、夕方になってから見物に行ってみた。

中村座と市村座は一本の通りの片側に並ぶかなり大きな建物だ。もちろん、当時としては大きいというだけで、現代の大劇場と比べればはるかに小さいが、マイクロフォンもスピーカーもなかった時代、役者の肉声が届く範囲は限られていたから当然だった。また、火事の多かった江戸では、劇場もしばしば全焼したせいもあって、あまり普請には金をかけられず、それほど豪華な建築でもない。

また、二座が並んでいるといっても、隣接しているのではなく、四十メートルぐらい離れていた。それぞれの座の両側には、所属する芝居茶屋、料理茶屋、小茶屋、水茶屋などが

ぎっしり並んでいたからだ。

芝居茶屋は、座席の予約を受けつけるプレイガイドの役割、席への案内、観劇中の飲食物のサービスはもちろん、女性客が幕間に着替える時の便宜もはかってくれるし、高級料亭としての機能もあるから、終演後の宴会もできる。座席の予約は、芝居茶屋を通さないとできないから、正規の芝居見物はちゃんとした芝居茶屋を通すのが便利だったが、費用もたっぷりかかり、もっとも贅沢な方法だった。

時には、役の終わった役者と女性客がデートする出合茶屋つまりラブホテル的な部屋の提供に到るまで、芝居見物にともなうさまざまな業務を引き受けてくれるのが、芝居茶屋なのだ。

さて、芝居国の大晦日の様子を見ようと思うのは洋介だけではないらしく、ひま人たちが大勢歩いていた。堺町の通りを行くと、茶屋の軒にはそろそろ灯の入った提灯がずらりと並び、造花の飾りつけができていて、見るからに華やかな感じがする。芝居好きの人なら、これだけで気もそぞろになるのだろう。

大芝居のシンボルになっている櫓が屋根に上がっている市村座の前にさしかかると、櫓の下には絵の具の色も鮮やかに、見るからに描いたばかりというような新しい絵看板がかかっている。その左に『御贔屓竹馬友達』と大きな字で書いてあるのが顔見世の主な演目らしい。この漢字を〈ごひいき　ちくばのともだち〉とは読まず、〈ごひいき　つわもののまじ

わり〉と読むのも歌舞伎独特である。

その左に、市川団十郎、尾上菊五郎、岩井半四郎などと書いた札が並んでいるのが主演俳優の名前であることは、洋介にもわかった。現代の歌舞伎にもそのままの名前が伝わっているし、いな吉が熱心に見ている芝居の番付という墨一色で刷った一枚ものの印刷物には、役者の名前や似顔絵が並んでいるからだ。

それ以上に目を引いたのは、正面に積み上げてある米俵や菓子の蒸籠、三方の上においた大きな鯛、薦かぶりの酒樽などだった。これは、積み物といって、ひいき筋、いわばスポンサーからの贈り物だが、質素なこの時代としては非常に貴重な商品を山積みにすることで、豪華な雰囲気を盛り上げているのだ。

洋介は、かつて文政九年の大晦日の江戸を日暮れ時に歩いたことがあるが、あの時に見た大店の店頭の忙しい緊張感とどこか雰囲気が似ていると思った。晴れの日である明日に備えて、今日中にすべてを整えなくてはならない点では、どちらも同じだからだろう。

暗くなる前に家に帰ると、女髪結い、つまり女性の美容師が来ていな吉の髪を結っていた。芸者は、日髪といって毎日髪を結い直すのが普通だから、改めて驚くこともないのだが、普段は午後早いうちに来る髪結いが薄暗くなりかけてから来ているのがちょっと意外だった。

「こんなに遅くなって髪を結うのは珍しいな」

というと、髪結いが答えた。

「姐さんは、明日は朝がお早いから、今のうちに結っておきますのサ。明日の朝は、お撫でだけにします」

「そうか」

洋介が納得すると、今度はいな吉がいった。

「明日は、五ツ頃には茶屋へ行きますから、わちきは明六ツ前には元大坂町へ行って、おこま姐さんといっしょに支度をします。お前さまが五ツ前に来て下されば、その足でごいっしょに葺屋町の尾浜屋へ行って、武蔵屋さまと落ち合います」

「そんなに早くから行くのかい」

この時代の人が非常に早起きであることはよく知っているが、洋介は、少し驚いていった。電灯のなかった時代は、何をするにも太陽の光が頼りだったが、芝居もこの点では同じだった。蠟燭も使ったが、基本的な照明は桟敷の上にある横に長い窓から入る自然光線だから、昼間見るものであることは、かつて一度見たことがあるだけに充分承知していた。

陰暦で十一月はじめ、グレゴリオ暦で十二月中旬の明六ツといえば丁度午前六時頃だから、この時代の人としてはけっしてそれほど早い時間ではないこともよくわかるが、いくら何でもほんの三、四百メートル、歩いて五分ぐらいしか離れていない葺屋町へ行く支度をするのには、早すぎるように思った。

「三建目が始まるのが、五ツ過ぎだから、それぐらいに出ないと間に合いません」
「ふうん」
よくわからないなりに、洋介はうなずいた。
江戸の芝居は、開演を知らせる一番太鼓が七ツに鳴る。七ツは、冬至も間近なこの時期では午前四時だが、夏至の頃ならまだ二時半で、早朝というより夜中といった方がいい時刻である。そんなに早く開演して観客が来るのか不思議だが、いくら昔でも、開演の頃は、ほとんど客が入らなかったようだ。
もちろん、そんなに早朝からちゃんとした芝居をしたのではなく、最初は下級俳優が三番叟を舞い、続いてワキ狂言という決まった芝居をする。市村座の場合、ワキ狂言は七福神と決まっていて、これが終わる頃ようやく日の出となる。ワキ狂言の次は序開きといって、見習い作者の作った新作の一幕ものの喜劇を演じる。次がやはり下級俳優の演じる二建目（ふたつめ、にたてめ、ふたたてめ）という開幕劇だが、ここまでは、番付にものっていないというから、ほとんど付録以下の扱いで、見ているのは、近所のひまなおばさんや、江戸見物に来たついでに芝居小屋でものぞいて見ようかという程度の、あまり小遣いが豊富でない観光客ぐらいのものだった。
次がいよいよ本格的な芝居の序幕になるが、序幕といわず三建目と呼ぶ。普通は時代物に決まっているが、顔見世の三建目は、有名な歌舞伎十八番の荒事『暫』を演じることに

決まっていて、そろそろ芝居好きの客が入り始める。それが五ツ頃だが、この季節の五ツは午前八時頃だから、もう外は充分に明るくなっている。
「ここは、芝居に近いからいいけれど、山の手のお方なんぞは、前の日から支度を始めるのでござんすヨ。堅気のお方は出つけないから、芸者と違ってお支度に大層な手間がかかります」
「そうだろうな」
洋介は、うなずいた。現代でも、女性の外出には手間がかかる。流子は、大学を出て以来ずっと働き続けているから、毎日かなりきちんとした通勤用の服装で出かけるのに慣れているはずだが、それでも、二人でちょっと改まった食事にでも行こうとすれば、支度にはかなりの時間をかける。
毎日、紋付の裾模様を着てお座敷に出ている芸者のいな吉も、服装の点では、現代のキャリアウーマンと似たようなものだから、芝居へ行く支度ぐらいいつもと同じ手間ですぐにできそうなものだが、年に一度の顔見世ともなれば、やはり特別な手間がかかるのだ。まして、片道一時間以上もかかるような所に住んでいる堅気の素人の女性なら、前夜はろくに寝ずに支度をするのが普通だったとしても当然だろう。
それやこれやで、いよいよ晩になると、いな吉は寝る前に布団の上にかしこまって手を合わせ、何やらぶつぶついい始めた。洋介は、先に横になって聞いていたが、やがて彼女が寝

床に入ったので尋ねた。
「今、何をやっていたんだね」
「明日、寝過ごさないように呪文を唱えていましたのサ」
「へえ。そんな便利な呪文があるのか。どんな呪文か教えてくれないか」
と尋ねると、大まじめな顔でいった。
「寝る前に、『ほのぼのと明石の浦の朝霧に』と三回唱えておいて、朝起きた時に、『島隠れ行く船惜しとぞ思う』と下の句を三回唱えるのでござんす」
「それで、ちゃんと起きられるのかい」
「アイ。わちきは、一度も寝過ごしたことはござんせんヨ。芝居の時も、いつもこれでちゃんと目が覚めますのサ」
いな吉は、得意そうにいった。目覚まし時計のなかった時代には、こういう呪術がいろいろとあったのだ。
呪文の効果があったらしく、翌朝になると、いな吉はまだ真っ暗なうちに起きだした。洋介も気になっているからつられて起き上がると、
「お前さまのお出かけまでには、まだ一刻もありますから、ゆっくりお休みあそばせ」
といいながらほのかな有明行灯の明かりを掻き立てると、寝巻に使っている長襦袢の上から半纏を羽織り、寝室に使っている二階の六畳間を出て行った。十一月といっても、グレゴ

リオ暦では十二月中旬で、もうかなり寒い。半月以上も前に〈こたつ開き〉をしてから、こたつを使って寝ているので、足が冷えて眠れないということはなかったが、起き上がってじっとしているとすぐに体が冷えてくる。
背筋がぞくぞくしたので、洋介は慌ててまた布団にもぐり込んだ。いな吉は、すぐに上がって来て、
「良いお天気でござんすヨ」
と嬉しそうにいった。現代の観劇なら、たとえ雨が降っても、劇場へ行く途中で濡れるから困るだけで、天候とは無関係である。ところが、江戸時代の芝居は、太陽が最大の照明だから、べた曇りでは舞台そのものがすっきりしない。その点は、遊山つまりピクニックに行くのも、花見に行くのも似たようなものなのだが、花見の季節に雨が降ると、芝居小屋へ来る人が増えたというのは、濡れるより薄暗い方がましだからだろう。
いな吉は、屏風のかげへ廻って手早く着替えると、前日から準備してあった洋介の着物をもう一度改めてから枕元に両手をつき、
「そんなら、お前さま。わちきはもう出かけますから、五ツまでにはきっと元大坂町へいらっしゃって下さいネ」
といいおいて、急ぎ足に出て行った。やがて、うつらうつらしている洋介の耳に明六ツの時の鐘が聞こえた。

洋介は、もう一寝入りしてから支度して家を出た。元大坂町の家へ行って格子戸を開けると、いな吉がすぐに出て来た。

あれほど大騒ぎしていたのだから、どんなに立派な衣裳を着ているのかと思うと、意外なことにいつも座敷に出る時と同じように、紋付の裾模様に長い下げ帯を締め、今朝もう一度撫でつけた艶やかな島田髷に、無反り一文字の櫛と簪を二本さしただけという、標準的な辰巳芸者姿をしているだけなのだ。

それでも、ほんの薄化粧しかしていないのに、つい見とれるほどの愛くるしい美貌を見れば、この美少女に華やかな衣裳など必要ないとも思うのだ。じっと見詰めていると、その様子がおかしかったのか、いな吉は、袖を口に当てて笑った。

「お前さま。わちきの顔に何かついてますかエ」

「いや。お前は、最初から大騒ぎしていたから、どんなに豪勢な着物を着るのかと思っていたら、普段と同じ座敷着みたいだから、ちょって不思議に思ったのさ」

二人のやり取りを聞きつけたおこま姐さんがすぐに出て来た。

「コレハ、旦那さま。お早うございます。本日は、顔見世のお相伴を仰せつけ下さり、まことに有難う存じます。いな吉は、まあ、旦那さまを上がり口にお立たせ申したままで……さ、お上がり遊ばしまして」

おこまは、名義上はここの女主人で、いな吉のマネージャーをしながら宮薗節の師匠もし

ている。ほんの半年ぐらい前までは現役の芸者で、借金で身動きできなくなっていたのを、いな吉のたっての希望で洋介が借金を肩代わりし、マネージャーとして引き抜いたのである。

自宅同然の場所なので、さっさと下駄を脱いで上がると、

「旦那さま。いな吉の衣裳でございますが……」

あとからついて入ったおこま姐さんが、畳に膝をつきながら、いいわけするようにいった。

「これは、けっして普段の座敷着ではございません。裾模様は、成田屋の猿に、音羽屋の梅と大和屋のかきつばたを散らした縫い取りで、急いで誂えましてございます」

おこま姐さんは、せっかくの顔見世にいな吉の衣裳代をけちったと思われたくないので、慌てて説明してくれたが、説明されても洋介には何のことやらさっぱりわからないし、そんなことをまるで気にもしない旦那だと知っているいな吉は、ただ笑っているばかりだ。

実をいうと、白猿、梅幸、杜若はそれぞれ、今年の市村座の顔見世に出演する市川団十郎、尾上菊五郎、岩井半四郎の俳名なのだ。役者たちには、俳優としての芸名のほかに、俳名つまり詩人としての雅号があるのが普通で、有名な役者の俳名は、当時の江戸人にとってはほとんど常識になっていた。

いな吉は、顔見世へ行くことが決まるとすぐにこのアイデアを思いつき、図案化した三人

の俳名をそれぞれ裾模様として散らし縫いにさせた。しかし、一つ一つの模様はかなり小さいので、そばに寄ってよく見ないとわからない。強い自己主張をせず、わからない人にはわからなくて結構というのが江戸趣味、深川好みなのだ。

「なるほど」

ともっともらしくうなずいたものの、わかったのは、いな吉の服装に、何やら深い意味のある趣向が凝らしてあるということだけである。

説明を終えたおこま姐さんが奥へ入ると、すぐに誰かが来た。普段なら、いな吉は人が来てもめったに応接には出ないのだが、今日は、おこまもおたねも大騒ぎの最中なのですぐに立って出て行き、涼哲夫人の多恵といっしょに戻って来た。

「まあ、速見さま。さえざえしゅう。このたびは、まあ、夢にも思いませなんだ顔見世にお招き下さいまして、おかたじけのうございます。主がくれぐれもよろしくと申しております」

多恵は、ふっくらした色白の顔を心持ち紅潮させながら丁寧に挨拶した。洋介の知っている文政十年の多恵は、一人の子の母になっていたが、この当時はまだ子供がなく、ようやく二十二、三になったばかりだから、見るからに若々しい。涼哲の家に居候していたことのある洋介にとって大変親しい人であるのは当然だが、今度顔見世を見物に行くことが決まってから顔を合わせたのは、はじめてである。

挨拶が終わると、愛想のいい多恵はすぐにいな吉の服装に目をとめていった。

「まあ、姐さんの裾模様は、猿、梅、かきつばたの散らし縫いではございませんか。結構なご趣向でいらっしゃいますこと」

「アイ。わちきが考えました」

いな吉は、にっこり笑ってうなずいた。旦那の洋介がさっぱりわかってくれない自分の趣向を、一目で見抜いて貰ったのが嬉しいのだ。

「おこま姐さんは、まだお支度中でございますか」

「今、おたねの支度を見てやっているところでございます。間もなく済みましょう」

などといっているところへ、おこまが出て来て、

「まあ、これは、ご新造さま。すっかりお待たせ致しました。こちらも支度が整いましたので、すぐに参ります」

というわけで、ようやく全員が揃った。

女三人は出払っても、箱廻しの弥八が留守番をするので、戸締りの必要はない。女たちが先に出て、洋介は、十メートルぐらいあとからゆっくりついて行った。

顔見世

洋介は、市村座の西上桟敷四つ目に座って、あたりを見廻していた。

文政五年（一八二二）陰暦十一月一日の四ツ前、グレゴリオ暦なら、十二月十三日の午前九時頃である。晴れているから場内は明るく、さらに、舞台や花道などには二、三メートル間隔で太い蠟燭が立ててあるから、目が慣れればそれほど暗くは感じない。

この頃の大芝居の座席は、土間の大衆席を囲むように一段高くなった席があり、舞台の上手側が東桟敷、下手側が西桟敷で、上等席となっている。正面の向桟敷は、名前は桟敷でも、せりふが聞こえにくいので安い大衆席だった。

東桟敷と西桟敷は二階になっていて、それぞれ上桟敷、下桟敷というが、下桟敷と切り落としの間には、高土間という中間的な席があった。

桟敷の中にも比較的良い場所と悪い場所があるが、舞台側から四番目と三番目の桟敷は俗に四三と呼び、もっとも見やすく役者の声もよく聞こえる。上の西桟敷の四三は、本花道に近くて太夫桟敷ともいう特に人気のある特等席だから、武蔵屋のような有力者でなくては、顔見世の初日を予約するのはむずかしい。

もちろん、料金も非常に高くて銀三十五匁もした。このほか、茶屋にチップを一分つまり四分の一両、銀十五匁相当ぐらいを払うから、合計五十匁。銀六十匁が金一両で、一人前の大工の賃金が、月に二両程度だった時代だから、ここで一日座って芝居を見ようとすれば、大工のほぼ半月分の稼ぎが必要なのだ。

狭い桟敷に一日中座っていると思うだけでうんざりしている洋介にとっては、まさに猫に小判なのだが、一番上等の席で、人気絶頂の七代目団十郎や三代目菊五郎、五代目半四郎の舞台を見られるのだから、女性たちはもちろん大喜びだった。

最前列には、いな吉を中心にして多恵とおこまが並んだ。おたねは、遠慮して後ろへ行くというのだが、洋介は、無理に自分の前に座らせ、武蔵屋と並んで最後列に座った。洋介は特別大きいから、前に小柄な女性たちがいてもあまり邪魔にならないのだ。

武蔵屋は、どっしりと構えて正座しているが、洋介はもちろん最初からあぐらをかいた。床には毛氈を敷いてあるが、江戸風だから座布団はなく、正座すれば五分と耐えられそうになかったからだ。

劇場の中は混雑していた。見下ろす下の大衆席は、もともとは〈切り落とし〉という仕切りのない入れ込みだったのが、次第に枡という仕切りのある土間が増えて、この時代は枡席が大部分を占めていた。外見は派手でも、江戸の劇場経営は、火災が多かったせいもあってかなり不安定だった。客の入りが悪ければすぐ赤字になるため、一人でも多く詰め込み、少しでも高い代金を取ろうとしているうちに、切り落としが減ってしまったのだ。

この部分は、桟敷と違って茶屋を通さず劇場正面にある〈鼠木戸〉という入口で料金を払えば入れるから、先着順でどんどん客を入れた。人気のある芝居の場合は、かなり無理な詰め込みをするので、満員といっても現在の椅子席での満員のようなそれなりに整然とした感じはなく、ただ雑然と人が詰まっているように見える。

場内には、独特のいぶし臭いような匂いが漂っているが、これは、大衆席の客一人に一本ずつ強制的に売りつける喫煙用の火縄のくすぶる匂いで、芝居小屋にはつきものになっていた。この火縄は、木綿糸をよって硝石つまり硝酸カリウムをしみ込ませてあり、数時間かけてゆっくり燃えるようになっている。最初は、煙草を吸う人の便宜のために売っていたのが、この時代には、入場者の人数チェックの目的を兼ねて、タバコを吸わない人でも買わされる仕組みになっていた。

洋介たちが、尾浜屋という大きな芝居茶屋に入ったのは、予定通り五ツをちょっと過ぎた頃だったが、堺町から葺屋町へ抜ける通りはもう、びっくりするほどの混雑になっていた。

芝居町は、魚河岸と新吉原遊廓と並んで「日に千両の金が動く」と謳われた場所だが、これぐらい繁盛していれば当然だと思えてくる。とにかく、現在の歌舞伎座と国立劇場を足しても、これだけの人数は収容できないほどの人が、ぞろぞろと歩いているが、もちろん、芝居小屋に入れるのはそのごく一部で、大部分はただ顔見世の雰囲気を味わうために二丁町をそぞろ歩きしているだけである。先を歩く三人からつかず離れずの距離を保って歩いてきた洋介も、はぐれてしまいそうになるほどだった。

ようやく大きな芝居茶屋の尾浜屋に着くと、こういう世界に慣れているおこまが先に入って声をかけた。すぐにおかみが出て来て、一行は丁重に二階座敷へ通された。

武蔵屋は座敷の隅に座っていたが、洋介の顔を見ると、両手を前につき額を畳にすりつけるようにした。初対面の時も、洋介を見るなり同じようにていねいに頭を下げたので、こういう癖なのかと思ったが、よく見ていると、他人に対してはそんなことはなく、ごく普通に振る舞っている様子だった。

親分肌、きおい肌の材木問屋と聞いていたので、洋介は、見るからに豪放磊落な江戸っ子といった感じの大男を想像していたのだが、実際の武蔵屋は、小太りで中背のごくもの静かな男だった。周囲の人々の態度を見ているうちに、これは特別な大物らしいと自然にわかってくるようなタイプの人物で、年齢は、洋介よりもちょっと上の、五十代前半のように見えた。

そんな武蔵屋も、〈神仙〉である洋介だけには、特別な敬意……という以上に畏(おそ)れのような感情を抱いているらしく、頭を上げると、非常にていねいな態度でいった。

「これは速見さま。お早うございます。この度は、よくお越し下さりました。ご新造さまも姐さんがたもお揃いで、手前どもと致しましてはまことに張り合いがござります。本日は、ゆっくりお楽しみ下さりますよう」

洋介も、向き合って座ってから頭を下げ、

「このたびは、お招きいただき有難うございます」

とあっさり挨拶を返す。こういう場合の挨拶にも、微妙な階級差があるらしく、かかりつけの医師の妻である多恵は、対等の身分として、

「わたくしまでお招きにあずかりまして、有難う存じます」

と、ごくあっさり答礼した。いな吉は、かつて芸者として武蔵屋の座敷に出たこともあり、相手の社会的地位をよく知っているのだが、今では、洋介の妻のような立場でもある。どうするかと思って見ていると、利口な娘だけあって、

「これは、武蔵屋の旦那さま。本日は顔見世の初日にお招き下されまして、まことにおかたじけのう存じます」

と、ていねいな女言葉であっさりと挨拶した。

こもごもの挨拶が終わると、茶菓子を持った仲居を従えたおかみが入って来て、

「そろそろ三建目が終わるところでございます」

と説明した。洋介は、芝居が始まっているのに、茶屋でお茶など飲んでいていいのかと心配になったが、事情をよく知っている人にとっては、芝居でも、ひいき役者が登場しない儀式じみた部分など見てもしょうがないということらしい。

「速見さまは、これまでにも芝居をご覧になったことはござりますかな」

武蔵屋がうやうやしく尋ねた。

「春頃に、一度だけ中村座へ参りました」

「団十郎の『千本桜』でござりましたか」

「アイ。さようでございます」

洋介が返事をする前に、いな吉が引き取って答えた。洋介がろくに何も覚えていないことを知っているからだ。

「それから、『色深川(いろもふかがわ)』の玉屋新兵衛でござんした」

「そうであった。あの時は、なかなか良いできであったな」

武蔵屋は、嬉しそうにうなずいてからいった。

「あとで、ぜひ木場の親玉にお引き合わせ致しましょう」

「はあ」

何をいわれているのかわからないので、洋介は曖昧に答えたが、同行の女性たちはそれを

聞いて色めき立った。

「アレ、武蔵屋の旦那さま。まさか、おなぶりになっていらっしゃるのでは……」

いな吉が、右手の甲で口を押さえながら、少し腰を浮かせるようにしていった。

親玉というのは、大芝居の中心人物を意味する団十郎のあだ名だが、木場に別荘があったことも有名で、木場の親玉といえば、誰でも知っていたのである。七代目団十郎は、歌舞伎の歴史を通しても、最高の役者の一人だが、武蔵屋は、有力な後援者で個人的にも親しい間柄なので、洋介に対するサービスの一環として芝居が終わってからの宴席に招いてあるのだ。

しかし、本当に喜んだのは女性たちの方で、何をいわれているかもよくわからない洋介にとっては、相変わらず猫に小判のままである。

賑やかにそんなことをいいながら茶を飲んでいると、またおかみが入って来て、

「それでは、そろそろお桟敷へご案内つかまつりましょう」

と、愛想良く声をかけたので、一同立ち上がり、ぞろぞろと部屋を出た。階段を降りてまた外へ出るのかと思っていると、廊下をいくつか曲がった先に橘の紋のついた大きな暖簾がかかっていた。それをくぐると、尾浜屋入口という札がかけてあって、案内の男が草履を並べている。大芝居に隣接した一流の芝居茶屋からは、直接劇場に出入りできる構造になっていたから、女性が着替えたり手洗いへ行ったりする時などは、じかに茶屋へ戻れて便利な

のだ。

狭い通路を通っていよいよ市村座の中に入ると、ここはもう表通りの延長のようで、ちょっとした人ごみだった。案内の男が、そこをかきわけかきわけしてようやく急な階段を昇って二階に上がると、桟敷の廊下はさすがに空いていた。

桟敷に入った時は、三建目の『暫』が終わり、本番の四建目の幕開けが近づいていたが、下の枡席にはもうぎっしり観客が入っている。なぜ、あまり面白くない三建目の時から枡席が満員かというと、予約制でないため、評判の芝居では早くから入っていないと良い場所が取れないばかりか、満員になると札止めになって入れなくなるからだ。

茶屋の男が茶の支度をし、ぜいたくな菓子やみかんをおいて戻って行ったので、ゆっくり場内を見廻すと、東西の桟敷には、見るからに裕福そうな着飾った町人の女性たちが目立った。芝居は、昔からお見合いに利用したから、この中にも何組かいそうだった。洋介たちの右隣、つまり五番目の桟敷は、これも金持の商人の家族らしかったが、着飾った振り袖姿の若い美しい娘を前の方に座らせている。親の見栄なのだろうが、どことなく微笑ましかった。

左隣には、花嫁さんの角隠しのようなものをつけた女性の一群がいた。これは、衣裳や言葉づかいから判断すると、どこかの大名家の奥女中たちらしかった。また、かなり身分の高そうな武士が、四人のグループで向かい側、東側の上桟敷にいるのも見えた。洋介がじっと

見ていると、それに気づいた武蔵屋がそっと耳打ちしてくれた。
「あのお武家さま方は、しかるべきご家中でござりましょう」
それ以上の説明がなくても、羽織姿の町人がかしこまって出入りしている様子から、どうやら御用商人が役人を招待したらしいと見当がついた。いつの世でもどんな社会構造でも、人は似たようなことをするものらしい。
大芝居の芝居小屋といっても、外は石造り、内装は金箔ずくめのきらびやかなヨーロッパ式劇場に比べれば、まるで掘っ建て小屋のようなものだが、この時代の日本としてはもっとも華やかな場面なのでそれなりに面白く、方々を眺め廻しているうちに、洋介は、いな吉がこういう一見地味な衣裳を着る意味がわかったように思った。
桟敷からは、下の枡席がよく見えるが、枡席の客にとっても桟敷の客には関心があって上を見ている人が多い。パリのオペラ座やミラノのスカラ座のように広ければオペラグラスでもないとよくみえないが、それほど広くないから肉眼で充分見える。つまり、太夫桟敷に座れば、いやでも満場の視線を集めてしまうのだ。
いな吉も、大勢の人に見られているはずだが、この時代の人なら一目で一流の芸者とわかるのだろう。身のこなしが意気であり、かなり厚化粧する素人の女性と違って、ほとんど素顔のように見える薄化粧で、髪飾りなどもあっさりしているが、それでいて素人よりずっと垢抜けて綺麗に見えるからだ。

タレントも女子大生もＯＬも風俗嬢もあまり差のない現代の平等社会と違い、この時代は素人(しろうと)と玄人(くろうと)の違いがはっきりしていて、玄人女性は、堅気の女性に対して謙虚な態度をとる。そもそも芸者が堅気の良家のお嬢さんと衣裳競べをするなど、野暮で失礼なだけという感覚なのだ。
見た目には珍しくもない裾模様を着て来たのは、表向きの豪華さを競わないためだが、それだけでは、やはり面白くないから、一見何でもない裾模様に趣向をこらしてある。見る人が見た時だけ、その趣向がわかってもらえればいいので、あくまで玄人の遊び心なのである。
華やかな桟敷に比べると、枡席の方はまるで人間のごった煮のようで、あらゆる人が詰め込まれた超過密状態だった。朝から酒を飲んでいる男がいるかと思えば、身なりの良い上品な女性が窮屈そうに座っていたりもする。この人は、どうしても顔見世の初日は見たいが、桟敷が予約できなかった人ではないかと、洋介は想像した。
とにかく、その熱気は大変なもので、今朝はかなり寒かったのに、火鉢もなしに場内が充分に暖かかった。
あちこちを見ているうちに、いよいよ四建目の『御贔屓竹馬友達(ごひいきつわもののまじわり)』が始まったが、まだ場内はざわめいているし、いな吉たちも、茶屋から持って来た菓子を食べたりおしゃべりしたりして、あまり熱心に見ていない様子だった。最初のうちは、はじめから舞台の上にいる板

付きという端役が、どうでもいいようなことをいっているだけなのだ。
　ところが、見るところはちゃんと見ているから、主役が登場すれば急に熱心になって場内は静まり、見せ場になれば声をかけ、拍手喝采をする。洋介もつられて、いな吉が熱心に見ているような場面だけは注目するようにしたが、どういう筋なのかもう一つはっきりわからなかった。
　現代の劇場なら、プログラムを買って来て読めば、配役も筋もわかるし、イアホン・ガイドがあれば、この場はどうなっていて、どこが見せ場であるかまで説明してくれるが、この時代にそんな親切なものはない。
　もちろん、江戸時代といえども、すべての人が芝居通の見巧者とは限らず、ちゃんと〈芝居唐人〉という言葉があった。つまり、芝居に関してはまるで言葉の通じない外国人のようにわからない人、とでもいうような意味だ。しかも、それに対する通訳の意味で〈芝居通辞〉という言葉まであったから面白い。
　洋介こそ、まさにその芝居唐人で、いな吉に聞けば少しは芝居通辞をしてくれるはずだが、彼女は、ものごとを論理的に考えたり説明したりするのが得意な方ではないし、洋介が何をどの程度理解していないかがよくわかっていないため、まともな答えは期待できない。それに、洋介自身、それほど知りたいとも思っていないので、芝居に夢中になっているいな吉によけいな気苦労をさせたくなかった。

　しかし、ほかにすることもないので、洋介はじっと舞台を見ていた。外国語ではないから、その気になって聞いていればある程度意味がわかり、少しずつ飲み込めてきたのは、平将門と藤原純友が登場する平安時代の話らしいということだった。
　引き返しという短い幕間を何度かはさんで、のんびりと筋が展開するのを見ているうちに、団十郎が藤原仲光で、菊五郎が源頼光、半四郎が辰夜叉御前の役をしていることがわかった。大立者が登場すると、いな吉が興奮して拍手するし、観客席のあちこちからも賑やかにかけ声がかかり拍手喝采が起きるからだ。
　面白いのは、主な役者が登場すると、表情がわかるように棒の先に蠟燭を立てたのを顔の横に突き出す。これは〈面あかり〉といって、スポットライトのような役目だが、洋介のような芝居唐人には、少なくとも誰が重要人物なのかがよくわかって助かる。
　筋が進行するにつれて、四天王つまり、坂田金時や渡辺綱、碓氷貞光、卜部季武の四人が登場したり、相馬太郎の相馬御殿で将門と純友らしい二大勢力のダンマリつまり沈黙劇があったりして、かなり頭が混乱してくる。すると今度は、いきなり芸者姿に変わった半四郎が登場して団十郎と菊五郎の間に座り、しばらく仕草があってから、観客の方を向いて何やらいい始めた。
　場内が急に静かになったのでセリフがよく通り、聞き取りやすくなった。半四郎が巧みないい廻しで話すところによれば、卯年つまり文政二年に、中村座で団十

郎、市村座で菊五郎が『助六』を同時に上演して以来、二人は仲違いしていたが、江戸歌舞伎界の超大物二人の仲が険悪では困るので、上方の興行から帰って来た半四郎が間に入って仲裁し、ここにめでたく仲直り公演をする次第になった、というのである。

　こういう単純で論理の一貫した説明なら、洋介にもほぼ完全にわかるから、いな吉が仲直り興行とかいっていたのをようやく思い出しながら、この顔見世では、二人の和解の現場を見るためにこれほどの客が集まったのか、とはじめて気づいた。そのうちに、団十郎と菊五郎がお互いに頭を下げて和解の仕草をし、また観客席から湧きかえるような拍手とかけ声が起こった。

　いな吉も、夢中になって声をかけ拍手をしているが、やがて拍子木が鳴って幕引きとなった。この時代には、まだ上下する緞帳（どんちょう）はなく、ただ三色の幕を引くだけだ。

　洋介は、半分キツネにつままれたような気分だったが、この頃の芝居、特に時代劇の場合は、必ずしもそれほどはっきりした筋があるとは限らず、伝統的な物語とその登場人物を利用して、役者の見せ場を作っているような場合が多い。だから、洋介のように論理的に筋を追って見ることしかできない単純な精神構造では、面白くないばかりか、わけがわからなくてくたびれるばかりなのだ。

　だが、いな吉はすっかり上気した顔で、多恵とおこまを相手に夢中で、

「あの大和屋のお大が、きっと直った顔が、マアなんて良かったコト。それに、成田屋と音

羽屋が最初にらみ合ったのが、どちらともなく打ち解けていくあのくだりは、本当にマア……なんともいえませんかった」

「あそこの成田屋のにらみは、本当にさすがと感服致しましてございますよ」

「大和屋は、上方から戻って一味違うようになりました。きょうの仲人（ちゅうにん）は、やはり大和屋でなければ、誰も納得いたしませんヨ」

　などと、熱心に劇評をやっていた。洋介にとっては非論理的でわかりにくいだけの芝居も、彼女たちにとっては、見どころがわかっているから充分に面白くて、立派に批評もできるのだ。

　土間の枡席を見下ろすと、観客たちはもうごたごたと立ち上がっていた。やや長い幕間に入ったらしく、花道を通路代わりにして出て行く客もあり、枡席の中で弁当を広げている人もある。さらにそこに割り込むように、

「茶は、よしかな。松風にまんじゅう、おこし、みかんはよしかな」

と、中売り（なかうり）が無理やりに通って行く。とにかく場所が狭いから、大変な騒ぎなのだ。しかし、見ていると、今日の芝居のできについて講評しているのか、舞台の方を指さしながら熱心に話し合っている人もいる。

　その雑然とした中で、何やら大声で文句をいいながら、さらに雑然さを増幅している男がいた。

「喧嘩（けんか）かな」

ようやく理解できそうな光景にぶつかったので、洋介は何となくほっとして体を乗り出した。狭い場所だからどなっているのが聞こえるが、どうやら足を踏んだの踏まないのという他愛ない原因で、摑み合いが始まったらしい。

　これぐらい混み合っていればもめごとも起きるだろうが、人がこうも大勢いれば派手な取っ組み合いもできまいと思って見ていると、案の定、すぐに仲裁する男が現われた。どちらも本気で怒っているわけではないから、顔さえ立ててくれればすぐ納まるのだ。

　やっとこちらが静まったと思うと、一方では、また一人の中年男が威猛高（いたけだか）になって若い男をつかまえてわめき始めた。こちらは、ただの喧嘩ではないらしく、腕力も使わないのに中年男の方が圧倒的に優勢のように見えた。何だろうと思って洋介が見ていると、

「あれは、油虫をつまみ出しているのでござります」

と、武蔵屋が教えてくれた。

「油虫とは、木戸銭（きどせん）を払わずに入った者でございます。この中にも、油虫はまだ十匹や二十匹はおりましょう」

　これほどごたごたしていれば、もぐり込む方法はいくらでもあるはずだから、無銭入場者をつまみ出すのに大騒ぎするよりは、最初から客の出入りをもっと合理的に管理すれば良さそうだと洋介は思った。だが、価値観のまるで違うこの時代の日本人にとっては、必ずしも

こういう管理法が不合理とはいえないのだ。とにかく、一つの大劇場があれば、その内部では、役者以外でも百人以上もの人間が生活の糧を得ていたのだから、近代的な意味で効率を良くする合理化が必ずしも合理化にならない。油虫退治の仕事も必要だったのである。

「ご膳（ぜん）でございます」

　桟敷の戸が開いて、茶屋の男と仲居が顔を出した。すぐに、仲居がご馳走を並べた膳をいくつも持ち込んで並べ始めた。狭い場所だけに、二の膳というわけにいかないが、芝居茶屋は、狭い場所でご馳走を出す経験が豊かだから、一つの膳にうまく盛り合わせてある。

「武蔵屋さま」

　すぐに、いな吉が銚子（ちょうし）を取ってすすめた。

「姐さん。まず、速見さまにおすすめしなくては……」

　武蔵屋は、慌てて自分が銚子を取って洋介の前に突き出した。昼間から酒を飲むのは苦手なのだが、ここで遠慮しても仕方がないので、洋介は、盃を取って酒を受けた。洋介が飲むと、武蔵屋もいな吉の酌（しゃく）を受けた。いな吉の芸者としての立場と洋介の愛人としての立場をうまく取る武蔵屋の、このあたりのバランス感覚は絶妙だと思いながら、洋介は何杯か飲んだ。

　ついでに書いておくなら、ここに出た銚子は現在の燗徳利（かんどくり）ではなく、土瓶（どびん）のような形をした陶器である。江戸で燗徳利がたまに宴席にも出るようになるのは、江戸時代も終わりに近

い天保末期の一八四〇年代あたりからで、この時代には私的な席はともかく、まだ酒場で使うことさえなかった。

「ホンニまあ、結構なお料理でございます」

何口か食べてから、多恵がほめた。本格的な料亭料理のできたてを食べる機会などめったにないおたねは、無言のまま夢中で食べている。洋介も、吸い物も魚も野菜も、すべて味がはっきりしていて本当にうまいと思った。素材そのものが良いうえ、一流の芝居茶屋は一流の料理茶屋でもあるから、武蔵屋のような上客には、たとえ桟敷の膳であってもいいかげんな料理は出さないのだ。

周囲の桟敷でも、食事が始まっていた。御殿女中の方は、やはりどこかの芝居茶屋の仕出しらしい幕の内弁当だが、商人の一家は豪華な重詰めの弁当を開いている。下の枡席でも、さまざまな食事をしているのが見えた。握り飯と煮しめだけのつましい弁当を開いている家族もあれば、買ってきたらしい幕の内弁当あり、酒ばかり飲んでいる男たちもある。

「お前さま」

多恵やおこま相手に芝居の話ばかりしていたいな吉が、洋介の方を向いて尋ねた。

「もっと、ご酒をお食べになりませんかエ」

芝居のことを尋ねないのがいいところだが、今から酒を飲めば眠くなるだけなので、

「今は、これぐらいで充分だ」

と答えれば、

「そんなら、もう少ししてお芝居が始まってからお食べになるとよろしゅうござんす」

という。何とも返事のしようがないので、生返事をして黙っていると、いな吉もそれっきりまた女たちとの会話に戻ってしまった。

武蔵屋は、もともと洋介のご機嫌を取って親しくなり、いざという時の力になって貰いたいと思って芝居に招待したのだから、何とかして洋介との話の継穂を見つけようとするのだが、涼哲や忠太郎からあらかじめ、この世のことをあまり知らない男だと聞かされているし、実際、そばにいてもほとんど口をきかない。洋介としては、別に機嫌をそこねているわけではなく、江戸の材木商を相手に何を話していいかわからなくて黙っているだけだが、その点は、二十世紀の化学者を相手にしている武蔵屋とても同じなのだ。

しかし、さすがに如才のない商人だけに、今のいな吉との何気ない会話を聞いてすぐ話のきっかけをつかみ、ていねいに尋ねた。

「速見さまはご酒をお好みだと、井筒屋の忠太郎に聞いておりましたが、お嫌いでござりましたか」

「嫌いなことはありませんが、せっかく芝居を見に来たのにここで飲めば眠くなってしまうではござらぬか」

「江戸では、芝居は酒を飲みながら見物致しますが、お国の仙境では、いかがでござります

か」
「芝居の時は、酒など飲みません」
現在の劇場で、酒宴を開きながら観劇すれば、つまみ出されてしまうだろう。
「ほう」
武蔵屋は意外そうな声を出したが、一呼吸おいてから話題を変えた。
「仙境では、すべてがこの世とずいぶん違っているようでございますが、速見さまは、この世のことが、ここから下の枡席を見下ろすようにおわかりになるのでございますか」
「わかることもあり、わからぬこともあります」
そら来た、と思った洋介は、できるだけ厳粛な表情になってもっともらしく答えた。
「また、たとえわかることでも、みだりにこの世で口にすれば、過去を変える……いや、口にしたこの私が、僣上の罰を受ける恐れがあります」
「しからば、何ゆえに、手前には夏の津波のことをお教え下されたのでございますか」
洋介は、いかにも神秘な世界のことを内々で話すように声をひそめた。
「時と場合、それに人によります。あの時の武蔵屋どのには神仏のご加護があったので、あえてお教え致しました」
「はあ」
武蔵屋は、神妙な表情になって両手を膝につき、下を向いてしばらく何かを考えていた

が、急に顔を上げると真剣な態度で尋ねた。
「今後も、手前に降りかかる災いを前もってお教え願えましょうか」
神仙らしく振る舞うためには、ためらったり、あいまいな態度をとったりしてはいけないことを経験的に知っている洋介は、きっぱりといい切った。
「それは、神仏のみ心次第で、今のところ何とも申し上げられませぬ」
『武江年表』には、この時代の江戸の主な火事はほとんど出ているから、材木商である武蔵屋の商売のたしになりそうなことを教える機会はありそうだが、はたして教えるべきかどうかは、その時その時の状況によって判断するほかない。しかし、こういって突き放されても、武蔵屋はかなり強い印象を受けたようだった。
武蔵屋がはじめて難波町で洋介に会った時は、涼哲や忠太郎も同席していたため、自分の一身上のことについてくわしく質問するわけにはいかなかった。そのため、何とかして不自然にならぬ口実で他の友人たちのいない席を設けたいと思い、洋介が溺愛していると聞いた旧知のいな吉が確実に食いつく餌を準備して今日の席を設けたのだった。
この作戦は図に当たり、女性たちが芝居の話で夢中になっている間に、武蔵屋は洋介を独占して仙界の秘密の一部を聞き出すことに成功したのである。木場の高潮を神仙が警告してくれたのは、自分に神仏の加護があったからだと知ったのも大きな収穫で、今後の商売にも自信がついた。

「手前は無信心者（ぶしんじんもの）にございまして、井筒屋に速見さまのような方がおられると聞いても信ぜずにおりました。しかし、今では、神仏や仙境のあることを信じております。これからも行いを正して神仏のご加護を受けるように致しますゆえ、今後ともよしなにお導き下さりますようお願い申し上げます」

目的を充分にはたした武蔵屋は、しみじみとした口調でいった。洋介の演技力との勝負は、まず引き分けというところだろうか。

団十郎

午後の舞台が始まると、洋介にも、いな吉が、芝居が始まってから酒を飲めといった意味がわかった。場内が、次第に宴会場のような雰囲気になってきたからである。

舞台の上には、役者が出て何やらやっているのだが、そちらはあまり見ずに、桟敷でも枡席でも盛んに料理を食べたり酒を飲んだりしている人が大勢いるのだ。もちろん、舞台を見ている人もいないわけではなく、洋介たちの桟敷では、おたねがいな吉とおこまの間に首を突っ込むようにして熱心に見ているし、枡席でも熱心に見ている人がいたが、いずれにせよ少数派だ。

場内を見渡した洋介は、これは、まるで、社内旅行の宴会で、見られたがりの社員が舞台に上がって、勝手に歌ったり寸劇をやったりしているような雰囲気だと思っていた。舞台を

見ているのは仲間うちだけで、大部分は知らん顔で酒を飲みながら勝手なおしゃべりをしているからだ。

この前一度だけ中村座へ行った時は、下桟敷の前にある高土間という席で四建目を見ただけで帰ってしまったから、芝居の世界をほんのかいま見ただけという感じだった。それに対して、今度は見通しの良い高い所でずっと長い間見続けているだけに芝居小屋の気分がよくわかるが、これなら何もわざわざ狭苦しい芝居小屋へ来ずに、料理屋へ行った方がましではないかという気さえした。

しかし、いな吉も多恵も武蔵屋も、この状態に何の違和感も感じないらしく、充分楽しそうにしゃべったり食べたり飲んだりしているから、洋介も仕方なしに、いな吉のすすめる酒をつい一杯二杯とかさねながら、武蔵屋と雑談していた。

ところが、そのうちに、舞台でいきなりバタンバタンと激しい附板の音がすると、賑やかだった客席が急に静まった。いな吉たちのおしゃべりもぴたりと止まり、一斉に舞台を注目する。

芝居は、いつの間にか一番目の時代物が終わって、二番目の世話物つまりこの時代なりの現代劇が始まっていた。雪の場面なのだが、目がすっかり慣れてしまったせいで、実際は薄暗い舞台も、充分明るく見える。

ここまでをほとんど見ていないから、筋がさっぱりわからないが、周囲の真剣な様子につられて舞台に目をやると、上手から出て来た役者と、すでに舞台にいた人物との間でしばらく会話が続く。前後関係がわからないだけに、何を話しているのかはっきりしないのだが、この二人の間にかなり緊張した雰囲気があって、舞台が急に引き締まり、観客も緊張して見入っている。

ここが名場面らしくて、大向こうから声がかかり、いな吉たちも息を殺すようにして見入っていたが、十分ほどたってその場面が終わると、またあたりが騒がしくなった。夢中になって見ていたいな吉も、多恵とおこま相手の劇評を始め、枡席はもとの酒宴場に戻ってしまった。

どうやら、見どころはほぼ決まっているらしく、芝居好きの関心は、役者が自分の持ち味でその場面をどのように演じるかに集中していて、その場面に到るための導入部はそれほど熱心に見ない、あるいはまったく見ないようだった。

芝居好きでさえそうなのだから、いな吉のおつき合いで来ている洋介にすれば、酒でも飲んでいるほかない。といっても、ほんの少しずつしか飲まないため、大して酔いはしないが、それでもけっしてしらふといえる状態ではないから、もともとよくわからない芝居の筋がますますわからなくなってしまった。

あくびをかみ殺して早く終わらないかと思いながら、見るともなしに見ているうちに、最後に大勢で踊る場面があって、洋介にとっては苦行に近い一日がようやく終わった。しか

し、いな吉の嬉しそうな様子を見れば、やはり愛人をこれほど喜ばせてくれた武蔵屋に対する感謝の気持が強いから、やれやれやっと済んだ、とばかり腰を挙げるわけにもいかず、

「本当に楽しい一日でございました」

と、礼をいえば、少しばかり酒も入っていて飛びきり上機嫌ないな吉がすぐに引き取って、

「明日はご近所のお方が大勢、私どもへ顔見世の話をお聞きになりにみえまする。そのみなみなさまに成り代わりまして、武蔵屋さまには、このいな吉より厚くおん礼申し上げまぁす」

と、おどけて芝居の声色を使いながら平伏してみせた。来たくても来られず、今日の名場面の話題と劇評を聞きたがっている人は、町内にも大勢いるのだ。いな吉の言葉を聞いた多恵もにこやかに、

「武蔵屋さま。ほんにマア、なんとお礼申し上げてよろしいやら、こんな結構な顔見世は久しく拝見致しませなんだ。これで、しばらくは話の種に困りませぬ」

と、上品に礼をいえば、武蔵屋も機嫌よく右手を顔の前で振ってから頭を下げた。

「なんの、なんの。速見さまと涼哲先生は、手前の一命が危ういところをお救い下さったお方。ご新造さまと姐さんがこれしきのことでお喜び下さるならば、さながら砂を黄金に換えたようなものでございます。

さて、それでは席を代えると致しましょう」

武蔵屋がそういった時には、もう尾浜屋の男が桟敷の外で待っていた。一同はまた案内されて芝居茶屋へ戻ったが、部屋に入って席につくとすぐに何人もの仲居たちが、銘々膳に小さな椀をのせたのを、全員の前においた。

「顔見世恒例の鴨雑煮でございます」

と、年配の仲居が説明した。それを食べ始めると、今度は豪華な料理を運び込んで来た。こういう場合の茶屋料理は、堅苦しい三の膳、四の膳つきや、お上品な会席料理ではなく、一応はそれぞれの前に銘々膳を並べるが、それとは別に、尾頭つきの大鯛をのせた皿や、刺身、煮物、焼物などを盛り合わせた染め付けの大皿などが並ぶ。

かなりの量なので、とてもこれだけの人数では食べきれないのだが、残ったぶんは折り詰めとして客に渡し、持ちかえってもらうのだ。つまり、昔の料亭での宴会料理は、出席者が自宅に持ち帰ることを前提にして作ってあった。日頃質素な食事をしている家族や使用人にもご馳走を食べさせたいという願望から生まれた習慣らしい。

幕末期に日本人と会食した欧米人が、客が宴席ではほとんど食べずに、大部分を残して持って帰るのを不思議に思ったという記録があるが、残ればそのまま全部捨ててしまう現在のバイキング料理の宴会などを見れば、先祖たちはあまりのもったいなさに腰を抜かすのではなかろうか。

それはともかくとして、料理が出揃うと、芸者が二人入って来た。

いな吉と、芸者たちの関係はどうなるのだろうと思って洋介が気にしていると、一人の仲居が三味線を一挺持って来て彼女に手渡した。どうやら、ここでは、いな吉も仲間といっしょに芸者としての勤めをする予定になっているらしかった。

すぐに三味線が鳴り始め、いな吉ともう一人の芸者が洋介と武蔵屋に酒をすすめ、おこまが多恵に料理を取り分ける。昼間から飲んでいたものの、量はそれほど入っていないし、かなり食べたつもりだが、腹にもたれない料理が多いせいか、空腹感もあった。今度は広い座敷なので、洋介はゆったりと座って酒を受けた。仲居たちが、それぞれに料理を取り分けてくれる。

いな吉は、酒を注ぎ終えると、仲間の芸者たちと並んで座り、三味線をひきながら唄い始めた。唄にはおこまも加わったから、座敷は急に賑やかになった。武蔵屋もこういう場面は大好きらしく、渋い声で唄い始めた。洋介一人は、まったく知らない唄なので調子の合わせようもない。

最近では、さすがにこういう席にもいくらか慣れてきて、もっともらしく耳を傾けるふうを装うようになったものの、唄はほとんど耳を素通りして、頭の中では別のことを考えているのだ。

以前から江戸の宴席で唄が出るたびに思うのは、いな吉のように唄を専門にする芸者を宴

席に呼ぶのは、現代人がテープやCD、カラオケなどで音楽を楽しむのと非常に似ているということだった。当たり前のことだが、この時代の日本には、人間が演奏する音楽しかなかったから、どうしても音楽を聞きたければ、プロの演奏を聞くか自分で唄うか楽器を演奏するほかない。

プロの演奏家としてもっとも手近にいたのが芸者だから、唄を聞きたければ上手な芸者を招いて好きな唄を歌わせるのが普通だった。自分で唄いたい時も、芸者に伴奏させればうまく調子を合わせてくれる。

洋介がこれまで見てきたところでは、芸者の仕事のかなりの部分は、客の唄の伴奏だった。同じ民族だから当然なのだろうが、この国では昔から自分で唄うのが好きな人間が多かったのだろう。そこで、人件費の安かった当時は、芸者という音楽の専門家が相手をし、人件費が高騰して機械の方が安くなってからは、カラオケ装置を使うようになったのではないかというのが、洋介の考えだった。

もちろん、芸者にもカラオケにもそれぞれ特徴があって、まったく同じ機能ではない。芸者なら、相手の調子や早さに合わせて伴奏してくれるばかりか、音楽の相手のほかに酒の相手もするし、場合によっては寝床の中までつき合ってくれる。その代わり、生身の人間の女性だから、どうしても男の相手が主になるばかりか、それぞれ個性があり、好き嫌いもあって、スイッチを押せば思うように動いてくれる機械を扱うよりずっとむずかしい。

これに対してカラオケ装置は、電源さえあればいつでもきちんと伴奏してくれるし、相手が男でも女でも上手でも下手でも差別も区別もせず、気まぐれなところはまるでない。その代わり、顔色を見て調子を合わせてくれることは期待できないし、もちろん、機械を相手に酒を飲んでもつまらないし、抱いて寝るわけにもいかない。

音楽を身近で楽しむために、先祖たちはフジヤマ、ゲイシャとして世界的に有名になった芸者文化を生み出したが、芸者のなり手が激減した現代の日本人が、その代用としてポケットに入れて歩きながら聞けるプレーヤーやカラオケを発明したという考えは、どんなものだろうと、技術雑誌のエッセーの種になりそうなことを考えていると、急に唄が途切れた。

我に返ってあたりを見廻すと、開いた襖から、鼻筋が通った目の大きな男がのっそりと入って来た。男はゆっくり畳の上に座り、前に両手をついてちょっと見得を切るような仕草をしてから、独特の節回しで、

「成田屋、これに参上つかまつりました」

と、よく通る声でいった。

「おう。親玉か。こちらへお通りな」

武蔵屋が、嬉しそうに招いた。座敷の中は、色めき立った。この時代のスーパースターの成田屋、七代目市川団十郎が、贔屓客の宴席へ挨拶に現われたのだ。

寛政三年（一七九一）生まれの団十郎は、この時三十一歳。まだ若々しいが、襲名してか

らすでに十五年、江戸の芝居の大立者として実力、人気ともに確立していた。顔を見ただけで非常に個性的な人物とわかるが、表芸の芝居だけでなく、俳句にも文章にも秀で、骨董の鑑識も本職なみだったという。

一旦こうと思ったことは断固として押し通す強烈な性格のせいで、年とともに傲慢になっていくが、この頃はまだ若かったのと、二十歳以上も年長の武蔵屋は、芝居の金主つまり出資者でもあったから、かなりへりくだった態度を見せていた。

「こちらは、私がいろいろとお世話になっている速見先生でいらっしゃる」

武蔵屋が洋介の方を指し示しながらていねいにいった。

「この夏は、死に神にとっつかれていたのを追っ払って下さったお方だ」

「はあ。さようで」

団十郎は少し驚いたように、洋介の顔を見上げた。武蔵屋の言葉をどう解釈していいかわかりかねている様子だった。

「成田屋さま。ご酒をお食べあそばせ」

気をきかせたいな吉が、盃と銚子を持って近づいた。

「こちらはいな吉姐さんで、速見さまのご内儀のようなお方だ」

武蔵屋が紹介すると、団十郎はいな吉の差し出した盃を取った。

「いな吉にございります。今後ともお見知りおきを……」

いな吉も、天下の成田屋の前では興奮ぎみだったが、それでも、酒を注ぎながら適当な間合いで如才なく、

「このこうもりは、新しいご趣向でございますネ。なんてマア面白い柄でござんしょう。きっとまた大はやり致しますヨ」

と、彼の着物をほめた。そういわれて洋介が団十郎の着物をよく見れば、小さなこうもりが一面に乱れ飛ぶ珍しいデザインである。

いな吉は、流行の元祖が身につけている新しいこうもり模様の面白さをほめながら、右手を上げて自分のかんざしを抜いて見せた。

「わちきも、こうもりを使っております」

漢字文化圏では、〈福〉の文字が、こうもりの漢字〈蝙蝠〉の蝠とつくりが同じで、発音も同じため、こうもりを縁起の良い動物とみなす風習があった。こうもりを悪魔の手下や化身のように考える西洋の文化とはまったく逆の発想である。

市川家の定紋は、有名な三桝つまり三重になった正方形だが、ほかにも福牡丹の控え紋があった。この福をこうもりの蝠にかけて、七代目団十郎がこうもりを紋章としたり、着物の柄に使ったりしたので、この頃からこうもりの図柄がはやり始め、一八三〇年代の天保期になると、こうもり模様はすっかり江戸の生活に定着してしまった。団十郎ほどの大物ともなれば、新しく流行を作りだせるだけの趣味の良さと、それを世間に広められるだけの人気と

を兼ね備えていたのだ。

こうもりの図柄がはやるにつれて、夏の浴衣の染模様から、かんざしや櫛、手拭いにまでつけるようになるが、流行の先端を行く芸者として、いな吉はすでにこうもり模様のついたかんざしを使っていたのだ。

「こうもりは福を招くから、これを頭にさしていらっしゃれば、姐さんにもきっと良いことがございます」

団十郎はそういいながら、いな吉からかんざしを受け取ってしばらく模様を眺めたあとで、それを彼女の頭にさしてやった。

「これは、マア、おかたじけのう……」

いな吉は、もちろん大感激である。

「こうもりはそれがしの好みでござるが、姐さんの裾模様のご趣向もなかなかのものではござりませぬか」

衣裳の柄をほめられたお返しのつもりか、団十郎は、いな吉の趣向に目をつけてほめてくれた。そればかりか、改めて縫い取りをしげしげと見詰めて、

「これは、姐さんのご趣向でございますかね」

と尋ねる。いな吉は得意な気持と嬉しさで一杯だが、謙遜して、

「アイ。今日の顔見世に合わせて作らせました。なるべく目立たないように小さく致しまし

たのに、お目に止まって嬉しゅうござんす」

「あまり大きければ厭味だが、その小さいところがよろしゅうございますな」

上手にほめられて、いな吉はぼうっとしてしまった。

団十郎には、素人離れした美女のいな吉が芸者だということは一目でわかるが、洋介がどういう人物なのかは、どう考えてもさっぱり見当もつかない。だが、武蔵屋ともあろう大物が、これほど手厚くもてなしている以上は、せめていな吉のご機嫌を取っておくに限ると思ったのか、上手に喜ばせてくれた。

こうして、団十郎を交えた酒宴が始まった。

いな吉は、難波町に帰ってからも興奮が冷めず、ハイな状態が続いていた。顔見世の初日を太夫桟敷に招かれて見物することは、売れっ妓の芸者にとってさえかなり特別なことなのに、終演後の武蔵屋の宴席に憧れの団十郎が来て相手をしてくれたのだから、ほとんど夢心地で家に帰った。

ようやく茶の間に落ちついてからも、芝居の場面をカラーで印刷したおみやげの錦絵、いわゆる芝居絵を並べては夢中で眺め、顔見世の様子を知りたくてうずうずしているおみねに今日の話をしながら、団十郎自作の俳句「寝ようもう八幡の鐘やほととぎす」を本人に書いてもらった扇子を開いては眺め、一度しまってからも、また取り出しては眺めている。洋介にとってはその熱中ぶりも可愛くてならないのだが、とにかくろくに口もきかないほどなので、先に風呂へ入ってしまった。

ところが、風呂から上がって茶の間に戻ると、いな吉がいきなりいった。

「お前さま。わちきは、何やらこわくなりました」

「藪から棒にどうしたっていうのだ」

びっくりして尋ねると、

「アイ。わちきは、つくづく果報者でござんす。でも、それというのも、お前さまが仙境の不思議な術で人助けをなさるからで、わちきまでそのおこぼれにあずかってこんなに楽しい思いをすれば、ばちが当たりそうでソラ恐ろしゅうござんす」

「お前のような娘に、どうしてばちが当たるものか」

洋介は、そういって笑ったが、自分の母も「いい思いをしすぎるとばちが当たる」といつもいっていたので、いな吉のような発想は、理解できないでもなかった。

家に帰って一時間もたつと次第に興奮が冷める。そうすると、今日一日があまりにも晴れがましくも楽しかっただけに、洋介の不思議な能力に何の貢献もできない自分が不相応な利益を得ているのではないか、という怖れがじわじわと湧き起こる、といったようなところだろう。

良い思いができるのが当たり前で、自分のように善良な人間が辛い目にあうのは社会が悪

い、政府が悪い、と考える現代的な発想とはまるで逆だが、いな吉のような庶民の娘にまで、良いことの裏には悪いことがあるというバランス感覚が浸透していたからこそ、江戸時代は長く平穏に続いたのかもしれない。

「おれが請け合ってやるから、心配するな」

洋介は、力強くいった。この程度のささやかな楽しみでばちが当たるのなら、現代人は揃って地獄に堕ちているだろう。

「それで、安心しました」

いな吉は、洋介の顔を見上げながら安心したように大きく息をついた。

「さあ、きょうはくたびれただろうから早く寝よう。おれはもう二階へ行くから、湯に入っておいで」

「アイ」

素直にうなずいたいな吉は、洋介から離れて長火鉢の上にかがみ込み、灰で炭火を丁寧に埋めてから茶の間を出て行った。

洋介は、二階へ上がって寝床に入り、夜着を首まで引き上げながら足を伸ばして炬燵の中に入れた。冬でも家中を暖めてある東京のマンションと違って、江戸の家は寒い。夜着や敷布団の綿も、現代の化繊綿に比べれば重くて暖まりにくい。しかし、これでも裕福な井筒屋が洋介のために特別に誂えた上等の夜具で、いな吉は充分に満足しているのだ。

少し暖かくなって落ち着くと、洋介は、ようやく今日一日のことを振り返ろうという気分になった。

何がどうなっていたのか、あまりにもすべてが雑然としていて、今になってもはっきりわからない部分が多いのだが、一つだけ明らかなのは、金持だけにできる芝居見物のいわばフルコースを経験したということだった。

着て行く衣裳を二十日も前から準備し、買ってきた芝居の番付を飽きずに眺めていろいろな噂話に花を咲かせる。当日は、夜明け前から支度して芝居茶屋へ行き、桟敷に入ってからは、芝居を見るだけでなく、ご馳走を食べたり酒を飲んだりする。つまらない部分は見ないで勝手におしゃべりを楽しむ。芝居がはねると茶屋へ戻って、ひいきの役者を座敷に招き、芸者を上げての宴会になる。そして、華やかな芝居絵と役者のサイン入りの記念品をおみやげに帰って来るのだ。

現代の演劇鑑賞と共通しているのは、黙って芝居を見てる時間だけであって、全体からいえばごく一部にすぎない。大部分の時間は、わけのわからないごった煮のように過ぎて行き、どう考えても演劇の鑑賞とは思えないのである。洋介には、あれのどこが面白いのかさっぱりわからなかった。

ところが、いな吉の様子を見ている限りでは、これほど楽しい思いをすればばちが当たっても仕方がないと心配するほどの快楽らしいのだ。

洋介は、同時代人である妻の流子を理解しているのとほぼ同じ程度に、江戸人であるいな吉も理解しているつもりだった。東京の日本橋に先祖代々住んでいて、自分も日本橋の裏町に生まれ育っただけに、いな吉の考えも理解しやすかったし、実際にほとんど違和感なしに暮らしてきたのである。

しかし、芝居の世界に完全に溶け込んでいた今日のいな吉の様子を見ているうちに、やはり自分が江戸では異分子なのだという気持が強くなった。

――どこが違うのだろうか――

洋介は、心の中でつぶやいたが、その時ふと、十九世紀のロンドンの光景が頭に浮かんだ。自分が転時したロンドンが西暦何年だったのかは、ついに確かめられなかったが、今いる文政五年に相当する一八二二年前後だったことは間違いないと思っている。

十九世紀前半のロンドンは、現代人の目で見るとけっしてそれほどきらびやかな都市ではなかったが、それでも、同じ時代の江戸よりはるかに現代の東京との共通点が多いと感じたのは事実だった。

デザインは多少違うものの、あの時代の洋服と現代の洋服の違いは、着物と現代の洋服の違いに比べればごくわずかにすぎない。木造の平屋かせいぜい二階家の並ぶ江戸の市街より、五階、六階の石造りの建物がぎっしり並ぶ市街の方が、コンクリートのビルが並ぶ現代の東京にはるかに似ている。

われわれは、日本を少しでも西洋諸国に近づけようとして涙ぐましいばかりの努力を続けてきたのだから、こうなったのは当然だが、真似も中途半端に成功すれば、見かけだけでなく、中身にも影響してくることは避けられない。はっきり意識してはいないが、自分はもうあらゆることを外国人のような目で見たり、外国人のような発想で考えたりすることしかできなくなっているのだろうと、洋介は思った。

いや、完全にどこかの外国人になりきってしまえれば、それはそれで成功なのかもしれないが、芯の部分は日本人以外の何ものでもない。

どうやら、われわれは、憧れ続けていた西洋人にもなりきれず、しかも、先祖たちのような日本人らしさはとうの昔に失い、まことに中途半端な宙ぶらりん状態になってしまったのではないだろうか。

自分ではいな吉を充分に理解していたつもりだっただけに、故郷の日本橋にいながら結局自分はよそ者なのかもしれないと思って少しさびしい気持になっていると、そんなこととはつゆ知らぬ彼女は、上機嫌のまま鼻唄まじりに二階へ上がってきた。そして、夜着にもぐり込んでいる洋介をのぞき込むようにしながら小声で尋ねた。

「お前さま。もうお休みかエ」

「いや。まだ起きている」

「アレ。良かった」

いな吉は、羽織っていた半纏を衣桁にかけると、夜着をそっと持ち上げて洋介の横に入り、体を押しつけながら熱っぽくいった。

「抱いておくんなさいまし」

まだ熱い湯上がりの体を抱き寄せると、いな吉には、まだ芝居見物の余韻が濃厚に残っているらしく、自分から腰紐を解いて長襦袢の前を開き、愛撫を求めてきた。まだ少女らしさの残る体であり、経験も浅いから、二十歳のいな吉ほど深い悦びに達することはないものの、性的刺激の強い花柳界に生きているだけあって、こういう時は積極的である。

洋介は、小さな唇に口づけしながらまるで象牙のように滑らかな肌を愛撫し、小さな乳房を手のひらにすっぽりと包んでやさしく刺激した。この娘の体が将来どういうふうに成熟するかを知っているだけに、いな吉を夢中にさせるにはいくらも時間がかからなかったが、もともと気分が高揚しているせいか、いつもとは違った反応を見せた。

そのことは、愛撫が深みに届くにしたがってはっきりした。今までなら、ある程度以上の刺激を受けてもただ同じようにあえぎ続けるばかりだったのが、はじめて小さな叫び声を上げた。そして、温かく潤んだ体を深く貫かれた時は、悦びのあまり体を激しく痙攣させ、巧みな刺激でますます高みに押し上げられると、はじめて味わう感覚に戸惑いながら、あえぎあえぎいった。

「お前……さま……もう……もうわちきは……」

その切迫した声を耳元に聞いた洋介が、もう一押ししてから果てると、いな吉は、喉の奥で細い悲鳴を上げながら力の限り締めつけ、体をかすかに震わせてから身動きしなくなった。洋介は、いつものように、しばらく彼女の体を抱いたままでいたが、あまりじっとしているので眠ってしまったのかと思っていると、急に大きく息をつき、洋介の胸に頬を押しつけたままいった。

「ああびっくりした」

「どうしたんだい」

「わちきは、今まで気が遠くなっていて、気がついてもう朝かと思ったら、まだお前さまに抱かれたままでござんした。こんなことははじめてで、顔見世の初日を見たせいか、今日は何やら体の具合がおかしゅうございます」

「おかしいことがあるものか」

洋介は、いな吉の背中をそっと撫でながら、ふと、衣裳選びに始まる彼女の顔見世の楽しみは、ここまで続いているのかもしれないと思った。

ものごとを、各部分の機能に分解して考えようとする近代科学の発想は、確かに工業を能率良く運営するのには有効だった。しかし、自然界の複雑な現象、特に生物を含む環境などについて考える時は、むしろ有害だということが次第にわかってきた。

洋介自身、科学評論家としてはそういう理屈を理解しているつもりでも、江戸の人たちが

芝居を見ながら酒を飲むのを見れば、酒は酒で飲み、芝居は芝居で見た方が良いのではないかと思ってしまうのだ。

だが、人間は、もともとそれほど単純で合理的な生き方が適しているのだろうか。

今でも、日本のお花見は、桜の花を見ながら酒を飲み、ご馳走を食べて歌ったり踊ったりする総合的な楽しみであって、ただの植物観賞会ではない。ワシントンのポトマック河畔の花見は、市民が静かに花を見ながら整然と歩く立派な行事なのだそうだが、われわれの古来のお花見のやり方がアメリカ人と違うから下品だといわれても困ってしまうのだ。

どうしてもアメリカ式が良いと思う人はワシントンへ行くか、酒や食べ物持ち込み禁止の桜観賞園を自分で作って、その清らかな環境で整然と歩いていただくほかないのである。

芝居も、お花見と同じだったのではないか、と洋介は思った。

着物を選んだり決めたりする段階から、当日が近づくにしたがって次第に気分が高まっていき、芝居小屋に入ってからも、舞台で役者が演技をしているのを横目で見ながら料理をつついて酒を飲み、気の合った同士で芝居の話をする。そして、好きな役者の名場面になれば、息をひそめて演技を見たり、拍手喝采したり、掛け声をかけたりする。芝居が終わって茶屋へひいきの役者を呼べる身なら、芸者も呼んでにぎやかに今日一日の仕上げをする。高揚した気分を家にまで持ち帰った恋人同士や仲のいい夫婦なら、総仕上げとして寝床の中で濡れ場を演じる。さらに翌日には、見に行けなかった近所の人に、おみやげの芝居絵を見せ

たり身振り手真似や声色で説明をするあたりまで、芝居見物の楽しみは続いていたのではなかろうか。

こういうさまざまなことがすべて芝居を楽しく見るために関連し合っていたため、日本人にとっての芝居は、心身ともに楽しめる大きな娯楽であり得たのだ。

もちろん、花見の場合と同じように、風習のまったく違う西洋人が見れば、下品だと思うだろうし、頭が西洋化してしまった洋介の見たところでも、確かにあまり品が良いとは思えなかった。だが、いな吉も多恵もけっして下品だと感じていないどころか、ああいう雰囲気がただ楽しくて楽しくてたまらないらしいのである。

庶民文化そのものだった日本の芝居を、貴族文化から庶民へ波及したヨーロッパのオペラやバレーなどに近づけようとした試みは、ほかの近代化と同様、中途半端に成功して、芝居見物が進歩して演劇鑑賞となった。だが、ほかの多くのことと同様、われわれは、一度失えば二度と得られない貴重な何かを、近代化、合理化の結果として失ってしまったのではないだろうか。

幸せ一杯で寝息を立て始めたいな吉の寝顔を、かすかな有明行灯（ありあけあんどん）の光で見ながら、洋介はそう思うのだった。

白魚

せっせと東京での仕事に励んでいた洋介は、流子がまたどこかの美術館の所蔵品を見るために出張するとすぐ江戸へ行った。
前の経験で懲りているから、いな吉は、洋介がしばらく来なくても不安がらなくなったが、一週間ぶりに顔を出すと大喜びでいった。
「今夜は、こちらへお泊まりでござんしょうネ」
「もちろんだ。明日も泊まる」
「アレ。明日もお泊まりなら、きのう、武蔵屋さまから、夜の舟遊びのお誘いがござんした。風が強くなければ、四つ手網で白魚（しらうお）を掬（すく）うのを見ながら、発句（ほっく）を作りにいらっしゃるのだそうでございますヨ」

洋介は、それを聞いて目を丸くした。
「舟遊びなら、川か海の上に出るんだろう。夜は寒いのじゃないか」
「そりゃ、冬だから寒うござんす」
いな吉は、おかしそうに笑った。江戸の四季は、陰暦一、二、三月が春、四、五、六月が夏、七、八、九月が秋、十、十一、十二月が冬だから、今は冬の真っ盛りなのだ。
「酔狂だなあ。なぜ、わざわざ寒い時に船に乗って、俳句……じゃなかった発句を作るんだろう。それに、お前も知っている通り、おれは発句は苦手なんだ」
「アイ。存じておりますハ。でも、お前さまは、いつものようにご酒をお食べになって、白魚漁を見ていらっしゃればよろしゅうござんしょう。涼哲先生は、お前さまの癖を飲み込んでいらっしゃるし、武蔵屋さまもご存じだろうから、どなたも気になさいません。
船にはおこたがあるし、厚着をして行けばそんなに寒くはないし、それに、お前さまは、ご酒も上がることだから、風さえ吹かなければ平気でござんすヨ」
盛んにすすめるところをみると、いな吉自身行ってみたいらしいから、洋介はもちろん逆らうつもりはなかった。
「それじゃ、行ってみよう。しかし、白魚漁を見るといっても、月も夜中すぎでないと出ないし、ちゃんと見えるのかね」
二十六日ならごく細い月が見えるのだが、暗くて夜間照明としては役に立たないばかり

か、月の出が午前三時から四時頃になる。洋介も、江戸暮らしが長くなったので、日付と月齢の関係は理屈ぬきでわかるようになっていた。この世界に生まれ育ったいな吉にとっては、もとより常識だから、すぐにうなずいて、

「アイ。月はなくても、白魚船ではかがり火を焚きますから、よく見えます」

「お前は、見に行ったことがあるのかい」

「わざわざ船のそばへ行ったことはないけど、今頃はまだ佃の沖にも船が出ているから、高輪や品川あたりの海沿いの二階から見ると、ソレハソレハ夢のようにきれいでございますヨ」

「今度は、高輪じゃなくてその佃島へ船で行くんだな」

「アイ。ほんの近間でござんす」

「白魚漁を見物に行く人は多いのか」

「さあ」

いな吉は、右手の人さし指を頬に当てて小首をかしげた。

「あんまり聞きませんけれど、武蔵屋さまは発句のお好きなお方だから、また何かご趣向がおありなさるのでございましょう。涼哲先生もいらっしゃるかもしれませんが、わちきもまだくわしいことを存じません」

「へえ。涼哲先生が発句をひねるとは知らなんだ。しかし、もし、明日連れていってもらえ

るのなら、お願いしてくれ」

「ソンナラ、本材木町にある武蔵屋さまのお店へ、おみねさんにでも行ってもらいましょう」

いな吉はいそいそと立ち上がった。江戸橋のすぐ南側の本材木町にある武蔵屋の支店までは、難波町から徒歩十分ぐらいの距離である。

迎えの駕籠が来たのは、暮六ツの鐘を聞いてしばらくたってからだった。この季節の暮六ツは午後五時頃だが、曇っているので真っ暗である。かなり寒いので、袷の上から綿入れを着た珍妙な服装だった。しかし、幸いなことに風はない。

船は永代橋から出るというので、ここのところ運動不足気味の洋介は、いな吉だけ駕籠に乗せて自分は歩いて行きたかった。この時代の永代橋は、今の位置より百メートルぐらい上流に架っていたから、歩いても大した距離ではないのだ。しかし、来てしまった駕籠の一方を帰すのも気の毒なので、難波町の住み込みである留吉、おみねの夫婦に見送られて二人とも提灯をつけた駕籠で永代橋を渡った。

外はほとんど真っ暗だが、提灯の蠟燭は行灯に比べるとかなり明るいので、駕籠舁の足元ぐらいは充分に見える。よく知った道だからだろうが、ほいほいと声をかけながら進む足取りは軽かった。

永代橋のたもとにある深川佐賀町の河岸で駕籠が止まると、駕籠舁がすぐにたれをはね上げて、下駄を揃えてくれた。地面に立つと、武蔵屋の屋号と紋章の入った提灯(ちょうちん)が五つ六つ見えた。日本橋の町中(まちなか)と違って、潮風のまじった大川端(おおかわばた)の川風はさすがに冷たい。

「これは、速見さま。ようこそお出で下されました」

武蔵屋の声が聞こえた。暗がりに目が慣れているので、店の手代らしい男たちの持つ提灯に照らされた武蔵屋の顔がはっきり見えた。そのうしろに北山涼哲と井筒屋忠太郎がいるのに驚かなかったが、川岸に立って何やらしゃべっていた二人の男が近づいて来たのを見ると、老時計師の大沼理左衛門と、成田屋つまり七代目市川団十郎だったので、その組み合わせの意外さにびっくりした。

「成田屋に、速見さまのことを話しましたところ、ぜひ一層のお近づきを願いたいと申しますので、今日も招きましてございます」

武蔵屋が小声でいった。どうやら、団十郎にも不思議な能力がある〈神仙〉の宣伝をしたらしい。

大沼理左衛門は裕福な隠居だが、洋介にいな吉を最初に引き合わせてくれた人で、いわば、二人の仲人(なこうど)なのだ。いな吉の唄が大好きで、しばしばお座敷をかけてくれる大のおとくいさまでもあるが、なぜここに現われたのか、洋介にはわからなかった。

親しい大沼理左衛門と憧れの成田屋がいきなり闇の中から現われたのを見たいな吉は、何

も知らされていなかっただけにちょっと驚いて見せた。しかし、二人とも趣味人であることをよく知っているので、発句の集まりに来ることは不思議でないと思っている様子だった。そして、いかにも客商売の女性らしく、団十郎には如才なく先日の礼をいい、理左衛門には顔見世の時のことを簡単に説明してから、

「大沼さまと成田屋さまがお揃いでお出ましとは、マア、ホンニ夢のようでござんす」

と、そつなく調子を合わせた。

「お知り合いだったのでござるか」

洋介は、挨拶もそこそこに理左衛門に尋ねた。

「成田屋さまの木場のお屋敷に、櫓時計(やぐらどけい)をお納め申しましてな。それ以来、お出入り致しております。今日は、白魚漁を見ながらの発句とのことで、お招きにあずかりましたが、速見さまといな吉姐さんもごいっしょと伺いまして、勇んで参りました」

やせているが壮健そのものの理左衛門は、成田屋と洋介、いな吉の顔を見廻しながらにこやかに答えた。この隠居は、四季折々の遊山(ゆさん)つまり江戸近郊のピクニックが大好きだが、俳句の趣味もあったのだ。

団十郎は、理左衛門が自分が時計を買ったことを披露してくれたので、得意そうにうなずき、洋介に向かって丁重な態度でいった。

「武蔵屋さまが、まことに立派な櫓時計を持っておられるのを見てうらやましくなり、どな

たの作か伺いましたら、大沼さまのお品とお教え下さいましたもので、是非にとお願いして二丁天符の見事なのを一台作っていただきました」

天保八年（一八三七）に長崎のオランダ人に櫓時計を銀七貫目で売った記録がある。銀六十匁が金一両だから約百十七両で、一人前の大工の五年以上もの賃金に相当する。時計といっても、一台ずつが注文生産で、機械部分以外にも、木工、漆芸、彫金、鋳金など多くの職人の手になる部品を組み合わせた美術品だから、手間をかければとてつもない金額になっても不思議はない。高級な櫓時計は、大名時計ともいうように、高い社会的地位の象徴でもあったのだ。

団十郎が理左衛門の店にいくら支払ったかわからない。ぜいたく好きで、しかも知的好奇心旺盛だった七代目は、年俸千両を受ける文字通りの千両役者だったから、庶民にはとても手の届かない高価で複雑な時計を身近において自慢したかったのだ。やはり百両かそれ以上の値段だったのだろう。

「さて、お客さまがた、どうか船の方へお越しくだされ」

武蔵屋が声をかけた。厚着をした客たちは、手代たちの提灯を頼りに河岸の階段を降りて、両側の鴨居に提灯を三張りずつ吊るしたやや大型の屋根船の前に立った。

屋根船は、屋形船とは違う。屋形船は、中が座敷のようになっていて、二、三十人は楽に乗れる大型遊覧船だが、普通の屋根船は一挺櫓で、五、六人も乗れば満員になる。これは二

挺櫓で、十人ぐらいは乗れそうだった。船尾の方の平らな板敷きの部分には、小さなかまどが二基据えつけてあり、ちょっとした宴会ぐらいできる構造になっている。

屋根船も屋形船も柱が立っているだけの吹きさらしで夏向きの船だが、冬景色を見物したがる風流な客もかなりいたから、船の進行にともなって風が吹き抜けないよう前後に戸を立て、櫓ごたつを入れて寒さに対する配慮をしてあった。いな吉のいったように、船の中にはこたつが三つおいてある。

「さあ、速見さまと姐さんは舳先側のこたつに入って、そこにある綿入れをお召し下され」

武蔵屋がすすめてくれたので、洋介は船首に上がって下駄を脱ぎ、鴨居につかまって足の方から滑り込んだ。こたつに足を入れてから、横にあった丹前のような綿入れを羽織ると、急に暖かくなった。

洋介のあとから、客たちが続いて入って来たが、いな吉は最後に乗って、洋介と差し向かいでこたつに膝を入れた。芸者として客を先に立てる習慣が身についているから、こんな場合にすすめられても、けっして自分が先に乗ることはないのだ。

皆が乗ってこたつに入ると、料理人らしい男が一人と仲居風の女性が二人、船尾の方に乗り込んだ。全員が乗ったところで、一人の船頭が竿に体重をかけて岸を押した。船が岸から離れると、蓑笠をつけた二人の船頭が揃ってゆっくり櫓を押し、船は、かすかに揺れながら大川を河口の方へ進み始めた。

洋介といな吉以外の客たちは、紙と矢立(やたて)を取り出した。

永代橋の下をくぐれば、佃島は目の前である。現代なら、日が暮れても両岸の家やビルの窓が明るく見えるが、この時代はほとんど真っ暗だ。夜間照明といっても、薄暗い行灯が大部分だから、遠くから見ればほとんど見えない。河口部には、上方と往復するような大型の貨物船がずらりと停泊しているが、このあたりの様子を知り尽くしている地元の船頭には、それなりの目印があるのだろう。船は、まっすぐに下流へ向かって行く。

間もなく、仲居らしい女性が二人、一人は、銚子(ちょうし)、もう一人は重箱らしい箱をかさねて持って船尾側の戸を開いて入って来た。狭い船の中だからていねいな挨拶はぬきで、

「お支度ができました」

といってから、腰をかがめて二、三往復し、こたつの上の板に銚子と重箱を並べる。

中央のこたつには、団十郎と理左衛門、船尾側には涼哲、忠太郎、武蔵屋の三人が入っているが、舳先側のこたつにはいな吉がいるから、二人の仲居は後ろのこたつの横に座って客たちに酒をすすめた。

こういう場合は、酒の相手をする芸者を招ぶのが普通だが、今夜はいな吉だけで、しかも彼女はなぜか三味線を持ってきていない。

「今夜は、発句の会だから唄わないのかい」

と尋ねると、武蔵屋が答えた。

「漁師の邪魔にならぬように、静かに致します」

佃島の漁師の先祖は、徳川家康に従って摂津(せっつ)の佃村から移住して来た。白魚漁は、十一月から三月までが解禁だが、その間、将軍家へ白魚を献上する一方で、佃島の漁民以外には禁漁となる。こういう形で巧みに資源保護をしているのだが、見物人もそれなりに遠慮していて、見物に来ても唄ったり三味線をひいたりせず、近くへ寄れば提灯も消す。これは漁を妨害しない配慮だったのだ。

仲居たちが酒を注ぎ始めると、いな吉も銚子を取って洋介にすすめた。

「寒うござんすから、まず二杯ほどお食べなさいまし」

船はゆれるから深い盃を使い、半分ぐらいしか注がないところが、いかにも船での宴席に慣れた芸者らしい。ちょっと熱いめの酒をたて続けに二杯飲み干して一息つくと、今度は、重箱から小皿に料理を取り分けてくれる。

「寒いから、お前も少しお飲み」

「アイ。おかたじけ」

彼女は、酒粕(さけかす)を食べて酔うというほど弱くはないが、特に強い方でもないから、いつもは相手に失礼にならない程度に唇を湿すだけだが、今夜は寒いし、これからさらに冷え込むと感じているのか、洋介が銚子を取って注いでやると、一杯飲み干してしまった。

酒が一回りしていくらか賑やかになった客たちを乗せた船は、しばらく下流に向かってい

たが、一キロちょっと行ったあたりで左の方へ大きく曲がると、右手の海の上には点々と火が見えた。今ではすっかり埋め立てが進んで、このあたりから月島、晴海、豊洲と陸続きになってしまったが、佃島より南はすべて海だから、船の右舷は佃沖に当たる。

ついでに書いておくと、現在われわれが東京湾と呼んでいる海を、江戸時代の人々が自発的に江戸湾と呼んでいた記録はない。幕末期になってやって来た外国人が、Edo Bay と呼んだのを直訳して、いつしか江戸湾と書くようになり、江戸が東京に変わるとそのまま東京湾というようになった。江戸前の海という言葉が東京湾に相当しそうな感じだが、これは文字通り、江戸に接しているすぐ前の海であって、浦賀水道以南の東京湾全域の呼び名にはならない。

だが、外の世界を意識せずには生きられない現代と違って、先祖たちはそれほど広い空間について考える必要も習慣もなかった。たとえば、日本列島とアメリカ大陸の間に拡がるあの広い海でさえ、江戸時代には特定の呼び名がなく、英語の Pacific Ocean を翻訳して太平洋と呼ぶようになったのだ。進歩的な人にとっては、じれったいほど愚かしい時代かもしれないが、洋介の見る限りでは、まことにのどかな時代である。

それはともかく、船は少しずつ沖合に出て、海上に四つ五つ見える火影の一つに近づいて行ったので、その火が漁船の船首から突き出した鉄製のかごの中で焚いているかがり火であることまでがはっきり見えるようになった。やがて、一艘の漁船から三十メートルほどの距

離に近づいたあたりで、船は停まった。仲居が立って、屋根船の鴨居にかかっている提灯の蠟燭を端から消していき、完全に真っ暗にならないように一つだけ残した。

屋根船の中は急に暗くなったが、川底に突き立てた竹竿に船首と船尾をくくりつけて、動かないように固定してある漁船の様子がそれだけはっきり見えるようになった。どの船にも、退屈そうな様子の漁師が蓑をつけ笠をかぶって乗っている。一人で乗っているのが大部分だが、屋根船の近くにある船には二人乗っている。

「白魚漁は、この季節ではまだ佃沖の方が盛んでございますが、春が近づいたので、そろそろ大川をさかのぼり始めております。ほどなく、佃島の方へも船が出ましょう。白魚は、海の水が川の水と混じるところでとれるのがもっともおいしゅうございます」

井筒屋忠太郎が、洋介の方を見て教えてくれた。

大川というのは、隅田川の浅草あたりから下流、江戸の市街地を流れる部分を指す名前である。新川生まれの忠太郎は、子供の頃から大川の河口部を見て育っているから、このあたりの事情には非常にくわしいのだ。

「ご覧なさりませ。そろそろあの船が四つ手を上げます」

忠太郎がそういったので、みんなおしゃべりをやめてじっと見ていると、水の上に出ている竹竿に漁師が左手をかけて引き上げた。竹竿は、三メートル以上もありそうな竹を十字に交差させた交点に固定してあり、十字になった竹の先の方が網の四隅に結びつけてある。そ

のため、四つ手網と呼ぶのだが、竹竿が立って垂直近くになると、ほぼ正方形の大きな網もまるで屏風のように立った。
「強気(ごうぎ)と上がっているようで……」
団十郎が、嬉しそうに洋介といな吉の顔を交互に見ながら、半分ひとり言のようにいった。目がすっかり闇に慣れたので、白魚が大きな網の下の方へぴんぴん跳ねながら流れ落ちていく様子が、かがり火の光でよく見えた。漁師は、長い柄の先につけた小さな網を右手に持って、網の下の方のたるみに溜まった白魚をしゃくっては、船の胴の間においた大型の魚籠(びく)に移している。
「今の一網で、一升（一・八リットル）は上がったな」
と、涼哲が忠太郎にいった。
「それぐらいは固かろうぜ。二、三日前にうちへ来た知り合いの漁師が、今年は、漁が多いといっていたが、見るがいい。大きな魚籠があふれそうだ」
「雪が降りだしました」
団十郎が、ちょっと空を見上げていった。ちらちらと白いものが落ちて来るのが、かすかに見えた。
「今、とれたばかりのを求めさせましょう」
漁師がまた網を下ろすのを見て、武蔵屋がいった。あらかじめいい含められていたらしく、屋根船はまたゆっくり動いて、漁船に近づいた。

「浪吉よ。おれだ」
知り合いらしく、こちらの船頭が、漁師の名を呼んだ。漁師は、大声で答えた。
「おぅ、おめえか。そんなとこへ船を停めて、どこのどいつかと思った」
「旦那は値切りなさらねえから、ちっと、魚を分けてくんねえ」
「いいとも。今夜は、大漁だ。全部売っても、帰るまでにゃこの魚籠にもう一杯ぐれえとれらあ」
「そんなにたんとはいらねえ」
軽口を叩きながら、船頭は船を寄せた。屋根船の船尾に乗っている料理人が桶(おけ)を渡して小声で何かいうと、漁師は網で白魚をすくってはその桶に入れた。かがり火を反射して光りながら桶に流れ落ちる白魚の上に、雪が降りかかる。料理人が金を出して手渡すと、船頭は引換えに桶を料理人に渡した。
白魚を仕入れたので、屋根船はまた漁船を離れた。仲居が船尾の方から火種(ひだね)を持って来て提灯に灯を入れた。
遠く闇の中にかすんで見える白魚漁のかがり火の数は、最初より少し増えたようだった。雪は次第に激しくなり、船の近くでは提灯に照らされて白い筋のように見えた。船の中では、いな吉の愛くるしい瞳がじっとこちらを見詰めている。

この世のものとも思えないほど幻想的な場面だった。ほんの百数十年前まで、先祖たちはこういう生活ができたのだと思って、洋介は溜息をついた。
急に、二ヵ月足らず前に見て来た十九世紀のテームズ川の様子が目の前に浮かんだ。今見ている隅田川とは、あらゆる意味でまったく対照的な光景だった。

テームズ川

科学博物館に近いケンジントンのホテルに滞在していた洋介は、朝食をすませると、セント・ポール大聖堂へ行くためにサウス・ケンジントンからセント・ポールまで地下鉄で行った。
もちろん、キリスト教の信仰心も、寺院そのものに対する関心もないに等しいが、観光案内書を読んで、現在の大聖堂が一七一〇年に完成したことを知ったからである。転時能力者にとって何より頼りになるのは、昔から同じ場所に同じ形で存在し続けている建造物だ。現在の位置と過去の位置とを確認するための基準になるばかりか、転時の定点としても利用しやすい。
ごちゃごちゃした下町で転時すれば、いくら用心していてもどんなことからいいがかりを

つけられるかわからない不安がつきまとうし、人通りの多い場所での転時が危険なことはいうまでもない。だが、聖域なら、敬虔な態度でいる限り危険がないばかりか、大きな寺院の場合は、祭礼でもない限り広い空間が空いていて、勝手のわからない外国人が過去の時代へ忍び込む入口としては、もっとも安全なのだ。しかも、洋介は、現代のシティからセント・ポール一帯にかけての地理をいくらか知っているので、地図を見なくても何とか歩けそうな自信があった。

地下鉄の駅から地上へ出た洋介は、大聖堂の正面に近いあまり通行人のいない場所へ行き、向こうを透視しながら一気に転時した。空気の匂いと空の明るさが急に変わるのは、江戸と東京の間を往復する時と同じだが、建造後三百年近くたった大きな建造物が、同じ形のまま同じ場所に立っている姿を見るのは感動的だったし、何よりも、ほっとする思いだった。

江戸でこれに近い気持になれるのは、芝増上寺の三門ぐらいだが、ほかに高層建築物のない時代だけに、周囲を圧する堂々とした巨大な石造の建造物であるセント・ポール大聖堂のドームの印象は、はるかに強烈だった。

無事に転時できたことがわかると、洋介は、最初から予定していたように、まずテームズ川のほとりへ行くことにした。十九世紀のロンドンは、現代に比べれば建物が低いとはいえ、このあたりでも五、六階が普通だから、ただ道路を歩いているだけではほとんど見通し

がきかない。そのため、テームズ川の橋の上からこの時代のロンドンを眺めようと思ったのだ。

セント・ポール大聖堂は、現在は二つの橋の中間にあるが、洋介が転時した正面の入口に近い地点は、サザーク橋よりブラックフライアーズ橋に近い地点だったので、まずそちらに向かうことにした。

わずかに風のあるどんよりと曇った空を見上げて歩き始めながら、洋介は、この時代のロンドンが、江戸とはまるで異質な大都会だと思った。むしろ、東京の方に近いといえば近いのだが、もちろん、現代の東京ともまるで違っていた。

二月末の東京は、気温はほぼロンドン並みだが、晴れた日が多く明るいのに、ロンドンは、朝から薄暗く、十時近いのに点々と街灯が灯っている。街灯は明るいガス灯であり、道路は石畳できちんと舗装されている。江戸の市中でさえ街灯らしい街灯がなく、メインストリートだった日本橋の通町でさえ雨が降ればぬかるみになる江戸と違って、すでに現代都市の原型ができ上がっていることは一目でわかった。

日本でこういう町並みが珍しくなくなったのは、昭和四十年（一九六五）以後だから、幕末から明治にかけての日本人留学生が、石造りのビル街と明るいガス灯を見ただけで感動し、一日も早くわが国をこういう進歩した状態にしなくては、と決心したのも無理はない。十九世紀初期のロンドンの市街は、すでに近代都市としての堂々としたたたずまいだった。

——それにしても暗い——

洋介は、心の中でつぶやきながら、肩を丸めるようにして歩いて行った。この季節のロンドンは曇り日が多く、日照時間が五、六月の半分以下という気象条件もあるが、ただ曇っているだけでは、これほど暗くなるはずがない。隙間もなく並ぶ石造りの建物の上に突き出した無数の煙突が絶え間なく吐き出す煙が、空と地上に立ち込めているのだ。

転時した瞬間に感じる空気の匂いの違いは、江戸ではいつもほのかな潮(しお)の香だが、ロンドンでは石炭を燃やした時の独特の臭気だった。この時代のロンドンは、江戸並みの百万都市になっていたが、建物の高さの平均が一・五階にもならない江戸に比べれば、中心部の人口密度は桁違いに高く、大勢の住民がそこで石炭を燃やしているばかりか、世界の工場と讃(たた)えられるほどの大工業国だっただけに、至る所に工場がある。そこでは蒸気機関を運転するためにさらに大量の石炭を燃やすのだから、市街地全体が煤煙(ばいえん)に覆われるのも無理はなかった。

この時代のロンドンの石炭消費量は、工業用まで含めて年間三百万トン程度だった。大ロンドンの住民を百五十万人とすれば、一人当たり二トン。石炭の熱量を一キログラム当たり七千キロカロリーとすれば、千四百万キロカロリー。現在の日本人一人当たりのエネルギー消費が、年間ざっと四千万キロカロリーだから、たとえ話半分の七百万キロカロリーとしてもかなり大きな数値である。まして、江戸時代の日本人の年間エネルギー消費、三十乃至(ないし)四

十万キロカロリーに比べれば、二百倍にも達する。

これだけ膨大なエネルギー消費を、石炭の生焚(なまだ)きだけでまかなっていたのだから、ロンドンがひどい大気汚染に悩まされ続けたのは当然で、高級住宅地が西側の郊外に発達したのは、南西風に運ばれる煤煙を避けるためだった。いずこも同じで、上流階級は金で健康を買っていたことになる。

だが、未来社会からの侵入者である洋介にとっては、昼間から薄暗いのはむしろ歓迎だった。山高帽を目深にかぶり、ややうつむき加減になって普通の早さで歩いていれば、ほとんど人目を引かないからだ。

二百メートルほど行った所で、道は幅十メートルたらずの川にさしかかった。両岸には、石造りの建物がぎりぎりまで迫って隙間もなく建ち並んでいるから、橋の上へ出てはじめて、下に悪臭を放つ汚水が流れていることがわかった。両側の建物の下には方々に排水口があって、汚水が流れ出しているのも見えた。

洋介は知らなかったが、これはフリート川あるいはフリート溝(ディッチ)というロンドンでもっとも古い排水溝で、いわば放流式の下水道だった。もちろん、汚水処理などしていないから、人間の排泄物を含む生下水がそのまま流れている。十九世紀の中頃までには次第に暗渠(あんきょ)化され、現代ではブラックフライアーズ橋に通じる広いニューブリッジ通りとなって、かつての面影はまったくない。

フリート溝を渡った先を左へ行くと、現在のニューブリッジ通りに相当する狭い道には馬車と馬、羊などの家畜の群れが押し合いへし合いしている。その間をすり抜けるように二頭立ての立派な馬車が走って行くが、中にはシルクハットをかぶった立派な紳士が乗っているのが見えた。

ここまで来ればすぐ先がテームズ川で、ブラックフライアーズ橋が架(かか)っている。洋介は、そのまま上流側の狭い歩道を歩いて橋を渡り始めた。あまり広くない橋の上は、馬車と家畜だらけだが、歩行者はあまり多くないので、洋介は、橋を半分ほど渡ったあたりで立ち止まり、川を見渡した。今なら、下流にサザーク橋、上流側にウォータールー橋があるが、この時代はまだどちらも架っていない。幸運なことに、洋介は無駄足をせずもよりの橋へまっすぐやって来たのだった。

下流にはロンドン橋が見えたが、風が弱まったせいか陰鬱(いんうつ)な霧があたりを覆い始めていて、橋の上に二階屋がずらりと並んでいる独特の構造がかすかにわかる程度だった。このロンドン橋は現在の橋の先々代なのである。

市街地には、セント・ポール大聖堂は別格としても、方々に教会らしい尖塔があるほかには、それほど突出して高い建物はなかった。つまり、思い思いに勝手な建築をするのではなく、全体としてはせいぜい七階どまりぐらいの整然とした町並みになっている。寺院のほかは木造の平屋かせいぜい二階の低い家しかない江戸とは比較にもならない近代都市としての

威容というほかなかった。

川岸には、貨物を積み下ろしする川港としてのさまざまな設備や倉庫があり、その背後にはやはり五階建てぐらいの石造の建物が整然と並んでいる。川面(かわも)には大小の船が浮かんでいるが、帆走している船も、帆を下ろして停泊している船もあり、特に下流側には、そのまま外洋航海のできる大型の帆船が方々に停泊している。あちこちで貨物の積み込み、積み下ろしをやっているのが、世界中から集まって来た物資なのだろう。

その活気にあふれる様子は、近代国家の先頭を切って進んでいる大帝国の首都にふわさしい繁栄の姿というほかなく、素人目に見ても、そこで動いている貨物の量が江戸とは桁違いらしいことは、容易に想像できた。

しかし、市街や港湾設備の整然とした様子に比べて、次第に濃くなっていく霧の下を流れるテームズ川の水は、現代の東京を流れる隅田川の水と比べてもはるかに汚く、橋の上に立っていてもかすかに異臭を感じるほどだった。それもそのはずで、さっき渡ったフリート川の汚水が、ブラックフライアーズ橋の北側の下にある排水口からテームズ川に勢いよく流れ込んでいるのをはじめ、あちこちにある大小の下水溝からも、汚水が遠慮なく流れ込んでいるのだ。

ヨーロッパでは昔から下水道が発達していた、というのは事実だが、この時代の下水道は、すべて生の下水を河川に放流していた。それでも、ロンドンは別の水源から引いた上水

道があったからまだましだったが、十九世紀初期のパリの下水道は、驚いたことに、上水の水源にもなっているセーヌ川に生下水を放流していたのである。しかも、排水口より下流で揚水水車で川水を汲み上げ、水売り人夫が車で運んで売り歩いていたから、パリの市民は、何のことはない薄めた下水を飲んでいたのだ。

パリでは、早くから人が立って歩けるほどの大下水道の建設が進み、文政五年（一八二二）当時には、総延長三十二キロメートルに達していたが、土木工事の規模としては立派でも、衛生設備としての実情はまことにお粗末きわまりないというほかはなかった。

それでも、セーヌ川は水量が多く流れも早かったから、汚物が停滞する危険は少なかった。ところが、ロンドンを流れるテームズ川は河口部に近いため、潮の干満が直接影響して流れが停滞しやすい。そこに汚水を放流し続けたため、この時代は、洋介の見るようにすでにかなりひどく汚れていた。しかも、ヨーロッパの近代技術文明には、なぜか環境保全の発想はほとんどなく、ヴィクトリア朝の繁栄期には、工業の発達にともなってさらに汚染の程度が進んだ。

一八五八年（安政五）は、雨が少なかったのに夏の気温が高かったため、ついにロンドン中心部のテームズ川では汚水が停滞して腐敗し、悪臭を放つに至った。国会議事堂は川に面しているため、あまりの臭さに国会審議ができなくなったということだから、よほどひどかったらしい。

汚いものを差し当たり目の前からどこかへ移したところで、問題が解決するどころか、さらに複雑化するだけだということは、この時代のロンドンではすでに誰の目にも明らかになっていた。さすがは、産業革命の発祥地である工業先進国イギリスだけあって、工業の発展と経済成長とともに、その裏側にある環境破壊、環境汚染までちゃんと先取りしていたのである。

都市としての立派さと、その裏返しであるテームズ川の水の汚さに驚きながら、あたりを見廻しているうちに、洋介は、潮が引いてできた川辺の泥の中に、かなりの人数の人々がうごめいているのに気づいた。

この寒いのに何をしているのだろうと思って、また岸の方へ戻って見れば、ひどい身なりをした人々が、荷揚げ場の階段を降りて冷たい泥の中に入り、鉤のついた棒や手でかき廻したりしながら、何かを拾い上げて袋や針金製らしいかごに入れているのだった。

貝でも拾っているのかとしばらく見ているうちに、この人たちはけっして何か特定のものを集めているのではなく、下水や川や潮の流れが運んで来る木片でも石炭のかけらでも金属の屑でも、いくらか経済的価値のありそうなものなら何でも取り込んでいるらしいことがわかった。さらによく見ると、そのみじめな作業をしているのは大人ばかりでなく、三分の一ぐらいが十歳前後の子供たちなのだ。

この時代のイギリスは、世界の最先端を行く大工業国だった。ワットの蒸気機関ができて

からすでに半世紀以上が過ぎている。一八一九年には三百八十トンの蒸気船サヴァンナ号が大西洋横断に成功し、蒸気船による定期航路も始まっているし、蒸気機関車もまだ試運転段階ながらすでに成功しているのだ。

海では、おもちゃのような帆掛け舟が沿岸航路だけをうろうろしていて、陸では、二人の駕籠舁で一人の客を運んでいた貧しい日本ならともかく、輝かしい十九世紀のイギリスにこういう人々がいたというのは、洋介にとってはなはだ意外だった。大人の常識として、この世に極楽のないことを知っていても、心のどこかには、西洋には、昔から自由で平等で豊かな世界があったように思い込む部分があったからだ。

なぜ、そんなふうに思うようになったか、その理由は簡単だ。鎖国してキリスト教を禁止していた江戸時代の日本が世界一野蛮で不幸な国で、海外へ一歩出れば、愛の精神にもとづいた進歩的な社会が地球全体に広がっていて、飢饉も暴動もなく、子供はすべて日本の上流階級の子女が通うミッション・スクールのような学校で教育を受けていた、といわんばかりの宣伝を長年にわたって聞かされ続けたせいである。

しかし、洋介の見るロンドンは、江戸よりもはるかに貧富の差が激しいようで、川をあさっていた子供たちが、ミッション・スクールどころか、読み書きを習っているとはとても思えなかった。実際、この時代の江戸の裏長屋で生まれ育った子供でさえ大部分が読み書きできたのに対して、同時代のロンドンの下層社会では、辛うじてアルファベットが読めるだ

けの子供でさえ十パーセントもいなかったようだ。

かつて、洋介は、自分の著作の中に〈江戸の市民〉という言葉を使ったところ、書評の中で、「江戸にいたのは住民であって、市民ではなかった」と解説されたのを読んでびっくりしたことがある。その解説によれば、〈市民〉とは、自主的に近代を生み出した西洋社会だけに存在する自立した〈近代的大衆〉だから、全人民が封建秩序に隷属していた江戸時代の日本にはあり得なかったのだそうだ。

物理学や数学では、たとえば、eという一種類の文字を、電子の電荷の記号としても、自然対数の底の記号としても使うが、別に混乱は生じない。だから、市民という常識的な日本語を、都市の住民という意味に使うぐらいは差し支えなさそうなものだが、進歩的な社会科学の世界ではそういう用法は間違いらしかった。

それはともかくとして、近世から近代にかけてのロンドンには、愚かな日本人がまねもできないほど立派に自立した〈市民〉たちがいたことは事実なのだろう。だが、その立派な市民のいる社会に、真冬のテームズ川に膝までつかって汚泥の中をあさっている子供たちが大勢いるというもう一つの面を目の前に突きつけられると、とうてい近代の西洋を手放しでほめ上げる気にはなれないのだった。

わずかに吹いていた風がやむと、急に霧が濃くなり始めた。石や煉瓦でできた立派な建物の上に並んでいる無数の煙突から絶え間なしに立ち昇る煙が霧にまじって、何ともいいよう

のない色になり、さっきまでかすかに見えていたロンドン橋は霧の中に消えてしまった。直線距離ではほんの五百メートルぐらいしか離れていないセント・ポールの巨大なドームでさえ次第にぼやけて、うすい影のようにしか見えなくなった。

　このまま勝手のわからない場所でうろうろしていれば、方向を見失って迷子になりかねないので、洋介は、いくらか地理を知っているシティの方へ行こうとして橋の上を後戻りし始めた。

　洋介の常識によれば、霧の色は白か灰色に決まっている。ロンドンの霧も、いくらか風のあった朝のうちはまだ灰色に見えたが、風が止んで霧が濃くなるのと並行して急に黄色みを帯び、次第に汚れた黄土色とでもいうほかない奇妙な色に変わっていった。川辺で泥の中をあさっている人々の姿も、気の滅入るような色の霧の中に飲み込まれて、すぐに見えなくなった。

　空気の温度は、地上を離れるにしたがって下がるのが普通だ。だから、山の上は平地より気温が低いのだが、エネルギー消費の多い大都市などでは、逆転層といって、上空の方に温度の高い層ができることがある。こうなると上空にふたをされたのと同じで、霧にまじった煤煙が市街地によどんでしまう。

　ほんの十分たらずの間に周囲が黄土色の霧に包まれて薄暗くなり、視界もすっかり狭くなったので、洋介は、うす気味悪い思いをしながら歩いて行った。

　これが、〈豆スープのような霧〉として有名なスモッグの元祖、冬のロンドンの濃霧だが、九月末から二月頃までは、二十世紀半ばになっても濃霧で交通機関が停まることが珍しくなかったというから驚くほかない。いや、もっと驚くべきことは、百五十年もの間、こういう状態こそが高度工業国の象徴だと信じて、本気で対策を講じなかったことの方ではなかろうか。

　先進国の科学や技術をまねることが精一杯だった日本に、水や空気を汚すことまでが進歩の一部だと信じる人が大勢いたところで不思議はないが、イギリスといえば、アイザック・ニュートンやマイケル・ファラデーやクラーク・マクスウェルを生んだ自然科学の本場、蒸気機関を最初に実用化した近代工業の祖国ではないか。偉大なファラデーは、今もここからそれほど遠くない王立研究所で研究しているはずなのだ。

　この立派な国の指導的地位にいた聡明な人たちが、長年にわたって川と大気が汚れ放題に汚れることに何の疑いも抱かずに放任していたという事実が、洋介にはどう考えても理解できなかった。

　ブラックフライアーズからシティに直接抜けられるヴィクトリア通りは、この時代にはまだできていないので、洋介は、現在のアッパー・テームズ通りにぴったりかさなるテームズ通りをロンドン橋の方へ向かって歩き始めた。ロンドンの中心地に近いだけあって、大勢の人がぞろぞろ歩いている。それに、さすがに世界最先端の大都会だけあって、石で舗装した

道路を行き交う馬車の音がうるさいほどだった。人の話し声や物売りの売り声以外にほとんど音らしい音の聞こえない江戸と大違いである。

霧はますます濃くなったが、それでもまだ二十メートルぐらい先までは何とか見通しがきくし、ガス灯の青白い火影だけはさらに遠くまで点々と見えている。現代の状況をいくらか知っているこのあたりなら、迷子になる心配はなかった。まだ時間は早いし、いざとなれば現代のロンドンに逃げ帰ればいいので、ぶらぶら歩きながら洋介は考えた。

こたつや火鉢と違って、暖炉で石炭を焚けば部屋全体がすぐに暖かくなる。石炭を焚いて高圧水蒸気を作り、蒸気機関を動かせば、楽に大きな仕事ができる。その代わり、排ガスの処理ができなかった時代は、ここでいやというほど実感しているように、どうにもならないほど空気が汚れる。恐らく、この時代のロンドンの〈市民〉には呼吸器の病気にかかる人が非常に多かったはずだ。

現代では、排ガス処理が上手になったから、硫黄分や窒素化合物などは取り除けるが、石炭や石油を燃やしてエネルギー源としている限り、空気中の二酸化炭素が際限なく増えるのはどうすることもできない。環境を犠牲にして目先だけ楽をしている、という基本的な問題はほとんど解決していないし、このままの状態が続けばどうなるのか、誰にもわかっていない。ただ、自分の生きているうちは何とかなるだろうと思って、その日暮らしを続けているだけなのだ。

下水道も同じだ。昔の日本のように、下肥として使うために排泄物を家の中に溜めておくより、川に流してしまった方が目先は清潔でさっぱりする。その反面、今見てきたように、川が汚れるのは避けられない。

現在のように汚水処理の技術が発達すれば、浄化してから放流できるが、そのためには直接間接に膨大なエネルギーが必要になるし、捨ててしまう下肥に相当する量の化学肥料を別に製造しなくてはならないから、また余計なエネルギーを使う結果になり、さらに大気や水の汚染が進む。

便利で清潔にするためには、その程度の犠牲はやむを得ない、というのが進歩的な考えなのだが、問題は空気や水やエネルギーだけではないから困るのだ。

もともと、人類は最初からさまざまな細菌と共存して生きてきた。細菌の中には、命取りになる病原菌もあるが、大部分は、毒にも薬にもならない雑菌で、われわれは、昭和三十年代頃までは、その中にどっぷり浸って平気で生きていた。ところが、最近では、水洗便所どころかシャワーつきトイレまでが普及し、毎朝シャンプーしないと不潔でがまんできないなどという進化した人類が増えた。軸に殺菌力のある素材を貼ったボールペンさえ売っているほどだから、世界一清潔好きな国民といっていいだろう。

ところが、周囲の環境を急に清潔にしたところで、長い時間をかけて進化してきたわれわれの体がそれに合わせて急に変質するわけではない。そのことをすっかり忘れて異常なほど

清潔好きになり、人類の歴史上かつてなかったほど細菌の少ない環境での生活を始めたため、そのことが原因でいろいろと困ったことが起き始めている。

たとえば、人間が雑菌と共存していた頃は子供の病気だったおたふく風、つまり流行性耳下腺炎は、子供のうちにかかれば、顔がはれるぐらいで大した病気ではなかった。ところが、最近のように免疫を得ないまま大人になって感染する症例が増えれば、生殖腺（せいしょくせん）の炎症を併発して不妊になる危険性が高い。

また、かつては、子供がアレルギー性のさまざまな症状を示すことなどめったになかったが、これも、雑菌と共生していた状態なら、体が雑菌に対抗するのにせいいっぱいで、アレルギーを起こす免疫物質など作る余裕がなかったからだ。ところが、異常なほど細菌が少なくなって、そちらに対抗する必要がなくなると、体がアレルギーを起こす免疫物質をせっせと作り始める。

そればかりではない。生まれた時からあまりにも清潔な環境で育った世代の日本人は、さまざまな細菌の感染に対する抵抗力が弱く、海外へ出ると伝染病にかかりやすい。この傾向は、今後とも進みそうだということだから、国を挙げての悲願である国際化さえ、そのうちにできなくなりかねないのだ。

激増している花粉症も、回虫が寄生している人は非常にかかりにくいという研究結果がある。日本人のアレルギー患者は激増しているのに、同じ日本列島に住んでいる野生の日本猿

の体にはまったく変化がない点に着目した学者が研究して、寄生虫に原因があるらしいことを突き止めた。子猿は衛生教育など受けないから、平気で親の排泄物に触れて寄生虫に感染し、そのためにアレルギーを起こしにくくなるらしい。

下肥を使う生活は、雑菌や寄生虫、時には病原菌とも共存する生活だったが、同時に、細菌やアレルギーに対する抵抗力をつける働きもしていた。つまり、過剰な清潔さには良い面もあると同時に、何百万年にわたって雑菌や寄生虫と共存しながら適応してきた人体にとっては、非常に不自然な状態でもあるのだ。

転時してからまだ一時間もたたないうちに、十九世紀のロンドンの裏表を見てしまった洋介は、今の日本のおかれている状況も、この延長上にあるのだと思った。

——得るものがあれば、必ず失うものもある——

洋介は、心の中でつぶやいた。何かを得るために代償が必要なことは、小学生でも知っている常識だ。ところが、日本では、「外国で成功している」ということになっている新しい方法を採用する時には、それによって得られるものだけを重視し、失うものについてはなるべく考えないのが進歩的な態度ということになっていた……というより、今でもその状態が続いている。

というより、輝かしいアチラのやり方に欠点などあるはずがない、という信仰心に近い気持が底にあって、うっかり短所など探そうものなら、センスが古い、保守的だ、反動的だと

袋叩きにされる。

明治以来、大勢の留学生を欧米先進国に送り出し、ここはイギリス、これはドイツ、こちらはフランス、あれはアメリカとばかり、つごうの良い部分を寄せ集めてまねることで新しい国を作り上げる方針が長い間続いた。そのため、日本のエリートの間から、十九世紀の技術文明に対する批判的な態度がまったくといっていいほど芽生えないまま、現代に至ってしまった。

ところが、今になって冷静に考えるなら、外国で成功している新しい方法といっても、長くて実質的にようやく五十年、短ければほんの数年程度の経験しかない方法が大部分だったから、そのまま長く続ければどうなるかは誰にもわからない。わからないというよりも、そもそも先のことなど考えようとさえしない、考えるのは反動的だというのが、十九世紀の技術文明と、そのものまねに終始した日本の明治から昭和に至る文明開化の特徴だったのである。

現代人である洋介の目で見れば、この時代のロンドンでは、いわゆる産業革命からまだようやく半世紀そこそこしかたっていないのに、すでに輝かしい経済的成功に対する重苦しい代償の支払いが始まっていることが、いやになるほどよく見える。だが、イギリス人が本気でこの問題の解決に取り組むようになるのは、まだ百年後のことなのだ。

そして、イギリスに憧れた日本人が、産業革命ごっこを始めるのが、さらに五十年後。追

いつけ追い越せの念願がかなって、隅田川がテームズ川に負けないほど汚く臭くなるのが百五十年後。今では、多くの開発途上国が、息せき切ってまったく同じ道を進もうとしているが、誰もそれを止めることはできそうにない。

人類は、歴史から学ぶことのほとんどできない生物らしい。

溜息をつきながら、ますます霧の濃くなるロンドンの町をとぼとぼと歩く洋介の横を、裕福そうな家族を乗せた立派な四頭立ての馬車が、騒々しい車輪の響きと馬の尻を打つ鋭い鞭の音を残して追い抜いて行った。

大川

「お前さま」
いな吉がこたつの中で膝をつつきながら小声で呼びかけたので、洋介は夢から覚めたようにわれに返った。
「ちり鍋ができましたヨ」
慌てて船の中を見廻すと、友人たちはいずれも左手に巻紙、右手には矢立から出した筆を持って、発句をひねり出しているところだ。洋介たちのこたつの上だけには鉄鍋がおいてあって、いい匂いがあたりに漂っている。中では白魚と青菜が煮えていた。真先に持って来てくれたらしい。
「ご酒も召し上がらずに、また、何やらもの案じをしていらっしゃったネ」

いな吉が、また始まった、というような笑いを浮かべていった。もの案じとは、考えごとの意味である。
「これは、うまそうだ」
洋介は、いな吉の質問を無視して箸を取った。
「このおつゆをつけて召し上がれ」
いな吉が、紅葉おろしとたれの入った小鉢を指さしながらいった。
鍋には、かなりの量の白魚が入っている。何というぜいたく……と感動しながら、洋介は口に入れた。ほんの数分前までぴちぴちとはねていた白魚は、文句なしにうまかった。続いて、二口、三口と食べる。
「うまいなあ」
思わず溜息まじりの声が出た。
「さ、もっとご酒をお食べなさいまし」
洋介は、酒を口に含んで外を見た。降りしきる雪の向こうに見えるかがり火は、さっきより増えたようだった。気温はさらに下がったらしく、舷にはうす氷が張っている。
仲居たちがほかのこたつにも、ちり鍋を運んで来た。
「さて、こちらもいただくとしますかな」
理左衛門が、筆を矢立にしまいながらいった。

「さよう。腹が減ってはいくさはならぬ、と申します」
団十郎も筆をしまい、巻紙を放り出しながら、洋介の方を見て笑った。ちらと見たところでは、もう二十句ぐらいは書きつけてある様子だった。
「だいぶお作りになったようでござるな」
「気に入ったのもいくつかござりますが、どうも、この道は奥が深うございましてな。ところで、速見さまは、発句をなさらぬとうかがいましたが、お好きではござりませぬか」
「いや」
洋介は、頭を掻いた。
「こういう道には、向き不向きがあって、私のような不調法者は、ただ眺めている方が発句を作るよりも気楽でよろしゅうござる」
「いや、あながちそういうものでもない」
と、白魚を食べながら涼哲が口を出した。こちらも俳句は一休みして、武蔵屋、忠太郎の三人ともちり鍋に取りついている。
「不佞も、前は発句などやる気もござりませなんだが、悪友の忠太郎にすすめられ、ちょいと足を入れてからは、次第に面白くなりましてな。近頃は、お声がかかり次第あちこちに顔を出しております」
「涼哲先生が、発句に凝っておられるとは知らなかった」

「速見さまも、ぜひお始めなさりませ」
涼哲がまじめな顔でいうと、武蔵屋も、
「それがしも、はじめは発句などは隠居致してからするものと、取り合わずにおりましたが、井筒屋、成田屋のご両人にすすめられて、ほんのつき合いに始めましたところ、何とこれが下手の横好きになってしまいましてな。今では、商いの最中にも、ふっと一句浮かんで反故紙などに書きつける癖がつき、家内や店の者にも笑われております。悪いことは申しませぬ。速見さまも、ぜひお始めなさりませ」
「まことにその通りでございます」
忠太郎までが尻馬に乗ってすすめた。
「ぜひ、この場でも一句お作りなされませ」
友人たちが口を揃えるのを聞いて、いな吉はいかにもおかしそうに、
「アレマア。旦那さまはお困りでいらっしゃいますハ」
といって、手の甲で口をおさえて笑いながら、洋介の顔を見上げた。
「わちきはよく存じておりますヨ。お前さまは、白魚の発句をお作りになるより、白魚を召し上がる方がずっとお好きでござんしょう」
「まあ、そうだ」
洋介は、苦笑しながらそう答えるほかなかった。

文章を書く仕事をしていながら、詩や和歌、俳句などを創作したいという意欲が湧いたことなど一度もなく、自分がまったく散文的な人間だということも、韻文を書く才能がないことも充分自覚している。もちろん、たとえどんなに下手でも、当人が楽しんでいれば何もいうことはないが、好きでも上手でもないのだ。

単純ないな吉は、唄や芝居にさえほとんど関心を示さない洋介が、俳句だけを好きになるはずがないと思っている。彼女にすれば、いずれも同じ芸ごとの範囲なのだから、AとBがきらいなら、Cもきらいで当然なのだ。小むずかしいりくつはわからなくても、勘が良いから、自分の旦那の性格ぐらいちゃんと見抜いている。

発句を作るより食べる方が好き、というのは、相手が野暮な男だとはっきり宣告したことになるが、ここでは、いな吉が機転をきかせて、旦那である洋介の気持を代弁したことが誰にもわかったので、俳句の話はそのまま立ち消えになってしまった。

厄介な話題から解放された洋介は、また白魚のちり鍋に戻った。だが、洋介は、自分では俳句を作る気がないだけで、けっして俳句の趣味をばかにしているのではない。

映画の大作一本と俳句一句は対等の芸術作品とはいえないから、俳句など第二芸術にすぎないといった人がいるが、洋介は、俳句の名作一句の方が、つまらない長編映画を二時間かけて見るより、はるかに内容豊富で感動的だと思えるし、誰でもが詩人になれることも素晴らしいと思っている方なのだ。

しかも、その広く厚い詩人の層を背景として、蕪村や一茶のように傑出した詩人が庶民の中から生まれたことは、日本語を母国語としている一人として誇らしい気持になる。もし、イギリスやフランスにこういう短く美しい詩を作る伝統があって、大勢の庶民的な大詩人がいたとすれば、外国のことなら何でも感動する日本人がどれほどほめまくり、よくわからないくせに感動してみせて、どれほど大量の研究書を書きまくったことだろうか。少なくとも、西洋の短い詩を第二芸術だなどという人はけっして現われなかったはずだ。

いな吉の酌で酒を飲みながら、洋介は白魚をどんどん食べた。あっさりしているからいくらでも食べられるし、食べてしまうと、仲居がすぐに煮えたばかりの新しい鍋を持って来てくれる。

「お気に召しましたようでございますな」

武蔵屋が、嬉しそうにいった。

「私の国では、とてもこんなうまいものは食べられません」

洋介が正直にいうと、団十郎が、驚いたように箸を休め、大きな目を見張って洋介を見た。

「何と、仙境には白魚がおりませぬか」

「ほとんどおりません」

洋介は、あっさりといった。

〈しろうお〉という魚は、今でもまだ方々でとれるので、白魚と混同する場合があるが、これはハゼ科の魚で、白魚よりずっと小さなまったくの別種である。今ここでとっている白魚は、人が飲めるぐらいきれいな水でなければ繁殖できないほど汚染に弱い魚で、これほど大発生できる環境は、現代の地球上にはどこにも残っていないそうだ。

それが、ロンドン以上の人口を擁する大都市の中を流れる川、テームズ川と同じぐらい大きな川の河口部で大量にとれるのである。

「ははあ……」

洋介が、あまりきっぱりと否定したので、団十郎はどう考えていいかわからなかったらしく、顎を引いてこちらを見ている。さすがに天下の名優だけあって、人の顔を見るのも芸のうちなのだろうか、じっと見詰めていられると、鈍感な洋介でさえ何となく背中がぞくぞくするような気分になった。

「仙境には、江戸にない不思議で便利なものが数多くあり、また、江戸にも仙境にない良いものがたくさんあります」

「仙境と申せば、極楽のような所と思っておりましたが、江戸にも仙境より良いものがございますか」

「さよう。水もよし、もちろん芸者もよし」

洋介は、自信をもって答えた。

「わっはっは」

のろけだと思ったのか、団十郎は豪快に笑った。ほかの人々もつられて笑ったが、いな吉だけは、黙ってほほえんでいた。

川の上を見廻すと、かがり火の数が最初よりずっと増えて二十近くになっていた。火は、佃島からやや上流にかけてもいくつか見えた。雪は相変わらず降っている。

「もうすぐ、春にございます」

酒を含みながら、理左衛門が静かにいった。

「春になれば、白魚は少しずつ大川をさかのぼりまして、三月には尾久の原より上まで上がります。その頃には、川辺の野新田の原に桜草が一面に咲きまして、それはまことに見事にございます。白魚の味は、この佃あたりでとれるのには及びませぬが、岸辺でいくらも網ですくえますゆえ、遊びがてら大勢すくいに行きます。私も二度ばかり参りましたが、まことに面白うございます」

「そんなにとってしまって、白魚が減りませんか」

乱獲とその結果による資源の枯渇という決まりきった構図を見慣れた洋介は、少し心配になって尋ねた。

「さて……」

理左衛門は、困ったように首をかしげた。その様子を見て、忠太郎が教えてくれた。

「子供の頃からずっと見ておりますが、年によって多少は大漁不漁の違いがあるものの、案じる者はおりません」

そうなのだろうと、洋介は思った。

動力としては人力しか使わない……使えないこの時代の漁業では、どんなに大量にとったところで、とり尽くすことなどできるはずもない。しかも、漁民は、地元に長年住み着いている人ばかりだ。魚がいなくなれば、来年から生活が成り立たないのだから、資源保護だの資源再生産だのとむずかしい言葉を振り回さなくても、来年また充分に繁殖してくれる範囲でしか漁をしない。しかも、二百年間繰り返してきた蓄積があるから、占いと大差ない科学的予測技術による環境アセスメントなどとは比較にならないほど確実である。

北海道で、かつてはあれほど大量にとれたニシンがいなくなったのは、とりすぎの結果ではなく、森林の伐採やダムの建設などで海に流れ込む川の環境を変えてしまったせいらしいことが最近ではほぼ明らかになっている。魚がいなくなる原因は、根こそぎ漁獲する技術の発達よりも、むしろ魚が繁殖できる環境を人間が破壊してしまうことにあるのだ。

もし、この隅田川に、テームズ川の十分の一でも汚水を流し込めば、白魚漁は激減し、半分流し込めば全滅して、漁は今年限りになるだろう。もちろん、白魚の漁獲高など、重さにしても金額にしても微々たるものだから、白魚のつごうなど無視して工場や下水道をどんどん建設して汚水を流していれば、いずれはイギリス以上の大工業国になれる。

実際、そうやってイギリスを追い抜き、もはや外国に学ぶことはない、と豪語していた結果が、今の日本なのだ。

その恩恵を充分に受けている洋介としては、今さら工業生産をやめて隅田川に白魚を戻せという気もないし、どんなことをしても文政年間のこの状態に戻せるはずのないことぐらい、考えるまでもなくわかっている。しかし、白魚が自然に繁殖できる清らかな大川を目の前に見ていれば、何とかしてこの状態を維持できないものか、と思うのも人情だろう。

百年後には見る影もなくなることがわかっている日本はあきらめるとしても、二十世紀末になってもまだ手つかずの自然がいくらか残っている途上国なら、何とかなる可能性がある。だが、先進国から出向いて行ったおせっかいが、「われわれは充分豊かになった代わりに、自然がなくなりました。あなた方は貧しいままでがまんして、自然を残しておいて下さい」と頼んだところで、誰も耳を傾けはしない。誰だって楽をしたいのだ。

「さて、また始めますかな」

団十郎が、また矢立を取り出した。鍋も酒も出たままだから、俳句を肴（さかな）にして宴会をしているようなものだ。

「世間はまだ冬だが、役者の方ではもう春になっているから、それがしだけは春の季題で吟（ぎん）じてもよろしゅうござるかな」

と団十郎が勝手なことをいえば、皆が口々に、

「春なら春でよろしいが、その代わり冬の季題はどんなに名句でもお取り上げになりませんぞよ」
「そうそう。春の雪では俗に落ちる。この舷（ふなばた）には氷が張っているゆえに、春の氷の題でうまく吟じなされればよい」
「春の氷では句にならぬ。氷の春でなくてはならぬ」
などと、一杯きげんで意味不明なことをいい合っている。
この人たちが良い句を作りたくて集まっていることは確かだが、現代人が小むずかしく考えるような芸術としての詩を創作しているというより、気の合った仲間が集まって楽しく時を過ごすための手段として俳句を利用しているような雰囲気である。
しかも、各人が一つの〈連（れん）〉つまりグループだけに所属しているのではなく、涼哲を例に上げても、さそわれればこういう内輪の句会にも参加するが、最初から忠太郎の加入している連に入っているのはもちろん、そのほかに、ある旗本が主催している連のメンバーにもなっているのだ。
人づき合いの良かった江戸人は、何かにつけて相手の顔を見るために寄り合わなくては気が済まないし、趣味のグループも、身分、職業にはあまり関係なく、気の合った同士が適当に集まったり離れたりして、ひんぱんに会合を開いていたのである。
人づき合いが下手な現代人にとっては、こういう濃密な人間関係よりも、コンピューター

を通じて顔も見せず声も聞かずに接触する方が楽なのだろうが、人類は何百万年もの間こうやって生きてきたので、たとえ表面的にはわずらわしく思えても、本当はこういう暮らし方に適応しているのではないだろうか。
いな吉は、男たちがまた俳句に熱中し始めたのを見ると、分厚い綿入れを首まで引き上げた。洋介は、笑いながらいった。
「それじゃ、まるで姫だるまのぬいぐるみだ。寒いのかい」
「アイ。すこしばかり。でも、こうやれば暖かい。それに、雪も小やみになったようでございます」
「また、一杯お飲み」
洋介は、仲居が持ってきたばかりの熱燗（あつかん）を彼女の盃に注いでから、自分もなみなみと注いで飲み干し、外を見廻した。雪の白い筋がほとんどなくなり、かがり火が、月のない漆黒（しっこく）の闇に切り抜いてはめこんだようにくっきりと見えた。
「きれいだな」
「ホンニ……」
いな吉は、真っ黒な大きな瞳で洋介の顔をじっと見詰めながらいった。
「こうして、お前さまとかがりを見ながら白魚をいただけるなんて、まるで夢を見ているようでござんす」

「おれだって、真冬にまさかこんな楽しみがあるなんて思いもしなかった」
「わちきも、こんなに近くで白魚の漁を見たのははじめてサ」
仲居が新しい鍋を運んで来た。洋介は、また煮えたての白魚に手を出しながら、句作のじゃまにならないように小声でいった。
「江戸は、世界で一番大きな町なんだよ。こんなに大勢の人が住んでいる広い町は世界中どこにもない」
「アレサ」
いな吉は、目を丸くした。
この時代、江戸の人口は、一般庶民が約五十五万人。正確な数はわからないがほぼ同数の武家人口があったと推定するのが普通である。さらに、僧侶などの人口を加えれば、百二十万人ぐらい。それに加えて、常に大勢の旅人や流れ者が滞在していたから、実際はさらに多かったはずだ。ロンドンの百万人、パリの六十万人に比べてもかなり多い。
面積は、町奉行所管轄の江戸の市部の範囲が、六十九・九平方キロ。現在の東京都二十三区の五百九十一・九平方キロの約八・五分の一にすぎないが、それでも、同時代のロンドンの市部三・五平方キロ、パリの三十二平方キロに比べればはるかに広い。
もちろん、江戸はただ広く人口が多いだけの巨大な田舎町で、石と煉瓦でできたヨーロッパの立派な都市に比べれば、とても都市とはいえないという考え方もある。寺社建築以外には二階以上の大きな建物がなく、上水道はあっても下水道がないし、道路も舗装してなくて、雨が降ればぬかるみになるからだ。

西洋と違う部分はすべて遅れているか間違っているのなら、まさにその通りであるし、洋介も、江戸が世界でもっとも優れた都市だなどとは夢にも思っていない。だが、実際に十九世紀のロンドンを見て来た今となっては、あれも、人類の目指すべき先進国の模範だとはとても思えず、地上には天国も極楽もあり得ないことを、改めて確認した気分なのだ。
「やっぱり、お江戸は世界一でござんすかエ」
いな吉が嬉しそうにいった。ただし、この場合、彼女の考える〈世界〉は、現代人が具体的に知っている世界とはまったく別の、架空の世界にすぎないが、そんなことはどちらでもよかった。洋介は、やさしくうなずいた。
「そうとも。世界一さ。江戸みたいに大きくて、白魚がこんなにどっさりとれる町は、日本にしかないんだ」
自然環境の清冽(せいれつ)さを標準にするなら、江戸こそ世界一の大都市といっても間違いではない。
「お前は、江戸に生まれたことを、有難いと思わなくちゃいけないよ」
「アイ」
いな吉は大きくうなずくと、真剣な表情になっていった。

「わちきは、お江戸が心底好きでなりません。神田の明神様や待乳山の聖天様へお参りするたびに、ホンニ良い所へ生まれさせて下さったと、お礼申し上げておりますハ。お江戸ぐらい楽しい町は、三千世界のどこにだってあるこっちゃござんせんヨ。白いご膳を三度三度いただけるし、お魚はおいしいし、お花見もお芝居もお祭も川開きもあって、それやこれやを考えれば、楽しみで楽しみで、胸が痛くなるほどでござんす」

生まれ故郷に対するいな吉の熱い思いの告白を聞いて、洋介は、貧しく素朴な江戸をこれほど誇りに思い強い愛着を抱いている素直な心と欲のなさに感動した。

江戸の人々は、洋介の住んでいる未来社会が仙境で、洋介を神仙だと信じている。しかし、江戸がこの世でいちばん良いところだと信じている愛くるしいいな吉の顔を見ていると、実はいな吉の心の中にある江戸こそが本当の仙境であり、いな吉はそこに住む仙女の一人ではないかという気分になってくるのだ。

毎日、世界中からかき集めたご馳走を食べ放題に食べて太る心配ばかりし、年に一度は海外旅行へ行き、軒並み自家用乗用車があり、風呂や水洗トイレのついた冷暖房のできる家に住んで、朝から晩までカラーテレビで芝居やショーを見られる生活をしていながらも、けっして満足することなく、「日本には欧米諸国のような真の豊かさがない」などといっている現代人が、同じ民族の子孫とはとても思えないほどである。

「春になったら、どこかへ遊びに行こうな」

大まじめないな吉の顔を見ているうちにいじらしくなって、洋介は思わずいった。

「さっき大沼さまのおっしゃった桜草を見に行きたい」

いな吉は、こたつの上に上半身を乗り出した。好奇心が強く、どこへでも行ってみたい盛りの年頃なのだ。

「ぜひ行こう」

日本橋から尾久までなら、直線距離で八キロ程度しかない。晴れた日に早立ちして屋根船で隅田川を遡れば、二、三時間で着くのではなかろうか。帰りは川下りになってもっと早いはずだから、楽に日帰りできる。

「アレ嬉しい」

いな吉は、こたつの中で洋介の手を握ってゆすった。洋介も、彼女の小さく滑らかな手を握り返してやる。

二人が仲良く話し込んでいる間にも、句会の方は順調にはかどったのか、

「今日は、やはり、成田屋どのが第一等でござるな」

などと賑やかにやっている。

江戸の発句の会にはいろいろなやり方があった。点者という判定役がいて採点し、ゲームのように勝敗を競う方法もあれば、ある師匠の作風を慕う弟子たちが集まり、師匠に添削してもらったり順位を決めてもらったりする場合もある。だが、ここは、ほぼ対等な仲間の集

まりだから、互選によって最高傑作を決めたらしい。

「いかがなされました」

いな吉も気になるらしく、体を乗り出して尋ねた。武蔵屋が、一枚の短冊を取り上げて読んだ。

「――白魚は雪と氷に生まるるか　白猿――

これが、文句なし、今夜の一等にござります」

「成田屋さまのお作でござんすかエ」

団十郎の句が入選したらしいので、いな吉は、成田屋と理左衛門の顔を交互に見ながら尋ねた。

「さよう」

理左衛門はうなずいてから、首を横に振っていった。

「とても、私ごときの及ぶところではない」

「ちょっと拝見致しとうございます」

いな吉は大喜びで両手を出し、武蔵屋から短冊を受け取ると、おし頂くようにしてから改めて読み上げた。

「白魚は雪と氷に生まるるか――

さすがは成田屋さま。マア、ナンテきれいな。お前さまも、ご覧遊ばせ」

洋介の方に向けられた短冊を見れば、勢いのある達筆で一気に書き下ろしてあって、なかなか見事である。

「成田屋さまは、ホンニマア、何でもお上手でいらっしゃいますこと」

いな吉は溜息をついて、短冊と団十郎の秀でた横顔を交互に見た。

「なになに、まぐれでござります」

団十郎は、得意そうだったが、一応は謙遜（けんそん）して見せながら、

「それほどおほめいただいたなら、その短冊は、姐さんに差し上げやしょう」

といった。

「アレマ……」

いな吉は、短冊を胸に押し当てた。ほの暗い船の中が、一瞬の間、彼女のまぶしい笑顔で輝いたようだった。

また、雪が降り始めた。かがり火はあかあかと燃え続け、あちこちで四つ手網が上がっている。

春着

「ねえ。五月二十五日から、六月三日までに決めてきたわ」
流子がうきうきした様子でいった。
勤続十五年なので、去年のうちにも十日間の特別休暇が取れることになっていたのに、なかなか日程が空けられずに今年に持ち越していた。それが、冬枯れで少しひまになったため、ようやく休めることになったのだ。
「それは良かった。どこかへ旅行にでも行くかい」
「旅行は、仕事だけでたくさん」
流子は、頭を横に振った。
「休暇の間ぐらい、家であなたの奥さんをやりたい。一度ぐらいは外へお食事に行きたいし、バーゲンのシーズンだから、買い物にも行きたいけれど、原則として家でのんびりしてるわ」
「きみが十五年もせっせと働いた結果なんだから、きみのいいようにすればいいさ」
そういいながら、洋介は、今度の正月はいな吉のもとへ行ってやれないので、埋め合わせのつけ方を含めて早めに納得させておかなくてはならない、と思っていた。
文政六年の元旦は、グレゴリオ暦二月十一日に相当するが、ロンドンで転時して以来、東京での太陽の位置が江戸とずれてしまったため、この期間は文政五年十二月二十四日から六年の正月四日に一致する。流子は、江戸の正月に合わせたように休暇を取ったことになる。
彼女は、月のうち半分も家にいないことさえあるせいか、専業主婦にひそかな憧れを感じているらしく、その間はずっと家にいて料理をしたり花を生けたり、普段は手抜きをしている家事をこまごまとやってみたい、といっている。
洋介としても、流子がいっしょにいてくれるのは嬉しかった。二十年近い最初の結婚の経験があるせいか、再婚後五年たっても、十歳以上も年下の流子との生活には愛人との同棲のような気分が濃く残っている。それだけに、若い妻が家の中にいるだけで、何となく華やいだ雰囲気になるし、美しい姿を見ているだけでも楽しい。
「いろいろなお料理のレシピを集めてあるから、毎日じっくり取り組んで新しいのを作ってみたいのよ」

流子は、職業柄いろいろな情報が集まるし、それを整理するのにも慣れているので、料理に関するメモやコピー、切り抜きなどをせっせとまとめているのだ。
「それはいいね」
洋介は、月のうち二十日以上流子のぶんまで夕食を作っているので、笑いながらいった。
「お手並み拝見というところだ」
しかし、流子のように大勢の人に会う仕事では、十日間も完全に仕事から離れるのはなかなか大変らしく、一月の末から二月にかけては、前倒しの仕事ということで四日間も家をあけることになった。
流子が出かけた翌日の午後、洋介は江戸へ行った。江戸では師走十八日で、そろそろ慌ただしくなっている。洋介は、いな吉に向かって因果を含めるようにいった。
「暮れから正月にかけては、私の国でもいろいろと御用があって、なかなか出て来られないのだ。その代わり、五日か六日には必ず来るから、前の時のように家で寝込んだりしてはいけないよ」
洋介は、仙境での自分は、江戸の旗本のような立場だといってある。旗本とは、徳川家の家臣のうちでも将軍に拝謁できる資格のある上級武士で、幕府の実務を担当する官僚の職についている者も多く、御用つまり公用はすべてに優先した。五千石の大身旗本の奥勤めを経

験しているいな吉は、そのことをよく知っているから、
「御用なら仕方がないから、せっせとお座敷を廻って、五日まで待っておりますハ」
と、あっさり納得した。
「この埋め合わせは、必ずつけるから」
「アイ」
いな吉は、素直にうなずいたが、すぐにやや上目づかいになって甘えた声を出した。
「ソンナラお前さま。お願いがござんす」
「何だね。いってごらん」
「これから春着を誂えますけれど、できれば、今年はなんやかやで十五両はかけたくて、かなりのものいりでござんすけれど、よろしゅうございましょうか」
「十両でも二十両でも、商売でいるなら買うがいいさ」
洋介は、腕時計を売った金の残りと金持の脚気を治療した謝礼を合計すれば、数百両を持っているから、すこぶる気前がいい。この時代の二十両は、一人前の大工の年収に近いちょっとした金額だが、正月に来られない埋め合わせまで一度で片づいてしまうのなら、安い買いものだと思った。
「アレ。ホントかエ」
いな吉は、ほっと息をついてから洋介の顔をじっと見上げると、嬉しさを包みきれないよ

うに微笑んだ。こういう美少女を愛人にしていながら、金を充分に使わせてやれないのなら、金など持っていても仕方がないと思いながら、洋介は、いな吉の愛らしい顔を見詰めた。

その時、廊下でおこまとおみねが何か話しているのが聞こえたと思うと、襖が開いて、おこまが茶の間に顔を出した。

「アレ。旦那さま。すっかりごぶさた致しまして」

「こちらこそ。でも、姐さんの顔を難波町で拝見するのは珍しい」

というと、

「今日は、山菱屋の番頭さんが見えて春着を誂えるからいっしょに見てくれと、この子が申しますので参りました」

呉服屋が来る直前になって下工作をしたのかと気づいて、洋介はおかしくなったが、これまでいな吉の買い物にただの一度も口出ししたことがないので、もし自分が来なければ十五両使いたくても十両で我慢するぐらいのつもりだったのだろうと思い、だまってうなずいた。

芸者にとっては、着物が三味線に並ぶ大切な商売道具だから、何かにつけて一枚作るのだが、特に大切なのが新年用の春着だ。若い売れっ妓の芸者、現代風にいうなら人気上昇中の芸能人としては、奮発して何着か新しく作らなくてはならないのだろう。特にいな吉のような自前の高級芸者ともなれば、衣裳の趣味の良さも売りものの一つなのである。

辰巳芸者の風俗のまま座敷に出ることの多いいな吉の場合は、座敷着は振り袖の紋付き裾模様と決まっている。幅の広い帯を二重に廻し、残りの長い部分を二つ折りにしてうしろにたらす〈やなぎ〉という形に締めることが多いため、上半身に模様のない着物の方が落ちつきがいいからだ。だが、そういう制約があるだけに柄を選ぶのがむずかしい。

客のお供をして出かける時などは、その制約がない代わりに、あまり自己主張が強すぎてもいけない。そうかといって、芸者は芸者らしく流行の先端を行く服装をしなくてはならないから、着物の誂えも重要な仕事であり、マネージャーのおこま姐さんと相談しながら決めるのだ。

「姐さん。山菱屋の番頭さんが……」

襖の外で、おみねの声がした。

「アイ。お通しして」

いな吉は、そういいながら立ち上がり、茶の間の隣にある八畳との間の襖を開けた。こちらは、障子越しに午後の日差しがよく入って茶の間よりずっと明るく、火鉢にももう炭火が入っている。

すぐに、おみねに案内されて、番頭らしい中年の男が、大きな風呂敷包みをかかえた若い男を二人連れて入って来た。芸者の衣裳選びは、金額がかさむだけにむずかしく、呉服屋に

とっては最先端の仕事だから、若い者を訓練するのにもいい機会なのだ。
「これは、旦那さまで……」
洋介が突っ立っているのを見た番頭は、恐縮した様子でもみ手をしながらその場に座り込み、両手を前に突いて頭を畳にすりつけた。洋介が慌てて座れば、顔だけ上げてにこやかに、
「お初にお目にかかります。手前、山菱屋の番頭六兵衛にございます。こちらは、手代どもにございます。おこま姐さんもいな吉姐さんも、深川以来ごひいき願っており、日頃、大変可愛がっていただいております。手前どもと致しましては、どちらさまにも負けぬように勉強致しておりますが、旦那さまがご覧遊ばして到らぬところがございましたら、いかようにも改めますゆえ、何とぞお叱り下さりますよう。今後ともご愛顧のほどお願い申し上げます」
立て板に水の挨拶とともに、三人が平蜘蛛のように平伏して頭を下げる。呉服屋の相手などしたことがないので、どう応対していいかわからず閉口していると、例によっていな吉がすぐに引き取って、
「旦那さまは、着物のことはおわかりにならないから、すぐに、見せておくんなさい」
と、催促した。
「かしこまりましてございます」

番頭が合図をすると、手代たちが紺色の大風呂敷を解いてつづらを出した。蓋をとれば中には反物が何十本と入っている。
「このあたりが、来年のはやりでございまして……」
手代がそれぞれ反物を一本ずつ取り出して、慣れた手つきで畳の上に転がせば、灰紫とでもいうのか、渋い紫の地に雪輪の模様が散っていて美しい。年齢の割には地味だが、これは毎度のことだ。
「辰巳では、こういう色柄も出ております」
というような説明とともに、見る見るうちに、座敷の中に反物が何本も流れて、絹物独特の香りが漂う。
「こちらにお茶をお入れ申しましたが……」
といって、おみねが茶の間の方から顔を出したが、これは、お茶にかこつけて見に来たのだろうと、洋介は推察した。
「アイ。有難う。おみねさんもご覧ナ」
いな吉がやさしく誘えば、おみねもすぐに座り込む。
「目の法楽でございます」
次から次へと目の前に繰り出される反物の前に、目の色を変えた女性が三人座り込めば、もう洋介の立ち入るすきはない。

「でも、これじゃあ、まるでお屋敷から宿下(やどさ)がりしたみたいで、芸者らしくない」
と、いな吉がいえば、おこま姐さんがその反物を彼女の体に懸けて見て、
「いな吉、お前は、もう少し派手にしてもいいヨ。これぐらいの花柄(はながら)なら、今どきお座敷に出たところで、とやかくいわれるこっちゃない」
おみねも、うなずき、
「はい。これなら姐さんがお召しになっても、それはぴったりでございます」
などと、夢中で品定めをしている。そのうちに、いな吉とおこまが、どこかよそで見た柄が良かったのどうのといい始めると、それを聞いた番頭は、
「へい。仰せの通りの品が手前どもにございますので、ちょっと手代を走らせます」
といって、一人の手代に耳打ちした。その男は、うなずいてからていねいに挨拶して出て行った。どうやら、別の品を取りに店まで一走りするらしい。こういう時のために、手代を二人も連れて来ているのかと感心しながら、洋介はしばらく横で眺めていたが、似たりよったりの反物や帯ばかり見ているのに、すぐあきてしまった。
うまいきっかけがあれば逃げ出そうと思いながら、番頭の熱心な顔を見ているうちに、また十本ぐらいの反物を持って手代が戻って来たが、それを広げても、おいそれとは決まりそうになく、まだまだ序盤戦といった感じなのだ。
洋介は、自分のように気の短い男には、呉服屋の番頭などとても勤まりそうにないと感心

していたが、このあたりが我慢の限界で、そろそろ逃げだしたくなった。しかし、せっかくの楽しみをじゃましては悪いので、じりじりと茶の間へ後退してからそっと立ち上がったが、手洗いへ行くのだろうとでも思われたらしく、誰もほとんど注意を払わない。
これ幸いと、茶の間に脱ぎ捨てたままの羽織を袷(あわせ)の上に着た洋介は、そっと外へ出た。今は寒中で寒さの真っ盛りだが、風もなく穏やかな日なので、女性たちの目の法楽とやらにつき合うよりは、江戸の町を歩く方が楽そうだった。
大晦日(おおみそか)までまだ十日以上あるとはいえ、暦の上の年末と会計年度の年末を分離している現代の年末と違って、十三日の煤(すす)はき、つまり江戸市中揃っての大掃除が終わって十二月の半ばをすぎれば、日に日に慌ただしさを増している。
洋介は、大門通りへ出て右へ曲がった。このあたりは、明暦(めいれき)の大火までは吉原遊廓があったいわゆる元吉原の跡地で、その中央を貫いて元吉原の大門へ抜けていた道がそのままの場所にあり、二十世紀の現代まで大門通りという名が残っている。この時代の大門通りは、金物屋が多く人通りも盛んで賑やかな町並みだった。
だが、現代の東京の市街地と違って、日本橋地区のこのあたりでさえ、右も左もちょっと裏へ入れば長屋ばかりである。長屋は、いわば江戸の住宅地であって、単身者あるいは夫婦単位で暮らす庶民のための低家賃住宅……というより江戸の標準的な住宅だった。現代のように、都心部の住民が減って遠い所から毎日通うのとは逆に、江戸の中心地は住民も多かっ

たのである。

五十万人を越す武家人口、つまりまったくの消費人口が半分を占める江戸は、その需要をまかなうために商人以外に大勢の職人が住んでいた。さまざまな実用品、工芸品を作る専門職のほかに、火事が多かったせいもあって、大工、左官、鳶職（仕事師）のような建設職人が多いのも江戸の特徴といえそうだ。

現代人は、長屋といえば貧民窟のように感じる人が多いようだ。もちろん、裏長屋に金持がいるはずもないが、工業が盛んになる明治以後にできたような意味での貧民窟は、この時代にはまだない。いつの世にもどんな社会にも貧乏人はいるし、もちろん、江戸にも貧乏人は大勢いた。というより、現代的な感覚では大部分が貧乏人だったが、近代的な工業が発達する前は、一つの階層としての貧乏人が、まとまって特定の地域に住むということはない。どの地域にも、表通りに面した所には、表店つまり商店があって、その裏には、大小の長屋がある。比較的広い長屋には弟子がいるような親方が住み、さらにその裏には単身者や夫婦単位の家族が住む裏長屋があるというように、さまざまな職業、階層の人の住む家が組み合わさっているのが普通だった。

どんなにつつましい生活をしているにせよ、狭い地域に大勢の人がまとまって住んでいれば、生活必需品の需要だけでも莫大な量に達する。

現代なら、小売り専門の商店が発達していて住民が買い物に行くのが普通だ。ちょっとし

た駅前商店街でさえ、食品から衣類、金物、食器、文房具、雑貨、薬、書籍、電気器具、カメラ、時計・貴金属・宝石に至るまで揃っている。

江戸のような大都市ともなれば、同じようにあらゆる小売店が発達しているのは当然だが、それ以上に大勢いたのが行商人だった。消費者人口の密度が圧倒的に高く、行商の効率が非常に良かったからだ。

しかも、行商人たち自身も、多くは裏長屋の住人で、その日暮らしに近い生活をしているのだから、固定店舗を維持するための間接費がかからない。独身者なら、家族の生活費さえ不要なのだ。一方、長屋の住民にとっては、家で待っているだけで商店の方から出張販売に来てくれて値段も安い。一般庶民は、行商人に頼って暮らしていたといってもいいすぎではないだろう。

いつものように、洋介は、人の流れに乗ってゆっくり歩いていた。のどかな農村から来た人にとっては、「生き馬の目を抜く」というほどの厳しい競争社会だった江戸も、さらに厳しい競争社会から来た洋介にとっては、まことにのどかな世界で、小柄な人々がのんびり歩いているようにしか見えない。

その気になって見ていると、本当にあらゆる行商人が歩いている。特に、歳末が近づいた今は、まとめ買いをする人も多く、行商人の商売も書き入れ時だから、普段よりかなり多いようだった。

し、その中に、商品とまな板、包丁を入れて急ぎ足で歩いている。高級魚を扱っていれば、買ってくれる家は大体決まっているから、一日おき、二日おきというふうに訪ねて行く。洋介のいるこの時代、文政年間ともなれば、注文されれば刺身でも煮魚でも、顧客の目の前で見事な包丁さばきを見せて作るのが普通になっていた。

魚でも、特殊な魚専門になれば、呼び声をあげて売り歩く。

「寒ブナは、よろしゅう、寒ブナは、よろしゅう……」

「どじょうー、どじょうっどじょうっ……」

「だいこぉーだいこ、だいこ、だぁいこ」

と大声を上げてゆっくり歩いているのは、魚ではなく、いうまでもなく大根売りだ。見事な練馬大根が前後のかごに五本ずつぐらい残っているだけだから、もうあらかた売り切ってしまったのだろう。

引出しがいくつもついた箱に〈国分〉と大きな字を書いたのを背負っているのは、たばこの行商だ。普通の固定店舗のたばこ屋もわりあい目立つが、わざわざ買いに行かなくてもすむから、これはこれで利用者が多いのだ。

眼鏡の絵を描いた箱を背負って、「めがねやでござい。めがねの玉のとりかえ、早よう早ようー」という売り声はもちろん眼鏡屋だ。何と、江戸では眼鏡までが行商人から買えたのだ。

塩を盛った大きなざるを天秤につけ、「えー、塩ぇー、しおーぉ」と、唄うように呼びながら歩いているのは、これもいうまでもなく塩売りだ。家で待っているだけで、調味料さえ手に入ったのである。紺色の筒袖を着て、磨きあげた真鍮の容器をつけた天秤をかついで歩いているのは、行灯用の油を売る商人。

縦に長い大きな風呂敷包みを背負っているのは、一目でわかる貸本屋である。本が好きないな吉のところへも、定期的に巡回して来て、新しい本を何冊かおいて行く。本はかなり高価だから、この時代は、特別な学問をする人でもない限り、本を買って手元においておくことはあまりなかった。大名でさえ、貸本を読んだという記録が残っているほどだから、本の流通の主役は貸本屋だった。

同じ縦長の荷物でも、箱を背負っているのは小間物屋だ。これも、いな吉が時々利用しているので、すぐにわかった。

納豆は、昭和五十年代頃の東京ではまだ呼び売りの人が来ていたし、豆腐は、今でも土地によっては地元の豆腐店の人が売りに出ているだろう。もちろん、この時代でも行商が盛ん、というより、納豆や豆腐は行商の方が主力だった。

田所町の手前から人形町通りへ出ようと左へ曲がると、この通りはすいているので、子供が元気良く遊び廻っているが、古着の行商が出ていた。天秤の両側に竹製の枠をつけている

が、そのまま地面におろせば、馬のような形になるので、竹馬の古着というのだが、枠の中には古着を解いた反物が入っていて、枠の上には端切れなどを吊るしてある。

高級な呉服屋には縁のない裏店(うらだな)の女性が相手の商売だが、いな吉のように仕立て下ろしの着物しか着ない芸者でも、家の近くにこの竹馬が来ていると、出て行ってきれいな端切れを買ったりしている。布に対する女性独特の愛着があるからこそ成り立つ商売だが、この竹馬のまわりにも、五、六人の女性が集まり、熱心に反物を見たり端切れをいじったりしていた。どうやら、一人の女性が反物を買った様子だった。この人たちも、貧しいなりにそれぞれの春着を作ろうとしているのだ。

年末なので、暦を売っている老人にも何人か行き合った。これは、おじいさんの小遣いかせぎである。

人形町通りから堀留(ほりどめ)、伊勢町河岸を抜けて行く途中でも、飴(あめ)、ほうろく、行灯用の灯心、卵、唐がらしなど、本当にあらゆる生活用品を売る行商人を見た。特定の顧客のない行商人たちは、同じ地域を何度も巡回しているから、売り声を一度聞いて待っていれば、また必ずやって来て、ほしいものを買い損なうことはめったにない。

行商人とは違うが、従業員の多い大きな店などへは御用聞きが来た。一回当たりの販売量が多い場合は、ただやみくもに商品を持って行っても用がたりないから、あらかじめ必要な品物とその量を聞いておき、あとで納品するのだ。この場合は、現金で支払う必要がなく、

勘定は盆と暮(くれ)の年二回払いが普通だった。

現代なら、駅前商店街へ買い物に行くところを、この時代は駅前商店街の方がコンベアベルトに乗って自宅の前をぐるぐる巡回してくれるような仕組みになっていたから、長屋のおかみさん連中はわざわざ買い物に行く必要もないし、必要に応じて必要な量だけ買えばすむ。冷蔵庫などなくても困ることはなかったのである。

——ロンドンにも、呼び売り人や行商人が多かったな——

洋介は、また十九世紀のロンドンを思い出しながら、大勢見かけた街頭商人たちを江戸の行商人とかさね合わせてみた。

ブラックフライアーズからテームズ通りをまっすぐ行き、ロンドン橋のたもとを横切った洋介は、ビリングズゲイトの魚市場に入った。日本橋のすぐそばに魚河岸があるのとちょっと似ているので、関心があったのだ。といっても、ロンドン橋は、江戸の隅田川に相当するテームズ川に架っている大きな橋だから、ビリングズゲイトは、日本橋よりむしろ永代橋の横にあると考えた方がわかりやすい。

ロンドンでも魚の仕入れは朝の早い商売だから、洋介が通りかかった時には、もうそれほど大勢の人はいなかった。しかし、まだ残った魚やえび、貝などを前に呼び声を上げている競売人が少しはいたし、その前で仕入れをしている仲買人もいるので、さっきまでの賑わい

が充分に想像できた。恐らく、大部分の商人たちは仕入れを済ませてロンドン市中に散って行ったのだろうと思った。

魚市場を通り過ぎ、ロンドン塔の手前を左に曲がって少し行くと、今度は衣類を扱う業者の多い地域になった。大勢の商人が街頭に立って、とても英語とは思えないような不思議な言葉でどなり合っているが、ごちゃごちゃした狭い道の至る所に古着らしい衣類を吊るし、地面には靴が並べてあるから、衣類や靴を売買していることだけはわかった。

人が大勢いる場所に物売りが集まるのは、どこでも同じらしいが、ここでも、行商人が大勢いた。食べ物を売る屋台や立ち売りが大部分だが、魚や野菜の行商人もいた。江戸と同じで、下町は住民が多いから、生鮮食料品も売れるのだろう。

江戸と違うのは、天秤棒で担ぐ人が一人もおらず、水分が多く重い商品は手押し車で運んでいることだった。江戸では車の使用が許可制で、限られた台数の大八車と牛車しか使えなかったから、行商人は商品を天秤棒でかついで運ぶが、ロンドンでは、道路が舗装され車の使用も自由なため、重い荷物は車で運ぶのが普通らしかった。

しかし、江戸との最大の違いは、そんな些細なことではない。ロンドンには、びっくりするほど大勢の子供の売り子がいたことだった。

江戸では子供の行商人を見かけることがまずないのに対して、ロンドンの裏町では、売り子の半分ぐらいが子供だということが、洋介にとっては何よりも意外だった。日本など問題

にもならないほど進歩していたはずのイギリスの首都ロンドンに、垢じみて顔色の悪い幼い子供たちが、見すぼらしい服装で朝から飲食物などを売りあるいているのを見ると、いったいこの子たちの教育はどうなっているのかと、よけいな心配までしたくなるほどだった。

江戸でも、子供は働く。いな吉もそうだったらしいが、庶民の場合は、特別な金持の子はともかくとして、十二、三歳になると親元を離れて奉公に出るのが普通だった。しかし、江戸の町中で生まれれば、たとえ裏長屋に住んでいても、六歳ぐらいから手習いに行かない子はまずいない。商売を覚えるにしろ職人の道を進むにせよ、一応は読み書きができるようになってから社会に出る。

これに対して、朝から物売りをしている十歳にもならないロンドンの子供たちは、どう見ても勉強しているひまなどなさそうだった。実際、こういう子供の中で文字を辛うじて読める子供は十人に一人ぐらい。書ける子供になれば、その何分の一もいなかったし、さらに何十年かたったヴィクトリア時代でも同じだったという。

幕末期から明治にかけて日本に来た外国人が、日本の子供は幸福そうだ、と記録している例は多い。たとえば、東京大学へ動物学を教えに来たモース博士が、

「世界中で、日本ほど子供が親切に扱われ、そして子供のために深い注意が払われる国はない」（日本その日その日　石川欣一訳　平凡社）

と書いているのは、当時の先進国の実情と比較していっているので、洋介の観察も、それ

ほど見当違いではないのだろう。

漢字を何千字も覚えなくてはならない日本の教育水準は、アルファベット二十六文字ですむ欧米諸国にはどうしても及ばないから、日本を一流工業国にするためには、漢字をやめて日本語をローマ字化するべきだ、という教育論議が盛んだった時期がある。

しかし、一九二〇年代のロシアでは、首都のモスクワでさえ子供の就学率が二〇パーセント程度だったそうだ。ロシア文字のアルファベットも三十三しかないのだから、ある社会での教育水準は、その言語の字母の数ではなく、教育に対する熱意で決まることは明らかだ。

もし、字母の数の少なさに比例して教育が普及するのなら、〈・〉と〈—〉の二文字だけですべてを表現できるモールス符号を国字とすれば、世界一の教育大国になれるはずだと皮肉の一つもいいたくなる。

習う文字の数が少なくてすめばすむほど教育が普及する、という西洋崇拝の幼稚な妄想から、われわれが目覚めたのは、情けないことに、ようやく一九七〇年頃になってからのことなのだ。

その、わずか二十六文字のアルファベットさえ習う余裕のない気の毒な子供たちは、菓子や果物などをかごに入れたり盆にのせたりして、大人たちの間を売り歩いていた。これでも、洋介にとっては充分に哀れだったが、川の泥をかきまわしていた子供たちに比べれば、身を切るような水に入らなくてすむだけましな暮らしなのだろう。

立派に自覚したロンドンの〈市民〉たちが、こんな光景をどう思って見ているのか、洋介には不思議でならなかった。

幕末期か明治になってからか、日本に来たイギリス人の宣教師が、正しい教育を受けられない日本人のために、キリスト教の立派な学校を作ったという話を聞いたことがある。その時は何という素晴らしいヒューマニズムだろうと感心したものだが、こうやって本国の実情を見ると、よその国の上流階級のために学校を作る金があるなら、なぜ、自分の国のみじめな下層階級のために使わなかったのか、首をひねらざるを得なかった。

そんなことを思い出しながらぶらぶら歩いているうちに、いつの間にか室町三丁目の大通りにさしかかっていた。洋介は、神田(かんだ)へ行こうか日本橋へ行こうかと考えたが、久しぶりに日本橋を渡ってみる気になったので、通りを左に折れて越後屋の前に出た。

江戸第一のこの大きな呉服店も、今日は人の出入りが盛んなので中の様子がちらちらと見えた。ちょっと足を止めてのぞいて見れば、店内は、江戸の大店(おおだな)としても珍しいほど広く、それこそ二百畳以上も敷けそうだった。

その大広間のような店内に何十組もの客が散らばって座り、手代がそれぞれの客の前で応対をしている。客の男女の比率は三対七ぐらいだろうか、男の客が思ったより多いのが意外だった。店の奥には大勢の若い男の見習い店員、いわゆる丁稚(でっち)が座って待機していて、そち

らに向かって声をかければ、すぐに立ち上がって反物を取り出し、客の前に持って来る。

裕福そうな母娘連れらしい女性客が、五枚も六枚もの反物を並べて、楽しそうにあれこれと品定めしているのも見えた。このぶんでは一時間ぐらいかけて、ああでもないこうでもないと鑑賞を兼ねて眺めているのではないかと思うが、着物の誂えはかなり単価が高い取引きになるから、のんびりやっていても充分に引き合うのだろう。店員もそれなりに楽しそうに応対している。

この頃の越後屋は、一日の売上げが二千両に達することもあった日本一の豪商である。二千両といえば、ほぼ農民五千人分の年貢に相当する米五千俵（三百トン）の値段だった。これだけの金額を、畳の上で毎日生み出したばかりか、地主として貸している土地から上がる地代収入が年間二万両。これだけでも五万石の大名領の所得だったというから、大変な商売をしていたのだ。

足をすり減らしながら、天秤棒につけたわずかな商品を売って一日数百文を得る商人と、一日二千両の越後屋が共存しているのが、巨大都市江戸なのである。

他人の買い物を眺めていても仕方がないし、あまりしげしげと見ていれば不審に思われそうなので、洋介はまた歩き始めた。室町通りはさすがに賑やかで、日頃はあまり見かけない背に荷物をつけた馬や、重そうな荷物を満載した大八車もかなり目についた。

ほどなく、左側に魚河岸の入口を見て日本橋にさしかかった。木製の日本橋は、渡って行く人々の下駄の音が響いて、鈍い音を立てていた。橋の中央部は小高くなっていて見晴らしが良いので、江戸橋の方を見れば、下を流れる日本橋川には、よく衝突しないものと感心するほどたくさんの船が上り下りしている。

年末を控えて、さまざまな商品の需要が増えているから、人口百万を越す消費都市に流入する物資は莫大な量に達し、集散地である日本橋界隈の河岸には、次々と荷船が発着していた。魚河岸にも魚を積んだ八丁櫓の押送船が次から次へ入っては荷を下ろしている。その間を縫うように、酒樽や薪などを満載した船がせわしなく日本橋の下を行き交っているのだ。

橋の上も、かなり混んでいた。橋の上の幅は四間二尺五寸（七・九五メートル）しかないのに、室町側で道幅七間（十二・六メートル）、通町側では道幅十間（十八メートル）もある大通りを通って来た人が、絞り込まれるようにして渡るのだから、混雑しても不思議ではない。

立ち止まって川を見ていられる状況ではないので、洋介はさっさと渡って通町へ出た。すぐに太い角材で組んだ町木戸という黒塗りの門構えがある。木戸というから、戸が閉まるようになっているのかと思うと、戸らしいものはどこにもない。もともとは、戸があって夜の四ツ時、ほぼ九時か十時頃には閉め、通行人は横のくぐり戸を通ったそうだが、江戸時代の後期には、ただ門のような形が残るだけで、実用上の意味はまったくといっていいほどなくなっていた。

ここまで来ると、かつて居候していた涼哲の家がすぐそばなので、寄ってみることにした。今なら、電話もせずにいきなり立ち寄るのはいくらか失礼な感じだが、この時代では、近所を通った時に立ち寄るのは、ごく自然である。

　日本橋から京橋までは、道幅も江戸中でもっとも広く江戸商業の中心地で、重々しい蔵造りの大店が両側にずらりと並んでいる。歩いている人の数も多いので、洋介もあまり人目を気にせずに歩けるのだ。

　しばらく行くと二番目の木戸があり、その先が通三丁目である。このあたりを右に入った檜物町（ひものちょう）の裏通りに涼哲の家はあった。かつてしばらくでも住んでいた場所だけに、洋介はさっさと歩いて、涼哲の家の前まで行き、そっと格子戸を開けた。すると、目の前の上がり框（かまち）の上に涼哲自身が立っていて、薬取り（くすりとり）に来ているらしい人に何かを説明していた。

「これは、速見さま……」

　洋介が突然目の前に現われたので、涼哲はちょっと驚いたようにいった。

「いきなり顔を出して申しわけない」

　洋介は、中に入りながらいった。

「ぶらぶら歩いていたら通町まで来てしまったので、年末でご迷惑ではないかと思いましたが、ちょっとお寄りしました」

「何が迷惑なことやら。そばまでいらっしゃってお寄り下さらねば、かえってお恨み申しますぞ。さ、お上がり下され」

　薬取りの人は、もう用がすんでいたらしく、そのまま挨拶して帰って行ったので、洋介は下駄をぬいだ。勝手のわかっている家なので、さっさと書斎に通る。

「最近は、とんとお見限りでお寄り下さらぬので、多恵も気にしておりました」

　涼哲は、嬉しそうにいいながら、あとについて来た若い男に何かいいつけた。

「あの男は、何者でござる」

　見慣れない顔なので、洋介は尋ねた。涼哲は、いつものように自分の机の前に座っていった。

「おかげさまにて、不佞（ふねい）も最近ではなかなかの流行り（はやり）医者になりましてな。一人では何をしてもはかが行きませぬ。たまたま、多恵の縁辺の者が書生になりたいと申すもので、手伝わせております」

「医者になろうというのでござるか」

「いや。医者に向いているかどうかは、しばらく使ってみなくてはわかりませぬ。今のところは、見習いと申しても薬刻みをさせる程度でござりまして、あとは使い走りなどをやらせております」

　この時代は、現在のような医科大学もないし、そもそも医師免許がなかったから、医師になりたければ、医師の弟子になるのが標準コースだった。涼哲自身も、京都の名医のもとで

七、八年間の修行をしてから、江戸へ帰って開業したのである。
「ところで、御新造さまは？」
いつもなら、すぐにやって来る多恵の姿が見えないので、洋介は尋ねた。
「今、呼びにやりましたが、何せ、春着を誂（あつら）えるとやらで、昼過ぎから呉服屋が参っておりましてな」
それを聞いた洋介が思わず吹き出したので、涼哲は不審そうな表情になった。
「いかがなされました」
「実は……」
洋介は、笑いながらいった。
「いな吉の所にも呉服屋が来ていて、春着の誂えとやらでおこま姐さんとおみねさんの三人が目の色を変えております。私の居る場所がないので逃げて来ました」
「いやはや」
涼哲も、剃（そ）り立ての丸い頭をぴしゃぴしゃ叩きながら苦笑した。
「売れっ妓芸者の姐さんと違って、貧乏医者のうちあたりは、春着といってもごくつましい買い物にございますが、それでも実家の母と妹までよびましてな。目の色を変えておりますわい」
越後屋のように大きな呉服屋へ買いに行く客もあれば、顧客の家へ出張販売に来る呉服屋

もある。山菱屋は、いな吉がはじめて芸者として出た頃から出入りしている呉服屋らしいから、彼女の好みや芸者の世界での流行をよく知っているのだろう。そういうきめ細かなサービスで大型店舗に対抗しているのだ。
涼哲は、憮然（ぶぜん）とした面持ちで続けた。
「不佞にとりましては、着物などただ寒さをしのぎ、見苦しくなければよろしいが、女にとっては、体の一部のようなものらしゅうございますな」
「芸者にとっては、体というより、いのちかもしれません。しかし、あれほど夢中になれる気持はどうもよくわからない」
「不佞にも、さっぱりわかり申さぬ」
多恵が、急ぎ足で書斎に近づいて来る音が聞こえた。二人は顔を見合わせ、声を立てずに笑った。

夏と春

「あたくし、もう支度できたわ」
流子が書斎をのぞいて声をかけた。
「じゃ、すぐ行く」
洋介は、書きかけの文はそのままでパソコンの始末をつけ、スイッチを切って立ち上がった。
流子は、淡い青磁色のツーピースを着て玄関に立って待っていた。上着は襟なしの半袖でスカートは優雅なフレアスカート。やや濃いめの同系色のバッグを片手に、ヒールが六センチぐらいの青い靴をはいている。髪を黒いバレッタでまとめているほか、指輪もはめず、耳飾りも首飾りもつけないまことにすっきりした姿だが、それ以上飾る必要があるとは思えな

いほど美しく見えた。
「もう、夏姿だね」
「そう。涼しすぎる感じかしら」
「そんなことないよ。ぴったりさ。きみは、本当に恰好がいいし、飾りをごたごたつけないのも意気だよ」
「ありがと」
流子は、嬉しそうにいった。
「あなたにほめてもらえないようじゃ、おしゃれする甲斐がないわ」
流子はもともとあまり太らないたちらしく、特別な節制をしているとも思えないのに、身長が一六七センチのスリムな長身も恰好の良い脚も五年前と同じ形を保っていて、洋服がよく似合う。
二人はマンションを出た。雲が多くなったので思ったほど暑くはなかったが、急いで歩けば汗をかく程度には暑い。
休暇になってから、流子はあらかじめ宣言していたように、せっせと家事にいそしみ始めた。洋介は、改めて、専業主婦がいるとどんなに楽かを認識したが、だからといって、流子に家庭に入ってほしいとは思わなかった。
江戸へ行きにくくなるという理由もないではないが、それよりも流子に所帯じみてほしく

ないという気持の方が強い。平穏な家庭生活は、前の結婚で充分に経験しているから、人生の半ば以上が過ぎた今となっては、愛人と同棲しているような感じの生活の方が、はるかに気楽で快適なのである。

休暇の初日、流子は、リフォームして衣装部屋にした三畳の部屋で半日を過ごした。春物の手入れをして防虫剤を入れ、夏物と入れ替えたり、クリーニングに出すのを仕分けたりしたらしい。二日目は、午前中から食料品の買い出しに行き、午後からいろいろな料理を作った。その間には、洋介の原稿をファックスで送ったり、コピーを取る手伝いもするが、ベテランの編集者だけあって、こういう仕事はさすがに手慣れていて要領がいい。

三日目は、また衣服をいじくってから、どことかの郷土料理を作り、本格的な料亭式の出汁の取り方とやらを試したが、晩になると、前に来ていたダイレクトメールの中に、デパートが都心のホテルで開く初夏の大型バーゲンの案内があったのを取り出した。

その特売は、季節の変わり目ごとにあるのだが、非常に割得だということで、前々から流子のごひいきだった。ぜひ行きたいという話から、できればいっしょに行って外で夕食をすませようということになったのである。

流子は、夫との久しぶりの外出が嬉しいらしく、バッグを持った手をやや大きく振りながら、冴えざえした表情で歩いている。

「あなたとお食事へ行くのなんて、久しぶりね」

「きみは、最近忙しいからな」

「席の温まるひまもない、っていう言葉があるけれど本当よ。編集会議だ、打合せだ、出張だ、撮影だって飛び廻っているから、最近は、会社で自分の椅子が温まるほどゆっくり座っていたことなんてないわ。雑誌の編集長の時も忙しかったけれど、あれとも違う忙しさね。でも、こういう感じが好きで編集者をやっているのだから、あたくしとしては別に苦痛でもないし、むしろ、毎日が面白くてたまらない。

でも、あなたも最近はお仕事が増えたわね。結婚した頃に比べれば五倍ぐらいじゃないかしら」

「そんなところかな。これぐらい仕事があれば、まあ食っていける」

「食っていける、どころじゃないわ。もう有名人だもの。あたくしもこういう仕事をしていて肩身が広いわ」

そんなことをいいながら、二人は肩を並べてのんびり歩いた。涼しい季節なら中野駅まで歩いてしまうところだが、あまり汗をかきたくないので、バスで中野まで行き地下鉄で都心へ直行した。

バーゲン会場は、ホテルの宴会場のかなり広い面積を使っていた。洋介の目で見ても出品点数が非常に多く、宣伝通りの大型バーゲンだということが一目でわかるほどだったから、婦人服の会場は大勢の女性客の熱気に包まれていた。

流子は、あまり混んでいない紳士服売り場の前で足を止めて、

「あなたも夏服を一着誂えたらいかが」

といった。

「夏は、スーツを着ることもめったにないから、いいよ」

洋介は、消極的な返事をした。流子にとっても、夫を買い物につき合わせる上のご挨拶程度だったらしく、

「そう。じゃ、一通り見て廻りましょう」

といいながら、人ごみの中に足を踏み入れた。仕方なくついて行くと、流子は両手を後ろに揃えてバッグを持ち、熱心に見ながら進んで行く。やがて、ブランドものが並んでいる所で気に入ったスーツがあったらしく、ハンガーを外して仔細に点検し始めた。

流子は、その辺にある服が片端から気になるらしく、一つずつ外しては体に当てて見たり、方々においてある姿見に映してみたりしている。すぐに、これは買いそうな客だと見当をつけたのか、中年の女性店員が近づいて来て話しかけた。

――やれやれ――

洋介は、溜息をついたが、目の前に展開している光景が、反物を前にして、いな吉と呉服屋が話し合っていた場面と妙に似ているのに気づいて、おかしくなった。呉服屋の番頭は男ばかりだったのに、婦人服売り場の営業は、なぜか女性ばかりで、表面的な形式はまるで違

うが、雰囲気としてはそっくりなのだ。

急に興味が湧いてきたので、そのまま見ていると、流子は、形は気に入ったが色がどうのこうのといった。すると、店員は、ご希望通りの品があるので取って来ます、というような意味のことをいって、急ぎ足で行ってしまった。

このままではいつ終わるかわからないので、洋介は、洋服を片手に持ったままの流子のそばへ行って声をかけた。

「あら。待たせてしまってご免なさい」

流子は、夢から覚めたような顔でいった。

「かまわないよ。ぼくはちょっと本屋へ行って来るから、ゆっくり決めればいい。何時頃に戻って来ようか」

「ええっと……」

流子は、腕時計をちらと見てから、

「ここは六時までだそうだから、五時半でどうかしら」

今はまだ四時半だが、百貨店や大きな書店の多い都心部で一時間ぐらいつぶすのは、それほどむずかしいことではない。もっとも、流子にとっては、このバーゲンの会場で同じ時間を過ごすのは、はるかにやさしいことなのだろう。

「いいよ。どこで落ち合おうか」

「じゃ、五時半頃にあそこのエスカレーターの上で待ってるわ」

流子は、右手でエスカレーターの方を指し示した。

「それじゃ……」

洋介は片手を上げて、その場を離れると、階段の方に向かった。江戸では、いな吉の春着の誂えにつき合い、東京では流子のバーゲンあさりにつき合って、いずれも途中から逃げ出したことになる。

しかし、百六十年を隔てた、かなり異質な社会に生まれ育ち、似ても似つかない教育を受けているいな吉と流子が、こと衣服選びとなると、ほとんど同じような態度を取るのが、洋介には不思議というよりおかしくてならなかった。

最近では、男女がなるべく同じように行動するのがよい、という進歩的な風潮のせいか、女以上の熱心さで衣服のおしゃれをする男もいるそうだが、かなり広く世界を見て来たつもりの洋介の見聞でも、やはり衣服に対する熱意は、世界中どこへ行っても女の方が男をはるかに上廻っている。

ファッション雑誌、あるいはファッションを主なテーマにした雑誌の大部分は女性向きであるし、衣服の形や色、模様などの多様性からいっても、男ものは女ものの足元にも及ばない。聞くところによれば、縄文時代でも、外へ食べ物をとりに行くのは男の仕事で、家で衣服を作るのは女の役割だったらしい。

遅れた日本と違って、男女平等という点でははるかに進歩的な教育をしていると信じられている欧米先進諸国でも、衣服のことになれば女性の方が、ずっと熱心なところをみると、縄文時代に性別による役割分担が生じたのは、民主教育の不足のせいではなくて、生物としての自然な成り行きだったのだろう。

一時は、もっとも進歩した社会として、日本の知識人でも憧れる人の多かった中華人民共和国では、一九七〇年代までは、男女ともに青い無地の人民服を着るのが普通だった。それに感動して、人類は歴史的必然性によるマルクス主義の革命により、ブルジョワ的ファッションの呪縛からついに解放された、と大宣伝する日本人もいたが、どうやら、それほど高度の社会現象ではなく、単に独裁政権による強制だったことは、やがて明らかになった。

建国の父だった毛沢東主席が亡くなって共産主義の解釈がゆらぎ始めると、素人目にもわかる現象として、真先に女性が人民服を脱いだ。洋介は、一九七九年秋の上海で、少数ながら若い女性が、人民服の代わりに花柄のブラウスを着ていたのを覚えているが、それから五年もたった頃には、町の中で人民服を着ているのは男だけになってしまった。人民の意識に根本的な変革がおきたはずの大革命によっても、どうやら、美しい衣服に対する女性の愛着は何の影響も受けなかったようだ。

ホテルを出て町を歩きながら、洋介は、江戸時代以来あれだけ大きな変動を何度も経てきた社会で暮らす流子の行動様式が、びっくりするほどいな吉に似ているということは、人間

の中身が容易に変わらない証拠になるのではないかと思った。

　しかし、そういう小むずかしいことを考える一方で、つい、いな吉と流子の真剣な顔を頭の中で比べてしまって、思わず独り笑いをしてしまい、慌てて表情を引き締めた。

　五時二十五分頃にホテルに戻って来ると、流子は、エスカレーターの上で待っていたが、手にはハンドバッグしか持っていなかった。

「あれ、買い物しなかったのかい」

「ちょっとまとめて買ったから、送ってもらうことにしたわ」

　流子は、すましていった。

「そう。手ぶらの方が楽でいい。それじゃ、行こうか」

「ちょっと待って……」

「まだ買うのかい」

　洋介は、歩き始めた足を止めた。

「お洋服はもういいの。あっちで家具のバーゲンもやっているから、ちょっと見てこようと思って」

「家具なんて、充分あるじゃないか」

「今度は、あたくしの部屋ができたから、もうちょっとちゃんとした机がほしいのよ。そのうちにパソコンを入れたいし」

「じゃ、行ってみよう」

　衣類のバーゲン会場が混雑しているのと対照的に、家具売り場は空いていた。流子は、机が並んでいる所へ行って一通り見てから、手帳を出して寸法を確かめ、そのうちの一つに決めた。非常に事務的かってきぱきした態度で、洋服を買う時の十分の一ぐらいの熱心さしか感じなかった。

　文政六年陰暦正月六日、洋介は、いつものように江戸へ行った。東京が春のうちは、それほど困らなかったが、六月中旬になれば、着るものの調節がむずかしくなる。東京はもう夏なのに、江戸は新春とはいってもまだ寒い最中だから、暑苦しい冬物を着て中野から日本橋まで行けば汗まみれになり、夏物を着て江戸を歩けば風邪をひく。

　現代の衣服を利用できれば何とかなるのだが、現代の東京で着物を着て歩くのさえ、最近では人目を引くのに、江戸で洋服を着れば、それこそ人だかりがしかねない。こんなことははじめてなので、洋介はいろいろ考えたが、結局、袷（あわせ）を着てタクシーで日本橋まで行くことにした。タクシーはもう冷房しているので、じっとしていれば、それほど暑い思いをせずに済むからだ。

　最近では、決まった定点（ていてん）ばかりを使うことが多くなっていたので、今日はちょっと用心して、かつての難波町（なにわちょう）から少し離れた場所でタクシーを降りた。都心部の空気はかなり蒸し暑

く、すぐに汗がにじむ。

江戸橋寄りの定点へ行って、すぐに転時すると、急に冷気が体を包み汗が引っ込んだ。この冷たさなら、江戸の気温は五度もないだろうと、洋介は思った。

この年の元日はグレゴリオ暦二月十一日だから、正月六日は二月十六日だ。立春は、文政五年の十二月二十六日なので、暦の上では春になってからもう十日もたっている。日本の気候では、立春あたりがほぼ寒さの底だから、この間までのような刺すような寒さではないが、蒸し暑い東京からいきなり来れば、体が引き締まる思いだった。

あちこちから羽根突きの音が、のどかに聞こえた。気温は低いが太陽の光はもうまぶしいほどで、晴れ渡った空を見上げれば、方々に凧が上がっている。昔の子供は、働きに出る年頃までは、のんびり遊んでいられたのだ。

まだまだ正月気分は濃厚で、正装した年礼、つまり年始の挨拶廻りの人が、大勢歩いている。過酷な自由競争にさらされている現代資本主義社会と違って、仕事の能率などそれほど重要ではないから、正月の年始廻りもだらだらと十日頃まで続くのだ。

鳥追いが、三味線をひきながら唄っている。編笠をかぶり、中型木綿のなまめかしい服装をした女性の門づけ芸人だ。

〽海上遥かに見渡せば、七福神の宝船。千町や万町の鳥追いが参りまして……
　鶴は千代、亀は万代いくとせか、齢かさねておめでたや

「すぅーしやぁー、あじのーぅすしぃー、こはだのぅーすぅしぃ――」

いなせな服装の男が、美声を町内に響かせながら肩に鮨の箱をのせてゆっくり歩いて行く。洋介の大好きな鯵とこはだの鮨売りだ。三河万歳も歩いている。

洋介は、溜息をついた。

――のどかだなあ――

ここも、不合理なことだらけの貧しい社会だ。しかし、不合理さと貧しさを一つ一つ取り除いていけば、最後に合理的で幸福な社会ができるかといえば、どうもそう簡単ではないらしい。明治維新以後の経験でわかったのは、大変な時間と犠牲を払ったところで、結局は新種の不合理を積み上げた社会ができ上がるだけらしいということだ。

危なっかしく積み上げた石の山が不安定だからといって、下手に積み直せば、せっかく辛うじて安定していた山を崩す結果にしかならないことを、洋介は知っている。日本は、もう二度と、これほどのどかに成熟した時代を迎えることはないのだ。

難波町の家へ行くと、おみねが出て来た。新年の挨拶をしていると、座敷着姿のいな吉が急ぎ足で出て来た。

暮れに仕立てたばかりの春着だが、この時代の着付けは、現代のように前を深く合わせてきっちり締めつけないばかりか、家の中では裾を長く引くように着ているから、立つと上着の前が左右に開いて、白い下着、さらに上品な浅葱のゆもじまでがあでやかに見える。下着

といっても、現在の洋服の下着のように原則として隠れるものではなく、見せるための衣装の一部だから、全部の色彩効果を考えて着なくてはならない。
ちょっと小首をかしげて微笑みながら洋介を見詰める顔は、薄く口紅を引いただけの素顔で、結いたての島田が艶やかに光っている。洋介は思わず見とれたが、これは座敷へ出る衣装だと気づいて、少しがっかりしながら尋ねた。
「あれ、これからお座敷へ出るのかい」
いな吉は、嫣然と笑ってうなずき、板敷きの上に座って、ていねいに頭を下げた。
「アイ。お前さまのお座敷でございます」
「何だ。そうか」
「お待ち申し上げておりました」
洋介が茶の間に入ろうとすると、大真面目な顔で、
「今日は、奥へお通り下さいまし」
という。八畳間の床の間には『天照皇太神宮』の軸がかかり、鏡餅が飾ってある。その前に正座すれば、いな吉は、しずしずと歩いて洋介の前にぴったり座り、厳粛な面持ちでいった。
「新年のお喜び申し上げます。ふつつか者ながら、本年も何とぞよろしくお願い申し上げまする」

「こちらこそ、よろしく」
洋介が頭を下げると、いな吉は、つと立って襖を開けた。廊下には、この家の管理人である留吉とおみねの夫婦が座っていた。こちらの祝辞を受けてから、いな吉がお年玉を渡して、簡単だが厳粛な新年の行事が終わる。
留吉夫婦が立って行くと、いな吉は、いつものように陽気になり、洋介の膝にすがりつくようにしていった。
「お前さま。今日はもうおそいから、すぐお風呂にお入りになってお雑煮を祝って、ご酒に遊ばしてはいかがでござんすかェ。明日は、わちきはお座敷を休んで、一日中お前さまとごいっしょにおりますハ。
でも、お前さまさえよろしければ、新板の芝居絵を買いに行きたい」
「いいとも。いっしょに行こう。どこで売っているんだ」
「通油町の鶴屋へ参ります」
「それなら、すぐ近くじゃないか」
通油町は、現在の日本橋大伝馬町の一部だから、難波町からは大門通りを行けば五百メートルほどの距離だ。
「アイ」
「もし、寒くなければ、どこかへお参りにでも行こうか」

いな吉は、寺社詣でが大好きなのだ。もちろん、ご利益を願う信仰心もあるが、江戸の寺社は、景色のよい場所にある場合が多いから、女にとっては芝居の次に位する娯楽だった遊山の一部分でもあるのだ。

「ほんとかェ」

いな吉は、顔を上げた。

「ソンナラ、浅草の観音様と待乳山の聖天様にお参りしたい」

「ちょっと遠くないか」

といえば、いな吉は、頬をふくらませて、

「わちきは、お元日に神田の明神様へお参りして来ました。観音様も同じぐらいでござんすヨ」

「それもそうだな」

浅草の方がいくらか遠いが、いずれにせよ直線距離で三キロ前後しか離れていない。どこへ行くのも乗物を利用するくせのついている現代人とちがって、この時代の人の足は、それこそ筋金入りなのだ。

「じゃ、先に観音様と聖天様にお参りしてから、帰りに鶴屋で絵を買おう」

「嬉しい。じゃ、おこま姐さんとおたねにもそういって、いっしょに行きましょう」

いな吉は、洋介にすがりついた。今の世の中なら、二人だけで行くところだが、昔は、たとえ夫婦でも、男女が肩を並べて外を歩かないのがたしなみだった。さらに、いな吉のように召使のいる女性なら、外出する時には原則として連れて行くから、たとえ一人でお参りに行く時でも、隠れ参りでなければ、おたねに供をさせる。

だから、どうせなら、おこま姐さんもいっしょ、ということになるのだが、洋介にもその方がつごうがいい。よその土地へ旅に行くのならともかく、いな吉のような売れっ妓芸者が地元で男と並んで歩くわけにいかないことは承知の上だから、女三人連れで先を歩かせて、後ろからついて行く方がはるかに気楽なのだ。

「あとで、おみねさんに元大坂町までひと走りしてもらいましょう」

いな吉は、おみねに伝言を頼むため部屋を出て行ったが、すぐに戻って来た。

「お前さま。もう、お湯が沸いております。お入り遊ばして。その間に、お雑煮とご酒の支度をしておきます」

洋介は、うなずいて立ち上がった。外は、もう日暮れが近い。

東と西

関東地方は晴天の続く季節なので、翌日も朝から晴れ上がっていた。朝のうちはかなり冷え込んだが、五ツ半、この季節では九時頃になると、風がないだけに暖かくなった。いな吉は、最初から出かけるつもりでいるから、朝飯をすませると、すぐに二階で着替え始めた。
洋介が、茶の間で待っていると、四(よ)ツ前におこま姐さんがおたねを連れて現われた。新年の挨拶を済ませると、おこまが尋ねた。
「旦那さま。いな吉はどこかへ参りましたでござんしょうか」
「二階で着替えているから、見てやって下さい」
「ハイハイ」
おこまは、おたねといっしょに出て行ったが、ものの五分もたたないうちに、いな吉が先

に降りて来ると、洋介の前に立って左手で褄(つま)を取った。
「いかがでござんしょう」
糸織の藍三筋(あいみすじ)に媚茶(こびちゃ)の茶丸(ちゃまる)の裏をつけた紋付きに黒繻子(くろじゅす)の通し裏襟(うらえり)、裾模様は千羽鶴を縫い取り、下着は白の小紋縮緬(ちりめん)。襦袢(じゅばん)の襟は鼠繻子(ねずみじゅす)に白糸と媚茶で梅花の丸を浮き織りしたのをかけ、袖口は絞りの縮緬。奥の裏袖折り返しには朱鷺色(ときいろ)縮緬、腰巻きはこまかいむきみ絞り、ゆもじはごくうすい浅葱(あさぎ)の風織(かざお)り縮緬。帯は黒の唐緞子(とうどんす)に鶴丸を飛び飛びに織り出したのを大きくやなぎに結んでいる。今日は片道一時間ほど歩くので、裾をやや短く着付けていた。
十代の女性の服装としては地味だが、まことに意気であり、やはり素人(しろうと)にまねのできる着こなしではなく、誰が見ても一流の芸者としか見えないだろう。洋介の目には、まるで動く日本人形のように見えた。
「とてもきれいだよ」
おこまも降りて来て、後ろで満足そうに眺めている。
「ソンナラ、お前さま。参りましょう」
洋介は、いつでも出られるので、そのまま立ち上がったが、
「どの道を通って行くつもりだ」
と、尋ねた。どうせ連れ立っては歩けないので、三人を先にやってついて行くことになる

から、道を確かめておく必要があるのだ。
「浜町へ出て川沿いの道を行けば近いけれど、風があれば寒いからな」
「さようでございますヨ。人形町通りは混みますから、やはり大門通りを行くのがよろしゅうございます」
おこまがそういったので、洋介もうなずいた。
いつものように、女三人が先に出た。後ろから見失わないようについて行くには、二、三十メートルぐらい離れているとつごうがいいので、適当な時間を見はからって洋介も出る。大門通りを曲がると、店はもう全部開店しているのに、町全体にまだ屠蘇気分が残っているせいか、暮れの賑わいに比べて、ずっと人通りが少ない。
あれほど大勢歩いていた行商人たちも、ほとんど見かけない。どの家も暮れに買い込んであるし、寒いから日持ちがするので、出歩いても、それほど売れないのだろう。昨日と同じく、目立つのは正装して歩いている人ばかりだ。紙で作った八本足の赤い蛸を竹竿の上から吊るして目印にした凧の露店が出ているのは、いかにも正月らしかった。
いな吉たちは、洋介の見積もり通りに二、三十メートルぐらい先を歩いている。褄を深く取っているから、黒の吾妻下駄をはいた白い足がちらちらとのぞく。丁寧に手入れしてある自慢の真っ白な素足なのだ。
芸者は、いつでも素足だが、洋介は、かつて、芸者は卑しい身分のため、足袋をはくこと

を禁じられている封建制度の犠牲者なのだ、という民主的解説を読んで、びっくりしたことがある。あるいはそうなのかもしれないが、この時代の芸者は、自慢のきれいな足を見せるのがおしゃれなのだ。いな吉の場合は、寒いから足袋をはけと命令されても、恐らく拒絶するのではないかと洋介は思っている。
現代女性が、脚をきれいに見せるためにミニスカートと薄いストッキングをはくのを、「女の性を見世物にするため、下半身を無理に露出させられていた時代の犠牲者」と解説すれば、大部分の女性たちに軽蔑されるだけだろうが、江戸の芸者の場合も、これとほとんど同じだと思っていい。
それはともかく、いな吉は、生まれも育ちもこの近所で、生家から数百メートルしか離れていない所で芸者屋を開業しているから、やたらと顔が広い。五十メートルも歩けば誰かに声をかけられるので、さっぱり進まないのだ。
しかし、このあたりは店の種類も多くて見るものはいくらでもあるし、洋介にとっても生まれ育った蠣殻町から数百メートルしか離れていない場所だから、迷子になる心配はない。江戸も日本橋や神田、京橋のような古い地域は、新しい道路はできても古い道路をつぶすことはあまりなく、道幅こそ現代より狭いが、洋介にとっては、江戸の下町一帯なら地図も何もなしに、自由に歩けるのだ。
しかし、何といっても有難いのは、人間以外に何も通っていないことだ。暮れの慌ただし

い頃には、大八車や馬をたまに見かけたが、今は通行人だけだから、子供たちも道の真ん中で平気でこま廻しや羽根つきをしている。道の真ん中で遊べば車にひき殺される世の中も、子供のための公園という設備をわざわざ作らなくてはならない進んだ社会も、さらに、子供たちがその公園で遊ぶ間もなく受験勉強に励んでいる様子も、この時代の人には想像もできないだろう。

同じ時代のロンドンが、すでに馬車時代に入っていて、道の真ん中で子供がのびのびと遊べる状態でないことは、洋介も見て来たばかりだが、それでも、ごちゃごちゃした狭い裏通りには馬車が入って来ないから、遊び場ぐらいあったはずだ。

世界の先進都市だったロンドンには、すでに立派な公園があったが、裏町の子供たちに、わざわざ公園へ遊びに行く余裕があったとは、とても思えない。あれは、たぶん、中流階級より上の人々のための場所だったのだろう。

大門通りを五百メートルほど行くと、通旅籠町（とおりはたごちょう）から通油町への道に出た。いな吉は、ちょっと振り返ってから右に折れた。このあたりから浅草へかけての道は、大部分が現代の道にぴったりかさなっている。

洋介も続いて右に曲がると、先の方でいな吉たちが一軒の店の前に足を止め、またすぐに歩き始めた。そこまで行ってみると、絵草紙（えぞうし）屋の鶴屋、通称〈鶴喜（つるき）〉だった。正月には本も錦絵も新板が出て、色鮮やかな絵が何十種類も店の奥の方に積み上げられてあり、店頭はか

なり賑わっていた。看板には〈本問屋（ほんどんや）　鶴屋喜右衛門〉とあるが、仕入れに来て品定めをしているらしい商人もいれば、すでに仕入れをすませて大きな風呂敷包みを背負って帰って行く人もいた。もちろん、店先に腰をおろして錦絵を見立てている正月の晴れ着姿の女性客もいるから、卸（おろし）も小売りもしているのだろう。

それにしても、何ときれいな印刷物だろうと思って、洋介も思わず足を止めた。この時代は、まだ植物性の色素で印刷しているため、新しいうちは非常に色鮮やかなのだが、保存が悪いと褪色（たいしょく）してしまう。だが、ここにあるのは、すべて刷って間もない新板ばかりなのである。

西洋化した現代のわれわれは、こういう商品を見ると、つい〈芸術作品〉と思ってしまうのだが、洋介がここで見るところでは、ちょっと感じが違うようだった。江戸の錦絵は、けっして展覧会に飾って偉い美術家が審査するような芸術作品ではなく、強いて現代に似たものを探すなら、多色刷りのカレンダーに近いのではないだろうか。

普通の商店で売り出して、ほしい人が買いに来たり、中間問屋（ちゅうかんどんや）がまとめて仕入れて、その辺の横町にある絵草紙屋に卸したりする商品だから、描いている絵師（えし）も、版木の彫師（ほりし）、摺師（すりし）と同じく〈師〉、つまり職人であり、その作品というより製品の値打ちは、自分の懐から金を出して買うごく当たり前の庶民たちの好みによる売れ行き、つまり人気だけで決まる。

後世、西洋式の学問をした学識の高い子孫たちが、自分たちの作った絵に関して長々と述

べ立てる難解にして高尚な芸術論を聞いたら、ご当人たちは、びっくりして腰を抜かすかもしれない。

どうせ帰りに寄るのだから、洋介もすぐに歩き始めた。通油町の先は浜町川の狭い堀で、その橋を渡り、さらに通塩町、横山町を通り過ぎて五、六百メートルも行けば、江戸第一の盛り場である両国広小路がある。この辺まで来れば、もう日本橋の外れになって知人に遭う率も低くなるから、洋介は、少し足を早めて、いな吉たちとの距離を詰めた。

見ていると、いな吉は、また足を止めておこまと何か話し合っている。彼女は賑やかなのが大好きで好奇心が強く、何でもかでも見たがるたちなので、また両国広小路を見たいといっているのではないかと思いながら近づいて行くと、おこまが困ったようにいった。

「旦那さま。この子が、広小路をちょっと見て行きたいと申しまして……」

いな吉は、洋介の顔を見ながらいった。

「お元日に相仕で出たおりん姐さんに、面白いからくり芝居の話を聞いたから、わちきは、ぜひぜひ見とうござんす」

江戸の芸者が座敷に出る時には二人が組になることが多く、その相手を相仕という。

「別に急ぐわけじゃないから、見て行こう」

洋介にそういわれれば、おこまとて別に反対する理由はないから、そのまま広小路に入って行く。この人ごみでは、もう並んで歩こうが離れて歩こうが同じことだから、四人が固

まって両国橋の方へ進んで行った。

両国広小路は、日本橋側の西詰が二ヘクタールぐらい、東詰がその三分の一ぐらいの面積で、いずれも盛り場になっている。本来が、火災の際に延焼を防ぐための火除地だから、空き地にしておかなくては意味がないのだが、あまりにも場所が良いために仮建築での興行や露天が既得権として認められ、大変な賑わいになっていた。

賑やかなのが大好きないな吉が足を踏み入れたくなるのも当然だと思いながら歩いて行くと、広場の中は道で縦横に区切ってあり、広い道の両側には食べ物の屋台がずらりと並び、横丁に入れば、弓場、軽業、講釈の席などが軒を連ねる。もっとも、全部が仮建築で、葦簾がけに毛の生えたようなものだ。

芝居小屋もあった。折しも正月とて、恒例の曾我兄弟ものがかかっていて、呼び込みの男が、

「コレ一切りみなせえ。モシ、始まった幕はまけましょう。マア、中へ入えって相談しなせえ」

などと、通りすがりの人にやたらと声をかけている。二丁町にある中村座や市村座のような大芝居に対して、寺社地や空き地などにあるのは、宮地芝居とか小芝居といい、芝居小屋も文字通りの小屋であって粗末な造作なら、絵看板も小さい。お客は、せいぜい何十文という程度の料金しか払えない芝居好きだが、洋介は、恐らくこちらでそれなりに気楽

で面白いのだろうと想像しながら歩いて行った。江戸は、まさに〈何でもあり〉の世界なのだ。

人をかき分けるようにして行くと、やがて、『竹田大からくり』と書いた赤い大きな幟が見えた。

「あれ、あれでござんすハ」

いな吉が振り向いて、嬉しそうにいった。派手な絵看板の上がった小屋で、ここも大勢の人が出入りしている。おこまが木戸銭を払って、いな吉とおたねを先に立てて中に入った。こういう見世物小屋は、客の総入れ替えなどせずに、同じことを繰り返して回転を良くしているから、思ったより簡単に入れるのだ。

舞台の上では、裃をつけて閉じた扇子を片手に持った男が、口上をいっていた。

「さて、ご見物のお客さまがた、とくとご覧じろ。この人形は、ただの人形ではござりませぬ。生けるが如くに文字を書きまする」

男の前には、派手な中国風の服装をしたいわゆる唐子人形が右手に筆を持って立っていたが、口上が終わると、ちょっとぎこちない動作ながら手を動かして、目の前に立てた板に貼ってある紙に、竹という漢字をゆっくり書いた。見物は拍手喝采、いな吉はもちろん、おこまでさえ驚いて手を叩いている。

人形が文字を書くぐらい、現代の技術者にとっては面白くもおかしくもないのだが、それ

はあくまで現代の技術を利用した場合の話であって、材木と竹、布、なわ、紙、それにせいぜい釘や針金しか使えない時代だから、洋介も少しは感心した。

これは、〈糸からくり〉といって、見えない場所に取りつけてある文字の型をなぞりながら、楽屋からのリモコンで人形の手を動かす、かなり複雑な技術である。曲亭馬琴が、これより約二十年前の享和二年（一八〇二）に、からくりの本場である名古屋で同じ趣向のからくりを見た記録を残しているから、からくり師も経験豊富で、かなり上手な字を書くようになっていた。

続いて、『船弁慶』が始まった。謡に合わせて義経と弁慶の乗った船が舞台にゆっくり出て来ると、波間から平知盛の亡霊がなぎなたを持って主従に打ちかかる。さすがの英雄豪傑も、相手が幽霊では太刀やなぎなたで勝てるはずがないと知って、弁慶が数珠をもんで祈ると、知盛は、また波間に姿を消す、という芝居を、からくり人形がなかなか上手に演じた。

さらに二つのからくり芝居を見ると、また唐子の文字書きに戻ったから、ほかの客といっしょにぞろぞろと外へ出る。

「なかなか面白かった」

洋介は、いな吉の顔を見ながらいった。

「アイ。ホントに不思議サ。でも、お前さま。なぜ人形に字が書けるんでござんしょう

ねェ」

彼女は、本当に不思議に思っているらしく、真剣な表情で首をかしげた。

「さあ、遊んでばかりいるとおそくなるヨ。早く観音様へ行かなくちゃ」

と、おこまが催促した。いな吉も、うなずいて歩き始めた。

今来た道を逆に歩いて神田川に向かい、浅草橋を渡れば日本橋側から浅草に入る。浅草側の道路も町屋の中を通る広い一本道だが、そこを四、五百メートル行けば、さらに道幅が広くなって右側に幕府の米蔵、倉庫群が数百メートル続くが、向かい側は蔵前、文字通り蔵の前の町屋が続く。

このあたりでちょっと目につくのが、左手の町屋の屋根の上に突き出すような小高い岡である。その上には、柵でかこった中に見慣れない形の建物が、いくつか並んでいるが、実は、ここが浅草鳥越の幕府の天文台、いわばこの時代の国立天文台なのだ。

岡の高さは五間（九メートル）で人工的な盛土らしいが、江戸の建築規制では、建物の総棟高二丈四尺（七・二七メートル）の制限があったから、これで水平方向に視界を妨げるものはなく、こんな町の中で全方向の星を観測できた。しかも、夜はほぼ完全に真っ暗になるし、ろくに星も見えないほど大気の汚れた工業国と違って、日本橋から歩いて三十分ぐらいの場所でも、現在の日本の高山の頂上なみに星が見えたのである。

ただし、天文台とはいっても、現在のような意味での天文学を研究する組織ではない。本

来の目的は、明治五年まで続いたいわゆる陰暦、正しくは太陰太陽暦というのだが、このかなり複雑な暦を作るための天体観測を第一の目的とした組織で、〈頒暦所〉とも呼んでいた。暦そのものの制作、印刷、販売などは、すべて民間の仕事だが、暦の内容は、すべてこの天文台で校閲していた。暦のデザインやレイアウトは、各地のカレンダー業者がそれぞれ伝統的な形を守ったが、内容に関しては完全に幕府の支配下にあり、暦の混乱が起きないようにしていた。

このように、幕府の天文台は、もともとは暦のための天体観測や計算をする役所だったが、実は、この時代としては日本中でただ一つの国立科学研究組織だった。有名な伊能忠敬の測量事業もここの管轄下だったし、さらに、幕末期になると、西洋の科学技術を導入する時の窓口になり、いくつかの変遷を経た後に東京大学の理工系学部となって発展的解消を遂げる。

だが、のどかなこの時代は、まだ自然科学だの工業技術だのというシチ面倒くさいものとはあまり縁がなく、なるべく辻褄の合う暦を作るために観測と計算だけをやっていればよかった。

この時代のイギリスでは、すでに蒸気機関が実用になり、陸では蒸気機関車、海には蒸気船が走っている。現代の機械工学や電気工学の基礎は、この時期以後のイギリスで生まれたといってもいいだろう。

それに比べれば、太陽と月と星を観測して作る複雑な暦や、さっき見てきたようなからくり人形ぐらいが最高の科学技術水準だった日本は、遅れていたなどという状態ではなくて、ほとんど何もなかったといっていい。静電気を起こすエレキテルがあったといっても、そこから電気の理論が生まれたわけでも何でもなく、二種類の物質をこすり合わせれば火花が飛ぶという現象を利用して遊んでいたのにすぎない。

だが、今になって考えれば、進んだ技術を開発したことが本当にそれほど人類のためになっているかどうか、わかったものではない。自然科学そのものは、良くも悪くもない中立の学問だが、いったん実験室から出て工業的な応用が始まってからは、経済的には豊かになる代わり、確実に自然環境を悪化させ続けたからだ。

そのことは、洋介が十九世紀初頭のロンドンで見てきたように、近代工業の初期には、すでにはっきりしていたのだが、先進国では、汚染イコール進歩という信じられないような発想がまかり通っていて、うっかり反対しようものなら、頭が古い、因循姑息だ、保守反動だとののしられ、社会から疎外されてしまったのである。

さらに工業が発展すれば、売れるだけ作るのではなく、作っただけ売らなくては工業自体が成り立たなくなるのも、世界中の工業国に共通した現象だ。その結果、坂道を転がり落ちるように空気が汚れ水が汚れて、人類どころか地球上のすべての生物の生存さえ危うくなるらしいことに、最近では、さすがに気がついている人も少数ながらいるようだ。

科学技術を正しく運用すれば、そんなことにはならないはずだ、などと楽天的なことをいっていられたのは、せいぜい二十世紀も前半までで、今では、いったい自然科学を応用した技術のどの部分が正しく、どの部分が間違っているのか、長期的な視点ではっきり指摘できる人などいないだろう。

こんな大都会の真ん中で星の観測ができるほど空気が澄み、大川の河口で白魚がふんだんにとれた理由は、近代工業がなかったおかげなのだ。

天文台を見上げた顔を左右に動かせば、方々の屋根の上で、子供たちがのんびりと凧を上げているのが見えた。

今は、この天文台の後身である東京大学へ入ることこそが人生の最高の目標と信じる親のおかげで、凧上げなどという入試の役に立たないことをする子供は激減したそうだ。

女の子たちが、道の真ん中でのどかに羽根突きをしているが、これも、自動車どころか人力車さえない遅れた世の中のおかげなのだ。

蔵前を過ぎれば、また両側が町屋になり、ほどなくちょっとした広場があって、白壁の小さな駒形堂が建っている。堂のすぐ裏は大川で、対岸の武家屋敷や町屋がはっきり見えた。

今は、この上手に駒形橋が架かっているが、この当時はまだ橋がない。

ここでY字形に別れる道の左をまっすぐ行けば、間もなく雷門である。昔も今も浅草寺は人気のある寺院なので、ここまで来れば参詣客が引きも切らずという感じで、男も女も老

人も子供も、武士も町人も歩いている。

このあたりで洋介は、いな吉たちから二、三メートルぐらい後に迫っていた。混雑している所なら、いっしょに歩いていてもわからないし、はぐれてしまえば厄介だからだ。気にして時々振り向いていたいな吉も、洋介がすぐ後ろにいることを知って、安心したようにおしゃべりしながら歩いている。

現在とほとんど同じように見える雷門をくぐると、左右におみやげを売る仲見世が続くのも同じだが、今の鉄筋コンクリートの立派な仲見世とは比べものにならない粗末な小屋ばかりだ。通路の両側には、浅草寺の末寺である鹿島、秋葉、弁天、金比羅、普賢、不動、大黒など、諸神諸菩薩の社やお堂が並び、その塀の前に葦簾がけの床店が飛び飛びにあるだけだから、ちょっとさびしい。

売っているのは、絵草紙、仏具、浅草の土人形、おもちゃ、小間物、はじけ豆、紅梅焼き、張り子の犬、それに、浅草名物の房楊枝などだ。房楊枝とは、楊柳の細い棒の先を叩いて刷毛のようにした昔の歯ブラシのことである。

仲見世の最後のあたりの右側は、おみやげ屋ではなくて水茶屋がずらりと並んでいた。その前を通り過ぎて仁王門をくぐれば、本堂はすぐ前だ。このあたりの位置関係は、現代とほとんど変わっていないように見えた。

本堂はさすがに混んでいたが、それでも押し合いへし合いというほどではなく、いな吉が

左褄を高めに取ってさっさと階段を登って行くのに、ぴったりついて行ける。本堂の中の雰囲気も、かなり現代に似ていた。現代の浅草へも、それほどしばしば行くわけでないから、今の賽銭箱がどんな形をしているのか洋介は、はっきり覚えていないが、ここでも大きな箱があって、みんなが銭を投げ入れていた。

いな吉は観音様の信者だから、大変熱心に拝んでいる。洋介は、あまり信仰心もないが、神社仏閣へ来て拝まずに突っ立っているほどの唯物論者でもないから、ちゃんと手を合わせて、

——どうか、この転時能力がいつまでも消えずに続きますように——

と、願いごとをした。どんな偉い科学者でも説明のしようがない自分の不思議な能力については、差し当たり神仏にでも祈るほかないのだ。

洋介の単純な祈願はすぐ終わったが、顔を上げても、三人はまだ熱心に拝んでいる。仕方がないから、また手を合わせ直したものの、三度めにはさすがに拝むのをやめ、本堂の向かって左側へ移動して、欄干のそばから境内を見渡した。もちろん、はぐれないように、いな吉たちの方にもちらちら視線を向けていなくてはならない。

高い所から見廻すと、小さな神社や寺、さらに小さなほこらのような建物が到る所に建っているのがわかった。神仏混淆の時代だから、寺の境内に鳥居が立っているのは当然としても、この神仏の種類の多さはどうだろう。

これだけ多ければ、かえって存在感がうすくならないかと心配になるほどだが、どうやらそうではないらしい。多様性が江戸時代の日本の大きな特徴だから、片端から拝んで廻れば、それだけ御利益も増えるだろうというのが、先祖伝来の発想なのだ。

そのうちに、女性たちの長い祈りが終わった。いな吉が頭を上げて、あたりを見廻しているので、洋介は手を振って合図した。すぐに気づいたらしく、いな吉は、おこまの腕をつついてから、こちらへ歩いて来た。

「お前さま。何を見ていらっしゃるのかエ」

いな吉は、洋介と並んで欄干に寄り、あたりを見廻した。

「賑やかだから、見ているだけで面白いじゃないか」

「これから、その裏手にある茶屋で、お昼をいただきましょう」

「何を食べるんだい」

「わちきはここの菜飯が好きだから、お前さまさえよければ、菜飯を食べたい」

「もちろん、おれも好きだから、そうしよう」

そばへ来て聞いていたおこまが、先に立って階段を降りた。いな吉もおたねを従えて降りて行く。洋介も、その後について本堂の横を裏手の方へ行った。現在、浅草寺本堂の裏は、ちょっとした広場のようになっているが、この時代は、念仏堂、釈迦堂、秋葉社など大小の建物があり、その間には葦簾がけの楊枝店や水茶屋が出ている。

大道芸の人だかりを避けて少し行くと、浅草寺境内の北側の奥、こんもりと繁った木立の中に、あまり大きくないが小ぎれいな茶屋があった。おこまが先に入ったので洋介がついて行くと、女中が、すぐに見晴らしの良い入れ込みの座敷に案内してくれた。

すぐ外は、一面の田圃だった。五百メートルほど北の方に鬱蒼とした森と大きな家が見えるのは大名の下屋敷だろうか。さらに遠くに見え隠れする町が、新吉原遊廓らしい。浅草は、江戸の市街としては最北端で、この先は街道沿いの町を除いて田畑ばかりになる。眺めの良いここの雰囲気は、町というより郊外というのにふさわしかった。

菜飯と田楽とみそ汁のあっさりした食事をすませて一休みしてから、今度は聖天宮へ向かった。本堂の裏を廻って三社権現にお参りしてから随身門を出て、大川に近い花川戸の通りへ抜け、左へ曲がって五、六百メートルも行けば待乳山の下へ出る。ここは、かつて文政十年のいな吉と来たことがあるし、現代との共通点も多いが、あまり勝手を知っているように振る舞うのも不自然だから、いつものように少し後からついて行った。

聖天宮の本殿は、小高い丘陵の上に建っているため、表門から入って階段をいくつも昇らなくてはならない。現在では仏教寺院となっているが、この時代は鳥居があるし、宮というからには神社なのだろうか、と考えながら、洋介はゆっくり上がって行った。小柄ないな吉が、左褄を取って昇るのについて行くのだから、急ごうにも急げないのだ。

観音様に比べると、聖天様はやや特殊なせいか参詣者はぐっと少なく、洋介たちのほかに

は、せいぜい二十人たらずの人が階段を昇り降りしているだけだったが、十五人ぐらいまでには芸者風の女性である。いな吉には同業者が一目でわかるらしく、芸者風の服装をした女性には愛想良く会釈して昇って行く。

階段を昇り詰めると、いな吉は真っ直ぐ拝殿の前へ行き、お賽銭を投げてから手を合わせた。ここの本尊というのか御神体というのか知らないが、祀ってあるのは、いわゆる歓喜天つまり男神と女神が抱き合った姿の神像ということなので、いな吉のような水商売の女性には非常に人気があるらしい。

おこまも水商売の一員であるし、おたねも芸者屋の召使だから、三人は並んで、また熱心に拝み始めた。自分だけが突っ立っているのも不自然なので、洋介も、いな吉の横へ行って手を合わせたものの、すぐにばからしくなって拝むのをやめ、一人で拝殿の右の方へ廻って行った。

待乳山は、山とはいっても、地面からほんの十メートルたらず高くなっているだけの丘陵にすぎないが、近くに目を遮るものがないばかりか、すぐ東側の下に隅田川が流れているため、遠くは富士山、筑波山はもちろん、江戸川の向こうの国府台の森、近くは墨東の景勝地である向島一帯が手に取るように見える。このあたりきっての天然の展望台になっていた。

洋介は、本社の真横へ行って、東の方を見渡したが、思わず、

「ああ、いい眺めだ」

と、感嘆の言葉が口に出た。

いな吉たちは、まだ拝んでいるらしくて、やって来ない。行った先々の神仏を片っぱしから熱心に拝むいな吉の真剣な顔を思い出すと、つい笑えてくるが、彼女の表情に遠くの景色をかさねるようにして眺めているうちに、待てよ、と思いなおした。

洋介は、これまで方々へ行っただけに、いろいろな宗教の礼拝設備を訪問した経験がある。立派な仏教寺院、仏塔、神社、道教の道院から、キリスト教ではカトリックやプロテスタントの大聖堂、それにイスラム教のモスク、ヒンズー教の寺院など、もう半ば忘れてしまうほど見物したり拝んだりしてきた。だが、客観的に見た場合、現世の御利益という点では、どの宗教も大差ないとしか思えないのである。

ある国が栄えているかどうかは、その国にどの宗教の信者が多いかより、国民性が時流に合っているかどうかの時の運が大きくものをいう。治安の良さでさえ、その国の主な宗教の種類とあまり関係がないことは、今では常識になっている。

それどころか、地球上には、救いのためというよりも、むしろ争いの口実だか原因だかにしかなっていないような大宗教さえあって、こうなれば御利益どころではなく、宗教のおかげで命までなくしかねない。

もっとも、そうやって自分の信じる宗教のために死ねるのが最大の御利益だ、というのなら、どうか死んで下さいとでもいうほかないのだが……

となると、いな吉のように、天照皇太神宮も三社様も八幡様も聖天様も同時進行で信じられる代わりに、他人の信仰にはきわめて寛大な宗教心の方が、人類全体にとって有益とはいわないまでも、少なくとも無害なのではないだろうか。

ところが、いな吉に代表される日本的な宗教心を高く評価しない知識人が意外に多いのには驚かざるを得ない。その人が一神教の熱烈な信徒とでもいうのならともかく、ほとんどの場合、自分に特定の信仰があるわけでもないのだから、これも、外国と違うことをすれば、必ず批判するというだけのことなのだろうか。

「わっ……」

美しい景色を眺めながらそんなことを考えていると、いな吉が忍び寄って来て背中を叩いた。

「また、もの案じをしていらっしゃったネ」

彼女は、洋介の前に廻って顔をのぞき込みながら笑った。

「そうじゃない。あまり景色が良いから、見とれていたのさ」

「ホンニ。今日はよく晴れているから、遠くまでよく見えて、良い眺めでござんす」

いな吉も、しばらく遠くを見ていたが、やがて、

「さあ、おそくならないうちに帰りましょう」

といった。

帰りは、隅田川に平行の道を山之宿（やまのしゅく）、花川戸と通って駒形堂まで行き、あとは来た時の道を逆行して浅草橋まで戻ったが、いな吉は、今度は錦絵を買う楽しみがあるから、両国広小路には目もくれず、まっすぐ通油町の鶴屋へ行った。

鶴屋の店頭は午前中より客が多くて混んでいたが、仕入れに来ていた男が折よく二、三人出て行って、場所が空（あ）いた。いな吉が近づいて行くと、この店とは知り合いらしく、手代がすぐに気づいて声をかけた。

「これは、いな吉姐さん。お帰りなさいまし。今年は良い絵がございますよ」

いな吉は、すぐ店先に腰かけたので、洋介も少し離れた所に座った。おこまとおたねが、いな吉の両側に腰を下ろす。

「お芝居の絵を見せておくんなさい」

「姐さんは、去年の顔見世の初日においでなされましたが、あの時の成田屋、音羽屋、大和屋の顔合わせのができております」

手代が、よどみなくいった。それを聞いたいな吉は、

「アレ。なんでわちきが顔見世に行ったのを、ご存じかエ」

と、目を見張って見せる。

「いな吉姐さんが、市村座の初日に四三（しそう）の桟敷（さじき）にお座りになれば、このあたりに知らぬ者はおりません」

と、手代がすかさずお上手（じょうず）をいう。
「ホントかエ」
いな吉も、さすがに売れっ妓（こ）芸者だけあって、そんなことをいわれたぐらいでは、特に驚く様子もなく、手代の持って来た芝居絵を受け取って膝においた。おこまとおたねが、のぞき込む。特に、おたねは、自分には一生縁のないものと思っていた顔見世を大夫桟敷で見る、という夢のような体験がまだ頭の中から抜けきらないから、その場面を極彩色（ごくさいしき）の絵で見て、夢を見直したような目つきで見詰めている。
いな吉とおこまも熱っぽく、
「この成田屋の睨（にら）みのいいこと」
「やはり、大和屋の目元が好きだねェ」
などと、いい合っているのを、洋介は横から見ていたが、手代が持って来たのは、いずれも芝居の場面を美しく着色して描いた構図ばかりである。
錦絵といえば、特別な知識のない洋介が真先に思い浮かべるのは、北斎（ほくさい）や広重（ひろしげ）の風景画、歌麿（うたまろ）の美人画などだ。役者の似顔絵といえば、顔と上半身だけを描いた写楽（しゃらく）の作品ぐらいの知識しかない。ところが、いな吉が夢中になっているのは、あまり見慣れない構図の絵ばかりなので、ちょっと意外な気がした。
着物の誂えに比べると錦絵の買い物は簡単で、二十種類ほどの絵を決めるのに十五分ぐら

いしかかからなかったが、いな吉が買ったのは、芝居の場面を描いた絵ばかりだった。
洋介は、そばに座っている若い手代に尋ねてみた。
「写楽の絵は、今は手に入らないかね」
「しゃ……しゃ、何とおっしゃいましたか」
手代は、それまで黙っていた大男が、いきなり妙な質問をしたのに驚いたらしく、口ごもりながら問い返した。
「写楽という絵師だ。楽を写すと書く」
「は、はい。お待ちくださいませ」
若い手代は、帳場に座っている五十年配の番頭の所へ行って、何かいった。番頭は、すぐに立って来ると、洋介のそばでかしこまった。
「写楽という絵師の名前は聞き及んでおりますが、あまり人気がなく、すぐに絶版になりましたようで。確か、癖の強い絵でございましたな」
写楽の絵が出たのは寛政六年（一七九四）だから、この時すでに三十年近くたっており、絵草紙屋の番頭にとっても、かすかな歴史上のできごとにすぎなくなっているのだ。
ここまで来れば、もう家も間近い。袋に入れたおみやげの絵をおたねに持たせて、いな吉は意気揚々と歩き始めた。日本橋へ帰って来たので、洋介は、また女性たちから少し離れて歩きながら、いな吉の錦絵の好みが、後世に高い評価を受ける絵とあまりに違っているのは

なぜだろうと思っていた。写楽も、現代では非常に有名なのに、この時代は、ほとんど無名らしい。洋介は、首をひねった。

いな吉が、大した美術的教養のない若い芸者だから、話題になっている芝居の絵にしか関心がないのだ、と思えばすっきりする。しかし、洋介が江戸で実際に暮らして体で感じている感覚では、錦絵は横丁の小さい絵草紙屋で売っている庶民の嗜好品に過ぎず、間違っても、大名屋敷の床の間に麗々しく飾ったりする高尚な芸術作品ではない。

しばらく考えているうちに、洋介はあることに思い到って、独りでうなずいた。

――錦絵、浮世絵が、ご大層な美術品になったのは、西洋人のおかげだからだ――

西洋式教育を受けた明治の日本人は、庶民のもてあそびものにすぎなかった浮世絵など、美術品としては、まるで評価していなかった。ところが、偉大な師であるヨーロッパの美術家が、何を血迷ったか錦絵をほめ上げたから大騒ぎになってしまった。

仕方がないから、自分たちも慌てて再評価したものの、本当はあまり自信がなくて、あちらの人がほめた尻馬に乗ってほめることしかできない。ところが、西洋人の美術評論家に理解できるのは、風景画や一枚ものの肖像画までだから、江戸の社会的背景がわからないと面白さのわからない芝居の絵などは無視してしまった。

当然、いな吉が夢中で見ているような絵は西洋人がほめないから、そのまま問題にもならず、西洋人が書いた立派な本の中で、むずかしい外国語でほめてくれた絵だけが、日本人の

頭越しに三段跳びで、世界的芸術作品に出世した……と、まあこんな筋書きではなかろうか。

だから、いずれ、あちらの偉い美術家が、芝居絵という新しいジャンルに着目し、英語やフランス語、ドイツ語などの世界的言語で書いた立派な研究書でも刊行すれば、急に風向きが変わって、いな吉の審美眼も世界的になることは保証してもいい。

ヨーロッパの有名な芸術家にほめられれば、桂離宮は世界の名建築になり、悪口をいわれれば、日光の東照宮も俗悪な駄作になる国だから、芝居絵ごときの評価が、あちらの人のお眼鏡にかなうかどうかで決まるぐらいは、当然の成り行きなのだろう。

もっとも、イギリス人がテームズ川を汚せば、こちらも隅田川を汚さないと恥ずかしいぐらいに思い込み、ヨーロッパ人がアジアに植民地を作れば、こちらもアジアに植民地を作りたくなるのに比べれば、たとえ基本的な発想はおなじでも、美術品のほめ方をまねるぐらい可愛らしいものだが……

人も羨むような愛くるしい美少女といっしょに華やかな正月の江戸を歩いているのに、何を見ても現代の日本を思い出すのは、つくづく損な性格だと洋介は思う。しかも、最近では同じ時代のロンドンと比較する癖までついてしまった。

洋介は、いささか憂鬱な思いで、いな吉の小意気な後ろ姿を見ながら歩いて行った。

二人

いな吉が、悦びにあえいでいた。

最近では、日に日に欲望に目覚めていくようで、洋介に抱かれるたび、前回に達した以上の高みに登ろうとするのか、際限なしに愛撫を求める。洋介は、文政十年のもう一人のいな吉で経験しているので、どうすれば彼女が満ち足りるのかを知っていた。

いな吉は、洋介が自分の未来までを知った上で相手をしてくれていることなど知るよしもないが、自分がもっとも楽しい思いができるよう上手にあやなしてくれるのが、ただ無性に嬉しく、男に対する愛しさが増すばかりである。

江戸の芸者は、芸は売るが体は売らないというたてまえになっている。相仕と二人で座敷へ出るのもそのためだが、たてまえはあくまでたてまえで、客と芸者の〈自由恋愛〉を禁じ

ることはできない。町奉行所は、時に〈警動〉と称する取締りを行って、素行の悪い芸者を検挙したが、大勢にはほとんど影響しなかった。

もちろん、いな吉のような芸専門の芸者も大勢いたのだが、彼女が修業した深川には売色をする芸者が多かったことは、有名だ。この時代の日本の家屋はかなり開放的だったため、いな吉も、仲間の芸者が客と同衾している場面を何度も目にしていた。

それでも、彼女は、さすがに上級武家の奥でのきびしい躾けのせいで、色恋沙汰の渦巻く環境にいながらも身持ちが固く、男嫌いと評判を取っていたが、非常に性的刺激の強い環境にいたことは間違いない。それだけに、洋介といっしょに暮らすようになってからは、かつての反動もあって、かなり積極的になり、ここのところハイティーンとは思えないほどの急激な成熟ぶりを見せていた。

洋介としても、ほんの一、二ヵ月のうちに、まだ稚さの残っていた体に脂がのって大人らしく成長していくのを感じるのは楽しかったから、彼女の要求に対しては、いつでも本気で相手をすることにしていた。

今夜も、湯上がりの体を朱鷺色の長襦袢に包んで、いそいそと夜着の中に入ってきたいな吉をしっかり抱きしめ、まず甘えたいだけ甘えさせながら、小さな唇を吸い、象牙のように滑らかな肌を少しずつあらわにしていった。

強く抱かれるだけで恍惚とするところを、背中から腰のくびれにかけてやさしく撫で続け

れば、もう唇を半ば開いてあえぎ始める。乳首を唇に含んで同時に腰を刺激すれば、耐えられずに声を上げて体全体がしっとりと汗ばむ。さらに、まるで脂身(あぶらみ)のようないな吉の腿に愛撫が及べば、のけぞりながらさらに強い刺激を求める。

洋介の指がもっと深い部分に達すれば、ただ夢中になり、喉(のど)の奥でかすれた叫び声を上げながら激しく体を震わせる。その頃には、もうひたすら、より強い快感を求める以外の気持はどこかへ消えてしまい、濡れきった体を押し開かれ貫かれれば、自分から腰を押しつけて手足をからませ、ようやく知り始めた目のくらむような悦びにあえぐばかりである。

洋介にとっても、可愛くてたまらない女性の体に深く入り込んで、思うままに悦楽の世界に引き入れ、前後不覚になるまで乱れさせるのは、この上ない快楽である。少しでも悦びを長続きさせようと努力すれば、すべてをまかせきっているいな吉は、のけぞらせた喉から胸のあたりを紅潮させ、可愛らしい唇から悦びの声をあげ続けている。

快感が深まるにつれて、いな吉の体が引き締まるのはいつものことだが、その快い刺激を楽しんでいる時、洋介は、にわかに異様な感覚にとらわれて戦(おのの)いた。

転時能力の源泉である体の疼(うず)きが、急に強くなったのである。

体の芯(しん)にあるこの疼きの感覚が弱まれば、転時しにくくなり、疼きがまったく消えてしまえば転時できなくなる。この奇妙な疼きの感覚こそが、洋介の肉体に二つの時間帯を往復させる能力に強い相関関係があることは確かなのだが、最近では、以前のように弱まったり消

えたりすることはなく、むしろわずかずつながら強くなっているようだった。

その疼きが、今突然異様なほどに強まったのだが、弱まるにせよ強まるにせよ、これほど大きな変化が一瞬のうちに起きたことは、これまで一度もなかっただけに、洋介は、いな吉の熱い体を抱いたまま思わず動きを停めた。

疼きといっても、まったく苦痛はないし、急激な変化も、転時に慣れた今となっては大した衝撃ではなかったが、次の瞬間、洋介は、自分の下で白い胸を大きく上下させているいな吉の姿が、二重になったように見えたのに驚いた。

これまで見えていたいな吉の顔にかさなって、ほとんど同じ場所にありながら少しずれたように、もう一人のいな吉が見えたのだ。ごく弱い常夜灯の光では、かすかにしか見えないが、二人のいな吉の位置は、かさなったりずれたりしながら動き続けている。ただ、見えるだけなら、目の具合が悪いと思うところだが、それだけではない。洋介は、明らかに二人のいな吉の体を感じることができたのである。

浮かせていた上体を彼女の上に伏せて胸と胸を合わせるようにしながら、上半身を抱き締めると、確かに、そこには今までよりはるかに複雑な動きをする若々しい二つの肉体があった。といっても、柔らかい肉のうねるような動きからは、二人の体が同時に出現しているのか、交互に現われているのかはっきりわからないが、一人の女性を抱いているのでないことは、微妙な感触の違いによって明らかだった。

洋介は、いな吉が醒めてしまわないように行為を続けながら、二人のいな吉の様子を確かめようとしたが、あえぎながら身悶えする若い女性の汗ばんだ体は、まったくとらえどころもない。むしろ、二人の肉体を同時に相手にする強烈な刺激によって、自分の方が果ててしまった。

強まっていく高まりの中で、その時を待っていたいな吉は、泣き声とも悲鳴ともつかない声を上げ、全身を引きつらせながら洋介の体にしがみついたが、やがて痙攣（けいれん）がおさまると、手足をゆっくり布団の上に下ろした。

しばらくの間、果てた時のまま、いな吉の体に覆いかぶさって大きく息をついていた洋介は、全身の力が抜けたような気分で布団の上に横になり、ぐったりした彼女の体を抱き寄せた。

異変はもう終わっており、いな吉は、普段のいな吉に戻っていた。

翌朝目が覚めた時、洋介は、すぐに昨夜の奇妙なできごとを思い出した。いな吉は、まだ寝床にいたが、洋介が身動きすると、

「お前さま。もうお目覚めかェ」

といってにじり寄って来た。

「わちきは、今日は朝稽古（あさげいこ）があるから、もう起きなくてはなりません」

「そうか。おれも、そろそろ起きよう」

といいながら抱き寄せると、そのまま素直に腕の中に滑り込んできたが、別に変わった様子もない。透き通るような桜色の耳たぶを軽く嚙みながら、

「昨夜（ゆうべ）は良かったたな」

と、ささやけば、

「アレ。恥ずかしい」

と両手で顔を覆い、

「でも、お前さま、わちきは、この頃ますます良くなって、ゆうべなんて、もうもう何がなにやらわからなくなってしまいました。夢中で何か叫んだみたいで、恥ずかしゅうござんす」

「何も恥ずかしがることはない。夫婦（めおと）というのは、こういうものなんだ」

「嬉しい」

という様子も初々（ういうい）しく可愛いが、別に変わったこともなく、当人も異変が起きたことにはまったく気づいていないらしいのだ。それなら、何かの勘違いだった、と思いたいところなのだが、体の疼きが、あの時のままに非常に強くなっているから、変化が起きたことは、どうにも否定しようがない。

だが、洋介自身は、そのことをほとんど気にしていなかった。転時能力という、もともと

異様な能力を得てからの五、六年というもの、さんざん奇妙な経験をかさねて、すっかり慣れてしまったから、昨夜程度の異変なら、平然と受け入れてしまうのである。

朝食をすませると、いな吉は朝稽古に出かけて、洋介は、どうしても午前中に家に帰っている必要があったので、しばらく使わなかった定点の一つへ直行した。

冬の服装で初夏の東京へ転時しなくてはならないから、タクシーを拾いやすく、しかも日陰になっている場所を定点に選んであった。そこへ近づきながら東京を透視したところまでは、いつもの通りだったが、透視して見える向こうの眺めが、これまでになくはっきりしているのに、まず驚いた。転時能力が強まれば透視の能力も強まることは、今までの経験でもわかっているが、これほど透視先がはっきり見えたことは、かつて一度もなかった。

だが、もっと驚いたのは、透視能力が強まったことではなく、その強い透視能力ではっきり見えた向こうの風景が、見慣れた東京の日本橋界隈ではなく、目の前に見える江戸の裏通りと同じだということだった。やはり、何かの異変が起きていることには間違いなかった。そのことに気づいた洋介は、慌てて歩き始めた。同じ場所であまり長い間うろついているのは、不自然だからである。

さりげなく歩きながら、瞬間的な透視を繰り返すと、三回目になって奇妙な場面にぶつかった。背景の建物などはまったく同じなのに、こちらの世界には人がおらず、向こうでは中年の女性がほうきで道路を掃いているのが見えたのだ。洋介は、首をかしげながら、さらに透視を繰り返して歩いて行ったが、そのうちに、透視して見える向こうの世界と、肉眼で見えるこちらの世界の間に微妙な違いがあることに気づいた。

向こうには植木鉢がおいてあるのに、こちらにはない。向こうには、窓を開けてすだれがかかっているのに、こちらでは締め切ってあってすだれがない。向こうの人は薄着なのに、こちらではもちろん冬の服装だ。

——そうだ——

十分もたたないうちに、洋介はあることに思い当たってうなずいた。

——文政十年の世界が見えているのかもしれない——

理由はともかくとして、昨夜、急に転時能力が強くなった……あるいは転時能力に何かの変化が生じたことは確かだから、そういうことが起きても不思議ではない。いな吉の体が二つあったように感じたのも、文政十年のいな吉が、夢の中で性のエクスタシーの中に割り込んで来たと考えれば説明がつく。かつて、いな吉は同じようにして流子のエクスタシーの中に割り込んだことがあるから、これぐらいのことが起きたとしても、洋介は今さら驚かなかった。

それに、もし、透視して見えるのが文政十年の光景だとすれば、変化の少ないこの時代のことだから、ほとんど同じ町並みが見えるのが当然だ。そう気づくと同時に、洋介は背筋が冷たくなるのを感じた。

——もとの東京へ帰れるのか——

空気は冷たいのに、額に汗が浮かんだ。まったく正体不明な転時能力を利用して楽しい思いをしているのだから、多少の危険は覚悟しているものの、自分の世界へ戻れなくなるのが何よりも恐ろしいのだ。

どうしてよいかわからないまま、洋介は、ふらふらと歩いて行ったが、ふと思いついてまた難波町へ引き返すことにした。家に入ると、迎えに出たおみねは、ちょっと驚いた様子だったが、忘れ物を取りに戻ったという説明に納得して引き下がった。

洋介は、茶の間に入ると、部屋の一隅に立ったまま、室内をちらりと透視した。向うには誰もいなかったので、そのまま透視を強くして壁に貼ってある暦の干支(えと)の欄を見詰めれば、丁亥(ひのとい)とある。間違いなく文政十年だった。

じっと見ていると、隣の八畳との間にある襖を開いて、いな吉が入って来た。

文政六年のいな吉よりは背が高くなっていて、何よりも顔が大人びている。愛らしいことも愛らしいが、愛くるしさは薄らいで、その分だけ端正な美貌になっている。彼女が長火鉢の横においてあった稽古本を取って、また八畳に戻ったので、洋介もこちらの襖を開けて八畳に入り、透視を続けた。長唄の女師匠が来ていて、稽古の最中らしかった。

洋介は、透視をやめて、そっと家を出ると、上がり口と門の間で、もう一度透視してから思い切って転時してみた。文政十年の何月かわからないが、木の葉の色や気温から判断すると、明らかに冬ではなく、初夏の気候だった。

ロンドンから帰ったのは、まだ春先だったから、この世界が初夏になっているとすれば、こちらのいな吉にも数ヵ月も待たせてしまったことになるはずだが、もしそうなら、彼女にとって難波町にいるのは不便なだけだから、元大坂町で暮らしているはずだ。ここのいな吉にも会いたかったが、仮に面倒な状況になっているとすれば、今はゆっくり相手をしている時間がない。

もう一度透視すると、今度見えたのは文政六年の江戸ではなく、現代のビルの入口の階段室らしい殺風景な眺めだった。ほっとした洋介は、門を出て、いちばん近くの定点まで歩いて行って透視した。今度も、明らかに現代の東京の光景が見えた。

洋介は、文政六年の春から、文政十年を経過して二段跳びで現代の東京へ戻った。そして、もう一度江戸時代の様子を見るために透視すると、今度は、何と、少しずれた二つの光景が見えるではないか。いったいどういうことなのかはっきりわからないが、この日の午後には、ある雑誌のインタビューを受ける予定だったので、いつまでも考えているわけにはいかない。それに、冬の服装で六月の東京にいるのは暑すぎるので、すぐにタクシーを拾って中野へ帰り、有り合わせの冷凍食品で昼食をすませた。

ようやく書斎の椅子に落ちついた洋介は、それにしてもややこしいことになったものだと思った。転時に関しては、起こってしまった結果を受け入れるほかないので、今日の午前中

の経験で判断するなら、江戸の光景が二種類見える東京からなら、二段跳びをせずに文政六年と文政十年のどちらへでも直接転時できそうだった。

行けるとなれば、文政十年のいな吉のもとへも行かなくてはならないが、あちらでは、どれだけの時間がたっているかわからないし、そこが本当にかつて自分のいた江戸と連続している江戸かどうかも百パーセント確実とはいえない。そして、さっき見た文政十年のいな吉が、自分の愛人であるあのいな吉であれば、これからの洋介は、東京の流子のほかに、別の時間の江戸にいる二人のいな吉を相手に暮らさなくてはならないことになる。

どうしたものだろうと腕組みをして溜息をついた時、ファックスが動き始めた。流子からだった。

——出張がもう一日延期になりました。明日は早めに帰って夕食の支度をします——

それを読んでいると玄関のチャイムが鳴ったので、洋介は急いで出て行った。

雑誌の編集者が帰ったのは、三時半頃だったので、洋介は、これから文政十年へ行ってみようと思った。ちょっと片づけておかなくてはならない仕事もあるが、一時間もかければ終わりそうだった。それに、さっきの様子ではあちらも気温が高いから、冬の江戸へ行くよりずっと楽そうだ。

急いで仕事をすませてファックスで送り、着替えをして家を出たのは五時前だったが、夏至の近いこの季節は、まだ昼間の明るさだ。今度は、いつものようにバスで中野へ出て地下

鉄に乗った。

はじめて転時能力を得た頃に比べても、最近では電車の中などで男の着物姿がますます人目を引くようになったと感じる。見られたがり屋から程遠い性格の洋介としては迷惑な話だが、毎度タクシーにばかりも乗っていられないし、江戸と東京のどちらでも共通の服装は着物しかないので、ほかに方法はなかった。

十九世紀のロンドンで転時した時に、それほど目立たなかったのは、コートを着て霧の中を歩いたせいもあるが、やはり、着物が洋服に変わったのに比べれば、洋服のデザインの変化がそれほど大きくないからだろう。着物を着て電車に乗るたびに、洋介は、自分たちが内発的な文化をほとんど失い、ほぼ完全にヨーロッパ系の文明に飲み込まれてしまったと感じるのだ。

日比谷線の地下鉄で人形町に着くと、洋介は、この時間に人通りの少ない江戸橋寄りの定点の手前まで行って透視した。先ほどと同じように、同じような二つの江戸の裏通りが少しずれて見えた。注意しながら歩いていると、とある長屋の入り口から青々した鉢植えの並んでいる様子が見えたので、その方をじっと見詰めながら定点まで歩いて一気に転時した。

いつものように、一瞬のうちに空気の匂いが変わり空が広くなったが、今度は気温がほとんど変わらない。ほっとしながらぶらぶら歩き始めると、通行人の服装も夏姿になっていて、こちらもグレゴリオ暦の六月頃に相当する季節だと見当がついた。それはいいが、次

は、こちらのいな吉が今どういう状況にいるかという問題がある。
文政六年へ行った時は、おたねがこちらを見つけてくれたので面倒がなかったが、ああいう偶然が二度起こるとは思えない。洋介は、自分に関することなら、逃げたり避けたりしない性格だが、相手が若い女性だけに、自分の不用意な行動でいな吉を傷つけてはいけないと思うから、つい用心深くなるのだ。
――涼哲さんの所へ行ってみよう――
そう思いついた洋介は、廻れ右をして、江戸橋に向かった。文政十年の涼哲は、医者としてかなり成功して、同じ檜物町の中だが、もとの家からやや西寄りにある大きな家に移っていた。通町は人通りが多いので、江戸橋広小路からすぐ裏通りに入り、箔屋町を右に折れて、まっすぐ通四丁目を横断すれば檜物町に入る。
涼哲の今度の家には内玄関があるので、洋介は潜り戸を通って格子戸を開けた。
「ご免」
声をかけると、すぐに召使の少女が出て来て、
「あれ、お出でなされませ。ただ今、ご新造さまを……」
と、いえば、すぐに多恵が顔を出し、いつもの通りにこやかに、
「まあ、速見さま。どうぞお上がり遊ばして」
どうやら、もとの世界へ戻ったらしいとほっとした洋介は、今さら遠慮する間柄でもないので、そのまま書斎へ通ると、すぐに涼哲が入って来た。
「江戸へは、いつお出でになりました」
涼哲は、挨拶代わりといった感じで尋ねた。
「今来たばかりで、この近所へ買い物に参ったついでにちょっとお寄りしました」
「それでは、まだ難波町には行っておられませぬか」
「はい。これから参ります」
「先日、元大坂町でお会い致しましたところ、姐さんは、速見さまが、もうそろそろお出でになる頃だといって、楽しみにしておられました」
「すぐに行ってやりましょう。ところで、折入ってうかがいたいことがござる」
「どのようなことでござりましょう」
「今日は何日でござる」
「五月十五日にござります」
今さらなぜそんなことを聞くのか、と訝しげな表情に対して、洋介はいった。
「江戸と仙境とでは、時として年月の進み具合がずれます。あちらで短い時がこちらでは長くなることもあり、こちらの日付がわからなくなります」
涼哲は、この説明に納得したようにうなずいた。
「やはり、浦島の話のように、仙境では月日のたつ早さも、この世とは違うのでござりま

しょうな」
「ところで、この前、私がいつ頃まで江戸にいたかご存じか」
「はっきりとは存じませぬが、ほんの十日ほど前だったように心得ておりますが」
「わかりました」
季節は合っているが、こちらでも時間がずれている。ロンドンで転時したのが原因だとしか考えられないが、涼哲も多恵も、洋介に何か変わりがあるとは思っていない様子だから、もとの世界と同じだと思うほかない。この分なら、いな吉も自然に受け入れてくれそうだった。
今のところ、それがわかれば充分だったので、洋介は、適当にいいつくろって涼哲の家を出ると、また難波町へ向かった。
「今日あたり、きっときっと来て下さると思っておりました」
小走りに出て来たいな吉は、柱につかまるようにしながら喜びを包みきれないようにいった。午前中に透視して見たままの、すっきりした美しい姿だが、その様子を見る限り、やはり洋介は、せいぜい十日ぐらいしか江戸を留守にしていなかったのだろう。
この年の陰暦五月十五日は、グレゴリオ暦では六月十一日。そろそろ梅雨の季節だ。江戸は夏で、いな吉は、白地にこまかい藍染模様の浴衣に、黒い大きな模様を染めだした青い幅広の帯を斜めに締めている。ちょっと着崩したように見えるのが涼しげで、湯上がりらしい

爽やかな香りが漂っていた。
文政六年のいな吉に比べると体に脂がのったような感じで、胸のふくらみも大きいが、子供らしさの残る丸い顔が、やや陰影のある細面の大人びた感じになり、背も高くなっているせいで、相変わらず華奢な体つきに見えることに変わりはなかった。
洋介は、若さが匂い立つような彼女の姿を惚れぼれと眺めた。
茶の間に入って座ると、いな吉はすぐに尋ねた。
「今夜は、こちらへお泊まりでござんしょうネ」
「もちろんだ」
「ソンナラ……」
いな吉は、期待に満ちた表情になっていった。
「熱海から帰って、まだどこへも行っていないし、今夜あたりはちょっと暑そうだから、浜町の船宿で泊まりたい」
やはり数年間だけ世馴れているから、若い方のいな吉に比べて積極的である。
「いい宿があるのかい」
「アイ。最近二階を改築しましたのサ。おかみさんが知り合いで、二、三日前に会ったら、ぜひ使ってほしいというから、そのうちに旦那さまと泊まりに行くといっておきました。先度のいつか、十五夜の晩に山谷の船宿に泊まった晩は、雨になってしまったけれど、今日は

十五日で晴れているから、お月様もきれいでござんしょう。前がお堀だから二階は風通しが良いし、近所に良い仕出屋があって、お料理もおいしいと自慢しておりました」

「じゃ、行こう」

「今は日が長くてまだ明るいから、お前さまは、お湯にお入りなさいまし。その間に、おみねさんに一走りしてもらって、あちらのつごうを聞いて参ります」

浜町までなら、せいぜい片道五分ぐらいで、日没までには、まだ三十分以上ありそうだった。

「それなら、急ぐことはない。一休みしてから風呂に入ろう」

いな吉は、うなずいて立ち上がり、茶の間を出て行った。

洋介が、風呂を出て二階で涼んでいると、おみねの報告を聞いたいな吉も着替えに上がって来た。

「あちらも、ちょうど空いていて、待っているそうでござんす。近間だから、わちきは浴衣で参りますハ」

「そうか。もうすぐ日が暮れるし、まだ月は高く上がっちゃいないから、どんな恰好でもかまやしない。おれも、浴衣で行こう」

いな吉は、今度は藍の絞り染の浴衣に着替えて、暗くなってきたのではっきりわからない

が、茶系統に白の大きな模様を染め抜いた帯を手早く締めた。ごくあっさりしているが、誰が見ても一目で芸者だとわかるほど、まことに意気な姿に仕上がった。

いな吉にとっては、この一見して芸者だとわかるということは非常に大切だった。複雑な上下関係のある身分社会では、女であることも一種の身分だから、それだけで行動が限定される。ところが、芸者なら、たとえ出合茶屋に客としけ込んでも、男の相手をするのが本来の仕事だから、誰も異様には思わない。

つまり、芸者は「たかが芸者風情が……」などと軽蔑される代償として、現代女性とそれほど変わらない自由な行動ができた。いな吉は、そのことをよく知ったうえで芸者の道に入ったのだ。

もちろん、借金で拘束されている場合は、行動の自由どころではないが、彼女のような自前芸者の場合は、現代のタレントと似たような感覚で働くことができる。いや、タレントの色恋沙汰を書き立てるのが仕事になっているジャーナリズムが存在しないだけ、むしろ、現代の単身生活をしているOLの自由さに近いかもしれない。

直観的にそのことを知って、芸者を自分の天職のように思い、その自由さを楽しんでいるいな吉にとっては、素人ではまねのできないほど意気で芸者らしい姿をすることが、いうなれば自由へのパスポートなのである。

二人が難波町の家を出たのは、かなり暗くなってからだったが、満月が東の空に昇ってい

るから、提灯はいらなかった。家の前の道を東へ百メートルも行けば、浜町川に行き当たる。この川は、今は埋め立ててしまって細長い緑地になっているが、洋介の子供の頃は、まだ大川に流れ込む堀川のままだったから、釣り船宿などがいくつもあったのを覚えている。

川に面した道を左へ曲がってしばらく行くと、小ぎれいな船宿がいくつもある中に、ちょっと大きな一軒があった。もう外は暗いので、〈ちょき船　屋根船　西田屋〉と書いた掛行灯が出してある。いな吉は、いかにも年期の入った年増芸者らしい落ちついた仕草で、腰をかがめ、腰高障子を開けて一歩入ると、

「今晩は」

と、声をかけた。すぐに、四十歳ぐらいのいかにも水商売らしく垢抜けたおかみが顔を出し、腰をかがめながら愛想良くいった。

「これは、いな吉姐さん。まあ、旦那さまも、よくお越し下さいました。お二階にすっかりお支度できております。さあ、どうぞ、お上がり……」

中は土間で、左側には銅製のかまどが据えてあり、台所になっている。その先が板敷きのあがりがまち、その奥が八畳間で、長火鉢や茶簞笥などがおいてあるのが見えた。遠慮していてもしようがないので、洋介は下駄をぬぎ、おかみについて板敷きの横から二階へ通じている階段を上がった。床も手すりも乾拭きしてぴかぴかに磨き上げてある。

二階は、廊下も新しい檜の板で、建具も新品らしい。

「はい。こちらへどうぞ」

と、通されたのは、行灯のある六畳の小座敷だったが、室内はすべて新しく改装したらしく、畳も張り替えたばかりのようだった。小さいながら床の間があって軸物がかかり、あやめが生けてあった。窓が開けてあるので、外を見れば、浜町川の対岸は武家屋敷らしく、小さな森のようだ。簾越しに吹き込む川風が涼しい。

「すぐに、お料理をお持ち致します」

着替えらしい小さな風呂敷包みを持ったいな吉が入って来ると、おかみは、そう声をかけて腰を浮かせた。それを待っていたように、女中が料理や酒をのせた盆を持って入って来る。

「こちらに、床も取ってございます」

料理が揃うと、おかみが隣室の襖を少し引いた。蚊帳が吊ってある中に、もう布団が敷いてあった。

洋介は、眠り込んでしまったいな吉のほてった体を抱いたまま、息をはずませていた。今度は、彼女を抱いている時に二人のいな吉が重複して現われることがなかったので、あれは、二つの世界への転時能力が発生しかけていた過渡期の異常現象だったのではないかと思っている。

今ここにいるいな吉の肉体が、明らかに前に文政十年に別れたその直後の状態であることは、こうして抱き合った感触からはっきりわかった。同じように愛撫し刺激すれば、同じように高まっていき、達する悦びの深さもほぼ同じだ。洋介のこれまでの経験では、同じように変化する女性は二人といなかったから、男の微妙な感覚として、これが自分とともに作り上げてきたいな吉の体であることは疑う余地がなかった。

ところが、彼女の記憶には、文政五年に洋介が消えてから十日目にまた江戸に現われ、そのまま難波町の家で自分とともにもとのような生活を始めたことは抜けている。雑談の中で、それとなく聞いてみても、たとえば団十郎や武蔵屋との個人的なつきあいはないらしいから、その点では、文政六年のいな吉とは微妙に違っている。いわば別人なのだ。

とすると、二人のいな吉が、はたして同じ人物なのだろうかという疑いが湧くが、そういうなら、今ここにいるいな吉とても、本当にこの前別れたばかりのいな吉とまったく同じ人物かどうかわからない。洋介は数ヵ月間も来られなかったのに、その間の時間のずれをまったく意識せず、ほんの半月ぐらい仙境へ帰っていたとしか感じていないらしいからである。

——過去へ行って戻れば、本当に、そこは完全に同じもとの世界なのか——

洋介は、何百回となく考えた疑問をまた蒸し返した。

過去へ行って先祖を殺せば、自分はどうなるか、などという過激な実験をしなくても、過去へ行けば、多かれ少なかれ未来に影響を与えずにはすまないはずだ。洋介のように、できるだけ過去に干渉しないように用心したところで、未来人が過去で生活すること自体が干渉になり、それが未来に何の影響も与えないと思うのは虫が良すぎるだろう。

したがって、東京の妻の流子も、洋介が江戸から戻るたびに微妙に記憶のずれが生じて、わずかながら別人になっている可能性がないとはいいきれない。ただ、人間は、それほど正確にすべてを覚えてはいないし、夫婦でいつも記憶を確かめ合っているわけでもないから、変化に気づかないだけかもしれないのだ。

無意識のうちに変えてしまった何かによって、その後の世界が微妙に変わる可能性がある以上、転時能力者は、もともとまったく同じ世界へは戻れないことを、いつも覚悟しているべきなのだろう。洋介の場合も、違いがはっきりわかるほどの変化が一度も起きなかったのは、ただの幸運にすぎなかったのかもしれない。

いずれにせよ、こうして別の時間帯に生きる二人のいな吉のもとへ行けるようになってしまったことは、動かしがたい事実だった。ロンドンで転時したのが原因なのか、ただのきっかけになっただけなのか、あるいはまったく無関係なのかはともかく、洋介としては、この事実をありのままに受け入れるほかない。

たとえ、二人のいな吉が完全な同一人物であろうとなかろうと、洋介としてはどうすることもできないし、相手が、洋介を自分の唯一の旦那だと認識して頼りにしてくれている以上、このまま二人のいな吉とともに生きていくほかなかった。

愛宕山

「ねえ、あなた」
流子が、書斎をのぞいて声をかけた。
「ちょっと、パソコンの具合が悪いんだけれど、見て下さらない」
洋介は、立ち上がって流子の部屋へ行った。
「どうしても、うまく動いてくれないのよ」
流子は、夫の前で操作をやり直して見せた。
「パソコンのせいじゃなくて、インストールの手順が間違っているんだ」
洋介は、立ったまま、もう一度操作をやり直した。
「ああ、そうか。わかったわ。あたくし、説明書の意味を取り違えていたみたい」

「パソコンに熱中するのもいいけれど、家にいる時ぐらい少しのんびりしていたらどうだい」
洋介は、後ろから妻の肩を抱いた。
「だって、面白いもの」
「面白いのはわかるけれど、頭ばかり使っていると、しわが増えるぞ」
「じゃ、もうやめる」
「ぼくも、今日は仕事をやめて寝酒を飲む」
「支度してあげる」
「ちょっぴり飲むだけだから、つまみはいらないよ」
洋介は書斎へ戻ると、棚からスコッチを出して居間へ行った。流子は、グラスと氷をソファの前の小机においてから、
「あたくし、お風呂に入ってくる」
といって出て行った。
オンザロックスで飲み始める。
江戸で暮らしている時は、あの生活をそれほど不便だと思わない。
自分で台所に立つ必要もなければ、肉体労働をするわけでもない旦那さまなのだから当然だといってしまえばそれまでだが、いくら旦那さまでも、水は水がめから杓(しゃく)で汲まなくては

ならないし、シャワーつきトイレどころか水洗便所さえない世界だ。
冬の夜は、全室暖房など夢にも見られない生活で、電気毛布どころか、重い木綿綿の夜着にくるまって、こたつに足を入れて寝られるだけでも有難い生活なのだ。それでも、あまり不便に感じないのは、洋介ぐらいの年齢だと、子供の頃に似たような生活を経験しているからかもしれない。
しかし、こうやって東京のマンションで生活しながら一つ一つ考えてみれば、普段は平気で受け入れている現代の生活が、あまりにも恵まれていて便利なのには感心せざるを得ない。
電気冷蔵庫は、魔法の箱そのものだ。
火打石に火打金を打ちつけ、ほくちの上に火花を落として点火し、その火を硫黄のついた付木に移して、ようやく炎にしてから、焚きつけに移して燃え上がらせ、次第に太い薪に火を移していく手間に比べれば、つまみを廻すだけで火のつくガスレンジも奇跡のようなものだ。
だが、何といっても便利なのが、ガスや電気で沸かせる風呂だろう。難波町の家には据風呂があるが、召使がいるからいいようなものの、自分で薪をくべるぐらいなら、洋介はためらわずに湯屋つまり銭湯へ行く。東京では、夏になると、シャワーをあびるだけですませてしまうが、盥に湯を入れて行水するのに比べれば十分の一以下の手間で、はるかにさっぱり

した気分になれる。
夏の暑い時、江戸では、せいぜい団扇であおぐか、ただ我慢するか、日が暮れてから涼みに出るほかない。天皇や征夷大将軍のような権力者でさえ、積極的に気温を下げて涼しくする手段は使えなかったのだ。
ところが、不便きわまりない物質的な生活に比べて、精神的というか心の満足感という点になると、いずれも、それほど大きな違いがあるとは思えないのである。
特に、女性との共同生活での満足感は、流子といな吉の個人差を除外して考えれば、どちらが上とも下ともいいようがない。男と女の間柄のように生物としての基本的なつながりは、世の中の表面的な部分に比べて、はるかに変化しにくいのだろう。江戸で暮らしていて、物質的な不便さをあまり感じないのは、いな吉との生活が楽しいせいかもしれない。たまたま、二人ともそれぞれの社会での先端的な職業について働いているから、比較しやすいが、好きな女といっしょにいる時の充足した感じに違いがあるとは、とても思えないし、好きな女性とベッドで抱き合う悦びは、それこそ時代を越えている。
洋介は、越後屋のような本当の豪商の主人が、どういう生活をしているのかは知らないが、武蔵屋や七代目団十郎とつき合ったおかげで、あの時代としては、かなり豪華な生活の一端をのぞく機会があった。しかし、現代人の生活に比べると、広い家に住んでいるという点以外は、豪華といっても、たかが知れているのだ。

団十郎は、大沼理左衛門の店で作った高価な櫓時計を自慢しているが、実用上の目的はあまりなくて、いわゆるステータスシンボル、金持であることの象徴にすぎない。時計としては、現代の安い置時計の方が、はるかに正確で使いやすいのだから、物質的な意味はあまりなく、時計という珍しい機械を持っているという心の満足感が、ほとんどすべてなのである。

金持が、たとえ金蒔絵の火鉢を使ったところで、裏長屋の住人の使う安い焼き物の火鉢と比べて、特に暖かいわけではない。肝心の暖房装置としての機能には大差ないのである。特に豪華な火鉢は、見かけが立派で高価な道具を使っているという満足感だけのためにあるといっていいだろう。

つまり、特別な大金持やとびきりの貧乏人を除外し、中間層について考えるなら、江戸の貧富の差は、実際の物質的な量よりも、むしろ贅沢さの感覚だけに依存している部分が多いのではないかという気がしてならないのだ。

「髪を洗ったもので、おそくなってしまったわ」

白いタオルのバスローブを着た流子が、そういいながら居間へ入って来たのは、三十分ぐらいたってからだった。洋介の横に座ると、グラスの底にスコッチをちょっぴり入れて水を三センチほど加えてから氷を入れる。

「ねえ、流子」

彼女が一口飲むのを待って、洋介はいった。

「きみは、三十年ぐらい前の向島あたりの生活をよく覚えているだろう」

「ええ」

「もちろん、今と比べれば、ずっと不便だったはずだ」

「当たり前でしょ。うちのあたりなんて、お屋敷町にはほど遠い下町だったから、商売で使うのでなければ、自動車を持っている家なんてまずなかったし、電話のない家だってざらだったし、家にお風呂のない家の方が多かったし、棟割長屋みたいな家に住んでいる友達もいたし、まあ、昔ながらの貧乏暮らしに近かったのじゃないかしら」

「今の生活と、どちらがいいと思う」

「そりゃ、今の方がいい。あなたといっしょだもの」

「そういう、きみの個人的な問題じゃなくて、社会全体としての一般論さ」

「それなら、昔の方がいいに決まってるじゃないの」

流子は、当然のことのようにいった。

「なぜ、そうはっきりいえるのさ」

「あたくしは、子供の頃から、母に、福の神と災いの神はきょうだいだから、姉の福の神を招けば必ずしばらくして妹の災いの神もついて来るという話を何度も何度も聞かされて、今でも、いいことの裏には必ず悪いことがあるって信じてるわ。

今は、みんな、お金持になりたい一心で福の神を招いているつもりだけれど、災いの神もいっしょに来ることを忘れているからだめなのよ」
「でも、福の神に来てほしいのは、昔だって同じだろう」
「ええ。でも昔は、みんな貧乏だったところをみると、福の神なんてめったに来なかったのでしょう。それに、あたくしの母程度の人でさえ、そういうことを知識として知っているだけじゃなくて、娘のあたくしに本気で伝えようとしていたのだから、自分の人生経験としても実感していたのじゃないかしら」
「それは、そうかもしれない」
洋介はうなずいたが、同時に、顔見世から帰った晩に、いな吉が自分の幸運が恐ろしいといっておびえていたのを思い出していた。流子の母には、まだ江戸的な感覚が濃厚に残っていたのだろう。
夫が何を考えているのか知るはずもないままに、流子は続けた。
「ところが、今は誰でも昔のお金持なみの生活ができるから、福の神が大勢いらっしゃるのでしょうね。もちろん、同じ数だけ妹さんの災いの神もついて来ているでしょう。GNPだかGDPだかが増えて、個人所得も世界一になったというのに、世の中の面倒ごとが減るどころか、増えるばっかりなのは、そのせいなのよ。治安は悪くなるし、アレルギーだ小児成人病だ、オゾンホールだって、次から次へと豊か

さのツケみたいに新しいいろくでもないことが起きるし、飲み水までスーパーで買わなくてはならないなんて、普通じゃないわ。母が今生きていれば、これはみんな福の神の後からついて来た災いの神のせいだ、っていうでしょうね」
「つまり、流子は、福の神が大勢いて、災いの神も大勢いるのより、福の神も少ししかいないけれど、災いの神も少ししかいない方がいいっていうんだね」
「もちろんよ」
流子は、ためらわずにいった。
「だって、貧乏か金持かは比較の問題じゃない。毎日十万円の収入があれば、まあお金持の方だけれど、それだって毎日百万円の収入がある人に比べれば貧乏だし、その人だって、毎日一千万円の収入のある人に比べれば貧乏だということになるわ。だから、あたくしたちの子供の頃みたいに、みんながおしなべて貧乏なら、福の神も少ない代わりに、災いの神の数も少なかったし、人間は、もともと貧乏な人が圧倒的に多いのが普通でしょう。その状態でのトラブルなら、原因も単純で、過去の知識が生かせるから解決しやすくて、昔話みたいに、お年寄りの智恵を借りれば解決できることも多かったと思うわ。ところが、今みたいに福の神も災いの神も、ぞろぞろいるような社会は、人類としても前代未聞だから、次から次に起こる複雑なトラブルを解決するための知識も経験もなくて、みんなおろおろしている。老人だって、古いことならわかっても、新しいことは知らないから、教えられない。

どう考えたって、三十年前の方がまともじゃないかしら」
「じゃ、なぜこんな世の中になってしまったんだろう」
「そんなこと、あたくしにわかるわけないでしょ」
流子は、そういってから、洋介の胸に頬を押しつけた。
「あたくしは、あなたとこうしていられれば、貧乏でも金持でもどっちでもいいの。ねえ、抱いて」
「ちょっと、流子」
洋介は、妻の体を引き起こした。
「せっかくそこまで話したんだから、結論をいってよ。終わったら抱いてあげるから」
「結論なんてないし、これ以上話すのは面倒くさい」
流子は、そういいながら顔を上げて、くっきりした二重瞼で夫を見上げた。洋介は、ふざけて彼女の体を向こうへ押しやった。
「いわなければ、今夜はいっしょに寝てやらない」
「そんな意地悪をいうのなら、続きを話すわ。
雑誌を作っていた時につくづく思ったのだけれど、世の中には、物質的にもっと貧しくなりたいと思っている人なんて、ほとんどいないのね。心の時代だの、心が豊かなら物がなくても豊かだとか、きれいごとやお説教をいいたがる人ならいくらでもいるけれど、本気でそ

んなこと考えて、わざわざ今より貧しい暮らしをしようとしている人なんて、まずいないと思うわ。雑誌は、とにかく売れなくてはならないでしょう。
売れなくなれば、即(そく)廃刊か休刊、編集長は降格つまりクビだから、こちらも必死で、読者がホンネで読みたがったり見たがったりするような内容を考える。それが見当違いなら落伍者になるから、朝から晩まで、そのことばかり考えていたわ。その結果、日本の人民は、みんな少しでも効率良くお金持になりたい、あるいは、なったのと同じように見えるようになりたいのだということがわかりました。雑誌の内容も、福の神の招き方に関する記事でないと売れません。だから、災いの神も日を追って増えているのでありまーす。
これで、おしまい。もう面倒な話はいや」
流子は、最後の方をふざけ半分の投げやりな口調でいってから、夫の膝の上に乗り、首に両手を廻した。今がもっとも感じやすい時期だということを知っている洋介は、問答を中止して妻の細い腰を抱き寄せた。
「お前さま。雪になりました」
いな吉の声で目を覚ました洋介は、夜着から首を出した。空気が冷たい。
「起きてご覧あそばせ」
「そうかい」

上半身を起こすと、いな吉が背中に半纏をかけてくれる。彼女自身も、長襦袢の上に単物を引っかけて、その上に半纏を羽織っているだけだ。まだ起きたばかりらしい。

雨戸が半分だけ開けてあるので、障子を少しだけ引いてのぞく。

「ちょっと積もったな」

もう十センチぐらいは積もっているし、まだ降り続いているから、もっと積もりそうだった。

「おお、寒い」

洋介は、すぐに障子を閉めて夜着の下にもぐり込んだ。

東京でも江戸でも、湿った重いどか雪が降るのは、三月末から四月頃が多い。今はまだ、グレゴリオ暦では二月の末だから、温度の低いさらさらした軽い雪だが、それだけに冷える。

「お前さま。愛宕山へ雪見に行きたい」

いな吉も、首をすくめて洋介の横に入り、体を押しつけながら、とんでもないことをいった。

「この寒いのに、なぜわざわざ雪なんか見に行くんだい」

小さな体を抱き寄せながら、耳元で尋ねる。

「だって……」

いな吉は、洋介の胸の中に体を押し込むようにしながらいった。

「雪はきれいだし、寒くないと雪は降らないし」

「確かに、その通りだ」

理路整然といい返されて、洋介は思わず吹き出した。

「でも、愛宕山までは、かなり遠いだろう。雪の中を歩くのも大変じゃないか」

「遠いといっても、ほんの一里（約四キロ）ほどで、観音様へ行くのと、そんなに違いませんハ。それに、近所の宿駕籠を頼めば、喜んで行ってくれます」

「雪なのに、なぜ喜ぶんだい」

「雪の日はお客さんが少ないから、酒手をはずめば大喜びでござんすヨ」

「それはわかったけれど、こんなに降っていたら、山の上から景色も見えないだろう」

「アイ。それはおっしゃる通りサ。だから、お昼前になって小降りになったら出かけるのでござんす」

「上で雪を見て、すぐ帰るのかい」

「いえ。山の上には茶屋が並んでますから、こたつに入ってご酒を上がりながら、ご覧になれます」

「へえ」

洋介は、びっくりした。

「しかし、それにしても物好きだなあ」
「物好きといえば、物好きに違いないけれど、そんなことをおっしゃれば、物好きでない道楽なんて一つだってござんせん」
「そういえばそうだ」
「ねえ、お前さまぁ。わちきは、雪見に行きたい。雪の日に愛宕山から見た景色は、ソレハソレハきれいでござんすから」
いな吉は、甘ったれて体をゆすった。
「よし。そんなにいうのなら行こう」
どう考えても、あまり気が進まないのだが、ここまでせがまれて、寒いからいやだともいえないから、行くことにする。いな吉は喜んで体をすりつけた。
「嬉しゅうござんす」
「その代わり、ちゃんとした駕籠屋を頼んでくれよ」
「アイ」
というわけで、雪の中を出かけるはめになってしまった。
雪見は、江戸では冬の遊山の大きな目的の一つになっていた。江戸は、それほど雪の多い土地ではないし、昔は、雪のある土地へ遊びに行く人がめったにいなかったせいもあって、雪景色は江戸の人にとって新鮮に映ったようだ。幕末期の観光案内書『江戸名所花暦』の

〈雪〉の項には、まず最初に愛宕山があるほどだから、江戸の市街を見下ろせる海抜二十六メートルのあの岡は、雪見の名所の筆頭だったのである。
しかし、洋介は、冷たくて濡れる雪そのものがきらいなので、名所であろうがなかろうが行きたくない。暖かい寝床の中で、いな吉を抱いている方がずっといいから、このまま降り続いて大雪になってしまえばいいと思っていたのだが、四ツの鐘が鳴ってしばらくすると、つまり十時頃になると雪はほとんど止んで、空も少し明るくなった。
「アレ。お前さま。これなら行けますハ」
いな吉は大喜びである。
「お前は、まるで犬ころみたいだ」
と、苦笑すれば、すっかり張り切って、
「アイ。わちきは犬の性サ。ソンナラ、留吉っつぁんにそういって、宿駕籠を二挺呼んでもらいましょう」
もう引っ込みがつかないから、洋介は着替えを始めたが、いな吉も今日はさすがに華やかな裾模様の座敷着では行けないから、媚茶の太い縞柄の袷の上に綿入れの半纏を着た。
駕籠はすぐに来たが、駕籠舁たちは綿入れどころか、布子一枚のびっくりするほどの薄着で、足も素足にわらじがけである。いな吉も、この雪だというのに、いつもながら吾妻下駄に素足なのだから、寒がりの洋介としては、この時代の人々の我慢強さに感心するほかな

かった。

駕籠舁たちは、雪中の愛宕山と聞いても、驚いた様子も見せないから、わざわざ雪見に行く物好きは、それほど珍しくもないのだろうと、洋介は推察した。

二人が乗ると、すぐに駕籠は走りだした。どんな道を行くのだろうと思って、外をのぞいていると、難波町を出て住吉町から堀江六軒町を通り、まっすぐ親父橋を渡った。さすがにプロだけあって、むだな廻り道はしない。もっとも、タクシーなら廻り道で売上げが増えることもあるが、駕籠屋はメーター制ではないから、廻り道をすれば体力を消耗するだけで良いことは一つもないのだ。

江戸橋にさしかかった頃には、空がかなり明るくなってきた。日本橋の方を見ると、橋の欄干にふっくらと雪が積もり、魚河岸のあたりに停泊している数多くの船も雪をかぶっていて、まるで墨絵のように美しい。

江戸橋を渡った駕籠は、そのまま真っ直ぐに本材木町一丁目から八丁目まで行き、白魚橋を渡ってから西に折れ、京橋のたもとから、現在の銀座一丁目にあたる新両替町一丁目を左に曲がる。

この先は、現在の銀座通り(中央通り)をまっすぐ行って新橋を渡り、さらにまっすぐ行って、今の東海道線のガードを越した先の露月町で右に曲がる。このあたりは、すべて大名屋敷なので、右も左も屋敷の周囲をかこむ長屋である。地面が白い雪、上の腰の部分が黒

い板壁で、その上が白壁、さらにその上の屋根には雪が積もっているから、長い道の両側が幾何学的な白黒の縞模様に見えて美しい。その道をまっすぐ行けば、愛宕下の道に出て、すぐ前が愛宕山の女坂の入口である。

愛宕山には、正面からまっすぐに登る急な階段の男坂と、右側から大きく迂回して登るゆるやかな階段の女坂があるが、駕籠ではとても男坂を登れないから、女坂を登って行った。辛うじて歩けるほどには雪がかいてあり、もう先に登った人もいるらしいが、駕籠舁たちにとっては難路なのだろう。この雪中なのに汗を流しながら息を弾ませて、歩きにくそうに登って行く。

はじめて江戸で駕籠に乗った時、洋介は、駕籠舁たちの苦しそうな様子を見ていやになってしまい、その後しばらくは、駕籠をあまり利用しなかった。タクシーの運転手は、機械のオペレーターだから、どんなに急な坂にさしかかっても当人は苦しくも何ともない。しかし、駕籠舁は、自分の筋肉の力だけで洋介のように六十キロ以上の体でもかつぎ上げなくてはならないから、かなり肉体を酷使する重労働なのだ。

しかし、しばらく江戸に暮らしているうちに、駕籠舁は、その苦しさの代償として賃金をもらっていることに気づいてからは、安っぽい人道主義をやめて必要に応じて乗るようになった。貧しい人に同情して労働をやめさせたところで、当人たちはただ失業するだけだし、明治以後のように、駕籠を人力車に、さらには自動車に変えたところで、世の中が本質

的に良くなるわけでないことを知っているからだ。

福の神を招けば、必ずしばらくして災いの神がついて来るという流子の説を聞いてからというもの、洋介は何でも一応その考えに当てはめる癖がついてしまったが、この場合も適用できそうだった。駕籠の時代にはあり得なかった交通事故による怪我や死亡が、自動車になってから激増し、さらに排気ガスが大気汚染の主な原因の一つになっている状況も、自動車という福の神と、そのお供である災いの神の関係にそっくりだからである。

それはともかく、ようやく愛宕山の上にたどり着くと、駕籠舁は、あらかじめいな吉に頼まれていたらしく、まず愛宕山権現社の拝殿の前まで行った。洋介の駕籠も止まったので顔を出すと、すぐに前の駕籠からいな吉が降りた。駕籠舁たちは、履物を出してくれたが、雪の中で大汗を流し、顔を手拭いでふいている。

洋介は、いな吉といっしょに神前に進み、お賽銭をあげてから拝んだ。いな吉は熱心に拝んでいるが、洋介は、いつものように形だけ拝むと、もう除雪してある参道を男坂の上へ行ってみた。神社なのに釣鐘堂や仁王門があるのだが、これは神仏混交だった江戸時代には珍しくもないので、今さら感心することもなく、男坂の階段の上まで行ってみると、急に視界が開けた。

「きれいだなあ」

思わず感嘆の声が出てしまったのは、愛宕下から海岸にかけて見渡す限り整然と続く大名

屋敷の屋根に、まるで真綿でもかぶせたように積もっている雪が、この世の景色とは思えないほど美しかったからだ。建物に綿をかぶせたというより、むしろ、綿で作った建物という方がふさわしいほど、その眺めは幻想的だった。しかも、大名屋敷はどこでも木が多いから、その部分がまたそれぞれ違った形にふくらんで、幾何学的な建物の線を乱していて面白い。

この時から四十年近く後、万延元年（一八六〇）グレゴリオ暦十一月十四日に、男坂を登って愛宕山を訪れたイギリスの園芸植物学者ロバート・フォーチューンは、

「麓から山頂まで積み重ねた長い石段を登り切ると、神殿の前や周囲に休憩所があった。そこへ待ち構えた花のような娘たちが、いろいろな茶碗に注いだ熱い茶をすすめた。しかし、その時は大パノラマのように、眼下に果てしなく広がる、美しい町に見惚れていたので、神社や休憩所やきれいな給仕女さえ眼中になかった」（江戸と北京　三宅馨訳　広川書店刊）

と、記録に残している。外国人の目で見ても充分きれいだったのだろう。ただ雑然とした市街地しか作れない子孫と違って、この時代の人々は、本当に美しい都市を作っていたのだ。

遠くを見ているうちにも、男坂を上がって来る雪見のグループがあったし、洋介たちと同じように女坂から駕籠に乗って登って来る人もかなりいた。雪見の名所として有名なだけあって、雪が止めば、すぐにでも来てみたい人がいるらしい。

「お前さま」
いつの間にか、いな吉がそばに来て声をかけた。
「きれいでござんすネ」
「うん。来て良かった」
「ネ。わちきのいった通りでござんしょう」
「いや。お前のいった以上にきれいだ」
「寒いから、そこの茶屋でおこたに入って休みましょう」
「駕籠屋さんは、どうした」
「別に休んでもらってます」
「そうか」
洋介は、いな吉について南の崖（がけ）の上に並ぶ茶屋の前に行った。茶屋といっても、掛小屋に毛の生えたような仮建築だが、身ぎれいにした若い娘たちが客引きに出ていて、
「お寄りなさいませ。あったかい甘酒がございます」
「おこたがございます。ご酒をお食べなさいませ」
などと愛想良く声をかける。
いな吉は、何度か来たことのあるらしい茶屋の前まで行くと、客引きの娘に何か話しかけていたが、すぐに洋介の方を振り向いて手招きした。

雪が止んだばかりなので、その茶屋にはまだ客が入っていない。二人は、いちばん見晴らしの良い場所に据えてあるこたつに入った。すぐに熱い茶が出て、いな吉が、酒とつまみを注文した。
「いい眺めだなあ。海まで見える。あの海岸に近い所に大きな森が見えるけれど、あそこは何だろう」
と尋ねれば、すぐにいな吉が教えてくれた。
「あれは、浜御殿でござんす」
現在の浜離宮庭園で、この時代は徳川家の別荘だった。
「ここは、お江戸でいちばん眺めのいい所だから、お月見や二十六夜待ちの晩などは、とても賑わいますのサ。わちきも、お客さまのお供で何度も来ております」
二十六夜待ちというのは、陰暦七月二十六日の月の出を見る行事で、細い月が出るのは明け方に近い頃だから、前夜から泊まって寝ずに待つのである。もともとは、宗教的な意味もあったのだろうが、この時代の江戸では、徹夜して騒ぐための口実になっていた。
「それにしても、江戸は広いなあ」
高い建物のない時代だから、愛宕山からは江戸の市街地のほぼ全域が見える。品川（しながわ）方面は手に取るように見えるが、北の日本橋の方は、ただどこまでも家並みが続くだけで、茫（ぼう）とかすんでいるし、どこにこの大都市の果てがあるのかもわからない。こうやって、直接見渡し

てみれば、先祖たちは、何というとてつもない大都市を建設し、長年にわたって維持していたものだろうと感心するほかなかった。

「少しお天気が良くなりました」

と、いな吉がいった。薄日が射してきて、雪がまぶしいほどに輝いた。あまりの見事な景観に、飽きることもなく眺めているうちに、燗酒と煮しめが来た。洋介は、体が冷えているので、いな吉の酌で熱燗を二、三杯飲んでから、また遠くを眺めた。

もし、人類が目先の苦しみに耐えて、文明のこの程度の段階で我慢……というより満足していられたなら、結果として今より幸福だったのではないかという気がしてならなかった。人間の欲望には果てしがないのだから、福の神を一人招き入れれば、二人ほしくなり、それでも満足できなくなって、また次の福の神を呼びたくなる。

江戸の人々のように、雪見や二十六夜待ちや、発句の会のような形で遊びながら満足している限り、いくら楽しんでも、その影響は、ほぼ人間の内部だけに限られる。福の神は来てくれないかもしれないが、災いの神も来ない。

長い目で見て、どちらが本当に賢いやり方なのか、結論は、もうそろそろ出始めているのではなかろうか。

あと五十年もすれば、このすぐ先を蒸気機関車が走り始める。そうすれば、もっと早く大勢の人を運べる機関車がほしくなり、単線を複線にしたくなり、線路網を日本中に広げたく

なり、もうその先は果てしもなく便利になる。そして、しばらくすれば、災いの神もぞろぞろとやって来て、マイナスの御利益もたっぷり授けてくれるのだ。

急に雲が切れて、大名屋敷の一部に強い日光が当たった。遠くの海も、ガラスの粉を撒いたように光り、浜御殿の森が黒い影のように見えた。洋介は、まぶしさのあまり目を閉じた。

「マア、きれい」

いな吉が大きな声でいった。洋介も、本当にきれいだと思った。こういうつつましいきれいさは、積極的に福の神を招くことで得たきれいさではなく、災いの神が寄りつかないために生じた消極的なきれいさなのかもしれない。

でも、先祖たちは、これで充分満足していたのだ。

紅と白

文政六年三月二十六日の朝、二丁櫓の屋根船は、かなりの速さで大川を漕ぎ昇って行った。

洋介は、舳先に近い場所に陣取って、あたりの景色を眺めていたが、客を乗せていない細身の猪牙船のほかに、この船を追い越す船はなかった。といっても、二人の船頭は、規則的に体を動かしているだけで、競争心で急いでいるとは思えない。これが二丁櫓の威力なのだろう。

難波町の竈河岸を出発して、浜町川を通って大川へ出る頃に、五ツの時の鐘が鳴った。この季節は、グレゴリオ暦なら五月はじめだから、五ツは午前六時四十五分ぐらいだ。しかし、日の出から二時間が過ぎている。

老時計師の大沼理左衛門の招待で尾久の先にある野新田の原まで桜草を見物に行くことに決まったのは、三月中旬だった。本当はもう二、三日早く来る予定だったのだが、雨もよいの天気が続いたため、晴れ上がるのを待って今日出て来たのだ。

船に乗っているのは、理左衛門に洋介といな吉のほかに、おこま姐さん、おたね、それに理左衛門の召使で、遊山の時に必ずお供をする亀吉の六人である。普通の一丁櫓の屋根船でも充分乗れる人数だが、今日はかなりの距離をさかのぼって漕ぐので、屈強の船頭が二人ついた二丁櫓の船を雇ったらしい。もちろん、遊山好きの老人のお供に慣れていて、気心の知れた船頭たちなのである。

「まことに良い気候になりました」

理左衛門老人が、目を細めて周囲を眺めながらいった。船は、いつしか幕府の船蔵の前を通り過ぎ、両国橋から米蔵にさしかかっていた。このあたりまでは、両岸とも大名屋敷が多い。大名屋敷は、家よりも庭園が主で、どこも木が繁っているから、大川は都会の中の川というより、森の中の川という方がふさわしいほどだった。

米蔵は、幕府の倉庫で、この時代としては大規模な川港の設備がある。陸上輸送の手段が不完全だった時代に大量の物資を運ぶためには、船を使うのがもっとも能率が良かったから、幕府の食料、資材輸送の主力は、隅田川を利用した水運だった。

米蔵と吾妻橋の間あたりにさしかかった時、後ろの方を見ていたおたねがいな吉にいっ

た。

「姐さん。あれ、お富士さんが見えます」

「ホント……」

「筑波も見えております」

と、理左衛門がいった。吾妻橋のかなたに、ややかすんだ筑波山が見えた。

普段なら、理左衛門は、このあたりでいな吉の唄を聞きたがるところなのだが、今日はあまり天気が良いので、景色の方に熱中しているらしい。洋介も、しばらく景色を見ていたが、川面で魚のはねる音がするのを聞いて水の中を見下ろすと、かなりの大きさの魚が泳いでいるのが見えた。

ふと思いついて水の中に手を入れてみたが、ひじまで水の中につけても、指先が青みを帯びてはっきり見えた。布で濾すだけで充分飲めるのではないかと思うほど澄んでいるのだ。これなら白魚が繁殖できるのも当然だと納得できた。

巨大都市の中を流れるこれほど大きな川の水が、飲めそうなほど澄んでいる理由は、要するに、川に汚水を放流しなかったからだ。実際、こうやって川から見ても、まとまった量の汚水が流れ込んでいる所など見当たらない。悪臭を放つ汚水をテームズ川に大量に流している現場を見て来た洋介には、この違いがまことに鮮やかに見えた。この同じ時代のテームズ川の水なら、飲むどころか手を入れるのさえ、あまり気持が良くなさそうだった。

川の最大の汚染源だった人間の排泄物は、わが国では、捨てるどころか貴重な肥料として農民が買い集め、すべて田畑にもどしてしまったから、川に流れるのは、ごくわずかな生活用水にすぎなかったし、そのおかげで、これだけ大きな川が奇跡のような清流として残っていたのである。

だが、不思議なことに、明治以後の日本では、先祖たちが、不完全な下水で川を汚さなかったことを高く評価する気風はまったくなかった。むしろ、「日本人は、上水道を作っても下水道を作らない。入れることは考えても、出る方について考えないのが、日本文化の特徴だ」などと見当違いのことをいって、手厳しく批判すればするほど、進歩的な思想の持ち主として尊敬されたのである。

同じ時代のテームズ川と隅田川を直接比べられる洋介は、紙の上の薄っぺらな知識だけで理想化した外国と比較して、悪口ばかりいわれ続けた先祖が気の毒でたまらなかった。

吾妻橋の下を潜ると、上流に向かって右側はもう江戸の景勝地である向島だ。春の花見から冬の枯野見物や雪見まで、四季を通じて美しい。今は、墨堤の桜も葉桜が終わり、青々と繁っている。背後の田畑や森の間にひときわ鬱蒼と繁っているのが、三囲稲荷、弘福寺、長命寺、牛島神社の森で、人工と自然のバランスが本当に見事である。

洋介は、向島生まれの流子に、この美しい景色を見せてやりたいと思った。

「三囲のあたりで、一休み致します」

と、理左衛門がいった。遊山が大好きな金持の隠居だけあって、まかせておけば、すべてうまく取り仕切ってくれるのが有難い。

船は、間もなく堤の船着場に着いて、まず亀吉が身軽に飛び下りて履物を舳先に揃えてくれた。続いて洋介が下りると、いな吉とおこま、おたねが亀吉に助けられて下り、理左衛門は、いかにももの慣れた様子で、最後にゆうゆうと下りて来た。

桜の季節なら、人が列を作って歩いているこのあたりも、葉桜も終わった今は、先に武士らしい客が降りた屋根船がもう一隻来ているだけで、あたりは閑散としていた。洋介は堤のゆるやかな坂を登って行ったが、最後の所が階段になっているので、女性たちが来るのを待ちながら、あたりを見廻した。

三囲稲荷の鳥居は、隅田堤の向こう側の低い所に立っているため、川辺から見ると笠木だけが堤の上に突き出して見える。この様子がちょっと面白いので、江戸の風景の画題の一つになっているほどだ。

すぐにいな吉たちがやって来た。おたねは裾短かに着付けているが、いな吉とおこまは左手で褄を取っているから、手助けしながら階段を昇る。堤の上はかなり広くて、川も向島の側もよく見える。洋介は、先に立って堤を下りた。鳥居の先には茶店があり、さらにその先は田圃の中に松並木の参道が続いている。もう一つ鳥居を潜って門を入ると、立派な社殿があった。

この稲荷は越後屋の三井家が代々尊崇していたことでも有名である。三囲の二字には、三と井の文字が入っているためだそうだが、雨の日も風の日も、日本橋の本店から手代を一人代参させ、盆暮の掛け取り、つまり集金の時には、ここから白狐の像を借りだして本店の神棚に祀っておき、集金が無事に終わってから返すのが例だったという。二十世紀末の現在でも、日本橋三越の屋上には、三囲稲荷を勧請して祀ってある。

お参りの大好きないな吉とおこま、おたねの三人は、すぐにお賽銭を上げて熱心に拝み始めたが、洋介は形だけ手を合わせてから、境内を歩いてみた。観光シーズンではないといっても、さすがに名所だけあって、五組ぐらいの参詣者がいる。武家の三人連れが、船着場で待っていたもう一隻の屋根船の客らしかった。

現代の向島からは想像もつかないが、百メートルに六十メートルぐらいありそうな境内の周囲は、すべて水田と森である。今では工場や住宅になっている地域が、すべて田畑と森だったのだから、川の水がきれいなのも当然だと思いつつ一周して戻って来ると、もういな吉たちの参詣も終わったらしく、皆が社殿の前に集まっていた。

「速見さま」

洋介が横の方から現われたので、理左衛門老人が声をかけた。

「茶店で一服致しますが、いかがでございます」

洋介がうなずいたのを見て、皆ゆっくり歩き始めた。来た時の逆コースを歩いて堤の下の

茶店に着くと、先に行った亀吉が茶と団子を頼んでいる。縁台に腰を下ろした時、浅草寺弁天山の時の鐘が鳴りはじめた。

「四ツでございますな」

時計師だけあって、時刻に敏感な理左衛門老人がいった。この季節では、午前九時十分頃で、難波町を出てから二時間ちょっとたったことになる。

休憩が終わると、また船に戻った。三囲稲荷の対岸は浅草で、まだ町家（まちや）が続いているが、真正面にあるのがおなじみの聖天宮（しょうでんぐう）の待乳山（まつちやま）だ。ほかに高いものがないだけに、愛宕山の半分以下の高さしかない低い岡が、かなり高く見えるのが面白い。ほかにも、浅草寺の本堂、五重の塔が民家の上に頭を出している。

船は、また川をさかのぼり始めた。やがて、右手に木母寺（もくぼじ）の森が見えるあたりまで来ると、浅草側も町屋が切れて水田が広がる。まだ、田植えには少し間があるが、畦（あぜ）には草が青々と繁っていた。ひばりのさえずりが、方々で聞こえる。

「きょうは、本当に暑からず寒からずで、風もなしのいい陽気だ」

あまりののどかさに、洋介はあくびをかみ殺しながらいった。

「私は、月に二、三回も遊山に出ることがござりますが、まことに、このような日は、年に何日もござりませぬな」

理左衛門も同調した。

「こんな日は、桜草も、さぞきれいでござんしょうネ」

と、いな吉がいった。

「それは、手前が太鼓判を押して請け合いまする」

理左衛門が、不自然なほど自信たっぷりにいった。

「アレ。大沼さまは、まるでご自分で見ていらっしゃったようにおっしゃいますヨ」

いな吉が、笑った。老人はうなずいて、

「そうなのだ。実は、この亀吉に、おととい野新田まで一走りさせた」

「ええっ。まことでござるか」

洋介は、驚いて老人と亀吉の顔を見た。

「へえ。まことにござります」

亀吉が右手を頭に当てながらいった。

「確か、おとといは雨が降っていた……」

洋介は、確認するようにいったが、亀吉は笑いながら、

「わしの在所（ざいしょ）では、雨が降っても野良仕事は休めねえで、蓑笠（みのかさ）つけて、ただ歩いて旦那さまのお使いに行くぐれえ、何のこともござりません」

「日本橋から、尾久の先までは、何里ぐらいあるかな」

「はて。歩いて二里半（十キロ）がところでござりましょうか。明六ツ（あけむ）に出て、昼過ぎには

戻って参りました」

この時代の農民にとっては、荷物もなしに時速五キロや六キロで半日歩き続けるぐらい、お安いご用で楽な仕事なのだ。亀吉は、自信たっぷりにいった。

「わしは、旦那さまのお供で野新田の桜草を見に行くのは今度で三度目にござりますが、今年ほど見事に咲いたのを見たのは、はじめてでござりますよ。お客さまがたが、びっくりなさること請け合いにございます」

「亀吉さんがいうのなら、間違いないだろう」

浅草の橋場(はしば)あたりから北は、西岸に民家が少しあるほかは、どちらを見ても森と田畑、それに点在する農家ばかり。聞こえるのは、水の音と櫓(ろ)のきしみ、それにひばりの声だけである。洋介には、これが同じ日本のわずか百数十年前の姿とは、とても信じられないほどだった。

「姐さんがた、一つ何か聞かせていただこうか」

景色がいくらか単調になったせいか、理左衛門がいな吉とおこまの顔を見ながら注文した。本当は、最初から自分がカラオケ風に唄いたいのだが、洋介がいるので遠慮しているのである。いな吉がうなずくと、すぐにおたねが三味線を箱から出しておこま姐さんに渡す。

おこまは、手早く調子を合わせながら、

「五月雨(さみだれ)を唄いな」

といって、弾き始めた。いな吉は、背筋をのばすようにして唄った。

〽五月雨に
池のまこもに水増して、
いずれがあやめ杜若(かきつばた)、
さだかにそれと吉原へ
ほど遠からぬ水神(すいじん)の
離れ座敷の夕暮れに
ちょっと見交わす
富士(ふじ)筑波(つくば)

理左衛門はもちろん、洋介も拍手した。いな吉の美声に対してはもちろんだが、吉原に通じる山谷堀の前を通って、水神の森を右手前方に見ながら、筑波山を前、富士山を後にしている今のこの景色そのものを巧みに唄い込んであるのに感心したからだ。

おこまが、次の曲を弾き始めると、いな吉も続けて唄った。

〽五月雨や

空に一声ほととぎす、
晴れて漕ぎ出す木母寺の
関屋はなれて綾瀬口。
うし田の森を横に見て、
越ゆる間もなく堀切の……

右手前方に、水神の森、その向こうに木母寺のこんもりした森が見えている。その先が関屋の里で、綾瀬川と大川の合流点も見える。まさに、このあたりの美しい光景を唄っているのだが、プロとはいえ、この場に合ったつごうの良い曲をすぐに思い出して唄えるものだと感心しながら聞いているうちにも、船は次第に川をさかのぼって行く。

やがて、隅田川は、綾瀬川との合流点、つまり鐘ケ淵あたりを境にして大きく西へ曲がる。江戸時代は、このあたりから上を荒川、下を大川と呼んでいたが、荒川まで来れば、川の両岸は、すべて農村地帯となり、見えるのは田畑と野原と森ばかりになった。やがて、遠くに見えた千住大橋が近づくと、橋の南詰は千住の宿場だから、民家が密集した大きな町になる。

大橋の下を潜ってさらに西へ行けば、このあたりが三河島村から町屋村。川は、また北に向きを変えて、両岸には、森林がますます多くなった。素人目には、人工林か天然林か区別

できないので、農村風景というより、自然そのままの風景を見ているような気分になってくる。

洋介は、また川の中に手を入れてみた。河口部に近いあたりでも、現代人の目で見れば充分に透明度が高かったが、ここではさらに濁りが少なくなり、煮沸せずに飲めば必ず下痢をするという、どこかの国の水道水よりましではないかと思うほどだった。

このあたりでは、さすがに観光用の屋根船はほかに見当たらないが、薪を積んだ船や、白帆を立てた荷船は、かなり多い。隅田川は、大消費地の江戸へ大量の貨物を送り込むための重要なルートだったが、どの船もエンジンで動くのではないから、まことに静かである。

「もうすぐでございますよ」

いな吉に伴奏させて得意の喉を聞かせていた理左衛門が、唄の切れ目で洋介の方を振り向いて教えてくれた。川の両岸は林の中に農家が点在している美しい農村風景だった。船の進行方向を見ていると、やがて、四つ手網をつけた船が何隻か川の中にもやっているのが見え、左側が一面の草原になった。

洋介は、誰も自分の方を見ていないことを確かめてから、現代を透視したが、どうやら川の流れが変わって、今ではこの場所は陸地になっているらしかった。何やら工場のような建物が見えたので、慌てて透視をやめると、また、緑の世界に戻った。

「旦那さま。あのあたりをご覧下され」

亀吉が手をのばして指し示すので、洋介は腰を浮かせて、その方向を見た。
「赤く見えましょうが」
「うん」
洋介は、うなずいた。確かに、草原が赤く見えた。
「あのあたりが、野新田の原で、赤く見えるのが、桜草でございます」
赤いのがすべて桜草だとすれば、川辺の草原が数百メートルにわたって桜草に覆われていることになる。
「ふうん」
信じられない思いで、洋介は唸った。
船は、そのまま岸に漕ぎ寄せて、舳先を浅瀬に乗り上げるようにして接岸した。遊山客を連れて来るのに慣れているらしく、男なら、そのまま上陸できる場所である。女性たちは、船頭が抱えて陸に下ろしてくれた。
「さあ、こちらでございます」
亀吉は、船に積んであった敷物をかついで先に立った。二、三十メートルも行くと、もう桜草の群落に行き当たった。べったり一面に生えているのではなく、数メートルぐらいの範囲に密生した群が方々にあって野原を埋めているが、あたり一面は、桜草独特の紅色一色だといっても大げさではない。

「マア、なんてきれいな……」
いな吉は、絶句した。
「見事だなあ」
洋介も、腕を組んだまま、そういうほかに言葉がなかった。うす緑色の葉が放射状に広がって、その中心から茎がのび、濃い桜色の花がついている。一つ一つを見ても、きれいだが、それが、数えきれないほどの群落を作って咲いている様子は、とても現実のものとは思えないほどだったし、これが、東京都荒川区の過去の姿だとは、透視して現代を見ることのできる洋介でさえ、とても信じられなかった。
「マア、本当に良い所へお連れ下さいまして、目の極楽でございますヨ。マア、何とお礼申し上げて良いやら」
おこまが、深々と頭を下げて理左衛門に礼をいった。
「何のなんの。どうせ、手前一人だけでも見に来るつもりでおりました。速見さまや姐さん方にお仲間になっていただいて、喜んでおります」
老人は、そういうものの、自分でもこれは絶景だと思っているらしく、
「今年は、まことに別して見事にござります。手前は、もう何度も参っておりますが、これほどの花は、何年に一度しか見られませぬ」
客と主人は遊びに来ているのだから、のんびり見物していればいいが、亀吉にとっては、

これも仕事の一部だから、それなりに忙しい。かついで来た敷物を草原に広げようとしているが、それを見て、いな吉がいった。

「アレ。亀吉っつぁん。それじゃ、お花が少しつぶれてしまって可哀相だから、もっとこっちにお敷きなさいな」

「ほい。しくじった」

亀吉が慌てて敷物を丸めたので、洋介は、桜草から少し離れた場所を探した。

「ここなら大丈夫だ」

と声をかけて敷物を運ばせ、洋介も手伝って敷物を広げていると、船頭たちが、大きなつづらを二つと酒の角樽(つのだる)、こんろなどを運んで来た。さすがに理左衛門だけあって、昼食の準備というよりは、ちょっとした宴会でも始まりそうな雰囲気だった。

亀吉が、すぐにこんろで火を起こし始めると、おこま姐さんとおたねが、つづらから重(じゅう)箱(ばこ)を取り出し、敷物の上に並べる。いな吉だけは、手を汚したり傷つけたりすると、すぐ商売に差し支えるため、こういう場合も、まるでお姫様のように何もしない。

洋介も、うっかり手伝えば使用人たちが気にするので、余計な手出しはせずに、ぶらぶら歩いて岸辺(きしべ)へ行ってみた。川幅は、このあたりでも二百メートル近くありそうだった。対岸は樹木に覆われているが、その間に農家があり、岸近くには網を干している漁師の家らしい草屋根も見えた。到るところにプラスチックのごみが散らばり、どんな小川でもコンクリートで固めてあるのを見慣れている現代人の目には、昭和三十年前半あたりまでは、ごくありふれていたこんな風景でさえ、新鮮で清潔に映るのだ。

佃島で見たのと同じような四つ手網の漁船が何隻も出ているところを見ると、白魚は、もうこのあたりでもとれるらしかった。四つ手網の船のほかに、岸の近くの船では、大きな網を手に持ってすくっている男がいたが、いずれも、かなりの漁があるようだった。

見ていると、洋介たちの乗って来た船の船頭が、岸辺で漁をしている男のそばへ行って呼びかけた。すぐに船が岸に寄って来て、何か話し合っていたが、どうやら白魚をわけてもらう交渉が成立した様子だった。今日も白魚を食べられるのかと思って、洋介は舌なめずりした。

しばらく歩いて戻って来ると、船頭の一人が、こんろにかけた鍋で白魚を煮ていた。亀吉は酒の支度をしている。それを見ながら、洋介は下駄をぬいで敷物に上がり、手足を広げて大の字に寝た。

「ああ、いい気持だ」

「お前さまは、まるで子供みたい」

いな吉が、口をおさえて笑った。ほととぎすが鳴いている。

江戸の近郊を歩いていつも不思議に思うのだが、なぜ現代人は、こういう自然環境とうまく折り合いをつけていけないのだろう。

もし現代の日本に、こういう場所があったとすれば、すぐにレジャー設備ができて自動車に乗った人が詰めかけるから、草原には大きな駐車場ができ、川岸は、現代文明と近代経済学の成果であるコンクリートの護岸で覆われ、人が川に落ちると誰かが責任を追及される人権思想の成果として、立派な遊歩道を作って手すりを立てる。しかし、人間以外の生物の権利については、まったく考慮しないのが近代思想の特徴だから、川の水は、またたく間にレジャー設備の排水で汚れて、二、三ヵ月もたたないうちに最後の白魚が姿を消すだろう。

桜草も、群落の周囲には柵と立入禁止の看板を立て、自治体は桜草保護センターを建設して環境アセスメントを行うが、まわりを踏み固められ、さらにその外側をコンクリートで固められては、こんなか弱い植物は繁殖できない。三年目には、園芸の専門家が厳重に管理した柵の中に、辛うじて一つの群落が残るだけとなる。

恐らく、こんなふうな段階を経て白魚も桜草も消えてしまい、保護センターの展示室の写真だけで昔をしのぶようになるまでに、十年もかからないことは保証してもいい。

何百年も続けられたことが、なぜ、数年で消えてしまうのか。

白魚や桜草など、もともとむだなものなのだから、たとえ消えてしまっても、代償として経済的に豊かになればその方が良い、というのなら話は別だ。現実に、白魚は絶滅同然で、桜草の自生地も同じ運命にあるから、われわれは、明らかに正しい道を進んでいることになる。しかも、この道が正しいと思っている人が圧倒的な多数派らしいから、民主主義の立派

な原則に従って、その人たちは自分の信じる道を進めばいい。

愚かで野蛮な封建社会の政府が決めたことではなく、立派な民主主義政府が正当な手続きを踏んだ決定なら、われわれとしても受け入れるのが正しい態度なのだろう。しかし、いかに人数が少なくても、少数派の意見にも一応耳を傾けるのが、民主主義の正しい方法だそうだから、科学評論家としての洋介は、この道が正しくないと思う少数派のために考えてみる。

こんなことになった直接の原因は、エネルギー多消費型のガソリンエンジン、ディーゼルエンジン、電動モーターなどの動力が手軽に使えることだ。普通の人間が、簡単に百人力、千人力のガリバーのような巨人になれるのだから、その気になれば何でもできる。

しかし、力が必ずしも危険とは限らない。本当に危険なのは力そのものではなく、力を制御するための頭脳、人間の発想の方なのだ。とすれば、これだけ教育が普及して、コンピューターのネットワークで世界中が結ばれるほど知識水準が高まっているというのに、なぜ、その知識と情報で力を正しく制御できないのだろう。

そこまで考えると、洋介は、いつも行き詰まってしまうのだ。

百年前、いや五十年前と比べても、人類の知識の量は何十倍にも増えているのではなかろうか。しかも、その知識を一部特権階級が独占していた時代や政治体制ならともかく、今ほど庶民が情報を手に入れやすい時代がかつてなかったことは、誰でも認めざるを得ない。

人間は、あまりにも身勝手で、知識も力も、自分の身勝手なつごうのためにしか使わないから……というのは簡単だが、それも答えになっていないと思う。知識のなかった時代の人が身勝手でなくて、知識のあるわれわれの方が身勝手だというのなら、無知な方が良いことになり、知識の否定につながるからだ。

流子なら、福の神を招く知識は同時に災いの神も招くが、福の神を招かない知識なら災いの神も寄せつけない、とあっさり片づけるかもしれない。

――どういう知識なら、福の神を招かないのだろうか――

結局、江戸の人々のように、雪見だの二十六夜待ちだの発句、芝居だのという毒にも薬にもならない楽しみに熱中しているのが安全なのだろうか。

「お前さま」

いな吉の愛らしい顔がすぐ上からのぞき込んだ。

「もう、昼御膳のお支度ができましたヨ」

洋介は、慌てて起き上がった。

蓋を取った重箱に、玉子焼き、かまぼこ、煮しめ、刺身などが並んでいるのが見えた。おこま姐さんが取り皿に取り分けている。さすがに銚子は持って来なかったらしいが、燗徳利が何本も並んでいるし、椀には白魚の入った清汁がつけてあった。

「いや、これは豪勢だ」

「大沼さまのご馳走でございますヨ」

と、いな吉がいった。

「本当に、何から何までご配慮いただいて、お礼の申し上げようもございません」

感謝の気持でいっぱいになった洋介は、老人の前に頭を下げた。

「まあ、そう堅苦しくなさらずと……」

理左衛門が、燗徳利を取っていな吉に手渡した。

「姐さんから、速見さまに一献差し上げてくれ」

いな吉が、うなずいて注いでくれる。

「有難う」

「静かでござんすネ」

いな吉が、大好きな玉子焼きを食べながらいった。

これほどのぜいたくはちょっと考えられないような気がして、酔う前から、陶然とした気分になる。しかし、よく考えれば、このぜいたくのために使う実質的なエネルギーは、櫓を押して往復する二人の船頭と、野新田の原と日本橋を徒歩で往復した亀吉の労力だけであって、環境に与える影響は、限りなくゼロに近い。膨大な化石燃料を消費し、環境に大きな負荷をかけなくては何一つできない現代のぜいたくとは根本的に異質なのである。

静かに時が流れていく。きちんと座ったいな吉はまるで仙女のように美しい。

洋介は、複雑な気持でいな吉の注いでくれる酒を飲みながら、この貧しい封建国家から、われわれが学んで役立てられることは、本当に何もないのだろうかと思うのだ。

愚かな封建時代の欠点を徹底的に洗い上げて民族としての弱点を知り、国際的な競争力の強化に役立てる、という手もある。だが、そのためには、大勢の進歩的な秀才たちが、明治以来すでに百年以上もの年月を費やしてきた。もう、ほとんどやることは残っていないだろう。

しかも、欧米諸国のやり方なら長所しか見えず、自分たちの伝統的な方法なら欠点しか見えないという屈折した心理状態の秀才たちに、本当に正しい評価や判断ができていたのかどうか、はなはだ疑問でもある。

これからは、むしろ先祖の生き方を積極的に評価し、子孫としてもっと謙虚な態度で学んでも、ばちは当たらないのではないかと洋介は思う。

雲が出て、風も少し吹き始めた。

静かで貧しく、そしてのどかである。

おわり

あとがき

『大江戸神仙伝』に始まり、『大江戸仙境録』『大江戸遊仙記』『大江戸仙界紀』と続いた大江戸シリーズは、『神仙伝』のハードカバー本の初版が出た一九七九年以来すでに十六年にもなるのに、まだ講談社文庫の増刷が続いている。また、嬉しいことに、続編はいつ出るのかという読者からのお問い合わせも引き続いてあるため、筆者としては早く第五冊目を出さなくてはと思い続けていた。

しかし、数年前から並行して書いていたもう一つの大江戸シリーズであるノンフィクションの『大江戸えねるぎー事情』『大江戸テクノロジー事情』『大江戸リサイクル事情』の三部作が完結して以来、急に忙しくなった。特に最後の『大江戸リサイクル事情』を刊行してからというもの、講演の依頼が全国から相次ぎ、今年（一九九五年）は、すでに四十回を越える講演をこなした。ほかに、今年は、よんどころない事情で、NHK教育テレビの『やってみよう　何でも実験』という理科実験番組のレギュラーとして出演したので、収録のため毎週日曜日がつぶれる結果となってしまった。

あまりにも多忙なため、本業の小説が書けないのはよくないと思って、今年は年頭から計

画をたてて書きはじめたものの、小説はノンフィクションと違って、筋が行き詰まれば、それまでだ。苦しみに苦しんで、ようやく今日最後の一字を打つことができた。

表題は、『大江戸〇〇〇』では、著者自身が混乱してしまうので、新しいシリーズとして書き始めたかった。しかし、大きく変えてしまえば、これまでの読者に続編だということがわかっていただけない恐れがあるため、担当の福田美知子さんのご意見にしたがい、『いな吉江戸暦』とし、「大江戸神仙伝シリーズ」という副題もつけることにした。

いな吉姐さんは、いうまでもなく大江戸シリーズのアイドルヒロインなので、これまでの読者も間違いなく見つけて下さるだろうと確信している。ただし、表題は変わっても、内容は、これまでの大江戸シリーズであり、本書は、『仙界紀』の続編と考えて下さって差し支えない。

江戸の大芝居については、演劇史家の松本伸子さんのご指導を受け、資料を貸していただいたばかりか、原稿に目をお通し願った。

本書の執筆中には、講談社文芸図書第二出版部の林雄造部長に大きな行き詰まりの打開を手伝っていただいた。また、筆者がフロッピーとプリントアウトを、百枚分、五十枚分と断続的に出稿するため、福田さんには軽井沢の仕事場にまで出向いていただいたこともあった。

こうして、また一冊の本ができた。

あとは、読者が楽しんで下さることを願うばかりである。

乙亥一九九五年十二月七日　　著者

文庫版あとがき

本書の親本の題名は『いな吉江戸暦』だった。本日で初版刊行後ちょうど二十年を迎えた『大江戸神仙伝』のシリーズとして、『大江戸仙境録』『大江戸遊仙記』『大江戸仙界紀』と四作書いた次の第五作に当たるが、それまでの四作の題名が似ているので、読者の混乱を避けるためちょっと変わった題名にした。

だが、実際に刊行すると、やはりもとのように〈大江戸〉と〈仙〉の字が入った題名の方が親しみやすいといわれることが多かったので、文庫化が決まった時にいろいろな案を考えた結果、『大江戸仙女暦』と改題した。

しばしばご質問を受けるため、もう一つここで解説しておきたいのは、本書中のいな吉姐さんの言葉につく「何々でござんすハ」という語尾である。語尾に「わ」をつけて「嬉しいわ」というような現代の女言葉は、江戸の辰巳芸者の言葉を明治時代の女学生たちが真似たのが始まりなのだそうだ。

もと辰巳芸者のいな吉姐さんも当然このいい方をするが、江戸の小説を読むと、女性の会話では「今朝早く出て行きましたは」「身にしみて芸をしますは」というように使っている。

同じ発音をする語尾の「わ」でも、現代女性の用法とは微妙に違っていて、含みとしては、むしろ現代の年配の男のいう「そりゃ無理ですわ」や、関西弁の「そらあきまへんわ」などの「わ」に近い。また今あげた例のように、江戸後期の小説では、女性が語尾につける「わ」を「は」で表現してあるのが普通なので、いな吉姐さんの語尾も現代女性言葉の「わ」と区別するため「ハ」にしたが、発音は「わ」である。

今年の十月と十一月の二ヵ月間で、私は江戸についての対談、懇談会、講演などのご依頼を十九回こなしたが、ほかに重複のためお断りした講演が三回ある。百年以上にわたって、「おくれた時代」として軽蔑し続けていた江戸時代への関心は、環境問題での行き詰まり感が強い最近になって確実に高まっているようだ。

研究者としての私は、江戸時代の日本が極楽でなかったことをよく知っているが、同時に、同じ時代の地上のどこにも理想郷がなかったことも知っている。人間の営む社会に極楽や天国があり得ないことは大人の常識だが、江戸時代の先祖がつつましい生活をしながら、洗練された高度に持続可能な文明を維持していたことは動かしがたい事実なのだ。

子孫のわれわれが先祖に学ばなくてはならない点は、今後ますます増えるだろう。

一九九八年十一月三十日　　石川英輔

解説

新井素子

もう今から十年以上も前の話なのですが。

どこかのパーティ（か、SF作家クラブの会合だったかな?）で、初めて石川さんにお会いした私、ずうずうしくも帰りに家まで送っていただいたことがあったんです（お話ししているうちに判ったんですが、石川さんのお宅と当時の私の家とは、何かかなりの御近所だったんです）。

その、帰りのタクシーの中で。その日初めて会った方なのに、わざわざ送っていただいているのに、とっても目上の方なのに、石川さんが極めて親切で品のいい紳士であることに甘えて、石川さんに文句をつけちゃったんですよね、私。

「速見洋介ってちょっと酷くないですか? あれじゃ、いな吉も流子さんも、あんまり可哀想です」って。

当時、私は、まだ二十代前半で、しかも結婚したばっかりでした（お話の時系列で言えば、『大江戸神仙伝』が出た後で、『大江戸仙境録』が出る前ね）。だからねー、『神仙伝』はとっても面白かったし、その面白さは、〝昔の江戸〟と〝今の東京〟の対比にある、そんな

ことは百も承知で、でも、これだけは作者に言っておきたいって気分が、盛り上がったんです。だって……だって……これじゃ、いな吉も流子さんも、可哀想だよおっ。可哀想すぎるっ。女なら大抵そう思うだろうし、ましてや新婚の女が、そう思わない訳がないっ。

石川さんは、いきなり初対面の小娘にこんな文句をつけられてどう思ったんでしょう、むっとしたのかも知れませんけど、そんなことはおくびにも出さずに。真剣になって、小娘の文句に弁解をしてくれました。同じ時代にいる訳じゃないので、あれは〝浮気〟とは違うんじゃないかとか、色々と。最後の頃には、「今執筆中の『仙境録』では洋介がいな吉の盲腸を治します、それで勘弁してください」なんて意味のことまで、仰ったんじゃないかと思います。

それを聞いているうちに、なあんか、ほわっとしました、私。勿論洋介は許せませんけど……でも、石川さんって、いいなあって。

うん。読者が勝手に作中人物に思い入れをして言っていることだもの、笑いとばしてくれたって、「そういう見方もありますね」「あいつはそういう男なんですよ」の一言で済ませてくれたって、まったく構わないのに。いや、むしろそっちの方が普通なのに。作中人物の不品行を一所懸命庇う作家なんて、かなり珍しい存在だと思います（ピカレスク物を書いている人なんて、どうしようもないだろうし……）。ああ、何か、こういう会話って、ほのぼのするなー。

この時点をもって。私、作品は勿論、石川さん御本人のファンになってしまったような気がします。うーん、しみじみと、いい方だよな、石川さん。紳士だし、優しいし、親切だし……何より、とても、誠実な方だと思う。

だもんで、私、言えなくなってしまいました。

違うの！って。

私が、いな吉と流子さんを可哀想だと思ったのは、洋介が二人の女を相手にしているからじゃないの！　浮気なんて問題じゃないの！

洋介が、現代の技術を駆使して、当時ならば死んでしまったであろう、盲腸になったいな吉を助ける。それは、ありがたいことなんだろうけど、でも、それで償えることじゃないの。むしろ、いな吉を助けてしまったが故に、より、いな吉は可哀想なの。

えーと……これは、どういうことかと言いますと。

☆

繰り返しになりますが。

当時、私は、まだ結婚したばっかりでした。そんで、新妻である私にとって何が嫌って……〝浮気〟は勿論嫌ですが、それより何より、〝判らない〟のが、嫌でした。夫が何しているのか判らないのが嫌、夫の考えていることが判らないのが嫌、夫がどこにいるのか判らないのが嫌。そんで、洋介ったら、いな吉に対しても流子さんに対しても、この〝嫌〟を、

それこそ嫌ってくらいしている！

まあ。結婚して十年もたてば、〝夫のことをすべて理解するのは無理〟っていうのは肌で納得しますが……それでも、できるだけは判りたいじゃない。相手をできるだけ理解したい、愛ってそんなもんじゃありません？

この思いをなー、洋介はなー、もう、思いっきり、とてつもなく踏みにじっちゃってるでしょ？

まあ、いな吉に時間旅行って概念を理解させるのは無理だろうし、だから〝仙人〟だってことで誤魔化しちゃうのは仕方ない。でも、流子さんの方は、目の前で一回洋介に消えられている訳じゃないですか。しかも、江戸に行ったことまでうちあけている。あの時流子さんがどんなに心配したかと思うと、もう私、流子さんが可哀想でならない。「二度と江戸に行くことがありませんように」って流子さんの思い、ものの見事に踏みにじって、流子さんにも内緒で、江戸と東京の二重生活をしているだなんて、これ、浮気とは比較にならないくらい酷いことじゃありません？

いな吉の方だって、そうです。〝仙人〟で、当時の技術では考えられない手術なんかしちゃって、死ぬ筈のいな吉を救ってくれた。いな吉の兄まで救ってくれた。これはもう、盲目的にいな吉、洋介のことを信じてしまいますよ。「とてつもないヒーロー、万能の王子様だと思っちゃいますよ。なのに実際の洋介はただの人間で、転時能力だって、いつ消えるか判

らない。しかも、転時能力が消えかけると洋介は流子さんの方を選んじゃって、にもかかわらず、消える時に、「また来るから待っていてくれ」って意味のことをいな吉に対して言ってしまう。万能のヒーローがこう言ったら、普通の女は待ってしまいます。なのに、もう一回来ることができるかどうか、洋介自身が判らないんだもの、こんな酷い話ってないと思いません？

☆

もし、お話世界の人間とおしゃべりすることができたなら。この文句をぶつけられた洋介は、きっと、必死になって、弁解しそうな気がします。えーと、例えば。

一回目に江戸に行った時、とても心配をかけてしまったから、もう余計な心配をかけたくないから、江戸に行くことを流子さんには内緒にしているんだ、とか（これはこれでほんとのことだとは思いますが、でも、少し建前はいってますね。いな吉のことがあるから、どうしても言えないって部分もある筈）。

転時能力が薄れる時はいつだって、絶対また江戸に帰ってくるぞってつもりでいる、だから、「また来る」っていうのは、何一つ嘘いつわりのない本音なんだ、とか。

はい、それは本当にそうなんでしょう。

でもなー、そーゆーの、世間一般の言葉では、〝無責任〟って言うんだぞおっ。

一番端的で判りやすい例をあげると――洋介、あんたは不死身のつもりかいっ。あたり前

だけど、洋介だって、いつかは死にます。うん、順当にいっても、いな吉も流子さんも、洋介より年下だ（確か流子さんで一回りかそこら下、いな吉に至っては、洋介の子供であってもおかしくはない年だよね？）、ほぼ確実に洋介の方が先に死にます。それ以外にも、不慮の事故死って可能性も、勿論あります。

余計な心配をかけたくないからって、江戸に行っていることを流子さんに内緒にして、それで江戸で死んでしまったら……かけたくなかった余計な心配の、二乗もの三乗もの、ううん、それどころではない規模の心配を、いつまでもいつまでも流子さんにかけ続けることになる、それを、洋介、あんたは判ってますか？　夫が死ぬだけでも妻の心労ってかなりのものだろうに、この場合の流子さんの心労たるや……ちょっと、辛すぎて私は想像もしたくありません。

じゃ、東京で死ねばいいのかって言えば、今度はいな吉が、ずっとずっとずっとずっと、洋介のことを待つ羽目になります。人間とは思えない、仙人の、スーパーマンの、万能のヒーローの洋介だもの、まさか死んでいるだなんて、いな吉は考えもしない。そんでそうなったら……そこから先のいな吉の人生は、待って待って待って……ただ、それだけで終わる、他のことが何もできない、そんなものになってしまいます。ああ、そんなの私、可哀想すぎて、考えるもの嫌。

どんなに洋介が誠意を尽くしたって、どんなに洋介ががんばったって、少なくとも二人の

うち一人は、絶対こういう苦しみを味わうことになる筈なんです（……それに。なんか、『仙女暦』では、いな吉の存在、時系列にそって分裂してますねー。泣く人が、増えそうな感じですねー）。

また。〝死〟みたいな絶対的なものを想定しなくったって、転時能力がまったくなくなって二度と回復しない、とか、『神仙伝』のラストにちょっとでてきた、涼哲さんの書いた『大江戸神仙伝』を流子さんが読んじゃうとか、女二人のうちどっちかが泣きそうな可能性は、結構あれこれあるんだよお。

だから。

今でも私は、もう結婚して十三年を経過した、とっくに新妻でなくなった私は、それでも、やっぱり、石川さんとタクシーに乗り合わせたら、こう言いたいです。

「速見洋介ってちょっと酷くないですか？　あれじゃ、いな吉も流子さんも、あんまり可哀想です」

☆

……でも。

こういうこと言ってると……このお話は、成立しようがないんですよね。

ぐっすん、それは、判ってます。

流子さんといな吉が〝可哀想〟にならないですむ、唯一の手段って、洋介がどっちかの時

代に定着することですもの。例えば、『誠に申し訳ないが、仙界の事情でもう江戸に来ることはできなくなった、私は死んだものだと思って、いな吉はこれから好きに生きてくれ』って言い残して、洋介が東京に生活を固定するとか、『非常に申し訳ないけれど、他に愛する人ができた、私は失踪する、探さないでくれ』って書き置きと離婚届けを残して、洋介が江戸に生活を固定する、とか。

こうなれば。捨てられた恰好のいな吉も流子さんも、一時はかなり不幸でしょうが、でも、それ、最悪の事態に比べれば、まだずっとまし。どちらにしても、いつかは何とか立ち直ることができるんじゃないかと思うんです。

けど……これじゃ、お話にならないんだよね。『大江戸神仙伝』シリーズ、終わりになっちゃうんだよね……。

☆

『大江戸神仙伝』シリーズを愛しているが故に。このお話をこれからもずっと読みたいが故に。

私は、しょうがない、これからも、洋介のこの〝無責任〟を容認し続けなければなりません。

でも……ううう、ぐぐぐ、ううむむ。うううう、うーん。

……今度石川さんに送ってもらう機会があったら、また洋介に文句を言うことにしよう……。

〈参考文献について〉

本書中で十九世紀のロンドンと江戸歌舞伎を書くに際しては、主に次の文献を参考にした。

江戸時代の遺産　S・ハンレー著　指　昭博訳　中央公論社（一九九〇）

ロンドン路地裏の生活　H・メイヒュー著　植松靖夫訳　原書房（一九九二）

LONDON STREET FINDER　Nicholson（一九九三）

一万分の一　ロンドン地形図集成　地図資料編纂会編　柏書房（一九九三）

近世日本演劇史　伊原敏郎著　早稲田大学出版部（一九一三）

考証江戸歌舞伎　小池章太郎著　三樹書房（一九七九）

|著者|石川英輔　1933年京都府生まれ。武蔵野美術大学講師。江戸の庶民生活に焦点をあて、江戸時代の生活の知恵や楽しさを再評価したエッセイ『大江戸事情』シリーズのほか、現代人と江戸芸者いな吉の時空を超えた恋心を、楽しい江戸市民の暮らしの中で描いた『大江戸神仙伝』『大江戸仙境録』などの小説も大好評。

大江戸仙女暦（おおえどせんにょれき）

石川英輔（いしかわえいすけ）

1999年1月15日第1刷発行

発行者――野間佐和子

発行所――株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫

定価はカバーに表示してあります

デザイン―菊地信義

製版――廣済堂印刷株式会社

印刷――東洋印刷株式会社

製本――株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。（庫）

ISBN4-06-263972-6

本書は一九九六年一月、小社より刊行された『いな吉江戸暦』を改題した作品です。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

講談社文庫 最新刊

西村京太郎　八ヶ岳高原殺人事件
若い女性が続けて絞殺された。共通点は首に残された黒い絹紐。犯人像に苦悩する十津川。

和久峻三　楊貴妃の亡霊〈赤かぶ検事奮戦記〉
楊貴妃の哀しい運命に似た、若妻の死の謎を追う赤かぶ検事。激論、名弁舌が法廷に響く。

津村秀介　迂回の殺意〈伊東着16時27分の死者〉
浦上伸介と前野美保がダイヤトリックに挑む表題作ほか、人間の暴力性を描く推理短編集。

中島らも ほか　輝きの一瞬〈短くて心に残る30編〉
中島らも、藤原伊織、桐野夏生、篠田節子らの傑作超短編。小説のエッセンスが凝縮満載！

麻耶雄嵩　痾(あ)
記憶を呼び戻すため放火した現場から焼死体が――。メルカトル鮎が謎を解く新本格推理。

霍見(つるみ)芳浩　日本の再興〈生き残りのためのヒント〉
この大不況から立ち直るには、何をどう始めるべきか。具体的考え方、行動を直言する。

明石散人　謎ジパング〈誰も知らない日本史〉
邪馬台国からオムスビの謎まで史実に隠れた日本の「謎」を鮮やかに解く超絶歴史推理。

柴門ふみ　笑って子育てあっぷっぷ
一男一女の母でもある恋愛マンガのヒット・メーカーが語る本音の子育て論。マンガも満載。

ラリー・ベイカー　高儀進 訳　フラミンゴ白書
シネマ館フラミンゴを舞台に恋と映画と冒険の青春グラフティ。愛と感動がここにある！

デボラ・クロンビー　西田佳子　警視の死角
警視キンケイドの別れた妻が殺され、事件は連続殺人に。動機はなにか。シリーズ第5弾。

講談社文庫　目録

いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろ・子どもの情景〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろ・紫のメッセージ〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろの花ことば〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろのアンデルセン〈文庫ギャラリー〉
いわさきちひろ 絵本美術館編　ちひろ・平和への願い〈文庫ギャラリー〉
石野径一郎　ひめゆりの塔
石毛直道　文化麵類学ことはじめ
今西錦司　生物の世界
入江泰吉　大和路のこころ
井沢元彦　猿丸幻視行
井沢元彦　本廟寺焼亡
井沢元彦　六歌仙暗殺考
井沢元彦　修道士の首〈織田信長推理帳①〉
井沢元彦　五つの首〈織田信長推理帳②〉
井沢元彦　謀略の首〈織田信長推理帳③〉
井沢元彦　ダビデの星の暗号
井沢元彦　義経幻殺録
井沢元彦　欲の無い犯罪者
井沢元彦　義経はここにいる

井沢元彦　芭蕉魔星陣
井沢元彦　光と影の武蔵〈切支丹秘録〉
色川武大　明日泣く
李御寧　「縮み」志向の日本人
一ノ瀬泰造　地雷を踏んだらサヨウナラ
石森章太郎　トキワ荘の青春〈ぼくの漫画修行時代〉
伊藤雅俊　商いの心くばり
泉麻人　丸の内アフター5
泉麻人　オフィス街の達人
泉麻人　東京23区動物探検
泉麻人　地下鉄の友
泉麻人（オカシ屋ケン太）　おやつストーリー
泉麻人　バナナの親子
伊井直行　さして重要でない一日
いしいひさいち　わたしはネコである
伊集院静　三年坂
伊集院静　乳房
伊集院静　遠い昨日
伊集院静　夢は枯野を〈競輪躁鬱旅行〉

伊集院静　峠の声
伊集院静　白秋
伊集院静　潮流
伊集院静　機関車先生
伊集院静　冬の蜻蛉
伊集院静 長友啓典　ともかく静かに
いとうせいこう　からっぽ男の休暇
いとうせいこう　解体屋外伝
伊藤礼　狸ビール
稲垣美晴　フィンランド語は猫の言葉
稲垣美晴　サンタクロースの秘密
石山茂利夫　中学校教師〈現場で何が起きているか〉
石村博子　新・東京物語
今邑彩　金雀枝荘の殺人
岩崎正吾　信長殺すべし〈異説本能寺〉
井上夢人　おかしな二人〈岡嶋二人盛衰記〉
家田荘子　バブルと寝た女たち
家田荘子　離婚
家田荘子　愛人〈ピュアで危険な愛を選んだ女たち〉

講談社文庫　目録

井上雅彦　竹馬男の犯罪
池宮彰一郎　高杉晋作(上)(下)
池宮彰一郎　風塵
池部良　風、凪んでまた吹いて
岩橋邦枝　「好色五人女」「堀川波鼓」を旅しよう〈古典を歩く10〉
内橋克人　匠の時代1～12
内橋克人　「手法革命」の時代
内橋克人　「退き際」の研究
内橋克人　ガンを告げる瞬間
内田康夫　死者の木霊
内田康夫　シーラカンス殺人事件
内田康夫　パソコン探偵の名推理
内田康夫　「横山大観」殺人事件
内田康夫　漂泊の楽人
内田康夫　江田島殺人事件
内田康夫　琵琶湖周航殺人歌
内田康夫　夏泊殺人岬
内田康夫　平城山を越えた女
内田康夫　「信濃の国」殺人事件

内田康夫　鐘
内田康夫　風葬の城
内田康夫　透明な遺書
内田康夫　鞆の浦殺人事件
内田康夫　箱庭
内田康夫　終幕のない殺人
内田康夫　御堂筋殺人事件
内田康夫　全面自供〈浅見光彦と内田康夫 いいたい放題〉
内田康夫　記憶の中の殺人
宇佐美徹也　プロ野球データブック最新版
梅棹忠夫　夜はまだあけぬか
生方幸夫　日本企業転落の日
歌野晶午　長い家の殺人
歌野晶午　白い家の殺人
歌野晶午　動く家の殺人
歌野晶午　ガラス張りの誘拐
歌野晶午　さらわれたい女
歌野晶午　ROMMY〈越境者の夢〉
with編集部編　男子禁制OL物語〈丸ごと本音激白集〉

with編集部編　男子禁制OL物語2〈もう許さないの巻〉
with編集部編　男子禁制OL物語3〈赤面しちゃうの巻〉
with編集部編　男子禁制OL物語4〈人の噂も七十五日の巻〉
with編集部編　男子禁制OL物語5〈超ムカつくぜの巻〉
with編集部編　男子禁制OL物語6〈私も苦労してますの巻〉
内館牧子　出逢った頃の君でいて
内館牧子　リトルボーイ・リトルガール
内館牧子　切ないOLに捧ぐ
内館牧子　あなたが好きだった
内館牧子　ハートが砕けた！
内館牧子 小林旭　徹夜対談・いつもロンリーだった
宇神幸男　神宿る手
宇神幸男　消えたオーケストラ
宇神幸男　ニーベルンクの城
植田まさし　らくてんパパ1 2
内海隆一郎　欅通りの人びと
内海隆一郎　帰郷ツアー
宇都宮直子　神様がくれた赤ん坊
宇都宮直子　人間らしい死を迎えるために

講談社文庫　目録

薄井ゆうじ　くじらの降る森
薄井ゆうじ　樹の上の草魚
薄井ゆうじ　竜宮の乙姫の元結いの切りはずし
薄井ゆうじ　星の感触
上田省造　なんかあるぞ！国連ボランティア〈カンボジア選挙監視員の野次馬ノート〉
海原純子　エイジング・コンプレックス〈「もう年だから」はいわないで〉
宇野千代　幸福に生きる知恵
遠藤周作　海と毒薬
遠藤周作　白い人・黄色い人ほか二編
遠藤周作　わたしが・棄てた・女
遠藤周作　ユーモア小説集
遠藤周作　第二ユーモア小説集
遠藤周作　第三ユーモア小説集
遠藤周作　怪奇小説集
遠藤周作　第二怪奇小説集
遠藤周作　ただいま浪人
遠藤周作　どっこいショ
遠藤周作　ぐうたら人間学
遠藤周作　ぐうたら愛情学
遠藤周作　ぐうたら好奇学
遠藤周作　ぐうたら交友録
遠藤周作　協奏曲
遠藤周作　口笛をふく時
遠藤周作　結婚
遠藤周作　聖書のなかの女性たち
遠藤周作　さらば、夏の光よ
遠藤周作　何でもない話
遠藤周作　最後の殉教者
遠藤周作　悪霊の午後(上)(下)
遠藤周作　作家の日記
遠藤周作　父親
遠藤周作　わが恋(おも)う人は(上)(下)
遠藤周作　イエスに邂(あ)った女たち
遠藤周作　妖女のごとく
遠藤周作　反逆(上)(下)
遠藤周作　ひとりを愛し続ける本
遠藤周作　決戦の時(上)(下)
遠藤周作　深い河(ディープ・リバー)
遠藤周作　周作塾〈読んでもタメにならないエッセイ〉
永六輔　無名人名語録
永六輔　普通人名語録
永六輔　評論家ごっこ
永六輔　一般人名語録
永六輔　真紅の琥珀
永六輔　わが師の恩
永六輔　どこかで誰かと
永六輔・下保進　第一生命広報部長からの手紙
永六輔・下保進　第一生命教育部長からの手紙
永六輔・ピーコ　I愛Eye
江波戸哲夫　小説大蔵省〈財政再建極秘指令〉
江波戸哲夫　左遷！〈商社マンの決断〉
江波戸哲夫　小説都市銀行
江波戸哲夫　政商誕生
江波戸哲夫　社長の決断〈その裏側〉
江波戸哲夫　田中角栄を生んだムラ〈西山町物語〉
江波戸哲夫　銀行支店長
江波戸哲夫　高卒副頭取

1998年12月15日現在